

ISSN 2434-513X

東アジア日本学研究

第 6 号

Japanese Studies in East Asia

No.6

東アジア日本学研究学会

The Society of Japanese Studies in East Asia

2021 年 9 月 20 日発行

卷頭言

新型コロナウイルスの世界的蔓延による社会活動の著しい制限が始まって久しい。しかも、ワクチンの普及により落ち着きを見せるのかと思いきや、従来型よりもさらに感染力が高いという変異株が広がり始めており、この騒動がいつ終わるのか、収束の目途も立たない。このところ、一年遅れで始まった東京オリンピックによる高揚とコロナウイルス禍による不安とが繋い交ぜになり、複雑な精神状態が続いている。

西洋社会を起点として始まった近代化が人類社会の発展に計り知れない貢献をしてきたことは確かである。しかし、その近代システムが地球全体を覆うことによって人類が失ったもの、そしてはや取り返しのつかないものも計り知れないほど多い。近代化によってもたらされる恩恵の一方で、近代化にともなう弊害も常に同時に問題にされてきた。しかし、近代化の動きは、今世紀に入ってますます加速されているように見える。

今回の新型コロナウイルスの世界的蔓延も、近代化の副産物である急速なグローバル化による世界の緊密な結合の結果の生じた事態といえるのではないだろうか。

今回の新型コロナの世界的流行の結果が、今後どのような社会を導き出すのか。東アジア日本学研究学会は、社会や文化の動向を研究対象とする研究者が主体となって組織された学会である。したがって、今回もまた感じるのだが、東アジア日本学研究学会としても、新型コロナ後の社会の行く末に注目し、その特徴を明らかにする研究に向かう必要があるのではないか。（こう述べながら、学会員の中から新型コロナ後の動向に焦点をあてた研究者・研究グループが現れることを待ち望んでいる。）

ところが、今回の新型コロナ騒動によってあらためて分かったことがある。それは、騒動の最中は、社会や文化の動向を研究対象としている研究者の研究活動が著しく制限されてしまうということである。フィールドワークを主体とした研究活動はとくに厳しい制約を受ける。分かったことではあるが、今回の騒動で身をもって思い知らされたということである。しかし、その制限を乗り越えて成果を上げるのが研究者としてのウデというものかもしれない。くわえて、学術大会などによる研究交流なども、ウェブ上での開催が中心となり、私のような前世代研究者にとっては不便極まりない。

そんな厳しい状況の中、今回も予定どおり『東アジア日本学研究』第6号を、研究論文11本と研究ノート1本という内容で出版することができたことは喜ばしいことである。執筆者、編集委員をはじめ、関係各位に深く感謝を申し上げたい。今後も、学会員諸氏には、厳しい研究環境の中にあっても奮闘努力して研究を続け、充実した研究成果を学術論文として出し続けていただくことを期待するしたいである。

東アジア日本学研究学会

会長 安達義弘

目 次

卷頭言	安達義弘(東アジア日本学研究学会会長)	1
-----	---------------------	---

【論文】

冀媛媛	大正期における「誰も」の否定共起に関する一考察	3
劉嘉勇	日本語と中国語の自動詞の受身文の対照言語学的研究	19
王雲姣	日本語の心理動詞における自己制御性と即時性について —格との関係から—	37
南明世	共起する動詞の違いからみた複合動詞「V1-間違える(間違う)」と 副詞的用法「間違えて(間違って)Vする」の意味分析	53
何芸芃	漢語「生活」・「生産」の意味・用法に関する一考察 —明治期を中心に—	69
尹惠貞	日・中・韓平和絵本 —『春姫』という名前の赤ちゃん』を題材に—	85
李先瑞	林英美子の戦争協力及びその要因について	99
王晴	爵青の「近代批判」における<感性>の役割 —芸術哲學論と小説創作を中心に—	111
崔雪梅	漱石の「俳句的小説」と漢文学	125
市川章子	元教師の平和教育	141
村下慣一	合気道における「競技化」の動向と現状 —国際統括組織「WSAF」設立にみる「グローバル化」の展望—	155

【研究ノート】

儲叶明	逸脱的な行動に対する日中母語話者の否定的評価について —ロールプレイの結果を中心に—	171
-----	---	-----

学会役員		189
学会動向	李東哲(東アジア日本学研究学会副会長)	190
会員消息	李東哲(東アジア日本学研究学会副会長)	191
東アジア日本学研究学会会則		192
『東アジア日本学研究』投稿要領		195
『東アジア日本学研究』執筆要領		197
『東アジア日本学研究』査読要領		198
編集後記		200

大正期における「誰も」の否定共起に関する一考察

冀 媛媛（名古屋大学大学院生）

要旨

現代日本語においては、「誰もが」などの形をとらない「誰も」単独の形は否定と共にすることが一般的である。一方、歴史的に古い時代には「誰も」は肯定述語と共に起していたことが知られる。本研究では否定述語に偏りながらも肯定述語の勢力を残している大正期を対象に、「誰も」と共起する述語の種類と「誰も」を含む文の構文的な特徴を分析し、「誰も」の使用実態を明らかにした。その結果、肯定述語と共に起する「誰も」は多いが、「～ことは誰も知っている」ないし「誰も知るよう」のような、認識動詞によって構成される特定のパターンで使用されていることが明らかになった。このことは、肯定述語の「誰も」は使用が固定化し、大正期においてすでに自由な形式ではなかったことを示唆する。一方、否定述語との共起では、肯定述語に対応する「～ことは誰も知らない」のようなパターンもあれば、「誰もいない」、「誰も～するものはない」のように非存在を表すパターンもあり、さらに上記にまとめられないパターンも数多くある。また、肯定述語と共に起する「誰も」はすべて主格相当（主語相当）であるが、述定を強める副詞的な機能を果たすと考えられるのに対し、否定と共に起する「誰も」には不定項を表す本来の機能を保持するものも見られた。否定述語の「誰も」は肯定述語ほど使用が固定化されておらず、用いられる文にバリエーションがあることが確認された。

キーワード：「誰も」、大正期、否定共起、構文パターン、認識動詞

はじめに

現代日本語において、「誰も」は否定述語と共に起するとされる。日本語記述文法研究会編（2009）は、「も」は「なぜ」「どうして」を除くほとんどの疑問語につくことができるし、「誰も」が否定述語としか共起できないことを記述している。特に「誰もが」などの形をとらない「誰も」単独の形のみに限定すれば、「誰も」は否定と共に起することが一般的であると考えられる。一方で、歴史的に古い時代には「誰も」は肯定述語と共に起していたことが知られる（山西 1987）。実際、大正期の例を見ると、以下のように「誰も」が肯定とともに用いられる例が見られる。

- (1) 谷崎潤一郎氏が、変態性欲者をテーマとした創作を発表したのは、誰も知つている、しかし其の材料は、大抵、杉田直樹博士の手から得たものだといふことを知つてゐるものはない。（60M 太陽 1925_02046, 35960）
- (2) 此の三人が、三人とも、揃つて新聞記者上り。尤も、小泉が、新聞記者上りというても、今では誰も意外に思ふくらゐ。二十歳前後、伊豆を飛び出してきた時の彼は、小説家となるのが志望。（60M 太陽 1925_09010, 14030）

本研究は、大正期を対象に、「誰も」がどのように否定や肯定と共に起していたのか、その使用実態を明らかにすることを目的とする。大正期¹⁾は現代に近い時代であるが、現代語のように否定述語との共起が未だ固定しておらず、否定述語に偏りながらも肯定述語の勢力を残している。そこで、近代からの使用実態を明らかにする第一段階として、本研究では、大正期における「誰も」の共時態を対象とする。

I. 先行研究

先行研究では、「誰も」と共起する述語の肯否に影響する要因として、韻律的特徴²⁾、歴史的変遷、「誰も」の指定範囲、格関係、構文的特徴という五つの観点から議論が重ねられてきた。ここでは、本研究に関わると思われる研究を取り上げて紹介する。

山西（1987）は古代語の「誰も」は否定述語へ傾くという傾向がなく、江戸時代以降は否定述語への傾きが顕著になり、明治時代以降は大きな変化がないと述べている。これに対し尾上（1983）は、不定語の持つ格関係と述語の肯否に着目し、不定語「x」から構成される「x モ…」は、その「x」がガ格、ヲ格、ニ格、ヘ格に立つ場合は必ず述語は否定に大きく偏るとした。一方、ヨリ格などは肯定に偏り、それ以外の格は肯定否定どちらとも共起可能であり、状況語に近い格成分になる場合も制限がないと結論づけている。

王（2011）は明治期、大正期、昭和戦後という長い幅をひとくくりにして、肯定述語、否定述語と共に起する場合の構造的な特徴をそれぞれまとめている。王（2011）は、「誰も」を含む例文が普遍性を持つものを表し、それが皆に知られ、認められている事態である場合は肯定述語とも否定述語とも共起できるとした。これに対し、否定述語と共に起するときの特徴としては、①場所が明示される場合、②述語が「いる」「ある」などの存在を表す場合、③「誰も」のさす対象が「～のほか」などの形で示される場合があるとした。さらに、王（2011）は、「誰も」の指す対象が明確に示される場合は肯否に関わらずいずれとも共起するが、そうではない場合は否定と共に起することが要求されたとした。これは山田（1991）³⁾でも指摘されている点である。

以上、先行研究では、「誰も」と共起する述語が次第に否定へと傾いたこと、「誰も」の指す対象の明記と述語の肯否との関係、格関係と述語の肯否との関係、一部の構造的な特徴が明らかにされている。しかし、上記考察の根拠となる作品の年代がさまざまであるこ

とと、共起する述語が否定へと傾く過程における肯定述語や否定述語の動詞タイプ等が変化した可能性があるため、まだ検討の余地があると思われる。そこで、本研究は時代ごとに「誰も」と共起する述語の肯否による特徴を見出し、共起する述語が否定へと傾いていくその具体的な変遷プロセスを明らかにすることを最終目標とし、その第一段階として、大正期における「誰も」の共時態の解明を目的とする。

II. 大正期における「誰も」の肯否と述語のタイプ

1. 研究対象および肯否述語の全体像

本研究では、『日本語歴史コーパス CHJ』（データバージョン 2020.03 中納言 2.5.2）を用いて、時代名を「7 大正」に指定して、短単位検索に「誰も」の語彙素読み「ダレ」と「モ」で検索した。ヒットした件数は合わせて 260 例であった。このうち、「誰人も」5 例、「誰も彼も」13 例、「誰も彼れも」3 例、「誰もが」17 例、「誰も皆」4 例、「人は誰も」1 例があった。「誰人も」という表現は「誰も」とは別の形式であるため、研究対象から除外した。その他の表現は「誰も」と共起する述語の肯否の傾向が異なるということで、同じく除外したが、「誰も」がどのように次第に否定述語へ傾いたのかを解明する際に重要であるため、用例を挙げて簡単に言及する。

(3) や (4) のように「誰も彼も」の用例は動作性や具体性を表す述語が多く用いられている。それに対して (5) や (6) のように「誰もが」の用例は抽象的な心的な態度を表す述語が多用されている。「誰も皆」（(7) (8)）と「人は誰も」（9）は用例数が少ないため、用例だけを挙げるにとどめる。

(3) かる、切る、掘る、運ぶ、誰も彼も一心不亂に働くので、仕事は豫想以上にはかどり、九時頃にはもう數坪の地面が新しく開かれた。（60T 小説 1918_35B08, 9810）

(4) 従つて、誰も彼も、退院といふ第一目的に向つて突撃するのだが、それが絶望となると、第二目的の逃走に向つて、肝膽をくだく。（60M 太陽 1925_05059, 47250）

(5) 迷信深き東京の人は…私は特にこれを東京の人と云ふ…日本全國の悪い迷信を持ち集つて、誰れもが深く尊重して居るのであるから、東京程何事にも迷信の多い所はない。（60M 太陽 1925_07049, 11230）

(6) この點は内地では充分に觀取するを得ないが、足一歩外國に踏出した者は、誰もが成程と首肯する所である。（60M 太陽 1925_03017, 49930）

(7) ふと、私は耐へ難い程の暑さに氣がつきましたので、着物を脱ぎにかかりました。その間に他の人々もやつて來ましたが、誰も皆着物を脱ぎ出しました。（60M 太陽 1925_03064, 28740）

(8) 袁總統に、獨立宣言書を、一日も早く、發電すべく、深夜に謀議を凝らした時、そして、私だけが、この夜に限つて、不思議に眠く、同志の者たちは、誰れも皆、異常に亢奮

しきつてゐる。 (60M 太陽 1925_10010, 2820)

(9) そんなことを考へて來ると、奈津子は、人は誰も自分のためなどを計つてくれる筈がない、といふことが今更らしく、感じられた。 (60M 太陽 1917_03040, 59820)

上記のほかに、共起する述語のない1例も除外し、最終的に216例を分析対象とした。このうち、否定述語と共に起する数は159例であり、全体の約74%を占めているのに対して、肯定述語と共に起する数は57例であり、全体の約26%であった。つまり、大正期には「誰も」単独の表現でも肯定述語と共に起する割合が約四分の一にも達しており、「誰も」が否定述語に偏りながらも肯定述語との共起をかなり残していることが分かる。

2. 「誰も」と共起する述語の種類

本研究では、基本的に志波（2009）の認識動詞についての定義に従うが、「誰も」と共起する述語には、自動詞述語なども存在するため、意味的に志波（2009）の認識動詞に類似するものをすべて認識述語とみなす。本研究の「誰も」と共起する肯定述語と否定述語を認識述語か非認識述語かに分類してみると以下のようになる。用例が2例以上あるものは（ ）で数を示す。なお、否定非認識述語は種類が多いため一部は省略した。

【肯定認識述語】

知る（27）、思う（3）、認める（3）、言う（2）、承知の事実/こと（2）、うなづく、申す、決する、見掛ける、見受ける、信ずる、疑う、控えて省みてみる必要がある

【肯定非認識述語】

好む、不安、座る、実行できる、花束にする、みはる、やる、出す、罹る、持つ、なる、嫌がる

【否定認識述語】

知る（23）、思う（7）、言う（6）、異論/異存がない/を挟む（5）、気が付く（4）、見る（4）、疑う（3）、考える（3）、わかる（3）、答える（2）、見つける、説明する、聞く、口にする、賛成する、記憶がある、言い出す、解き得る、耳に傾ける

【否定非認識述語】⁴⁾

いる（23）、来る（8）、入る（3）、見向く（2）、会う（2）、お辞儀をする、参拝する、出る、書く、持つ、推す、食べる、通る、入れる、触れる、上げる、付ける、救い上げる、見送る、呼ぶ、笑う、住む、残る、頼む、禁じ得ない、計る、懸念をする、抗する、実行する、手の付ける、成功する、相手になる、味方にする、熱愛する、負う、返事をする

「誰も」と共起する肯定述語と否定述語を認識述語と非認識述語に分類して、集計したデータを図1に示す。なお、代表動詞がある場合はその出現頻度を示す（図の中の「知る」、

「いる」）。認識述語の使用については、肯定述語（78.95%）のほうが否定述語（43.40%）より多いが、一方で非認識述語は、肯定述語（21.05%）より否定述語（56.60%）のほうがより多く用いられている。

図1 共起する述語の種類の分布

	認識述語	非認識述語	合計
肯定	45 (78.95%)	12 (21.05%)	57
	知る (27)		
否定	69 (43.40%)	90 (56.60%)	159
	知る (23)	いる (23)	
合計	114	102	216
$\chi^2(1)=21.28, p < .001$			
独立性の検定 (カイ二乗) の結果		肯定 (認識) > 肯定 (非認識) 否定 (認識) < 否定 (非認識)	
	残差分析による比較		

カイ二乗検定を行った結果、 $\chi^2(1)=30.29, p < .001$ で有意な結果になり、共起する述語の極性により認識述語や非認識述語の選択が異なることが示された。残差分析の結果によると、肯定述語の場合は認識述語が有意に多く使われ、否定述語の場合は肯定述語ほど認識述語を多用していないため、非認識述語が有意に比較的多く使われることが分かった。

「誰も」が肯定述語と共に起する場合は、「知る」が多く用いられ、認識述語の 60%を占めている。「誰も」が否定述語と共に起する場合は、「知る」が 23 例、「いる」が 23 例で、比較的頻繁に使われている述語である。

このように、「誰も」と共起する述語の肯否の違いによって、用いられる述語タイプが異なることが分かった。この結果を踏まえ、次節では、「誰も」とこうした述語のタイプがどのような文構造の中で用いられるのか、そのパターンに注目して記述していく。

III. 「誰も」を含む用例の意味・構造的なタイプ⁵⁾

本研究では「誰も」の大正期における使用実態を明らかにすることを目的とするために、意味・構造的なタイプを取り出すというアプローチを取る。意味・構造的なタイプとは、ある要素（部分）で構成された構造形式がパターン（全体）となって、その全体が一つの意味を表すものである（志波 2015）。意味・構造的なタイプを取り出すことで、単に動詞だけに着目しているのでは分からず、特徴的な文の構造パターンを記述することができる。以下、「誰も」と共起する述語の意味的な特徴、すなわち認識述語であるか否か、および用例の構文的特徴をもとに構造的なタイプの分類を試みる。

1. 肯定述語と共に起する場合の意味・構造的なタイプ

「誰も」が肯定述語と共に起する場合の一つ目のタイプは、認識述語が使われ、認識の内容節を持つものである。そして、内容節で表されていることが人々に認識されていることを表すため、これを「周知事態型」と呼ぶ。「誰も」が肯定述語と共に起する場合、約 80% の述語が認識述語であり、さらにその認識述語の約 96%（周辺例も含む）は、この「周知事態型」に現れる。さらに、「周知事態型」の下位タイプとして二つの代表的なタイプを取り出して、「主題-題述型」と「挿入句型」を立てた。「主題-題述型」の内容節は後続する述語の対象であるが、「は」で主題化されて文頭にくることにより主語のように働いている。同時に、「誰も」を含む述語全体が「誰も知っている」で一つの名詞述語や形容詞述語相当（「周知のことだ」「明らかだ」）となり、内容節で表されている事態が明らかだという属性叙述文に近い述べ方になっている。「誰も」は本来後続する述語（認識述語）の主語であるが、ここでは述語の述定を強める副詞的な働きを果たしているとみられる。そのため、このタイプを「主題-題述型」と命名した。これに対し、「挿入句型」は「誰も知る{様に/如く/通り}」というまとまりで、文内の様々な位置に自由に挿入されるタイプである。そのほかは主に非認識述語が用いられ、共通の構文的特徴が見出しにくいため、「その他」とする。「その他」についてはいくつかの特徴を取り出して考察する。以上述べたタイプの構造を示すと次のようになる。

周知事態型（全て認識述語）

1) 主題-題述型：[内容節-{こと/の/と}は 誰も + 認識述語]

「その年に大きな地震があったことは誰も知っている。」

2) 挿入句型：[誰も知る{様に/如く/通り} + 内容節]

「誰も知る様にその年に大きな地震があった。」

その他：（非認識述語が多い）

以下で用例を観察しながら、それぞれの特徴を分析していく。

（1）周知事態型

「周知事態型」は、内容節（周辺例は名詞句の場合もある）で示されている内容が多くの人々に認識されていることを表す。以下、この下位タイプである「主題-題述型」と「挿入句型」の特徴について記述する。

① 主題-題述型

「誰も」は後続する認識述語の主語であり、その内容節は後続する認識述語の対象である。通常の語順では「誰も内容節を知らない」となるが、「主題-題述型」は内容節が「は」で取り立てられ、文頭に立つ。文末に「こと/もの/ところ/事実だ」などの形式名詞述語を持つ場合があり、このときは主題である内容節は文の主語にもなる。このタイプは内容節で

表されている内容が多くの人々に認識されていることを表す。

(10) 蛋白質の必要量扱て之から養素の各論に就て述べて見やう。抑も蛋白質が主要なる
養素の一つであつて人體の發育並に窒素の缺陷を補ふに必要なることは誰も承知のこと
である。 (60M 太陽 1925_01055, 38860)

(11) 谷崎潤一郎氏が、変態性欲者をテーマとした創作を発表したのは、誰も知っている、
しかし其の材料は、大抵、杉田直樹博士の手から得たものだといふことを知つてゐるもの
はない。 (60M 太陽 1925_02046, 35960)

(12) 尤も某々の如く一種の賣名手段から、或は云ふべからざる動機の下に彌次る者は論
外として、一般の彌次は毫も咎むべきでないと思ふ。議會には名論も稀にはあるかなれど
も、愚論冗辯の多いことは誰も知つてゐやう。 (60M 太陽 1917_09008, 9760)

(13) それは老侯が自ら筆を執つて手紙を書かれぬのは周知の事實で『俺の方から手紙を
やつても、どうせ代筆の手紙しか寄越さぬのだ』と誰も思つてみたのに、よくもこれ丈多
くの手紙が寄つたことだ。 (60M 太陽 1925_10054, 78080)

上に述べたように、「誰も」は、本来は認識動詞の主体を表す主語相当の語であるが、述
語の直前に置かれることで、副詞的に述語の叙法を強め、「誰も知つてゐる」全体で、内容
節で表されている事態が「明らかだ」という意味を表している。内容節については、(10)
のように普遍真理、(11)のように過去における反復的な事柄、(12)のように現在における
状況を表す場合がある。いずれも、内容節が個別具体的な出来事ではなく、非アクチュ
アルな事柄を表している。なお、アクチュアルな出来事とは個別具体的時間のなかに起
る現象であるが、(11)と(12)の内容節はいずれも運動の複数性が読み取れるため、非
アクチュアルな事柄であると見なす。なお、(13)のように認識動詞が引用の「と」を取る場
合は内容節が文の主題ではなくなるが、文頭に置かれている点でやはり主題的であり、「主
題-題述型」と見なす。

② 挿入句型

このタイプは、「誰も知る {様に/如く/通り}」が一つの塊となり、文頭や文中に自由に挿
入される。「挿入句型」は「主題-題述型」と同じく、ある事態が多くの人々に認識され、周
知されていることを表す。(14)のように挿入句が内容節の前に位置する場合もあるが、(15)、
(16)のように挿入句が内容節の中央に置かれることもある。なお、「挿入句型」には(14)
のように「誰も」の指し示す対象を「人名詞なら」のように明記するタイプもある。

(14) 私は彼等が圓丘傳ひにやつて來るものだと思つてみた。北極地方の旅行に慣れた者
なら誰も知つてゐるやうにそれが唯一の安全な道だつたからである。處が彼等はその道筋

をとらないで、新しい氷の上をやつて來た。（60M 太陽 1925_11084, 25550）

(15) 例之ば彼の八釜しい色盲の遺傳の如きものは、今日では誰れも知る様に之れに特別な染色體があつて、此の染色體が之れと同時に男女の性に何にか關係を有つものである事が判つたのである。（60M 太陽 1925_12023, 46360）

(16) 三條公の書簡を讀んでゆくと、公の性格が文字の間に現れてありあり解る。公は誰も知る如て温藉の人で人と爭ふことを好まれなかつた。（60M 太陽 1925_10054, 135410）

「主題-題述型」と「挿入句型」は「周知事態型」の下位タイプであり、「挿入句型」は「主題-題述型」を逆転した形で、同じ内容を伝達している。(17) は「挿入句型」であり、挿入句という認識述語が内容節の前に置かれている。これに対し、(18) は「主題-題述型」であり、認識述語を内容節の後ろに置く形をとる。つまり、「挿入句型」の前後を入れ替えると「主題-題述型」になる。このような形式の似通いと意味的な共通点は、二つのタイプが体系上隣接しており、「周知事態型」としてまとめられることを表している。

(17) 是等は最初人が頼まぬに偶然鳥の舉動が人を助けたのだが、中には是を吉例として自然其鳥を保護し又飼養するに及んだのも有う。誰も知る通りガウル人が羅馬の議政堂を夜竊かに圍んだ時犬は黙つたが鵝は噪鳴て警報した。（60M 太陽 1917_05022, 94510）

(18) 關東に大震災があつた時政府は物資の不足を補ふ爲めに建築材料やら食糧品やらの關稅の減免をやつたことは誰も知つてゐる通りの次第だが、その期限が大正十三年の三月三十一日限りと云ふのだらう。（60M 太陽 1925_07033, 1530）

(2) その他

「その他」に分類した例のほとんどは述語が非認識述語である。これらの例には共通の特徴を捉えるのが難しいが、その共通点をあえて挙げるならば、なんらかの要素が取り立てられて「誰も」に先行するという語順のパターンである。(19) のように「誰も」の指示示す対象を明記する場合、(20) のように、なんらかの時間的条件が取り立てられる場合、(21) のように非認識述語の対象が取り立てられる場合などがある。

(19) 即ち人間は必ず生活するがために、誰も一つの職業をもたねばならぬ。然るに、現時の如く、持つべき職業もなかつたり、或は無爲徒食に終る様な人が多いといふことは、憂ふべき事柄である。（60M 太陽 1925_13015, 19340）

(20) おのぼりさん達が、信玄袋をさげて電車で雷門にはき出された時には、誰もかういつて眼をみはるのである。（60M 太陽 1925_11080, 690）

(21) 既に紀元前からその惨害を人類は受けて居つたのですから、今日では最早世界の到る處に結核菌が潜在して居ます。従つて人類が麻疹に罹るやうに、結核にも誰も罹つて居

る譯です。 (60M 婦俱 1925_06051, 1420)

(3) まとめ

肯定述語と共に起する場合の構造的なタイプをまず「周知事態型」と「その他」に分類し、内容節で表されている内容が認識されていることを表す「周知事態型」をさらに名詞述語文や形容詞述語文に相当する「主題-題述型」と「誰も知る {様に/如く/通り}」のような句が文中に挿入される「挿入句型」に分けた。「主題-題述型」と「挿入句型」は主題と題述を入れ替えることで転換されることを見た。「周知事態型」においては「誰も」を含めた述語表現がひとまとめになり、「誰も」が後続する述語の主語であるというよりも、肯定を強めるような副詞的な働きを果たしている。構造的な特徴から見ると、「は」の多用が観察できる。「主題-題述型」においては、内容節が「は」で提示されることで主題化し、「挿入句型」においても、認識述語の対象が「は」で取り立てられることがよくある。「その他」とした例には共通の特徴が見出しにくいが、その根底にはある要素が取り立てられるという共通点がある。その点では「周知事態型」ともつながりを持ち、肯定述語と共に起する「誰も」の特徴の一つになっている。

肯定述語の約 80%は認識述語であり、そのうち「周知事態型」の構文的な特徴を持つのは認識述語の 75%で、周辺的な用例⁶⁾も含めば、認識述語の約 96%がこのパターンに現れる。それは肯定述語と共に起する「誰も」は使用が固定化し、定型化していることを示唆する。つまり、大正期において「誰も」は肯定述語と共に起する場合には、すでに自由な形式ではなかったことがうかがえる。

2. 否定述語と共に起する場合の意味・構造的なタイプ

否定述語と共に起する「誰も」の構造的なタイプには、大きく三つある。一つ目は典型的に「内容節は 誰も + 認識述語 (否定形)」という形式を持つもので、肯定述語の「主題-題述型」に対応する否定の構造的なタイプであり、内容節で表されていることが多くの人々に認識されていないことを表す。これを「未周知事態型」と呼ぶ。二つ目のタイプは「非存在型」であり、ここには二つの下位タイプを立てた。一つは、存在動詞「いる」を用いて、人々が存在しないことを表すもので、「不在型」と呼ぶ。もう一つの下位タイプは「誰も + 動詞 (連体形) + もの {が/の/は} ない」という形を持ち、ある行為をしている人々がいないことを表すもので、これを「行為不遂行型」と呼ぶ。ほかの例は共通の特徴が捉えにくいため、「その他」に分類した。

未周知事態型

[内容節- {こと/の/と/か} は 誰も + 認識述語 (否定形)]

「地球がいつ爆発するかは誰も知らない。」

非存在型

- 1) 不在型：〔（時間/場所-には）誰もいない〕
「部屋には誰もいない。」
- 2) 行為不遂行型：〔誰も+動詞（連体形）+もの {が/の/は} ない〕
「誰も私たちを止めるものはなかった。」

(1) 未周知事態型

肯定述語の「主題-題述型」に対応する否定述語の構造的なタイプであり、内容節で表されている内容が多くの人々に認識されていないことを表す。内容節は、現在の非アクチュアルな事柄についての用例（(22) (23)）が多数を占め、過去の出来事を表す用例（(24)）もあるが、普遍真理を表す例はない。本研究が対象にしたデータにたまたま現れなかつた可能性もあるが、普遍真理は肯定述語に偏っているという点は重要である。さらに、(23)のように内容節が間接疑問文で現れることもある点においても異なっている。「誰も」と「認識述語」との緊密性については、「主題-題述型」ほど強くなく、間に別の語が挿入されることもあるが、「誰も」が述定を強める副詞的な働きをしている点では同じである。

(22) しかし さうした生活以上に我々人間の大切なことがあるのを誰も知らない。 (60M 太陽 1917_10041, 231720)

(23) 政見を発表するでもなく、自己を宣傳するでもなく、暗黙の中に活動してゐる丈なので、どういふ見解をもつてゐるのか、誰も知らない。 さうして、怪物扱ひにして、疑問の人と目してゐる。筆者が仄聞する處によれば、彼は、熱意のあることにかけては、同窓上杉博士に劣らない。 (60M 太陽 1925_07022, 37170)

(24) エステバンが城内に來たことは、誰れも知りますまいから、彼の屍は彼を殺した黒奴の屍と共に、城の奥深い處に投り込まれたのでせうが、その後と云ふものは、公式の場合の外は、公爵も私も互に一言も話かけませんでした。 (60M 太陽 1925_13052, 99070)

(2) 非存在型

否定述語は存在動詞「いる」が多く使われ、「非存在型」が代表的なタイプである。その下位タイプには「不在型」と「行為不遂行型」がある。「誰も」を用いて一人も存在していないことが強調されるため、「誰も」が副詞的な働きをしていると考えられる。

① 不在型

「不在型」は「誰も」と存在動詞「いる」の否定形を用い、一人も存在しないことを表す。なお、(25)、(26)のように「は」で場所名詞と時間名詞を取り立てる用例もある。存在動詞以外に、(27)のように「残って居ない」などの動詞で不在を表す場合もある。否定述語の特徴として「不在型」があることは既に王（2011）で指摘されている。

(25) 舟は上げ潮に乗つて、をかの方へ動きはじめた。川口にかかつた時ふりかへつて見たら、もう廣い海には誰もゐなかつた。昨日おかあさんにするすをしていただいて、うち中の者が潮干狩に参りました。 (60T 小説 1918_34A04, 9230)

(26) こちらは互ひに不安な顔をして饒舌つて居ます。『誰でせう』『誰だらう』昨夜一番後れて歸つた玉尾さんとお咲さんは盜難に氣が附いた時には誰も居なかつた、だがかういふ事はこれまでに屢々ありましたが警察へ出したのは初めてです。(60M 婦俱 1925_12157, 91080)

(27) お京は止宿人が皆出拂つて誰も残つて居ない二階へ上つて、廊下に佇み乍ら恐々封を切つて日下部の手紙を読み下した。 (60M 太陽 1917_10042, 146420)

② 行為不遂行型

「行為不在型」は (28) 、 (29) のように「動詞（連体形）+もの {が/の/は} ない」という形式を持ち、ある行為をする人々が存在しないことを表す。{動詞（連体形）+もの}は「誰も」と同格であり、「誰も」の指す対象をある範囲で限定している。王 (2011) では、述語が存在動詞「いる」である一種類として「行為不遂行型」が指摘されている。

(28) 『チョイトいらつしやいね、これから二人で待合へ行きませうよ、時間なんぞ遅くなつたつて構やしませんよ、寄席なんぞ抜いてお仕舞ひなさいよ、ねチョイト小三治さん』私には誰もそんなことを言ふ人はありませんけれども。 (60M 婦俱 1925_03072, 16290)

(29) 『今朝は原巡査が立會ふ筈になつてゐるよ。今來がけに起したら、直ぐ後から行くから、一足先きに行つてくれといふことだつた。先生も昨日の疲勞で睡いんだらうよ。』と智信が後を振返つて云つた。誰もそれに答へる者はなかつた。 (60M 太陽 1917_14040, 146420)

(3) その他

「その他」については、以下の二つのタイプを指摘するにとどめる。一つ目は「誰も」が後続する述語の動作主として働くもので、これを「動作主型」と呼ぶ。もう一つは「誰も」が後続する述語の対象として働くもので、これを「対象型」と呼ぶ。 (30) と (31) が「動作主型」であり、 (32) と (33) が「対象型」である。「動作主型」では「誰も」が述語までかかっているため、後続述語の表す動作や状態について一人もそうではないという強調の意味合いがある。これに対し、「対象型」では、「誰も」は後続述語に支配される対象であり、単に不明確な項を示す不定語としての働きを保持している。なお、 (31) のように「誰も」が連体修飾を受ける例は大正期において数が少ないながらも存在するが、現代語においては見られない。

(30) 母親ばかりでなく、この英さんにもおあいさんは何か面當てをしてやらなければならなくなつた。其れにはもう母親も父親も英さんも、誰れも手の付けられない程な偉すぎた女になつてやるか、さもなければ態と身慘めに落魄れてやりたい。(60M 太陽 1917_05029, 28820)

(31) その脊高い後姿を見送つた誰も、しかし、決して笑はない。(60M 太陽 1925_13030, 4120)

(32) 城ではとても復讐は出来ません。私は誰れも味方にしませんでした。(60M 太陽 1925_13052, 101470)

(33) それは小林様の厳しい吩咐で、それに東京から來てゐる杉本さんといふ看護婦さんが、やかましくつて誰も御病室へ入らせないのです。事によると、お嬢様でも中々お傍へゆかせないかも知れません。(60M 婦俱 1925_12090, 31090)

(4) まとめ

以上、否定述語と共に起する場合の「誰も」の構造的なタイプを、「未周知事態型」と「非存在型」という二つに大きく分類して記述した。「未周知事態型」は、肯定述語と共に起する場合の「主題-題述型」と構造形式で類似するが、否定述語の内容節は間接疑問節を取ることができ、意味的には普遍真理を表さない点で異なっている。

さらに「主題-題述型」のように多くの用例が典型的な構造形式に従うのではなく、周辺的な用例⁷⁾ も数多くあることから、否定述語と共に起する場合の使用が肯定述語ほど固定化していないことが示唆される。否定述語には、認識動詞より頻度の高い存在動詞で構成される「非存在型」があるのも特徴である。「未周知事態型」と「非存在型」においては、「誰も」が述語の述定を強める副詞的な機能を持ち、強調の意味合いが含まれる。しかし、否定述語と共に起した例の約 36%は「その他」の例であり、このうちの「対象型」の場合は「誰も」は単なる不定語として機能しており、不明確な項を示しているにすぎないと考えられる。なお、肯定述語と共に起する場合には、「対象型」に対応する用例は確認されなかった。

おわりに

本研究は、意味・構造的なタイプを取り出すことで、王（2011）が記述したよりもより詳細に「誰も」の使用実態を考察し、肯定述語と否定述語ぞれぞれの特徴も細かく探ることができた。共起する述語の肯否による述語タイプと構造的なタイプの割合を図 2 に示す。

図2 共起する述語の肯定による述語タイプと構造的なタイプ

		肯定述語構造的なタイプ	否定述語構造的なタイプ
動詞種類	認識述語	45 (78.95%)	認識述語 69 (43.40%)
	非認識述語	12 (21.05%)	非認識述語 90 (56.60%)
	合計	57 (100.00%)	合計 159 (100.00%)
構文パターン	周知事態型	主題-題述型 31 (54.39%)	未周知認識型 35 (22.02%)
		挿入句型 12 (21.05%)	非存在型 33 (20.75%)
			行為不遂行型 33 (20.75%)
	その他	14 (24.56%)	その他 58 (36.48%)
合計		57 (26.39%)	159 (73.61%)

上の図から見て取れるように、全体の約 26%を占める肯定述語のほとんどは認識述語 (78.95%) で構成され、かつ「周知事態型」(75.44%) という一定のパターンで述べられることが分かった。これらの特徴から、大正期には肯定述語の使用が固定化し、肯定と共に起する「誰も」が自由な形式ではなくなり、肯定文の生産性が低かったことがうかがえる。これはもともと否定述語に偏る傾向がなかった「誰も」が否定述語とのみ共起する形式に変化している証と言えるだろう。否定述語の場合は「知る」を代表とする認識述語、「いる」を代表とする非認識述語に偏る傾向がある。これらの語の多用により「未周知事態型」、「非存在型」が否定述語の約 64%を占めることになるが、「その他」とした例も数多くある。肯定述語において「誰も」が固定的なパターンに現れるのに対して、否定述語の場合は様々な文に現れることがわかる。

さらに、否定述語で「その他」に分類した「対象型」では「誰も」が後続する述語の対象という役割を果たすが、ここでは「誰も」が未だ不定語としての意味を残していることを見た。こうした使用は、肯定述語には見られない。つまり、否定述語にはガ格とヲ格両方を観察できるが、肯定述語にはガ格しか見られないということである。尾上 (1983) は、不定語「x」が構成する「x モ…」はその「x」がガ格、ヲ格に立つ場合に必ず述語は否定に大きく偏ると、昭和期の「誰も」について結論付けていた。肯定述語の場合はガ格にしか表れないという本研究の大正期の調査を踏まえると、大正期から昭和期へと変化していくうちに、ガ格に立つ肯定述語と共に起する「誰も」の使用が次第に減少することで、尾上 (1983) の指摘するガ格に立つ場合も否定に大きく偏るという状態になったことが推測できるだろう。これに対し、ヲ格相当の「誰も」は、大正期からすでに否定述語とのみ共起していた。ヲ格相当の「誰も」がいつの時代から否定述語に偏るようになったのかは明らかではない。今後の調査の中で明らかにしたい課題の一つである。今後は大正期の前後にある明治期と現代を視野に入れ、近現代における「誰も」の変遷プロセスを考察していきたい。

注

- 1) 昭和期は大正期と同じく現代に近いが、歴史コーパスにおける昭和期の用例数が少ないため、大正期を考察することにした。
- 2) Kato (1985) は「誰も」のアクセントが頭部にあるのか後部にあるのかによって共起する述語の極性が分かれることを指摘している。本研究では韻律特徴を考慮せずに分析する。
- 3) 山田 (1991) は昭和期の作品を対象に分析したものである。
- 4) 否定非認識述語のうち、1語しかない例は動作述語から心理述語という順番で並べた。
- 5) 本研究では、□が内容節を表し、__が「誰も」を含む述語の部分を示し、■が「誰も」の指す対象を指し、___が取り立てられた成分を示す。
- 6) 周辺的な用例とは、内容節ではなく「彼のことは」などの名詞句を用いる場合や、「誰も」と認識述語の語順や内容節の位置などが典型例と相違する用例のことである。
- 7) 「未周知事態型」の周辺的な用例とは、内容節を代名詞や対象で表したり、係助詞「は」ではなく、「について」、「さえ」、「を」などの形式を取ったりする用例のことである。

参考文献

- 王华伟 (2011) 「疑问表达「誰も」与肯定否定的共起」『日语学习与研究』152、25-30 頁。
- 尾上圭介 (1983) 「不定語の語性と用法」（渡辺実編『副用語の研究』明治書院）、404-431 頁。
- 奥田靖雄 (1983) 『日本語文法・連語論（資料編）』むぎ書房。
- Kato, Y (1985) “Negative sentences in Japanese,” Sophia Linguistica, 19, pp. 1-229.
- 小林茂之 (2009) 「日本語否定一致表現の文法化について」『學苑』821、A66-A75 頁。
- 志波彩子 (2009) 「認識動詞の非情主語受身文--「見られる」「思われる」「言われる」「呼ばれる」を中心に」『東京外国语大学日本研究教育年報』13、1-24 頁。
- 志波彩子 (2015) 『現代日本語の受身構文タイプとテクストジャンル（研究叢書）』和泉書院。
- 日本語記述文法研究会編 (2007) 『現代日本語文法3』くろしお出版。
- 日本語記述文法研究会編 (2009) 『現代日本語文法5』くろしお出版。
- 山田潤子 (1991) 「「誰も」と「何も」否定対極性をめぐって」『百舌鳥国文』11、33-46 頁。
- 山西正子 (1987) 「「だれも」考」『国語と国文学』64 (7)、47-66 頁。

使用データベース

『現代日本語書き言葉均衡コーパス BCCWJ』（中納言 2.4.5, データバージョン 2020.02）

<https://chunagon.ninjal.ac.jp/bccwj-nt/search> (2020年07月15日確認)

『日本語歴史コーパス CHJ』（中納言 2.5.2, データバージョン 2020.03）

<https://chunagon.ninjal.ac.jp/chj/search> (2020年07月15日確認)

The negative polarity item *daremo* in the Taisho Era

Ji, Yuanyuan

Abstract

Currently, *daremo* without particles such as *ga* (*daremoga*) is usually used with negative predicates; however, *daremo* was used with affirmative predicates in earlier periods. In this study, I analyzed the types of predicates used with *daremo* and the constructional patterns of sentences containing *daremo* in the Taisho period, a period in which the use with affirmative predicates remained despite a tendency toward the exclusive use with negative predicates, to clarify the actual use of *daremo*. As a result, it was found that *daremo* was used with the affirmative predicates in a specific constructional pattern involving cognitive verbs, such as *~daremo shitteiru* or *daremo shiruyōni~*. This suggests that the use of *daremo* with the affirmative predicates was already not a free form by the Taisho period. On the other hand, regarding its use with negative predicates, there are patterns such as *~daremo shiranai*, which corresponds to the pattern of the affirmative predicates; *daremo inai* and *daremo ~suru mono ha inai* ‘nobody exists’; and many patterns that cannot be summarized above. In addition, *daremo* is always a subject or subject equivalent when used with affirmative predicates, where it appears to have fulfilled an adverbial function to strengthen predication, while *daremo* used with negative predicates sometimes retained its original function of expressing indefinite terms. Moreover, *daremo* was not used with negative predicates in as fixed a pattern as with affirmative predicates, and the constructional patterns show great variation.

Keywords : *daremo*, Taisho Era, negative polarity item, constructional pattern, cognitive verb

日本語と中国語の自動詞の受身文の対照言語学的研究

劉 嘉勇（名古屋大学大学院生）

要旨

本研究は構文的特徴と述語動詞の範囲をめぐり、日本語と中国語の自動詞の受身文の共通点と相違点を対照した。共通点は、述語動詞の表す出来事（原因）と主語が影響を受けたということ（結果）との因果関係を明確にするために、主語の変化や結果状態を表す表現がしばしば文に現れることである。相違点は、中国語ではこの因果関係があれば、自動詞であっても能動文（他動構文）が成立するが、日本語ではこの因果関係が対応する能動文（他動構文）とはならないことである。対応する能動文を持つ中国語の自動詞の受身文は、直接受身文である。直接受身文であるため、日本語の自動詞の受身文（間接受身）とは性質がかなり異なり、この違いは主語と行為者などの特徴にも現れる。日本語の自動詞の受身文は、有情物が主語に立つことが一般的であり、行為者は省略できず、述語には意志的自動詞だけでなく一部の無意志的自動詞も用いられる。これに対し、中国語の自動詞の受身文は、非情物も一般的に主語に立つことができ、行為者の省略が可能であり、述語には人間か物の動作や自然現象や一部の生理的変化を表す自動詞が用いられる。

キーワード： 自動詞の受身文、構文的特徴、述語動詞の範囲、他動構文

はじめに

日本語では次のような自動詞の受身文はごく自然に用いられる。対応する能動文を持たず、主語が述語の表す出来事から間接的な影響を受けることを表すため、間接受身文¹⁾と呼ばれている。

- (1) 電車で変な人に隣に座られた。
- (2) 太郎は父親に死なれた。

このような自動詞の受身文は中国語の受身文に訳されると非文になり、中国語母語話者にとって習得しにくいとされている。一方、日本語と中国語のヴォイスの対照研究が盛ん

になるとともに、中国語においても自動詞の受身文が成立する場合があるということが指摘されてきた（大河内 1983、中島 2007、李 2017、楊 2018 等）。

- (3) 我被孩子吵得头也痛了。（中島 2007: 97）
(私は子供に騒がれて、頭が痛くなった)
- (4) 她被孩子哭得一夜没睡好觉。（李 2017: 79）
(彼女は子供に泣かれて、一晩ろくに眠れなかった)

しかし、(3) (4) のような中国語の自動詞の受身文と(1) (2) のような日本語の自動詞の受身文にどのような共通点と相違点があるのかについてはまだ詳細な議論がなされていない。例えば、(3) (4) が対応する能動文を持つという点は、日本語の自動詞の受身文とかなり異なる特徴である。

- (3)' 孩子吵得我头也痛了。
(*子供は私を騒いで、(私は) 頭が痛くなった)
- (4)' 孩子哭得她一夜没睡好觉。
(*子供は彼女を泣いて、(彼女は) 一晩ろくに眠れなかった)

本研究は、日中両言語の自動詞の受身文の共通点と相違点を明らかにするために、両言語の自動詞の受身文の構文的特徴と述語動詞の範囲をめぐって考察を行う。

I. 先行研究

1. 日本語の自動詞の受身文

日本語の自動詞の受身文については数多くの研究がある。ここでは、高見（2011）をその代表として紹介する。高見（2011）では次のような日本語の自動詞の受身文が挙げられている。

- (5) あー、お父さんに先にトイレに入られちゃったよ。（高見 2011: 48）
- (6) 妻に実家に帰られて、一人なんです。（高見 2011: 48）
- (7) 晴れていたのに、急に雨に降られた…そんな経験ありませんか？（高見 2011: 48）

そして、日本語の自動詞の受身文²⁾の適格性は行為者の有情性、行為者が意志を持って行為を行うかどうか、迷惑の意味が文に示されているかどうか等と深く関わっていると指摘されている（高見 2011: 81）。本研究はこの主張に基本的に賛同し、これらの基準を参考に、両言語の自動詞の受身文を対照する。

2. 中国語の自動詞の受身文

極めて稀ではあるが、中国語においても自動詞の受身文が成立する場合があると指摘されてきた（中島 2007、李 2017 等）。中島（2007）、李（2017）は中国語では一部の自動詞に結果を表す“得”補語を後続させれば、受身文を作ることができると指摘している。

- (8) 夜里我被婴儿哭得睡不着觉。（中島 2007: 97）
(私は夜中に赤ちゃんに泣かれて、眠れなかった)
- (9) 我被孩子吵得头也痛了。（中島 2007: 97） (= (3))
(私は子供に騒がれて、頭が痛くなった)
- (10) 我被他来回走得心烦。（李 2017: 80）
(私は彼にまわりを何度も歩かれて、いらっしゃった)

そして、李（2017）は、次のような補語のない自動詞の受身文も存在するが、こうした自動詞の受身文が成立するためには、主語が受けたマイナスの影響を文に明示しなければならないと指摘している。

- (11) [小张他爸和小三旅游时出事故死了] 小张被他爸这么一死、也不出席亲戚聚会了。
([張さんの父親は浮気の相手と旅行中に事故死した] 張さんはこのように父親に死なれて、親戚の集まりに顔を出せなくなった) (李 2017: 80)
- (12) [孩子半夜突然发起高烧、上吐下泻] 小张被孩子这么一病、明天公司只能请假了。
([子供は夜中に急に高熱を出して、嘔吐と下痢の症状も出た] 張さんはこのように子供に病気になられて、明日会社を休むしかない) (李 2017: 80)

このように、先行研究では中国語の自動詞の受身文はマイナスの意味を含意する表現が後続するという特徴があると指摘されているが、この他にどのような構文的特徴を持つかについては、体系的な整理がない。また、日本語の自動詞の受身文との違いについても検討する余地があると思われる。

II. 構文的特徴の違い

本研究は、対応する能動文の有無、主語の有情性、行為者の特徴、被害の意味の四つの面から日中両言語の自動詞の受身文を対照する。

1. 対応する能動文の有無

日本語の自動詞の受身文が対応する能動文を持たないことは、数多くの研究で指摘されている（寺村 1982 等）。

(13) a. 太郎は父親に死なれた。

b. 父親が死んだ。

例(13)の示すように、受身文 a の主語「太郎」は能動文 b の動詞の項としては現れないため³⁾、日本語の自動詞の受身文は対応する能動文を持たないとされている。これに対し、中国語の自動詞の受身文は、ほとんどが対応する能動文を持つ。

(14) a (受身文) 她被孩子哭得一夜没睡着觉。 (= (4))

(彼女は子供に泣かれて、一晩ろくに眠れなかつた)

b (能動文) 孩子哭得她一夜没睡着觉。 (= (4)')

(*子供は彼女を泣いて、(彼女は) 一晩ろくに眠れなかつた)

では、なぜ“哭”に補語を後続させると、能動文(14)b が成立するのか。本研究は、この理由について、中国語には以下に述べるような他動の意味を持つ構文が存在するためであると考える。

(1) 他動の意味を持つ構文 1

中国語では動詞に補語を後続させることで、他動の意味を持つ構文（以下他動構文と略す）を作ることができる。

(15) [主語 + 動詞《主語の行為》 + 補語《目的語の変化》 + 目的語]

※ここでの動詞は典型的に他動詞、補語は典型的に一字⁴⁾

意味：主語（行為者）が目的語（対象）に働きかけ、目的語が変化する

中国語では、こうした構造の文は頻繁に用いられている。

(16) 他 打碎 了自己的杯子。(彼は自分のコップを打ち割った)

(17) 孩子 扎破 了手里的气球。(子供は手元の風船を突き破った)

この他動構文は、本来他動詞専用のものであったが、他動詞の繰り返される使用によってパターンとして定着し、一部の人間の動作を表す自動詞も要素となるようになったと考えられる。例えば、次のような自動詞が、この構文に用いられる。

(18) a ？你 吵 我了。(*あなたは私を騒いだ)

- b 你 吵醒 我了。(*あなたは私を騒ぎ醒ました)
 c 你 吵死 我了。(*あなたは私を騒ぎ死なせた)

こうした他動構文の存在は、英語ではかなり以前から指摘されている。Goldberg (1995) の次の例が有名である。

- (19) Sam sneezed the napkin off the table. (Goldberg 1995)

「sneeze」は本来自動詞であるが、後に位置変化を表す成分「off the table」を取ることで、構文全体が他動的になり、目的語「the napkin」を取るに至っている。これに対し、日本語では動詞に明確な結合価と格体制の制限があるため、自動詞の他動的用法は中国語や英語ほど発達していない。例(19)は、日本語では「サムはくしゃみをしてナプキンをテーブルから吹き飛ばした」のような複文で表すのが普通である。

そして、例(14)b の“孩子哭得她睡不着觉”のような「主語+自動詞+目的語+補語（複数文字）」のパターンは(15)「主語+動詞+補語（一字）+目的語」というパターンと本質的に同じである。つまり、“睡不着觉”も目的語の変化（結果）を表しており、「主語が目的語に働きかけて目的語が変化する」という大枠のパターンを共有している。従って、例(14)b “孩子哭得她睡不着觉”も、他動の意味を持つ文であると考えられる。目的語である“她”「彼女」は、文末に置かれず、動詞に近い位置（補語マーカー“得”の直後）に置かれている。例(14)b をパターンにすると次のようになる。

- (20) [主語+動詞《主語の行為》+目的語+補語《目的語の変化}]

※ここでの動詞は人間の行為を表す動詞、補語は複数文字

意味：主語（行為者）の行為が目的語（対象）の変化を引き起こす

この構文を自動詞が構成する例には次のようなものがある。

- (21) 他来回走得我心烦。

(*彼が私を何度も歩き回って、(私は) いらいらした)

- (22) 孩子吵得我头也痛了。

(*子供が私を騒いで、(私は) 頭が痛くなった)

従来指摘されてきた次のような自動詞による受身文は、こうした能動文（他動構文）に対応していると考えられる。

- (21)' 我被他来回走得心烦。 (= (10))
 (私は彼にまわりを何度も歩かれて、 いらいらした)
- (22)' 我被孩子吵得头也痛了。 (= (3))
 (私は子供に騒がれて、 頭が痛くなった)

(21)' (22)' の示すように、 中国語においては自動詞の受身文は、 述語動詞の表す出来事（原因）と主語が影響を受けたということ（結果）との因果関係を明確するために、 主語の変化や結果状態を “得～” のような補語で明示する必要がある。さらに、 この因果関係は中国語では能動文（他動構文）をも構成することができる（例(21) (22) 参照）。

(2) 他動の意味を持つ構文 2

中国語の他動構文は、 上述の(15) (20)のようなパターンに限られず、 次のようなバリエーションもある。次の他動構文は、 (15) (20)のような他動構文と同様に目的語の変化を表す補語を後続させるのであるが、 主語と動詞との関係に大きな違いがある。 (15) (20)のような他動構文では、 主語が、 動詞が表す動作の動作主であるのに対し、 次の他動構文では、 主語が原因（使役主体）であり、 動詞は目的語の生理的変化を表す動詞である。

- (23) [主語 + 動詞 《目的語の生理的変化》 + 補語 《目的語の生理的変化》 + 目的語]
 ※ここで動詞は人間の生理的変化を表す無意志的自動詞、 補語は典型的に一字意味：主語（原因）が目的語（変化主体）を変化させる

こうした構造を持つ文には次のような例が挙げられる。

- (24) a (能動文) *后妈饿了那孩子。 (*継母はあの子を飢えた)
 (受身文) *那孩子被后妈饿了。 (*あの子は継母に飢えられた)
 b (能動文) 后妈饿死了那孩子。 (継母はあの子を飢えさせて、 (あの子は) 死んだ)
 (受身文) 那孩子被后妈饿死了。 (あの子は継母に飢えさせられて、 死んだ)

“饿”「飢える」は生理的変化を表し、 他者への働きかけ性を持たず、 目的語を取れない無意志的自動詞であるため、 (24)a 文は成立しない。 ところが、 動詞 “饿” と “那孩子” の間に “死” という結果補語を挿入して(24)b 文のようにすると、 文は自然になる。 これは “死” という結果補語の挿入によって、 文全体が [主語 + 動詞 + 補語 + 目的語] という他動構文のパターンになったためであると考えられる。“饿”「飢える」のような生理的変化を表す自動詞はこの他動構文に用いられると、 構文の作用を受け（構文全体から構文要素への作用）、 使役の意味を獲得し、 働きかけ性を持つことになる。これにより、 目的語（使

役対象) を取るようになったと考えられる。こうして、能動文もそれに対応する受身文も成立するわけである。これに対し、日本語では「飢える」や「疲れる」などを受身文にするためには、「サセル」という形態素をつけて使役受身(直接受身の一種)にする必要がある。次の中国語の例も、(24)b と同様である。

- (25) a (能動文) *你要累我了。 (*あなたは私を疲れた)
 (受身文) *我要被你累了。 (*私はあなたに疲れられた)
 b (能動文) 你要累死我了。 (あなたは私を疲れさせて、(私は) 死にそうだ)
 (受身文) 我要被你累死了。 (私はあなたに疲れさせられて、死にそうだ)

(3) 他動の意味を持つ構文 3

さらに、中国語には動量詞や時量詞が動詞に後続するという他動構文のパターンもある。

- (26) [主語+動詞《主語の行為/目的語の生理的変化》+目的語+動作量/変化量]
 ※ここで動詞は人間の行為や生理的変化を表す動詞である
 動作量/変化量は動量詞や時量詞で表す
 意味：主語(行為者)が目的語(対象)に働きかける
 主語(原因)が目的語(使役対象)を変化させる

こうした構造には次のような自動詞が用いられる。

- (27) a (能動文) *邻居孩子哭了我。
 (*隣の子は私を泣いた)
 (受身文) *我被邻居孩子哭了。
 (私は隣の子に泣かれた)
 b (能動文) 邻居孩子哭了我一夜。(筆者⁵⁾)
 (*隣の子は私を一晩中泣いた)
 (受身文) 我被邻居孩子哭了一夜。(王 2016: 42)
 (私は隣の子に一晩中泣かれた)
 (28) a (能動文) *后妈饿了那孩子。(=(24)a) (*繼母はあの子を飢えた)
 (受身文) *那孩子被后妈饿了。 (*あの子は繼母に飢えられた)
 b (能動文) 后妈饿了那孩子三天。(繼母はあの子を三日間飢えさせた)
 (受身文) 那孩子被后妈饿了三天。(あの子は繼母に三日間飢えさせられた)

(27) と (28) の示すように、「一夜」「三天」のような動量詞ないし時量詞が後続することで、能動文もそれに対応する受身文も成立するようになる。「一夜」のような時量表現は日本語の自動詞の受身文にもよく現れる。

(29) 2階の人に昨夜は一晩中⁶⁾騒がれた。(高見 2011: 67)

(30) 隣の猫に夜通し鳴かれ、よく寝られなかつた。(高見 2011: 67)

「2階の人が騒ぐ」と「隣の猫が鳴く」は日常生活で起こりうる出来事であり、「一晩中」や「夜通し」のような時間表現を加えて行為の激しさ、重さを強調することで、主語が受けた影響を読み取りやすくなる。そして、両言語の自動詞の受身文においては「よく寝られなかつた」のような主語の結果状態を表す表現で述語の表す行為（原因）との因果関係を明示することが普通である。しかし、前述した構文と同じように、日本語では因果関係が明示されても、能動文（他動構文）としては成立しない。

以上、中国語には他動の意味を持つ構文が存在し、その要素に自動詞がなることで、自動詞による受身文のほとんどは、対応する能動文（他動構文）を持つことを見た。なお、中国語の自動詞の受身文は、すべてにこの他動構文と対応関係があるわけではない。中国語には補語や時間表現がつかない自動詞の受身文の特例もある。対応する能動文（他動構文）が存在しないため、これは完全な間接受身文であると考えられる。

(31) 不注意让他跑了。(楊 2018: 201)

(うっかりしてあいつに逃げられてしまった)

(32) 被白棋活了，黑地是六目。(大河内 1983)

(白石に生きられると黒石は六目だ)

しかし、中国語の自動詞の受身文全体を眺めると、対応する能動文（他動構文）が存在する自動詞の受身文の方が圧倒的に多い。本研究は、以上で見てきたような対応する能動文（他動構文）が存在する自動詞の受身文は、直接受身であると主張する。この点は2、3節で述べる中国語の自動詞の受身文の主語と行為者の特徴にも関係している。

2. 主語の有情性

日本語では自動詞の受身文は一般的に間接受身文とされ、主語が間接的に事態から被害を受ける「受影者」であるため、有情物でなければならない。そのため、次のような非情物が主語に立つ自動詞の受身文は日本語では不自然である。

(33) *家は地震に揺れられて壊れた。(自動詞文：地震が揺れる)

しかし、杉本（1999）等の議論にあるように、「雨に降られる」を代表とする「気象受動文」はかなり直接的な影響があり、直接受身に近いため、非情物が主語でも成立することがある。この場合の二格は、「風にゆれる/雨に濡れる」などの自動詞文に現れる原因の二格に近い。例えば、次のような例である。

(34) あのお寺は長年雨に降られてボロボロになった。

これに対し、中国語の自動詞の受身文はほとんどが対応する他動構文を持つ直接受身であるため、非情物が主語に立つことが日本語のそれよりかなり多い。

(35) 房子被地震震垮了。

(*家は地震に揺れられて壊れた)

“震”「(地震が)揺れる」は本来自動詞であり、“垮”「壊れる」のような結果補語が後続することで、他動性を持つようになり、直接受身文を構成することになる。両言語においては、間接受身文であるなら、主語は「受影者」でなければならず、感情を持つ有情者のみが主語に立つ。これに対し、直接受身文では、主語が「動作の受け手+受影者」の場合も、「動作の受け手」のみの場合もあり、後者の解釈では非情物も主語に立つのである。

3. 行為者の特徴

(1) 行為者の省略

日本語において、自動詞の受身文は行為者が省略できないという点は、先行研究で指摘されている (Shibatani 1990: 326)。例えば、次のような行為者が省略された自動詞の受身文は不自然である。

(36) *電車で座られた。 (cf. 電車で変な人に隣に座られた)

(37) *太郎は死なれた。 (cf. 太郎は父親に死なれた)

これに対し、中国語の自動詞の受身文は行為者を省略することが可能である⁷⁾。

(38) a. 我被孩子吵得头也痛了。 (中島 2007: 97) (= (3))

(私は子供に騒がれて、頭が痛くなった)

b. 我被吵得头也痛了。 (行為者省略) (筆者)

前節で既に述べたように、例(38)aは“得”補語の後続により、構文全体が他動の意味を持つことになり、対応する他動構文が成立する直接受身文であると考えられる。行為者の省略が可能になるのは直接受身文の性質によると考えられる。直接受身文の場合は、行為が誰かによって主語に向けられたことが明確であり、因果関係が読み取られるため、行為者が省略できる。これに対し、間接受身文の場合は、因果関係が不明瞭であるため、行為者を主語に影響を与えた有責者（坪井 2003）として明示する必要があるのだと考えられる。

(2) 行為者の有情性

高見（2011: 81）によれば、日本語の自動詞の受身文は有情物だけ（人間か動物）ではなく、自然の力・機械類名詞も行為者になることができる。

- (39) 電車で**変な人**に隣に座られた。 (= (1))
- (40) **雨**に降られた。
- (41) こんなに**日照り**に続かれては、田んぼが干上がっちゃうよ。（高見 2011: 54）
- (42) 沖縄の子供たちは、毎日毎日**飛行機**に飛ばれて、先生の声がよく聞こえない状態で勉強しているんですよ。（高見 2011: 53）

中国語の自動詞の受身文も有情物と自然の力と機械類名詞が行為者になることができる。これは両言語の自動詞の受身文の共通点であると言える。

- (43) 她被**孩子**哭得一夜没睡着觉。 (= (4))
(彼女は子供に泣かれて、一晩ろくに眠れなかった)
- (44) 有时被**雨**下得烦心、半夜推起老宋、两人便开了冰箱取啤酒喝。（『丁香街』張翎）
(たまに、雨に降られて心が乱れて、深夜に宋さんを起こして、二人で一緒に冷蔵庫のビールを飲んだことがある。)
- (45) 被**门外的车**吵得睡不着觉。
(*外の車に騒がれて、眠れなかった。) (cf. 外の車がうるさくて、眠れなかった)

このように、中国語では人間や雨や車のような致し物が、何等かの媒介（音声等）を通して、主語の領域に近づき、主語に影響をもたらす場合にのみ、受身文の行為者となり得る。例(43)例については、行為者が致し物を持つ人間（子供）であり、子供の泣き声が主語の彼女の聴覚領域に近づき、彼女に「眠れなかった」というマイナスの影響をもたらしたため、受身文として成立する。これも直接受身文の性質によると考えられる。

4. 迷惑の意味

高見（2011: 65）によれば、日本語では、自動詞の受身文を用いる際、主語が当該の事象により被害・迷惑を被っていることが、聞き手によって容易に理解されるようにしなければならない。日本語の自動詞の受身文は「られ」を含む節に時間表現や動作様態の表現がしばしば現れる。

(46) 2階の人に昨夜は一晩中騒がれた。 (高見 2011: 67) (= (29))

(47) 授業中に学生に次から次へと出て行かれた。 (高見 2011: 67)

下線部の成分は日本語の自動詞の間接受身文にしばしば現れ、省略されると、文の不自然さがやや増す。例(29)(30)のところで述べたように、被害・迷惑の意味は下線部によつて読み取りやすくなる。

そして、日本語の自動詞の受身文では、「られ」を含む節にこれらの表現が現れるとき同時に、「られ」の後続文で主語の変化や状態を明示し、被害・迷惑の意味が補強されることが多い。

(48) 学生に授業中ペチャクチャしゃべられ、授業がうまく進まなかつた。 (高見 2011: 67)

(49) 隣の猫に夜通し鳴かれ、よく寝られなかつた。 (高見 2011: 67) (= (30))

「よく寝られなかつた」のような主語の変化や結果状態を表す表現は間接受身文にとって重要な成分であり、間接受身文の外部構造（志波 2015: 36）であると言える。勿論、「太郎は父に死なれた」のような被害・迷惑の意味を強く含意する動詞の場合は、他の要素を付加することであえて被害・迷惑の意味を補強する必要はない。

これに対し、中国語の自動詞の受身文は述語の前に時間表現や動作様態の表現が現れることがあるが、主語の変化や結果状態を表す補語が必ず述語に後続しなければならない。

(50) 夜里我被婴儿哭得睡不着觉。 (= (8))

(私は夜中に赤ん坊に泣かれて、眠れなかつた)

(51) *夜里我被婴儿哭了。

例(51)の示すように、“夜里”という被害・迷惑の意味を補強する時間表現だけでは文が成立せず、“得”のような補語が必ず後続しなければならない。“得”のような補語が後続することで、“婴儿哭”「赤ん坊が泣く」という行為（原因）との因果関係が明確にされ、対応する能動文を持つ受身文として成立するのである。

本節をまとめると、日中両言語の自動詞の受身文の共通点は、述語動詞の表す出来事（原因）と主語が影響を受けたということ（結果）との因果関係を明確にするために、主語の変化や結果状態を表す表現がしばしば文に現れることである。相違点は、日本語ではこの因果関係が対応する能動文とはならないことである（例(3)’(4)’参照）。直接受身文である中国語の自動詞の受身文は、間接受身文である日本語の自動詞の受身文と性質がかなり異なる。この違いは主語と行為者の特徴にも現れる。日本語の自動詞の受身文は、有情物が主語に立つことが一般的であり、行為者は省略できない。これに対し、中国語の自動詞の受身文は、非情物も一般的に主語に立つことができ、行為者の省略が可能である。

II. 述語動詞の範囲

I. 節で述べたように、日本語においても中国語においても自動詞が受身文に用いられる。本節は、両言語の受身文に用いられる自動詞の特徴と範囲を考察する。

1. 日本語の場合

受身文に用いられる自動詞は、基本的に意志的自動詞である（三上 1953、高見 2011 等）。一方、無意志的自動詞でも、行為者が人間であれば、受身文に用いられる。この場合は行為者が主語の親族や友人同士であることが多い（金 2011）。

(52) 山田さんは最愛の娘さんに先立たれ、ずっと辛い思いをしている。（高見 2011: 56）

(53) 夫に倒れられて、自分が働きに出ることになった。

しかし、同じ人間が行為者でも、「疲れる、老いる」などの生理的変化動詞は、他者に影響をもたらしにくいため、「*疲れられる」のような受身文としては成立しない。

そして、日本語では「いる」のような静態動詞までも受身文を構成する。

(54) 彼に教室にいられて、勉強に集中できなかった。

「いる」は動作性が薄いが、意志性があり、「割れる」などの無意志的自動詞と違い、「ここにいなさい」「ここにいよう」などを述べることができる。「いる」の場合は行為者が意志をもってある場所に「いる」ため、有責者として責任を追及することができ、間接受身文として成立するのだと考えられる。

さらに、高見（2011: 53-54）によれば、無意志的自動詞が受身文に用いられる場合がある。例えば、自然現象や機械運行類動詞「故障する、（飛行機が）飛ぶ等」である。

(55) エアコンに故障されて、暑くてかなわなかった。（高見 2011: 61）

- (56) 沖縄の子供たちは、毎日毎日飛行機に飛ばれて、先生の声がよく聞こえない状態で勉強しているんですよ。(高見 2011: 53) (= (42))
- (57) 桜島にまた噴火され、地元の住民はとても困っている。(高見 2011: 56)

以上から見ると、日本語の自動詞の受身文の成立は「被害」という概念と深く関わっている。主語が被害を感じていると解釈されれば、非情物行為者の無意志的自動詞も受身文に用いられる。

2. 中国語の場合

中国語の自動詞の受身文の成立は「被害・迷惑を感じること」の他に、例(15) (20) (23) (26)のところで述べた他動構文とも深く関わっている。他動の意味の本質は、対象に働きかけで対象を変化させるということである。対象への働きかけを表すため、述語動詞には動作性が要求される。

- (58) 夜里我被婴儿哭得睡不着觉。(中島 2007: 97) (= (8))
(私は夜中に赤ん坊に泣かれて、眠れなかった)
- (59) 我被他来回走得心烦。(李 2017: 80) (= (10))
(私は彼にまわりを何度も歩かれて、いらいらした)

また、人間の動作だけではなく、無生物や自然現象を表す動詞も、「働きかけ」のための動きと解釈され、受身文を構成する。

- (60) 被门外的车吵得睡不着觉。(外の車がうるさくて、眠れなかった) (= (45))
- (61) 说老家下了三天雨、奶奶住的院子、院墙也被雨下塌了半扇。(BCC 都市快讯 2003. 11. 22)
(? (黒煉瓦は電話で) 故郷は雨が三日間続いて、お婆さんが住んでいる庭で、土塀は半分が雨に降られて崩れたと言った。)
- (62) 我被地震震得从床上滚到了地上。(百度检索 2021. 3. 14)
(*私は地震に揺れられてベッドから床に落ちた)
- (63) 在被窝里被震醒了。(百度检索 2021. 3. 14)
(*寝床の中に (地震に) 揺れられて醒めた)

これに対し、存在動詞などのような静態動詞は中国語の受身文に用いられにくい。

- (64) *我被他在教室里、不能集中学习。(彼に教室にいられて、勉強に集中できなかった。)

例(64)が非文なのは動作性のない存在動詞が、他動構造としての「(動作主) 働きかけ⇒(対象の) 変化」という因果の構文を構成することができないためであると考えられる。

この他に、例(26)のところで既に述べたように、中国語では“饿”「飢える」、“累”「疲れる」などのような生理的変化自動詞が、他動構文から使役の意味を獲得し、受身文を構成する。日本語では「飢える」や「疲れる」などを受身文にするためには、「サセル」という形態素をつけて使役受身（直接受身の一種）にする必要がある。

(65) 那孩子被后妈饿死了。 (あの子は繼母に飢えさせられて、死んだ) (= (24)b)

(66) 我要被你累死了。 (私はあなたに疲れさせられて、死にそうだ) (= (25)b)

以下、両言語の受身文に用いられる自動詞を表にまとめると、表1のようになる。

表1 日本語と中国語の受身文に用いられる自動詞

自動詞		日本語の受身文	中国語の受身文
意志的自動詞	動態 (行く、来る、歩く、逃げる、働く、遊ぶ、座る、しゃがむ、etc)	○	△ (※「逃げる、歩く、座る」のみ、可)
	静態 (いる)	○	×
無意志的自動詞	有情行為者	生理的動作① (泣く、笑う、死ぬ、etc)	○ (※文脈限定)
		生理的動作② (疲れる、飢える、etc)	× (※使役受身のみ)
	機械運行類動詞 (故障する、(飛行機が) 飛ぶ、etc)		○ (※有情行為者のみ)
	非情物行為者	自然現象 ((雨が) 降る、etc)	○
		非自然現象 (落ちる、割れる、etc)	×

表1からも分かるように、中国語の受身文に用いられる自動詞の範囲は日本語のそれより狭い。例えば、意志的自動詞の場合は、中国語では“逃”「逃げる」と“走”「歩く」と“座”「座る」以外の動詞はほとんどが受身文に用いられない。このうち、“走”「歩く」は被害・迷惑の意味との関連性が薄いため、受身文に用いられる際には、“来回走”「歩き回る」のような移動様態を含む複合動詞にしなければならない（例(59)参照）。

おわりに

本研究は構文的特徴と述語動詞の範囲をめぐり、日中両言語の自動詞の受身文の共通点と相違点を考察した。共通点は、述語動詞の表す出来事（原因）と主語が影響を受けたということ（結果）との因果関係を明確にするために、主語の変化や結果状態を表す表現がしばしば文に現れることである。相違点は、中国語ではこの因果関係があれば、自動詞であっても能動文（他動構文）が成立するが、日本語ではこの因果関係が対応する能動文（他動構文）とはならないことである。対応する能動文（他動構文）を持つ中国語の自動詞の受身文は、直接受身文であることを主張した。直接受身文であるため、日本語の自動詞の受身文とは性質がかなり異なり、この違いは主語と行為者などの特徴にも現れる。日本語の自動詞の受身文は、有情物が主語に立つことが一般的であり、行為者は省略できない。これに対し、中国語の自動詞の受身文は、非情物も一般的に主語に立つことができ、行為者の省略が可能である。最後に、両言語の受身文に用いられる自動詞の範囲は、表1のようにまとめられた。

今後の課題は日本語と中国語の他動詞の受身文の構文的特徴を対照することである。木村（1992）で指摘されたように、中国語の受身文の成立には「結果」表現が必須である。この「結果」が中国語の受身文で具体的にどのような形で現れているのかを考察したい。その上で、両言語の受身文全体（今回の自動詞の受身文も含む）の構文的特徴を対照し、両言語の受身文の本質的な共通点と相違点を明らかにしたい。

注

- 1) 日本語の間接受身文には(1)のような自動詞のタイプの他に、「私は隣の家に二階建ての家を建てられた」のような他動詞のタイプもある。今回の考察対象は自動詞のタイプのみである。
- 2) 高見（2011）は間接受身文全体の特徴を言っている。自動詞の受身文は間接受身文の下位タイプであり、これらの特徴を持つ。
- 3) ただし、「太郎の父親が死んだ」のように、「太郎」は主語の修飾語として現れることがある。
- 4) 「※」の部分は先行研究で挙げられた例文と筆者が内省した例文にそのような傾向があるということを表す。以下の構文パターンも同様の意味を表す。
- 5) 出典を明示していない例文は断りのない限り、筆者の作例である。
- 6) 下線は筆者による。
- 7) ここは行為者を省略すると、文の意味が変わる（行為者が不明瞭になる）が、受身文としては問題なく成立する。

参考文献

- 王亜新（2016）、「日本語と中国語の受動文に見られる類似点と相違点」『東洋大学人間科学総合研究所紀

- 要』第18号、41-63頁
大河内康憲（1983）、「日・中語の被動表現」『日本語学』1983年4月号、31-38頁
金俸呈（2011）、「自動詞の受身文の言語形式上の特徴について—受身文の主語と文中の諸要素との関係を中心にして」東京外国语大学『日本研究教育年報』第15号、1-16頁
木村英樹（1992）、「BEI受身文の意味と構造」『中国語』第389号中国語友の会、10-15頁
志波彩子（2015）、「現代日本語の受身構文タイプとテクストジャンル」和泉書院
杉本武（1999）、「『雨に降られる』再考」『文藝言語研究. 言語篇』第35巻、49-62頁
高見健一（2011）、「受身と使役—その意味規則を探る」開拓社
坪井栄治郎（2003）、「受影性と他動性」『言語』第32巻第4号、50-55頁
寺村秀夫（1982）、「日本語のシンタクスと意味I」くろしお出版
中島悦子（2007）、「日中対照研究ヴォイス—自・他の対応・受身・使役・可能・自発—」おうふう
三上章（1953）、「現代語序説—シンタクスの試み—」刀江書院
李藝（2017）、「現代中国語の”被”受動文—日中対照研究からのアプローチ—」神戸外大論第67巻第2号、65-93頁
楊凱菴（2018）、「中国語学・日中対照論考」白帝社
Croft, William (1991), *Syntactic Categories and Grammatical Relations: The Cognitive Organization of Information*, Chicago: University of Chicago Press.
Shibatani, M. (1990), *The Languages of Japan*, Cambridge: Cambridge University Press.
Goldberg, A. E. (1995), *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*, Chicago: University of Chicago Press.

Contrastive study on of passives of Japanese and Chinese intransitive verbs

LIU,Jiayong

Abstract

This study compared the passives of Japanese and Chinese intransitive verbs, and focused on the constructional features and the range of predicative verbs. What they have in common is that in order to express the causality between the event (cause) represented by the predicate and the effect (result) that the subject is affected, the expressions describing the change and result state of the subject often appear in the passive sentence. The difference is that in Chinese, an active sentence (active voice) is established if there is the causality, even if the predicate is an intransitive verb. However, in Japanese, the causality does not establish a corresponding active sentence (active voice). Thus, a passive of a Chinese intransitive verb with a corresponding active sentence is rather a “direct passive” than “indirect passive”. Since it is a direct passive, its features are quite different

from the passives (indirect passive) of Japanese intransitive verbs, and this difference also appears in the features of the subject and the actor. In the passives of Japanese intransitive verbs, the subject is generally an animate noun, the actor cannot be omitted, and volitional intransitive verbs as well as some involitional intransitive verbs can act as the predicate. On the other hand, in the passives of Chinese intransitive verbs, sometimes the subject is even an inanimate noun, the actor can be omitted, and some intransitive verbs of the act of humans or things, natural phenomena, and physiological changes can be the predicate.

Keywords : passives of intransitive verbs, constructional features, range of predicative verbs, active voice

日本語の心理動詞における自己制御性と即時性について —格との関係から—

王 雲姣（名古屋大学大学院生）

要旨

本稿は日本語の心理動詞における自己制御性・即時性と、格の関連について考察するものである。考察した結果、以下の結論が得られた。

1. 思考認識的心理動詞は命令文になりやすいが、即時文になりにくいことから、自己制御性は相対的に高く、即時性は相対的に低い。また、対象にヲ格をとるものとヲ格寄りのものが多い。
2. 知覚感覚的心理動詞は命令文にはならないが、即時文にはなるものとならないものとがある。また、対象にガ格をとるものが多い。
3. 感情的心理動詞は自己制御性も即時性もあるものとないものとがあり、思考認識的心理動詞寄りのものと、知覚感覚的心理動詞寄りのものと、どちら寄りでもないものとがあることを指摘する。また、対象にヲ格をとるもの、ヲ格寄りのもの、ニ格をとるもの、ニ格寄りのもの、ヲ／ニ格両用のもの、ガ格をとるものがある。

キーワード： 心理動詞、自己制御性、即時性、命令文、格

はじめに

本稿は日本語の心理動詞における自己制御性・即時性と格の関連について考察するものである。仁田（2004）では動詞の自己制御性を「達成の自己制御性」と「過程の自己制御性」の二つに分けている。例えば（1）～（3）はいずれも命令形（肯定の命令形（「シロ」の形）または否定の命令形（「スルナ」の形））として成り立つが、（1）の「渡す」は主体が事態の成立・達成までコントロールできるのに対し、（2）の「落ち着く」と（3）の「くよくよする」は、主体が最後の成立・達成までコントロールできず、その過程段階のみコントロールできるとしている。仁田（2004：42）は（1）のように成立・達成までコントロールできる動詞を「達成の自己制御性」がある動詞とし、（2）（3）のように過程段階のみコントロールできる動詞を「過程の自己制御性」がある動詞としている。

- （1）すぐにお客さんに書類をお渡ししろ。

- (2) 洋平、まあ落ち着け！
(3) 君、そんな事ぐらいでクヨクヨするな！

(仁田 2004 : 41-42)

過程の自己制御性と達成の自己制御性を区別して見ることは、心理動詞と動作動詞の違いを見るのに有効である。しかし、心理動詞の中の違いを見る場合には、自己制御性だけでなく、即時性 1) の違いを見る必要がある。例えば次の (4) の「びっくりする」も (5) の「軽蔑する」も禁止形（「スルナ」の形）を取りうるため、仁田（2004）の説明に従うと、いずれも過程の自己制御性を持つことになる。しかし、(6) の「びっくりする」は話し手の発話時点での瞬間的な感情を表す即時文に使えるのに対し、(7) の「軽蔑する」は即時文に使えないという違いがある。

- (4) こんなことでびっくりするな！
(5) あの人を軽蔑するな！
(6) (突然雷が鳴って思わず) 「わっ、びっくりした。」と叫んだ。
(7) (他人の本性を見て思わず) 「*わっ、軽蔑 {する／した}。」と叫んだ。

これは (6) の「びっくりする」は反射的な反応であり、即時的に生じる事態であるのに対し、(7) の「軽蔑する」は一度脳内で対象に対する感情を処理する過程があり、即時的に生じる事態ではないためである。このように同じ心理動詞といつても「びっくりする」と「軽蔑する」には即時性における違いがある。そこで、本稿では自己制御性と即時性の観点から心理動詞の再分類を試みる。

また、従来心理動詞は (8) ~ (11) のように対象にどの格をとるかが議論されてきた。しかし、これと自己制御性と即時性との関連についてはほとんど論じられていない。そこで、本稿ではその対応関係について見る。

- (8) 彼を愛する。
(9) 彼に惚れる。
(10) プレゼントを／に喜ぶ。
(11) 胸がどきどきする。

後述するように、先行研究において心理動詞は思考認識的心理動詞（「思う」「考える」など）、感情的心理動詞（「感謝する」「困る」など）、知覚感覚的心理動詞（「見える」「すべてする」など）のように分類されてきた。本稿では、これをもとに次の点について考察する。

1. 思考認識的心理動詞は命令文になりやすいが、即時文になりにくいことから、自己

制御性は相対的に高く、即時性は相対的に低い。また、対象にヲ格をとるものとヲ格寄りのものが多い。

2. 知覚感覚的心理動詞は命令文にはならないが、即時文にはなるものとならないものとがある。また、対象にガ格をとるものが多い。
3. 感情的心理動詞は自己制御性も即時性もあるものとないものとがあり、思考認識的心理動詞寄りのものと、知覚感覚的心理動詞寄りのものと、どちら寄りでもないものとがあることを指摘する。また、対象にヲ格をとるもの、ヲ格寄りのもの、ニ格をとるもの、ニ格寄りのもの、ヲ／ニ格両用のもの、ガ格をとるものがある。

I. 先行研究およびその問題点

本節では心理動詞の自己制御性、および自己制御性と格助詞、テンスとの関係に関する先行研究を紹介し、先行研究の問題点を述べたうえで、本稿の研究方法と目的を提起する。

1. 先行研究

(1) 心理動詞の自己制御性に関する先行研究

まず、心理動詞の自己制御性に関する先行研究を紹介する。心理動詞の自己制御性に関する先行研究として森山（1988）、仁田（1988、2004）、小竹（2011）などが挙げられる。森山（1988：221-222）では、次の（12）～（14）のように心理動詞は一般に無意志的であるが、（15）のように否定の命令文として使え、それも自己制御性に関わると主張している。

- (12) *惜しんでみた。
- (13) ??わざと惜しんだ。
- (14) *惜しめ。
- (15) そんなことをいちいち惜しんではいけない。

（森山 1988：221-222）

小竹（2011）は森山（1988）を踏まえたうえで、「～するな」という否定の命令文の成立可能性によって心理動詞の自己制御性を判断している。成立不可能な心理動詞は経験者がより被動的であり、成立可能な心理動詞は経験者がより主動的であると述べている。例えば、小竹（2011：88-89）は（16）の「困る」は否定の命令文を形成できないのに対し、（17）の「怒る」は形成できると指摘している。つまり、「困る」と比べ、「怒る」の場合、経験者は「怒らないように努める」ことができ、より自己制御性が高いということになる。

- (16) ??急な変更に困るな。

(17) 子供のいたずらで怒るな。

(小竹 2011 : 88-89)

森山（1988）、小竹（2011）のほか仁田（1988、2004）は「命令や意志が可能」かどうかを基準に、動詞が表す事態を「自己制御的な事態」と「非自己制御的な事態」に分け、「自己制御的な事態」をさらに「達成の自己制御性がある事態」と「過程の自己制御性がある事態」に分けている。そのうち、「達成の自己制御性」は事態の成立・達成までもが自己制御的なことであり、「過程の自己制御性」は事態の成立・達成に向けての過程段階のみが自己制御的なことであるとしている。次の（18）～（21）を例にとると、（18）～（20）は命令文として成り立つのに対し、（21）は意志文として成り立たないため、「渡す」「落ち着く」「クヨクヨする」は「自己制御性」を持っているが、「困る」は「自己制御性」を持っていないと論じている。

(18) すぐにお客さんに書類をお渡ししろ。 (達成の自己制御性)

(19) 洋平、まあ落ち着け！ (過程の自己制御性)

(20) 君、そんな事ぐらいでクヨクヨするな！ (過程の自己制御性)

(21) *彼らの無責任さに困ろう。 (非自己制御的)

(仁田 2004 : 41-42)

また、（18）～（20）はいずれも命令文として成り立つが、（18）では「〔（君ガ）スグニオ客サンニ書類ヲ渡ス〕」という事態は、事態の成立・達成までもが自己制御的であるがゆえに、「達成の自己制御性」があると述べている。それに対して、（19）では「〔洋平ガ落チ着ク〕」という事態では、制御できるのは、落ち着くという事態の成立・達成そのものではなく、事態の成立・達成に向けての過程段階のみであるため、「達成の自己制御性」ではなく、「過程の自己制御性」を持っていると述べている。（20）も、「君がそんな事ぐらいでクヨクヨしない」という事態で制御できるのは過程段階のみであるため、「過程の自己制御性」を持っていると述べている。このように、仁田（1988、2004）では、命令や意志の形で判断し、「落ち着く」「クヨクヨする」などの心理動詞は肯定あるいは否定の場合に過程の自己制御性を持っていると主張している。

以上のように、森山（1988）、仁田（1988、2004）と小竹（2011）は命令文（「シロ」の形および「スルナ」の形）に使えるかどうかで心理動詞の自己制御性について述べている。しかし、いずれも少数の心理動詞を例に挙げているだけである。そこで、本稿では157語の心理動詞について命令文になるかどうかを調べた。その結果、対象にどのような格助詞をとるかということと関係していることを指摘する。

（2）心理動詞の即時性に関する先行研究

次に、心理動詞の即時性に関する先行研究について見る。趙（2016）は次の表1のよう

に心理動詞の一人称の発話機能を分析している。

表1 趙 (2016) における心理動詞の一人称の発話機能

テ ns・ アスペクト 動詞の例	スル形	シタ形	シテイル・ シティタ形
感謝する、祈る、願う、 恨む、憎む、軽蔑する、 憧れる、同情する等	働きかけ的意志表出； 態度的意思表明		
疑う、思う、考える等	態度的意思表明	伝達	
心配する、恐れる、喜ぶ、 悩む、苦しむ、迷う等	φ		伝達
感動する、ほっとする、 がっかりする等		受動的感情の表出； 伝達	
呆れる、困る、疲れる、 驚く、びっくりする、弱 る、参る等	受動的感情の表出	受動的感情の表出； 即時的感嘆； 伝達	

(表1は趙 (2016: 87) の表8を修正したものである。)

具体的には、趙 (2016: 49) は「働きかけ的意志表出」を「聞き手に向かって、話し手が聞き手に対する感情を意志的に表出するという意味機能」としている。例えば、(22) は聞き手に対して話し手の「同情する」という気持ちを「言い伝えるものであり、聞き手に対する自分の意志表出を表すものである」と述べている。

- (22) 「残念なことに、私には参加資格がないからねえ。同情するけど、手伝えないな
あ」 (『星忍母艦テンブレイブ』) (趙 2016: 51)

それに対して、「態度的意思表明」を「話し手が自分のことや他人事に対する感情を」表出するという意味機能としている。例えば、(23) は上の (22) と同じく「同情する」という気持ちの表出であるが、(22) は聞き手に対する感情の表明であるのに対し、(23) は三人称である「船員たち」への気持ちを表している。(24) も同様である。

- (23) 「ああ、激しい嵐だ。海に出てる気の毒な船員たちに同情するよ。夜通し続きそ
うだ」 (『カッティング・ルーム』) (趙 2016: 56)

- (24) 「お前はどう思う」
「やはり国家全体の利益の為にはじめられた戦争だろうと考えます」
(『風にそよぐ葦』) (趙 2016: 54)

また、「伝達」とは「話し手が聞き手にある心理活動を言い伝える」という機能であると述べている。例えば、(25) は話し手の過去の「後悔する」という気持ちを聞き手に言

い伝えている。

- (25) 「でもあの時、何故スペインの人と付き合わなかつたのかずっと後になつて後悔しました」（『火曜日に落ちる雨たちへ』）（趙 2016：62）

また、「受動的感情の表出」を「話し手が何かの刺激や原因をきっかけにして反応的に起こつた心理活動を直接的に表出する」という機能であるとしている。例えば、(26) は「皆さんの素晴らしい活躍」をきっかけに感動し、その気持ちを直接に表している。

- (26) 「素晴らしい活躍に感動しました。今後も音楽都市こおりやまのけん引役として、皆さんの活躍を期待しています」（『広報こおりやま』）（趙 2016：74）

さらに、「即時的感嘆」は「一語文的に用いられるものが多く」、「発話現場における即時的な感情や感想を直接に言語化するものである」と述べている。例えば、(27) は、聞き手がその場にいるが、聞き手の存在を意識しないまま、自分の「困る」という反応を表すものである。

- (27) 彼女はいまにも泣き出しそうな顔をしていた。「困ったな」と彼はいった。
(『男ともだち』)（趙 2016：79）

このように、趙 (2016) は心理動詞の発話機能を「働きかけ的意志表出」「態度的意志表明」「伝達」「受動的感情の表出」「即時的感嘆」の五つに分類している。しかし、趙 (2016) は直感的に発話機能を区別しており、形式的な基準を立てていないため、曖昧なところがある。例えば「悩む」「迷う」を「伝達」に入れているが、(28) (29) に見られるようにル形で即時文に使うことができる。趙 (2016) は即時文を「困った」のようにタ形になる場合しか見ていないが、本稿ではル形になる場合も含めて考察する。

- (28) 悩むなあ。
(29) ああ、迷う。

(3) 心理動詞の自己制御性と格助詞との関係に関する先行研究

次に、心理動詞の自己制御性と格助詞との関係に関する先行研究を見る。寺村 (1982：140-142) は二格心理動詞を「受身的感情の表現」とし、ヲ格心理動詞を「能動的感情の動き」としている。例えば (30) の「失望する／がっかりする」は「その結果」という誘因によって一時的に感情が動くことを表す。一方、(31) の「愛する／憎む」は「人」とい

う対象に対する働きかけ的な感情を表すと述べている。このように寺村（1982）ではニ格心理動詞は相対的にコントロールしにくく、ヲ格心理動詞は相対的にコントロールしやすいと指摘している。

- (30) ソノ結果ニ 失望スル／ガッカリスル (寺村 1982 : 140)
 (31) 人ヲ 愛スル／憎ム (寺村 1982 : 142)

しかし、ヲ格心理動詞やニ格心理動詞にもいろいろなものがあり、必ずしもニ格心理動詞は相対的にコントロールしにくく、ヲ格心理動詞は相対的にコントロールしやすいとは限らないと考えられる。例えば、(32) の「同情する」は上の趙（2016）が述べているように、聞き手に対する働きかけ的な感情を表す。そこで本稿では同じニ格やヲ格をとる心理動詞の違いについて見ていくことにする。

- (32) あなたに同情する。

2. 先行研究の問題点

以上、心理動詞の自己制御性、即時性、格助詞に関する先行研究について見てきた。上に述べたように、先行研究には次のような問題点がある。

まず、自己制御性について森山（1988）、小竹（2011）、仁田（1988、2004）は感情動詞の命令形などに焦点を当てて論じているが、いずれも少数の心理動詞を例に挙げているだけであり、さらに多くの語について見る必要がある。

次に、趙（2016）は心理動詞の発話機能を考察しているが、直感的に考察し形式的な基準を立ててない。例えば「悩む」「迷う」を「伝達」に入れているが、「悩むなあ」「ああ、迷う」のようにル形で即時文に使うことができる場合も見る必要がある。

さらに、心理動詞の自己制御性と格助詞との関係について寺村（1982）ではニ格心理動詞は相対的にコントロールしにくく、ヲ格心理動詞は相対的にコントロールしやすいと指摘しているが、ヲ格心理動詞やニ格心理動詞にもいろいろなものがあり、必ずしもニ格心理動詞は相対的にコントロールしにくく、ヲ格心理動詞は相対的にコントロールしやすいとは限らない。

そこで、本稿では先行研究を踏まえたうえで、心理動詞の自己制御性・即時性と格助詞の関係について改めて考察する。

II. 心理動詞の自己制御性・即時性に関する考察

本節では各心理動詞が命令文や即時文に使えるかどうかを考察する。命令文に使えるということは、その心理状態になる（ならない）ように主体が事態の過程段階を制御できる

ということである。また、即時文に使えるということは、発話時点における主体の即時的な感情を表すことができるということである。

本稿では次の（33）（34）のように「わっ／あっ／ああ」などの感動詞をつけて話し手の即時的な感情を表すことができる文を即時文とする。

（33）（突然雷が鳴って思わず）「わっ、びっくりした。」と叫んだ。

（34）（どちらの料理を注文するか迷い、思わず）「ああ、迷うなあ」と呟いた。

また、吉永（2008）では心理動詞を次の思考認識的心理動詞、知覚感覚的心理動詞、感情的心理動詞の三つに分類している。本稿では吉永（2008）の3分類に従って分析する。

①思考認識的心理動詞—思う、考える、疑う、信じる、分かる、覚える

〈思考認識〉 …知的な精神活動。目的を伴うことが多く、能動的、意志的。

②知覚感覚的心理動詞—痛む、痺れる、震える、音がする

〈知覚感覚〉 …感覚器官からの刺激により感知される神経作用。具体的。

③感情的心理動詞—悩む、困る、あきれる、あせる、悲しむ

〈感情〉 …色々な精神状態、心理的作用。（喜怒哀楽、好き嫌い、高揚・落胆など）

次に、これら三つの分類において、心理動詞が命令文になるかどうか即時文になるかどうかを見る。対象とするのは現代日本語書き言葉均衡コーパス（Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese）（以下、BCCWJとする）で、例文が100件以上出現する心理動詞²⁾である（全157語）。検索対象は全データで、短単位検索を使い、キーワードに各動詞の語彙素を入力して検索した。その結果を表2～表4に示す。

表2 思考認識的心理動詞の自己制御性と即時性

		自己制御性	
		+命令文	-命令文
即時性	一即時文	A) 信じる、考える、願う、疑う、たくらむ、みとめる、念じる、祈る、覚える、察する、望む、思う、考慮する、考察する、信頼する、決意する、計画する、画策する、反省する、決心する、覚悟する、観念する、判断する、誤解する、理解する、想像する、信用する、記憶する、暗記する、回想する、批判する、非難する、評価する、推測する、注意する、納得する、集中する、期待する（38語）	B) 知る ³⁾ 、もくろむ、おしほかる、思案する、了解する、認識する、認知する（7語）
	十即時文	C) 忘れる（1語）	D) 分かる、ひらめく（2語）

表3 知覚感覚的心理動詞の自己制御性と即時性

		自己制御性	
		+命令文	-命令文
即時性	-即時文	A) なし	B) 痛む、震える、うずく、くらむ、くらくらする、ぐったりする (6語)
	+即時文	C) なし	D) 見える、聞こえる、感じる、臭う、音がする、味がする、匂いがする、香りがする、疲れる、くたびれる、痺れる、どきどきする、ぞくぞくする (13語)

表4 感情的心理動詞の自己制御性と即時性

		自己制御性	
		+命令文	-命令文
即時性	-即時文	A) 喜ぶ、耐える、愛する、楽しむ、諦める、懶ぶ、呪う、恐れる、堪える、忍ぶ、慣れる、憎む、恨む、嫌う、感謝する、同意する、軽蔑する、実感する、抑圧する、満足する、尊敬する、のんびりする、リラックスする、キレル、慕う、悲しむ、怯える、躊躇う、妬む、蔑む、侮る、悔やむ、怯む、惚れる、心配する、落胆する、同情する、嫉妬する、仰天する、後悔する、がっかりする、くよくよする、びくびくする、ボーッとする (44語)	B) あがる、苦しむ、戸惑う、好く、尊ぶ、舞い上がる、逆上する、激怒する、失望する、驚愕する、退屈する、感激する、感心する、感動する、共感する、挫折する、ぞつとする、むつとする、どきっとする、うつとりする、どぎまぎする、ハラハラする、ワクワクする、うきうきする、ぞくぞくする (25語)
	+即時文	C) 落ち着く、悩む、焦る、憧れる、懲りる、白ける、滅入る、めげる、安心する、緊張する、イライラする、迷う、ほっとする、驚く、びっくりする (15語)	D) まいる、困る、弱る、呆れる、飽きる、うんざりする (6語)

表2を見ると、思考認識的心理動詞は〔-命令文〕のものと〔+即時文〕のものが少なく、48語のうち38語は〔+命令文〕〔-即時文〕⁴⁾である。一方、表3を見ると、知覚感覚的心理動詞は〔+命令文〕のものなく、〔-命令文〕〔-即時文〕あるいは〔-命令文〕〔+即時文〕となっている。このことから、自己制御性については、思考認識的心理動詞は相対的に高いのに対し、知覚感覚的心理動詞は相対的に低いことが分かる。また、即時性については、思考認識的心理動詞は相対的に低いのに対し、知覚感覚的心理動詞は相対的に高いものと低いものがあることが分かる。

次に、表4を見ると、感情的心理動詞は〔+命令文〕〔-即時文〕、〔+命令文〕〔+即時文〕、〔-命令文〕〔-即時文〕、〔-命令文〕〔+即時文〕の四つに分かれている。このように、感情的心理動詞の自己制御性と即時性の観点において思考的心理動詞寄りの

もの（A）もあれば、知覚感覚的心理動詞寄りのもの（B D）もあり、また、どちら寄りでもないもの（C）もあることが分かる。

III. 心理動詞の自己制御性・即時性と格助詞の関係

本節では上で見た心理動詞の自己制御性と即時性に加えて、格助詞との関係についても見る。本稿では、BCCWJ を用いて各心理動詞のとる格の用例数を調べた⁵⁾。その結果、全 157 語のうち対象にヲ格のみとるものは 60 語、ヲ格寄りのものは 10 語、ニ格のみとるものは 38 語、ニ格寄りのものは 20 語、ヲ格とニ格の両方をとるもの（以下「ヲ／ニ格」と呼ぶ）は 2 語、ガ格のみとるものは 27 語であった⁶⁾。その考察結果を表 5～7 に示す。

まず、思考認識的心理動詞の自己制御性・即時性・格助詞の関連を表 5 に示す。

表 5 思考認識的心理動詞の自己制御性・即時性・格助詞の関連

		自己制御性	
		十命令文	一命令文
即時性	一即時文	ヲ格：信じる、考える、疑う、たくらむ、みとめる、念じる、祈る ⁷⁾ 、願う、覚える、察する、望む、思う、考慮する、考察する、信頼する、決意する、計画する、画策する、反省する、決心する、覚悟する、観念する、判断する、誤解する、理解する、想像する、信用する、記憶する、暗記する、回想する、批判する、非難する、評価する、推測する（34 語）	ヲ格：知る、もくろむ、おしほかる、思案する、了解する、認識する、認知する（7 語）
		ヲ格寄り：期待する（1 語）	ヲ格寄り：なし
		ヲ／ニ格：納得する（1 語）	ヲ／ニ格：なし
		ニ格寄り：注意する、集中する（2 語）	ニ格寄り：なし
		ニ格：なし	ニ格：なし
	十即時文	ヲ格：忘れる（1 語）	ヲ格：なし
		ガ格：なし	ガ格：分かる、ひらめく（2 語）

表 5 に示すように、思考認識的心理動詞の場合、「納得する」の 1 語がヲ／ニ格両用で、「注意する」「集中する」の 2 語がニ格寄りで、「分かる」と「ひらめく」の 2 語がガ格をとるほかは、すべてヲ格をとるもの或いはヲ格寄りのものである。ヲ格をとるもの或いはヲ格寄りのものは（35）の「計画する」のように、主体が「計画する」という動きを能動的に発動することができ、自己制御性が相対的に高いものが多い⁸⁾。（36）の「信じる」も同様である。

(35) さらに、耐震性の高い安全な建物とし、災害時にも市民が安心して利用でき、防災拠点ともなり得るよう計画します。（BCCWJ 『広報こうふ』中部地方/山梨県）

(36) おだてられれば、あなたを信じない。（BCCWJ Yahoo! ブログ）

また、「納得する」はヲ／ニ格両用で、ヲ格をとる（37）の「納得する」は「納得したい」の形で「意図的にそのことを受け入れるように努めたい」という対象への働きかけを表すのに対して、ニ格をとる（38）の「納得する」は自然にそのことを受け入れたことを表し、対象への働きかけの意味はない。また、ニ格をとる「注意する」と「集中する」は対象に向けて意識を傾けることを表すため、着点を表すニ格をとる。この点で広い意味で対象への働きかけを表す思考認識的心理動詞とは性質が異なる。ただし、対象に向けて意識を傾けるように努めることはできるため、自己制御性は高くなる。これに対し、「分かる」「ひらめく」は（39）のように自発的な事態を表すため、自動詞表現として対象にガ格をとり、相対的に自己制御性が低くなる。

（37）愛する者の死を理解し、それを納得したい。（BCCWJ 『告発-人工透析死』山崎敏子）

（38）勝海も説得力のある守屋の意見に納得した。（BCCWJ 『磐舟の光芒』黒岩重吾）

（39）いい気分で湯に浸かる私にひとつのアイディアがひらめいた。

（BCCWJ 『小説新潮』植田草介）

また、即時性については、Ⅱでも論じたように思考認識的心理動詞は〔+即時文〕のものがヲ格をとる「忘れる」とガ格をとる「分かる」「ひらめく」の3語しかなく、即時性が相対的に低い。即時文は発話時点における感情の発露を表すものであるが、思考認識的心理動詞は主に脳内での処理を経た心理動作を表すため、同じ心理動詞といつても即時的な感情を表す動詞とは性質が異なることを示している。

次に知覚感覚的心理動詞の場合を表6に示す。

表6 知覚感覚的心理動詞の自己制御性・即時性・格助詞の関連

		自己制御性	
		+命令文	-命令文
即時性	一即時文	なし	ヲ格：なし ガ格：痛む、ぐったりする、うずく、震える、くらむ、くらくらする（6語）
	十即時文	なし	ヲ格：感じる（1語） ガ格：疲れる、くたびれる、痺れる、どきどきする、ぞくぞくする、見える、聞こえる、臭う、音がする、味がする、匂いがする、香りがする（12語）

表6に示すように、知覚感覚的心理動詞は「感じる」の1語しかヲ格をとらず、ほかはすべてガ格をとる。これらの動詞は主体から対象に能動的に働きかけるのではなく、外部

からの刺激による反応を表すため、自動詞表現としてガ格をとると考えられる。

これらの動詞はさらに（40）のように即時文にならないものと、（41）のように即時文になるものとに分けることができる。前者は「痛む」⁹⁾「ぐったりする」のように身体的な感覚を表す動詞が含まれ、後者は「疲れる」「見える」「感じる」のように身体的な感覚を表すものと五感や心による知覚を表すものの両方が含まれる。ただし、前者の「痛む」「くらくらする」と後者の「痺れる」「どきどきする」などは精神的感覚にも肉体的感覚にも使われるよう、精神的感覚と肉体的感覚は截然と分けることができず、お互いに連続しているが、本稿では即時文の成立可能性によって、相対的に感覚を表すものと知覚を表すものに分けることができることを主張する。

(40) (思わず) 「*ああ、ぐったりする／ぐったりした」と呟いた。

(41) (思わず) 「ああ、いい匂いがする」と呟いた。

最後に、感情的心理動詞の場合を表7に示す。

表7 感情的心理動詞の自己制御性・即時性・格助詞の関連

		自己制御性	
		+命令文	-命令文
即時性	-即時文	ヲ格: 愛する、侮る、慕う、妬む、妬む、蔑む、呪う、忍ぶ、憎む、恨む、嫌う、尊敬する、実感する、抑圧する、軽蔑する(15語)	ヲ格: 好く、尊ぶ(2語)
		ヲ格寄り: 楽しむ、諦める、悲しむ、恐れる、堪える、躊躇う、悔やむ、後悔する、喜ぶ(9語)	ヲ格寄り: なし
		ニ格寄り: 同情する、怯える、耐える、同意する、満足する、嫉妬する、感謝する(7語)	ニ格寄り: 戸惑う、感心する、感動する、苦しむ、激怒する、共感する、挫折する(7語)
		ニ格: 惚れる、キレル、怯む、慣れる、心配する、落胆する、仰天する、がっかりする、びくびくする、くよくよする(10語)	ニ格: 感激する、逆上する、失望する、驚愕する、退屈する、ぞつとする、むつとする、どきっとする、うつとりする、どぎまぎする、ハラハラする、ワクワクする、ぞくぞくする(13語)
		ガ格: のんびりする、リラックスする、ボーッとする(3語)	ガ格: あがる、舞い上がる、うきうきする(3語)
即時性	+即時文	ヲ格: なし	ヲ格: なし
		ヲ格寄り: なし	ヲ格寄り: なし
		ヲ/ニ格: 焦る ¹⁰⁾ (1語)	ヲ/ニ格: なし
		ニ格寄り: 驚く、憧れる、迷う、悩む(4語)	ニ格寄り: なし
		ニ格: 白ける、滅入る、めげる、懲りる、安心する、緊張する、イライラする、びっくりする、ほっとする(9語)	ニ格: まいる、困る、弱る、呆れる、飽きる、うんざりする(6語)
		ガ格: 落ち着く(1語)	ガ格: なし

表7に示すように、感情的心理動詞はヲ格をとるもの、ヲ格寄りのもの、ヲ／ニ格両用のもの、ニ格寄りのもの、ニ格をとるもの、ガ格をとるものとの六つの場合がある。

このうち、ヲ格をとるものとヲ格寄りのものは「好く」「尊ぶ」¹¹⁾の2語を除いて自己制御性が相対的に高いものが多い。また、ヲ格をとるものとヲ格寄りのものは〔+即時文〕のものではなく、即時性が相対的に低い。これは上の思考認識的心理動詞と同様に、主体が意志的に感情の発動をコントロールしやすいためであると考えられる。また、ヲ格をとるものとヲ格寄りのものには対応する感情形容詞があるものが多いということも即時文に使いにくい原因であると考えられる。例えば、(42)では動詞「悲しむ」ではなく形容詞である「悲しい」が選択される。(43)も同様である。このように、ヲ格をとるものとヲ格寄りのものは思考認識的心理動詞と似ており、自己制御性が相対的に高く、即時性が相対的に低いという特徴がある。

- (42) (思わず) 「ああ、{悲しい／*悲しむ}」と呟いた。
 (43) (思わず) 「ああ、{悔しい／*悔やむ}」と呟いた。

一方、ニ格をとるものとニ格寄りのものは命令文や即時文になるものとならないものがある。つまり、ニ格をとるものとニ格寄りのものは自己制御性も即時性も相対的に高いものと低いものとがある。例えば、(44)の「惚れる」は命令文になるのに対し、(45)の「呆れる」は命令文にならないことから、「惚れる」は「呆れる」より相対的に自己制御性が高いことが分かる。また、(46)の「惚れる」は即時文にならないのに対し、(47)の「呆れる」は即時文になることから、「惚れる」は「呆れる」より相対的に即時性が低いことが分かる。このように、ニ格をとるものとニ格寄りのものは自己制御性も即時性も相対的に高いものと低いものとがある¹²⁾。

- (44) あの人に惚れるな。
 (45) *そんなことぐらいで呆れるなよ。
 (46) (思わず) /*ああ、惚れ {る／た}」と呟いた。
 (47) (思わず) 「ああ、呆れたな」と呟いた。

以上のように、全体的に見るとヲ格をとる心理動詞とヲ格寄りの心理動詞はほとんど命令文になるが、即時文になりにくい。つまり、相対的に自己制御性が高く、かつ即時性が低い。それに対して、ニ格をとる心理動詞とニ格寄りの心理動詞は命令文にも即時文にもなるものとならないものとがある。つまり、自己制御性も即時性も相対的に高いものと低いものとがある。

おわりに

以上、本稿は日本語の心理動詞における自己制御性・即時性と、格の関連について考察してきた。その結果、以下の3点が分かった。

1. 思考認識的心理動詞は命令文になりやすいが、即時文になりにくいことから、自己制御性は相対的に高く、即時性は相対的に低い。また、対象にヲ格をとるものとヲ格寄りのものが多い。
2. 知覚感覚的心理動詞は命令文にはならないが、即時文にはなるものとならないものとがある。また、対象にガ格をとるものが多い。
3. 感情的心理動詞は自己制御性も即時性もあるものとないものとがあり、思考認識的心理動詞寄りのものと、知覚感覚的心理動詞寄りのものと、どちら寄りでもないものとがあることを指摘する。また、対象にヲ格をとるもの、ヲ格寄りのもの、ニ格をとるもの、ニ格寄りのもの、ヲ／ニ格両用のもの、ガ格をとるものがある。

今後の課題として、本稿では（48）（49）のように「わっ／あっ／ああ」などの感動詞をつけて話し手の即時的な感情を表すことができる文を即時文としているが、（48）の「びっくりした」はタ形であり、（49）の「迷う」はル形である。このように、即時文にはタ形のものとル形のものとがある。この二つのタイプは自己制御性などの点においてどのような違いがあるかについてまだ検討する余地があると思われる。

(48) (突然雷が鳴って思わず) 「わっ、びっくりした。」と叫んだ。 (=34)

(49) (どちらの料理を注文するか迷い、思わず) 「ああ、迷うなあ」と呟いた。

(=35)

注

- 1) 本稿でいう即時性は岩崎・大野（2007）の「即時文」の性質に相当する。岩崎・大野（2007:137）では、「即時文は、話者が自分の中に生じた感覚、感情、思考、意見などを即座に表出するものである。これらの感情、思考などの表出には、話の現場、発話内容、話の流れなどへ反応して起こるものと、周囲とは直接無関係に、話し手の中で自然発生的に起こる場合がある」と論じている。
- 2) 吉永（2018:88-89）で挙げられた心理動詞に「気をもむ」「胸がさわぐ」のような派生語もあるが、コーパスにおける用例数が少なく、また、基本的に格をとらないものが多いため、本稿では対象外とする。
- 3) 「知る」には「恥を知れ」のように命令文の用法もあるが、これは慣用句で特殊な表現であるため、一般的に「知る」は命令文として使わないと思われる。

- 4) 本稿は命令文、感嘆文に使用可能なものを [+]、不可能なものを [-] で表記する。
- 5) 500 例以下の場合は全用例を集計し、501 例以上の場合は検索画面の 500 例を集計した。
- 6) ヲ格のみとるもの、ヲ格寄りのもの、ヲ／ニ両用のもの、ニ格寄りのもの、ニ格のみとるものとの判断基準は次のようにある。

「ヲ格」の割合	心理動詞のとる格
100%	ヲ格
70～100%未満	ヲ格寄り
30～70%未満	ヲ／ニ両用
0～30%未満	ニ格寄り
0%	ニ格

- 7) 「祈る」などの思考認識的心理動詞は「神様に家族の幸せを祈った」のように、ニ格が前にくる可能性もあるが、本稿は対象にとる格のみを考察するため、この場合のニ格は考慮に入れないことにする。
- 8) 「もくろむ」「おしほかる」などがなぜ命令形にならないのかは今後の課題とする。
- 9) 「痛む」は感情形容詞の「痛い」があるため、即時文では形容詞の「ああ、痛い」が選好されて言わないのかもしれない。
- 10) 「焦る」は、500 例のうち 19 例がヲ格をとり、7 例がニ格をとっていたが、ヲ格をとる 19 例のうち 10 例が「功を焦る」という慣用表現であったため、どちらにも偏らないヲ／ニ両用とした。
- 11) 「好く」「尊ぶ」がなぜ命令形にならないのかは今後の課題とする。
- 12) 表 7 に示されるように、[−命令文] [+即時文] となるものはすべてニ格をとるものであることから、自己制御性が相対的に低く、かつ即時性が相対的に高いものはニ格をとる心理動詞であると思われる。

参考文献

- 岩崎勝一・大野剛(2007)、「「即時文」・「非即時文」--言語学の方法論と既成概念」(串田秀也、定延利之、伝康晴『時間の中の文と発話 シリーズ文と発話 3』ひつじ書房)、135-157 頁。
- 小竹直子(2011)、『日本語心理述語文のアスペクト--話者による事態の捉え方の観点から』広島大学大学院博士学位論文。
- 趙仲(2016)、『日本語心理動詞の内部機能変化と外部連続性--主体性関与を手掛かりとする語彙・文法的な総合研究』北京外国语大学博士学位論文。
- 寺村秀夫(1982)、『日本語のシンタクスと意味 (第 1 卷)』くろしお出版。
- 仁田義雄(1988)、「意志動詞と無意志動詞」『月刊言語』17(5)、34-37 頁。
- 仁田義雄(2004)、「意志性から見た主語」『月刊言語』33(2)、41-49 頁。

森山卓郎(1988)、『日本語動詞述語文の研究』明治書院。

山岡政紀(2000)、『日本語の述語と文機能』くろしお出版。

吉永尚(2008)、『心理動詞と動作動詞のインターフェイス』和泉書院。

用例出典・資料

国立国語研究所 現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)

A Study of Self-controllability and Immediacy in Japanese Psychological Verbs:

From the Perspective of the Relationship to Case

WANG, Yunjiao

Abstract

This paper considers the relationship between case and self-controllability and immediacy in Japanese Psychological Verbs. As a result, the following conclusions were obtained.

1. Thinking Verbs tend to form imperative sentences, but they are less likely to form immediate sentences, so they have relatively high self-controllability and relatively low immediacy. In addition, most of them are “Wo” case or biased toward “Wo” case.
2. Perception / Sense Verbs all can form imperative sentences, but some can form immediate sentences, and some cannot. In addition, most of them are “Ga” case.
3. Emotional Verbs may or may not be self-controllable and immediate. Some are closer to Thinking verbs, some are closer to Perception/ Sense Verbs, and some are not. In addition, there are “Wo” case, “Wo” case biased, “Ni” case, “Ni” case biased, “Wo/Ni” dual-used case, or “Ga” case.

Keywords : Psychological Verbs, self-controllability, immediacy, imperative sentences, case

共起する動詞の違いからみた複合動詞「V1-間違える（間違う）」と 副詞的用法「間違えて（間違って）Vする」の意味分析

南 明世（名古屋大学大学院生）

要旨

行為の対象の失敗を表す複合動詞に「V1-間違える」「V1-間違う」がある。これらは、「間違えてVする」「間違ってVする」と副詞的用法に言い換えられる場合がある。しかし、すべて言い換えられるとは限らず、言い換えられない場合もある。そこで本稿では、複合動詞用法「V1-間違える」「V1-間違う」および副詞的用法の「間違えてVする」「間違ってVする」の4つの表現について、現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）を利用し、共起する動詞の違いから相違点を考察した。その結果、いずれも主に動作動詞と共に対象Aと対象Bの誤りの意味を表すが、複合動詞用法「V1-間違える（間違う）」は、対象Aと対象Bの取り違えに焦点があり、副詞的用法「間違えて（間違って）Vする」は、対象Aと対象Bのうち誤った対象を選択したことに焦点がある点で異なることを指摘した。これは、V1の「間違う」という行為の後にV2の行為が行われるという「V1 て V2」の順序に起因していると思われる。また、「間違ってVする」には「生まれる」など無意志動詞と共に起して、当該自体が予想外に成立して、そのことがまるで間違いであったかのように述べる表現があることを指摘した。

キーワード：失敗を表す複合動詞、副詞的用法、コーパス、「V1-間違える（間違う）」、「間違えて（間違って）Vする」

はじめに

日本語の語彙的複合動詞は主題関係複合動詞とアスペクト複合動詞に分けられる¹⁾（影山2013）。主題関係複合動詞は「V1 て V2」と言い換えられるのに対し、アスペクト複合動詞は「V1 て V2」に言い換えられないという違いがある。つまり、(1) の主題関係複合動詞「歩き疲れる」は「歩いて、その結果疲れる」という意味であるが、(2) のアスペクト複合動詞「見逃す」は「見て、その結果逃す」という意味ではなく、「見るという機会を逃す」という意味を表すという違いがある。

- (1) 主題関係複合動詞：歩き疲れる → 歩いて、（その結果）疲れる
- (2) アスペクト複合動詞：見逃す → *見て、（その結果）逃す

アスペクト複合動詞の多くは「V1-逃す」や「V1-忘れる」のように「V2 て V1」と言い換えられない。しかし、「V1-間違える（間違う）」は（3）や（4）のように言い換えられない場合もあるが、（5）のように「V2 て V1」に言い換えられる場合もある。

- (3) a. かえすがえすも山広は、時流と自分の才能を読み間違えた（*間違えて読んだ）²⁾としか言えない。（鈴木智彦『親分』PB53_00073³⁾）
b. 下を向いて彼の話を聞いていると、BBCのアナウンサーの声かと聞き間違う（*間違って聞く）ほどだ。（井形慶子『イギリス式お金をかけず楽しく生きる！』PB25_00152）
- (4) a. 油性ペンで間違えて書いて（*書き間違えて）しまった文字や子どもの落書き。（不明『伊東家の食卓裏ワザ大全集』OB5X_00075）
b. 他の人がまちがって使わない（*使い間違わない）ようにするためでもあるのです。（小林久美子『小林久美子の三つ星テーブルマナー』LBq5_00041）
- (5) a. うつかり両者のボタンを押しまちがえる（間違えて押す）ことのないような工夫を期待します。（岩崎かつ代『くらしの安全徹底ガイド』LBm3_00019）
b. 一瞬、ベルを押しまちがった（間違って押した）のかと思ったほど美弥子の声は変わっていた。（高嶋哲夫『トールーマン・レター』PB19_00402）

本稿では「間違えて（間違って）V1する」のような「V2 て V1」を副詞的用法と呼ぶこととし、複合動詞「V1-間違える（間違う）」との意味の相違を比較し、それぞれの特徴を明らかにすることを目的とする。

また、「V1-間違える」と「V1-間違う」は（6）のように言い換えられる場合もあれば、（7）のように言い換えられない場合もある。同様に「間違えて Vする」と「間違って Vする」も（8）のように言い換えられる場合もあれば、（9）のように言い換えられない場合もある。

- (6) ご存知のとおり、ドン・キホーテが風車を巨人と見間違えた（見間違った）のだ。（木村浩嗣『情熱のアンダルシアを旅するスペイン』LBq2_00088）
- (7) 一見、真跡かと見間違う（*見間違える）ほどの精巧な模本で、奈良時代に我が国に伝來したと考えられています。（栗原蘆水ほか『書道III』OT63_00047）
- (8) 特にことわざ、四字熟語、間違えて（間違って）覚えていた言い回しなどがどんどん矯正されていく。（長島猛人『チャイムが鳴ったら』PB23_00168）

- (9) 単にコーヒーと間違えて (*間違って) 紅茶を飲んだだけで、衝撃的な味覚体験になってしまうとは。(中野純『闇を歩く』PB12_00001)

以上の点について、本稿では現代日本語書き言葉均衡コーパス（以下 BCCWJ）を利用して、複合動詞「V1-間違える」「V1-間違う」、副詞的用法「間違えて V する」「間違って V する」に使われる動詞の違いをみることにより、これら 4 つの表現の相違点を考察する。

I. 先行研究

森田（1989：81）では「間違える（他）／間違う（自、他）」を「A なら A と判断すべきところを他の B・C・D……などと取り違えること。そこから、一ある決まったやり方に反する、もしくは、二他と取り違える、の意味が出てくる」と述べている。更に「「間違える」には「つい／うっかり／不注意／不勉強」等の原因が想定されやすく、本人の責任と判断されてしまう」と述べている。森田（1989）で述べられている通り、「間違える・間違う」には「友達の名前を間違えた（間違った）」のように A とすべきところを A 以外の何かと取り違えた意味がある。本稿では森田（1989）を受けて「取り違え」や「うっかり」といった意味が複合動詞や副詞的用法にも反映されているかを見る。

また、薛（2019）は BCCWJ を利用して、「間違えて V する」や「間違って V する」が「V1-間違える」に言い換えられるかどうかを検討している。その結果、次の 1～2 の場合には言い換えができ、3 の場合は言い換えられないと述べている。

[言い換え不可]

1. 原因：「間違える」が V1 の発生する原因となる場合

- (10) 連敗が多いのでしょう。勝っているのは、間違って勝ってしまったのです。
(Yahoo!知恵袋) (*勝ち間違える) (薛 2019 の例文 (44))

2. 動作の順番：動作が順番に起き、V1 と「間違える」が時間的に切れている場合

- (11) ちなみに私がプレゼントしたスーツのジャケットを誰かのと間違って着て來たみたいなので、放置してやろうかともおもってますが… (Yahoo!知恵袋) (*着間違える) (薛 2019 の例文 (45))

[言い換え可]

3. 付帯状況：「V1 しながら間違えた」に言い換えられる場合

- (12) 字を {間違えて書いて/書き間違えて} しまった。(本稿の作例) (薛 2019 には例文が無かった)
(薛 2019 : 76 の記述を整理し直した)

たしかに、「1. 原因」の場合、(10) は何かの間違いが起きて勝ったという「原因－結果」

の解釈ができなくもない。しかし、ここで言いたいのは「運命のいたずらのように、勝つことが奇跡的で、まるで間違いであったかのようだ」という意味であり、「勝つ」という事態の成立が予想外のことであったことを表している。これに対し、後述するように「V1-間違える」は対象の取り違えを表す表現であるため、「勝つ」のような自動詞には着きにくいのである。そもそも（11）の「間違って着る」も（12）の「間違えて書く」も間違えることが原因でV1が発生すると言えなくもないため、「原因」による説明は成り立たないと考えられる。

次に「2. 動作の順番」の「時間的に切れている」ということについて、薛（2019:76）は「V1-間違える」のV1と「間違える」は、目的語が同じでなければならず、さらに、二つの動作が同時でない場合は共起できないと考えられる」と述べている。どのような場合に「時間的に切れているか」あるいは「二つの動作が同時でない場合」なのかについては詳しく説明されていない。薛（2019）は（11）で服を間違えて選ぶことと実際に着ることの間に時間的な差があることを言っているように思われる。しかし、この「着る」は服を選ぶことも含めて言っているので、必ずしも時間的に切れているとは言えない。もしこれが時間的に切れているのであれば、（10）と（12）も「何かの間違いがあって、その結果、勝った」、「思い違いや運筆の間違いがあって、その結果字を間違えた」と言えなくもない。また、「（服を）着間違える」は確かに不自然であるが、「（靴を）履き間違える」なら自然である。そのため、「動作の順番」という説明も成り立たないことになる⁴⁾。最後の「付帯状況」という説明も、基本的に「間違えてVする」や「間違ってVする」が「V1-間違える」は全て付帯状況を表すため、有効な説明とは言えない。ただし、これらの副詞的用法と複合動詞形の間に置き換え可能なものとそうでないものがあることが指摘されている点は重要である。本稿では「字を書き間違える」のように対象の取り違えを表す場合には「V1-間違える」が使えるが、「*勝ち間違える」のように対象の取り違えを表さない場合には使えないことを主張する。

また、薛（2019）では「V1-間違える」、「間違えてVする」、「間違ってVする」の3語を対象としており「V1-間違う」は対象としていない。しかし、（13）のように「見間違える」、「見間違う」でも言い換えられない場合がある。

（13）一見、真跡かと見間違う（*見間違える）ほどの精巧な模本で、奈良時代に我が国に伝來したと考えられています。（栗原蘆水ほか『書道III』0T63_00047）

このような「V1-間違える」と「V1-間違う」については考察されていないため、本稿ではまず複合動詞用法の「V1-間違える」と「V1-間違う」の相違点について考察した後、副詞的用法の「間違えてVする」と「間違ってVする」の相違点について考察する。更に、複合動詞用法「V1-間違える」、「V1-間違う」と副詞的用法「間違えてVする」、「間違って

Vする」を比較することで、複合動詞用法と副詞的用法の相違点について考察する。

II. 「V1-間違える」と「V1-間違う」の違い

まず「V1-間違える」と「V1-間違う」の相違点について考察する。本稿では「V1-間違う」、「V1-間違う」をBCCWJから中納言を使用して検索した。検索条件は次の通りである。

「V1-間違う」	
キー	:品詞-大分類-動詞
後方共起条件1	:語彙素読み「マチガエル」

「V1-間違う」	
キー	:品詞-大分類-動詞
後方共起条件1	:語彙素読み「マチガウ」

以上のようにして検索した結果、「V1-間違う」の延べ語数は182語、異なり語数は28語、「V1-間違う」の延べ語数は76語、異なり語数は17語であった。表1、2は「V1-間違う」、「V1-間違う」のV1の出現数上位20位までの例を示したものである。各表の割合(%)は延べ語数における出現率を表す。

表1. V1-間違う

延べ語数：182語 異なり語数：28語

	V1	数	%
1	見	53	29.12
2	聞き	20	10.99
3	書き	15	8.24
4	言い	14	7.69
5	かけ	12	6.59
5	まかり	12	6.59
7	読み	9	4.95
8	押し	7	3.85
9	乗り	5	2.75
10	打ち	4	2.20
10	踏み	4	2.20
12	し	3	1.65
13	つけ	2	1.10
13	とり	2	1.10
13	計り	2	1.10
13	呼び	2	1.10
13	使い	2	1.10
13	乗せ	2	1.10
13	数え	2	1.10
13	送り	2	1.10

表2. V1-間違う

延べ語数：76語 異なり語数：17語

	V1	数	%
1	まかり	28	36.84
2	見	26	34.21
3	聞き	6	7.89
4	数え	2	2.63
5	読み	2	2.63
5	し	2	2.63
7	言い	1	1.32
7	入り	1	1.32
7	思い	1	1.32
7	打ち	1	1.32
7	押し	1	1.32
7	育て	1	1.32
7	乗り	1	1.32
7	食べ	1	1.32
7	繋がり	1	1.32
7	写し	1	1.32

表1、2をみると「V1-間違える」は「見る」、「聞く」、「書く」、「言う」といった動作動詞と共に起している。このうち「書く」は「V1-間違える」が15件も出現したのに対し、「V1-間違う」では1件も出現しなかった。(14)の「書く」という行為は相手が意志的に行ったものであり、このような表現は「書き間違う」と言い換えると不自然になる。

- (14) 処方せんに書く際、ちょっと書き間違えて（*書き間違って）別の薬出したり、量を十倍にしたりすることも時々ある。（楡一郎『医療機関はトラブルがいっぱい』PB54_00025）

本動詞「間違える」と「間違う」は言い換えが可能な場合もあるが、両者は「間違える」が「漢字を間違える」や「部屋を間違える」のように対象Aと対象Bの取り違えを表すに対し、「間違う」は「生き方を間違う」や「決定を間違う」のよう主体の判断ミスを表すという相違点があると思われる。この相違点が「V1-間違える」と「V1-間違う」にも受け継がれ、両者は言い換えが可能な場合もあるが、「V1-間違う」は他動詞と共に起して対象Aと対象Bの取り違えを表すのに対し、「V1-間違う」は接辞化した「まるで」や「見る」や「聞く」と共起して主体の判断ミスを表すという相違点がみられる。

例えば、「見る」は(15)や(16)のように「V1-間違える」と「V1-間違う」で言い換え可能な場合がある。

- (15) ご存知のとおり、ドン・キホーテが風車を巨人と見間違えた（見間違った）のだ。（木村浩嗣『情熱のアンダルシアを旅するスペイン』LBq2_00088）
- (16) 私専用のテーブル上にあったブラウンの手鏡を大麻と見間違った（見間違えた）のだと思います。（小林潔『ガサ！』LBs4_00047）

このように「風車」と「巨人」、「手鏡」と「大麻」のように「対象(A)」と「対象(B)」を取り違える意味を表す場合は「V1-間違える」と「V1-間違う」の言い換えが可能である。

一方、(17)の「V1-間違う」は「V1-間違う」で言い換えることができない。(17)は「模写」と「真蹟」を取り違えたことを表すことに焦点があるのでなく、主体が判断ミスを犯す（ほど精巧だ）ということに焦点がある文である。(18)も同様である。

- (17) 一見、真跡かと見間違う（*見間違える）ほどの精巧な模本で、奈良時代に我が国に伝來したと考えられています。（栗原蘆水ほか『書道III』OT63_00047）
- (18) ズボンが目に入らなければ、一見すると女の子と見間違う（*見間違える）ほどかわいらしい。（白川佳代子『子どものスクリブル』PB14_00224）

両者の相違点は (15) と (16) の「ト」は並列助詞で、(17) と (18) の「ト」は「～と見なす」の「ト」と同じ引用を表す助詞である点にある。その証拠に、前者は (19) (20) のように「A ヲ B ト」を「A ト B ヲ」に言い換えると表面的な意味は変わらないのに対し、後者は (21) (22) のように「A ヲ B ト」を「A ト B ヲ」に言い換えると話の焦点が「ヲ」格のものに変わってしまう。

- (19) a. 風車を巨人と {見間違える/見間違う}。
b. 風車と巨人を {見間違える/見間違う}。
- (20) a. 手鏡を大麻と {見間違える/見間違う}。
b. 手鏡と大麻を {見間違える/見間違う}。
- (21) a. 模写を真蹟と {*見間違える/見間違う} (模写の話)。
b. 真蹟を模写と {*見間違える/見間違う} (真蹟の話)。
- (22) a. (彼を) 女の子と {*見間違える/見間違う} (彼の話)。
b. 女の子を (彼と) {*見間違える/見間違う} (女の子の話)。

また、1 件ずつではあるものの、「V1-間違う」には「思う」や「入る」といった V1 に自動詞が来るものもみられる。これらは (23) (24) のように「V1-間違える」とは言い換えられない。この場合も「見間違う」と同様に主体の判断ミスを表している。

- (23) わたしたちは、心の外に、心を離れてあたかも存在するがごとくに思いまちがって (*間違えて) いるのだと仏教は主張します。 (横山紘一『十牛図・自己発見への旅』PB51_00038)
- (24) 専門用語を理解しないと、入り間違う (*間違える) 危険があります。 (高橋伸子『誰にでもわかる保険の本』LB13_00135)

以上の考察から、「V1-間違える」と「V1-間違う」は共に対象 A と対象 B を取り違える意味をもつ点で共通しており、「V1-間違う」には「V1-間違える」では言いにくい判断ミスを表すことができる点で異なっていることがわかった。

III. 「間違えて V する」と「間違って V する」の違い

次に「間違えて V する」と「間違って V する」の相違点について考察する。本稿では「間違えて V する」と「間違って V する」を BCCWJ から中納言を使用して検索した。検索条件は次の通りである。

「間違えてVする」 長単位検索 「間違えて／まちがえて」	「間違ってVする」 長単位検索 「間違って／まちがって」
---------------------------------	---------------------------------

これによって出現したものから、「Vする」の形式を目視で抽出した。なお、(25) のように「間違えて」とVの間に語や文が入るものも、「V1-間違える」に言い換えができることから、本稿では考察の対象とする。

- (25) 中濃ソースをかけようとして間違えてウスターソースをかけてしまい、からつと揚がったはずのエピフライが湿ってしまう。(和泉桂『シークレット・レッサン』PB29_00263)

その結果、「間違えてVする」のVの延べ語数は264語、異なり語数は154語、「間違ってVする」のVの延べ語数は339語、異なり語数は188語であった。表3、4は「間違えてVする」と「間違ってVする」のVの出現数上位20位までの例を示したものである。各表の割合(%)は延べ語数における出現率を表す。

「間違えてVする」と「間違ってVする」はいずれも意志的な動作動詞が多くみられる。しかし、「間違ってVする」は「間違って生まれる」のように無意志の動詞に付く例もある。(26)の場合、「武門」と別の場所を間違えたという意味ではなく、「(武門に)生まれる」という事態そのものが誤りであったという、予想外に当該自体が成立することを運命のいたずらのように述べる表現である。ここで「間違えて武門に生まれた」と言うと、本当は別の場所に生まれるべきであったのに誤って武門に生まれてしまったという意味になる。そのため、このような場合には対象(この場合は場所)の取り違いを表す「間違えてVする」には言い換えられない。

- (26) 聞いた頼朝は、「おだやかでお心根のやさしき方であった。間違って(*間違えて)武門に生れたが如きお方であった故、さぞ生き難かったことであろう(宮尾登美子『宮尾本平家物語』PB49_00075)

表3. 間違えてVする

延べ語数: 264語 異なり語数: 154語

	V1	数	%
1	する	11	4.17
2	書く	10	3.79
3	入る	9	3.41
4	覚える	8	3.03
5	買う	7	2.65
6	出る	6	2.27
6	押す	6	2.27
6	入札する	6	2.27
9	クリックする	5	1.89
9	乗る	5	1.89
11	入れる	5	1.89
11	飲む	4	1.52
11	入力する	4	1.52
14	使う	4	1.52
14	言う	3	1.14
14	呼ぶ	3	1.14
14	持ってくる	3	1.14
14	食べる	3	1.14
14	教える	3	1.14
14	声をかける	3	1.14
14	付ける	3	1.14
14	持っていく	3	1.14
14	出品する	3	1.14

表4. 間違ってVする

延べ語数: 339語 異なり語数: 188語

	V1	数	%
1	使う	13	3.83
2	する	10	2.95
3	入れる	9	2.65
4	入札する	8	2.36
4	押す	8	2.36
4	入る	8	2.36
4	殺す	8	2.36
8	食べる	7	2.06
8	削除する	7	2.06
8	買う	7	2.06
11	クリックする	6	1.77
11	書く	6	1.77
13	消す	5	1.47
13	落札する	5	1.47
13	出す	5	1.47
16	入り込む	3	0.88
16	購入する	3	0.88
16	捨てる	3	0.88
16	飲み込む	3	0.88
16	飲む	3	0.88
16	振り込む	3	0.88
16	覚える	3	0.88
16	生まれる	3	0.88
16	行く	3	0.88
16	接続する	3	0.88
16	評価する	3	0.88
16	選ぶ	3	0.88
16	送る	3	0.88
16	理解する	3	0.88

また、「飲む」は「間違えてVする」、「間違ってVする」の両方に出現しているが、それぞれ表す意味が異なっている。「間違えて飲む」は(27)のように「コーヒーと紅茶のうち誤った対象(紅茶)を選択して飲んだ」という対象の失敗を表す時に使用されやすい。一方、「間違って飲む」は(28)のように「飲むつもりはなかったのに飲んでしまった」という行為の失敗を表している。

(27) 単にコーヒーと間違えて（[?]間違って）紅茶を飲んだだけで、衝撃的な味覚体験になってしまうとは。（中野純『闇を歩く』PB12_00001）

(28) 赤ちゃんが間違って（[?]間違えて）飲めば、亡くなる危険性が高いのだ。（平岩正樹『医者の私ががんに罹ったら』LBr4_00030）

これらは言い換えると不自然に感じられる。それは、「間違える」は「2つのものを取り違える」という意味を表すのに対し、「間違う」は「正しい行為」からの逸脱という本動詞の意味が強く影響しているためであると思われる。しかし、(29)の「Aのバス停とBのバス停のうち誤った対象を選択して降りた」や(30)の「油性ペンと別のペンのうち誤った対象を選択して書いた」のように行為の対象に対する選択の失敗を表す場合でも「間違ってVする」に言い換えられるものもある。(29)は「Aのバス停とBのバス停のうち誤った対象を選択して降りた」ことで「正しい行為（正しい駅で降りる）から逸脱した」という意味でも解釈でき、(30)は「油性ペンと別のペンのうち誤った対象を選択して書いた」ことで「正しい行為（別のペンで書く）から逸脱した」という意味でも解釈できる。このように「AとBの取り違い」を「AとBのうち誤った対象を選択してVすることで正しい行為から逸脱する」と解釈できる場合には言い換えが可能である⁶⁾。

(29) 間違えて（間違って）目ざすホテルの手前でバスを降りてしまった私たちを、二人の中学生が二十分ほどもある道のりをいやがりもせず案内してくれた。（中島暢太郎『パタゴニア氷河紀行』LBf2_00018）

(30) 油性ペンで間違えて（間違って）書いてしまった文字や子どもの落書き。（不明『伊東家の食卓裏ワザ大全集』OB5X_00075）

一方、(31)や(32)のような行為の失敗を表す「間違ってVする」は「間違えてVする」には言い換えられない。(31)の「間違えて殺す」であれば「殺す相手を間違えた（別の人を殺す）」という意味になり、(32)の「間違えて飲み込む」であれば「飲む薬を間違えた（別の薬を飲む）」というように「AとBの取り違い」の意味をもつためである。

(31) 間違って（^{*}間違えて）人を殺したら、どういう罪名になって幾らの処罰になりますか。（国会会議録 OM35_00003）

(32) この麻酔薬がなんともまずくて気持ちが悪い。閉口した。おそらくまちがって（^{*}間違えて）飲みこんだりしないようにという配慮なのだろう。（佐藤宏明『精神病棟の中で』LBo9_00131）

以上の考察から、「間違えてVする」は「AとBのうち誤った対象を選択してVした」

という対象の取り違えを表しており、「間違って V する」は「V するつもりはなかったのに V してしまった」という行為の失敗を表す点で異なっていることがわかった。このうち、「間違えて V する」は「A と B のうち誤った対象を選択して V することで正しい行為から逸脱する」と解釈できる場合には言い換えが可能である。一方、行為の失敗を意味する「間違って V する」は「間違えて V する」に言い換えられない。また、「間違えて V する」は無意志の動詞に付き自体そのものが誤っていたことを表すことができる点で「間違って V する」と異なっている。

IV. 「V1-間違える」「V1-間違う」「間違えて V する」「間違って V する」の違い

最後にこれまでの議論を踏まえて「V1-間違える」、「V1-間違う」、「間違えて V する」、「間違って V する」の 4 つの形式の相違点について考察する。表 5 は今回 BCCWJ から抽出した動詞のうち、いずれかの表現で 5 語以上出現したものの出現数を比較したものである。これを「V1-間違える」の出現数が多いもの、次に「間違えて V する」の出現数が多いもの順に並べた。() 内の数字は 4 つの形式はそれぞれの総出現数に占める出現率である。

表 5. 4 つの形式の動詞の出現数の比較

	V1-間違える	V1-間違う	間違えて V する	間違って V する
見る	53 (29. 12%)	26 (34. 21%)	0 (0%)	0 (0%)
聞く	20 (10. 99%)	6 (7. 89%)	0 (0%)	0 (0%)
まる	12 (6. 59%)	28 (36. 84%)	0 (0%)	0 (0%)
かける	12 (6. 59%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
言う	14 (7. 69%)	1 (1. 32%)	3 (1. 14%)	0 (0%)
書く	15 (8. 24%)	0 (0%)	10 (3. 79%)	6 (1. 77%)
読む	9 (4. 95%)	2 (2. 63%)	0 (0%)	0 (0%)
押す	7 (3. 85%)	1 (1. 32%)	6 (2. 27%)	8 (2. 36%)
する	3 (1. 65%)	2 (2. 63%)	14 (5. 30%)	10 (2. 95%)
入る	0 (0%)	1 (1. 32%)	9 (3. 41%)	8 (2. 36%)
覚える	0 (0%)	0 (0%)	8 (3. 03%)	3 (0. 88%)
買う	0 (0%)	0 (0%)	7 (2. 65%)	7 (2. 06%)
出る	0 (0%)	0 (0%)	6 (2. 27%)	0 (0%)
入れする	0 (0%)	0 (0%)	6 (2. 27%)	8 (2. 36%)
入れる	0 (0%)	0 (0%)	5 (1. 89%)	9 (2. 65%)
使う	0 (0%)	0 (0%)	4 (1. 52%)	13 (3. 83%)
食べる	0 (0%)	1 (1. 32%)	3 (1. 14%)	7 (2. 06%)
殺す	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	8 (2. 36%)
削除する	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	7 (2. 06%)
合計	182 (100%)	76 (100%)	264 (100%)	188 (100%)

これをみると、先にも述べたように複合動詞「V1-間違える」と「V1-間違う」で共通して多いのは「見る」「聞く」のような視聴覚を表す動詞と接辞化した「まかる」であることが分かる。また、「V1-間違える」も「V1-間違う」もV1に他動詞を取るが、「V1-間違う」の方が出現数が多く、相対的に広く使われていることが分かる。このうち、「まかる」や「読む」は「間違えてVした」や「間違ってVした」に言い換えられない。「まかり間違う（間違う）」は「まかる」が接辞化して意味を強調する意味であり、「読み間違う」は(33)のようにV1の「読む」が読書の意味ではなく、「理解する」という意味である。このようにV1の意味が希薄化したり別の意味になったりしている場合、「間違えてVする」や「間違ってVする」には言い換えられない。

(33) かえすがえすも山広は、時流と自分の才能を読み間違えた (*間違えて読んだ)
としか言えない。(鈴木智彦『親分』PB53_00073)

また、「見る」「聞く」のような視聴覚を表す動詞は(34)のように「間違えてVする」や「間違ってVする」に言い換えにくい。

(34) a. はるか彼方から、せわしげな足音が聞こえたからである。断じて聞き間違えたたりしない。(宮本輝『春の夢』LBc9_00059)
b. はるか彼方から、せわしげな足音が聞こえたからである。断じて{*間違えて/*間違って}聞いたたりしない。

「V1-間違う」、「V1-間違える」は「AとBを取り違える」という意味をもつが、「間違えてVする」、「間違ってVする」は「AとBのうち誤った対象を選択してVする」という意味をもつ。つまり、副詞的用法は「選択を間違える」という行為が行われてから、Vの行為が行われるのである。これは「V1でV2」の順序に起因していると思われる。例えば、「毎日7時に起きて、運動します」は「起きる」という行為のあとに「運動する」という行為が続くことを表す。同様に「間違えてVする」も「間違う」という行為が行われてから「V」の行為が行われることを意味している。(34)の場合、「(足音を)聞く→間違う」という順序で事態が発生するため、その順序を逆にした「間違えて(足音を)聞く」という言い方はできないのである。(34)は「間違う」という行為と「聞く」という行為が同時に行われている。「足音か別の音か選択」する以前にもう「聞こえている」のであり、行為をするかしないかの選択ができないのである。「見る」も同様である。

一方、「入る」、「入れる」、「食べる」、「使う」、「覚える」、「買う」などは「間違えてVする」、「間違ってVする」に共通して出現している。これらは「間違ってVする」と共起するとそれぞれ「入るつもりはないのに入った」、「入れるつもりはないのに

入れた」、「食べるつもりはないのに食べた」、「使うつもりはないのに使った」、「覚えるつもりはないのに覚えた」、「買うつもりがないのに買った」のように行行為の選択を誤ったことを表すことができるという点で共通しており、(35) のように「V1-間違える」や「V1-間違う」に言い換えにくい⁷⁾。(35) は対象の選択を誤ったことを表すのではなく、行為自体の選択を誤ったということを表す文脈であるため、複合動詞では言い換えられないと考えられる。

(35) システム的に間違って使え (*使い間違え/*使い間違わ) ないようになってい
るだけでなく、カートリッジの形状も変えられている。(河村正行『MD のすべ
て』 LBm5_00001)

しかし、(36) のように「使う」対象が「言葉」にすると比較的「V1-間違える」でも言
いやすくなる。これは行為自体の選択を誤った意味ではなく、対象の選択を誤った意味で
あるためだと考えられる。

(36) 肝心な言葉を使い間違えて (間違えて使って) しまった。(作例)

また、「間違って生まれた」のように無意志の動詞に付く例がある。これは(37)のよう
に「(武門に) 生まれた」ことが間違いであったという行為自体の間違いを表す。

(37) 聞いた頼朝は、「おだやかでお心根のやさしき方であった。間違って (*間違
えて) 武門に生れたが如きお方であった故、さぞ生き難かったことであろう。
(宮尾登美子『宮尾本平家物語』 PB49_00075)

次に複合動詞と副詞用法の両方に共通して出現した V に「書く」、「押す」、「する」
などがあげられる。このうち (38) ~ (41) の「押す」の例を使って、4 つの形式の意味
の違いをみる。

(38) うっかり両者のボタンを押しまちがえることのないような工夫を期待します。
(岩崎かつ代『くらしの安全徹底ガイド』 LBm3_00019)

(39) 一瞬、ベルを押しまちがったのかと思ったほど美弥子の声は変わっていた。(高
嶋哲夫『トローマン・レター』 PB19_00402)

(40) エレベーターがゆっくり次の階へ向かう。間違えて、ボタンを幾つかまとめて
押してしまったからだ。(平井和正『ウルフガイ魔界天使』 LBa9_00100)

(41) 手順3の画面で、間違って停止ボタンを押してしまったときは、手順2の画面に戻ります。 (小寺信良『できる CD & DVD 作成』LBsn_00011)

(38) の「押し間違える」は複数あるボタンのうち押すべきボタンを取り違えて押すことを表している。次の(39)の「押し間違う」は正しいベルではなく誤ったベルを押したことと表している。次の(40)の「間違えて押す」は誤ったエレベータの階数ボタンを選択して押したことを表している。最後の(41)の「間違って押す」は（インターネットの）画面上の停止ボタンを押すつもりはないのに誤って押したことを表している。本稿で考察した4つの形式は、典型的にはこのような意味の異なりを示しながら、互いに重なり合っているのである。

おわりに

本稿では日本語の失敗を表す複合動詞用法「V1-間違える」、「V1-間違う」と副詞用法の「間違えてVする」、「間違ってVする」の4つの形式の相違点について共起する動詞の違いから考察した。その結果、「V1-間違える」は「見る」、「聞く」、「書く」、「言う」という動詞と共に起しやすく、「対象Aと対象Bを取り違えてVする」という意味特徴をもつものに対し、「V1-間違う」は「まかる」「見る」「聞く」という動詞と共に起しやすく、「対象Aと対象Bを取り違えてVする」という意味とは別に「対象Aを誤って対象Bと見なす」という意味特徴をもつという特徴があることを明らかにした。また、「間違えてVする」は「する」、「書く」、「入る」、「覚える」という動詞と共に起しやすく、「AとBのうち誤った対象を選択してVする」という意味特徴をもつものに対し、「間違ってVする」は「使う」、「する」、「入れる」という動詞と共に起しやすく、「AとBのうち誤った対象を選択してVする（ことで正しい行為から逸脱する）」という意味特徴、および「Vすつもりでなかったのに誤ってVする」や「すべきではなかった」という行為の失敗という意味特徴をもつという特徴があることを明らかにした。以上の特徴をまとめると表6、表7のようになる。

表6. 複合動詞用法の特徴

複合動詞用法	V1の特徴	意味的特徴
V1-間違える	動作動詞	対象Aと対象Bを取り違えてVする
V1-間違う	まかる・見る・聞く (一部「思う」などの思考動詞)	1. 対象Aと対象Bを取り違えてVする 2. 対象Aを誤って対象Bと見なす（判断ミス）

表 7. 副詞的用法の特徴

副詞的用法	Vの特徴	意味的特徴
間違えて V する	動作動詞	対象の選択の失敗： A と B のうち誤った対象を選択して V する
間違って V する	動作動詞 無意志の動詞	1. A と B のうち誤った対象を選択して V する (ことで正しい行為から逸脱する) 行為の失敗： 2. V するつもりはないのに誤って V する 3. 行為自体の誤り (すべきではなかった)

複合動詞用法「V1-間違う」「V1-間違える」と副詞的用法「間違えて V する」「間違って V する」はいずれも対象 A と対象 B の誤りの意味をもつ点で共通しているが、以上のような違いがある。今後は「V1-落とす」や「V1-漏らす」など他の失敗を表す表現と比較することにより、これらの表現の特徴をより明確にしていきたい。

注

- 1) 影山 (2013:11) では主題関係複合動詞を「V1、V2 ともに主題関係（項関係）を持ち、V1 は V2 を様々な意味関係で修飾する」ものとし、アスペクト複合動詞を「文の項関係は基本的に V1 によって決まる。V2 は広い意味で語彙的アスペクトを表し、V1 が表す事象の展開について述べる」と定義している。
- 2) () 内の表現および下線は筆者が加えたものである。以下同様。
- 3) これは BCCWJ のサンプル ID である。以下同様。
- 4) 「?着間違える」が不自然な理由については、今後の課題とする。
- 5) 「まかり間違う」の「まかり」は古語の尊敬・謙譲の意味をもつ「まかる」が接辞化したもので、現代では意味を強める意味を表している。『旺文社国語辞典』では「まかり間違う」は「「まちがう」を強調した言い方。万一まちがう」という意味を表すとしている。
- 6) NHK 放送文化研究所（メディア研究部・放送用語 塩田雄大）によると、「間違う」は「人として間違った道を歩む」の場合、「道徳的に正しい生き方」を歩んでいないという意味を表し、「人として間違えた道を歩む」とはいえないことから、「間違う」は「正しい（あるべき）状態から外れていること」を意味すると述べている。一方、「間違える」は「ズーツの左右を間違えて履いてしまった」だと「A と B とを取り違える」という意味があると述べている。また、「右用は右足に、左用は左足に履くのが正しい」と解釈した場合は「間違う」とも言えるとしている。（参考 URL：
<https://www.nhk.or.jp/bunken/summary/kotoba/term/057.html>、2021 年 3 月 28 日検索）
- 7) 複合動詞と共に起する「覚える」、「聞く」、「言う」などは「覚え間違い」、「書き間違い」、「言

い間違い」、「見間違い」のように名詞用法があるが、副詞的用法と共に起する「使う」「食べる」「買う」などは「使い間違い」、「食べ間違い」、「買い間違い」は不自然になる。複合名詞との関係は今後の課題とする。

参考文献

- 影山太郎(2013)、「語彙的複合動詞の新体型—その理論的・応用的意味合い」(影山太郎(編)『複合動詞研究の最先端—謎の解明に向けて』ひつじ書房)、3-46頁。
- 薛婧宇(2019)、『日本語の失敗を表す複合動詞と中国語との対照研究』、名古屋大学修士学位論文。
- 森田良行(1989)、『基礎日本語辞典』、角川書店。

用例出典

- 松村明、山口明穂、和田利政(編) (2005)、『旺文社国語辞典』[第十版] 旺文社。

The Semantic Analysis of Compound Verb “V1-Machigaeru (Machigau)” and Adverbial Usage “Machigaete (Machigatte)-V” : From the Viewpoint of differences in Co-occurring Verb

MINAMI, Akiyo

Abstract

“V1-Machigaeru” and “V1-Machigau” are one of the Japanese compound verb which explain failure of object. These can be expressed adverbial usage “Machigaete-V” and “Machigatte-V” in other words. However, it can't be expressed in other words all of the time. Therefore the aim of this study is to examine the differences between four expressions: compound verb “V1-Machigaeru” “V1-Machigau” and adverbial usage “Machigaete-V” “Machigatte-V” through Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese (BCCWJ). As a result, all expressed the meaning of the false implementation on target A and target B when it co-occurring action verb. Compound verb more likely to express confounding of target A and target B, while adverbial usage tend to express selecting the wrong target. These differences might due to the order of “V1-te-V2”, namely an act of V2 is carried out after V1. In addition, when “Machigaete-V” co-occur with non-volitional verb (eg, “Umareru [born]”), it expressed the act was unexpectedly happened or implemented.

Keywords : compound verb for failure, Adverbial Usage, corpus, “V1-Machigaeru (Machigau)”, “Machigaete (Machigatte)-V”

漢語「生活」・「生産」の意味・用法に関する一考察 —明治期を中心に—

何 芸苑（神戸大学大学院生）

要旨

本稿は明治期における「生活」「生産」の意味・用法を明らかにするため、まず当時の辞書資料の意味記述を概観する。そして、『日本語歴史コーパス』を用い、実際の用例を分析することによって、「生活」「生産」の意味・用法を検討することを試みる。

明治期の辞書資料で「生活」「生産」の意味記述を確認したところ、明治中期までは各辞書資料の語釈は均質的であり、「生活」「生産」は「ナリワヒ」「スギハヒ」「ヨワタリ」といった意味で一貫している。『日本語歴史コーパス』の用例に合わせて見ると、「生活」は「①人間が生きていること。生物が命を維持するために行う活動」「②人間が世の中に暮らしていくこと。またそのために行う活動」「③生計を立てる。また人を頼らずに自立すること」の意味で用いられている。一方、「生産」の用例は「①出産すること」「②一種の経済活動として、物を作り出すこと。またその活動」「③文芸作品を創作すること」の意味に限られており、辞書資料において「ナリワヒ」の意味に相当する用例が見当たらなかった。

上記の分析によって、「生活」「生産」は意味上の重なりが少ないが、各自の②の意味で関連付けられていることが観察できる。全体的に見れば、両語は造語成分として数多くの合成語を造出した点で共通しており、いずれも当時活発に使用されていた漢語であると判断される。

キーワード： 生活、生産、近代語、漢語、語義

はじめに

本稿は明治期における「生活」「生産」の意味・用法を明らかにすることを目的とする。明治期は経済、政治、文化のあらゆる面で激動の時期であり、日本語の語彙の面もそのような傾向がある。とくに漢語の流行とともに、西洋から伝來した新しい概念を表す際に新漢語を創出する、また世相を反映する漢語を生み出すことがしばしば見られる。そして、漢語のそれまでの意味を拡大すること、意味が変化したことなど、語義面においてもさまざまな現象が生じる¹⁾。

本稿で扱う「生活」「生産」はそのような背景のもとでの一例であると言えよう。「生活」

「生産」は漢籍出典の語であり、近世以降から広く使用されている語である。現代日本語では、この二語の意味が異なっており、使い分けも明確ではあるが、明治初期に上梓された数多くの辞書資料は「生活」「生産」は同義語として扱われているように思われる²⁾。本稿は明治期の「生活」「生産」の意味・用法を確認するため、まず当時の辞書資料の意味記述を概観する。そして、『日本語歴史コーパス』を用い、用例を分析することによって、「生活」「生産」の意味・用法を検討することを試みる。

I. 先行研究

「生活」に関する先行研究については、まず坂詰（1983）は「生計」の関連語として漢語「生活」「生業」、和語「口過ぎ」「なりわい」を取り上げ、それらの語について、語誌の面において幅広く考察を行っている。そのうち、「生活」は江戸時代以降の使用が盛んになるとともに、意味も「生存する」から「世の中にくらしていくこと」までに広がっていくことが指摘されている。佐藤（1983:263）では、近世の資料『玉石志林』の漢語を調査したところ、近世中期の語例として「生活」が挙げられているが、詳しい記述が見られなかった。福井（1995）は「life」の訳語との関りを検討する際に「生命」「人生」「生活」について言及しており、「生活」は訳語としての位置づけを提示したものであると考えられる。木村（2018）では、「生活」ないしその周辺にある語は近代以降の辞書にどのように扱われていることが明らかにされており、「生活」が造語成分としての広がりも示されている。その上、木村（2019）は近代語の立場から二十世紀の新語辞典における「生活」の合成語を概観し、「生活」は20世紀以降の新語辞典から合成語の造語成分としても多面的に用いられており、近代用語として欠かせない存在であると指摘している。一方、「生産」は『日本国語大辞典第二版』（以下は『日国二』と略す）、『明治のことば辞典』などの辞書の記載以外、その語に関する先行研究は管見の限りでは見られなかった。『日国二』では、「生産」の初出は『江戸繁昌記』であり、近世以前の用例が確認できなかった。『明治のことば辞典』の記載からみれば、「生産」には、元来「なりわり、生活」「出産」の意味を持っていたが、明治期に入ると、現代語によく用いられる「消費財を作り出す」意味へと変化したことがわかった。

これらの先行研究の記述から、「生活」「生産」は共に近世以降から広く使用されている語である。また、「生活」と「生産」は意味上に共通点のある二語である同時、「生計」「生業」「人生」などの漢語との関連性が高いように思われる。

II. 明治期の辞書資料における「生活」・「生産」

「生活」「生産」の意味・用法を把握するため、本節はまず明治期の辞書資料の意味記述を確認する。辞書資料として、明治期の国語辞書も調査対象に入るが、その時期の小型辞書は実用性と事実性が持っており、時代の反映がなされるものと見なされるため³⁾、当

時成立した漢語辞書・俗語辞書を中心に調査を行う。なお、各辞書の意味記述によって、「生活」「生産」の関連語として「生業」「生理」「生計」があると判断されるため、合わせてこれらの語の意味記述も表に載せる。ここで、当時成立した27冊⁴⁾の辞書資料を取り上げる。各辞書の名は以下のように示し、各辞書の刊行年代・意味記述⁵⁾を表1にまとめる。

- ①『新令字解』②『日誌必用御布令引』③『漢語字類』④『新撰字類』
- ⑤『漢語便覧』⑥『新撰字解』⑦『大全漢語便解』⑧『漢語二重字引』
- ⑨『大増補漢語解大全』⑩『広益熟字典』⑪『漢語開化節用字集』⑫『大全漢語字彙』
- ⑬『音画漢語両引便覧』⑭『漢語挿入新撰玉篇』⑮『文明いろは字引』⑯『必携熟字集』
- ⑰『雅俗漢語字引大全』⑱『漢語いろは字典』⑲『言海』⑳『日本大辞書』
- ㉑『日本新辞林』㉒『ことばの泉』㉓『新編熟語字典』㉔『漢語故諺熟語大林』
- ㉕『新編漢語辞林』㉖『早縁辞書』㉗『辞林』

表1. 明治期の辞書資料における「生活」・「生産」及びその関連語の意味記述

辞書	年代	生活	生産	生業	生理	生計
①	明1	ナリワヒ	×	「生活」二同	×	×
②	明1	今日ノミスギ	×	今日ノミスギ	×	×
③	明2	「生産」二同	ナリワヒ	×	「生産」二同	×
④	明3	「生産」二同	なりわい	「生産」二同	なりわい	×
⑤	明3	「生民」二同 タミ	ナリワヒ	×	「生民」二同 タミ	×
⑥	明5	「生業」二同	「生業」二同	ナリワヒ	「生業」二同	×
⑦	明6	スギハヒ	スギワヒ	「生産」二同	ナリハヒ	×
⑧	明6	「生業」二同	×	ナリワヒ	「生業」二同	×
⑨	明7	「生業」二同	「生業」二同	スギハヒ	「生業」二同	×
⑩	明7	スギワヒ	スギワヒ	「生産」二同	ナリハヒ	×
⑪	明8	「生業」二同	「生業」二同	ナリワヒ	「生業」二同	×
⑫	明8	「生業」二同	「生業」二同	スギハヒ	「生業」二同	ナリハヒ
⑬	明10	×	「生業」二同	ナリワヒ	×	「生業」二同
⑭	明10	ナリハヒ	「生活」二同	×	ナリハヒ	ナリハヒ
⑮	明10	ナリワヒ	ナリハイ	×	ナリワイ ノミチ	ナイワイ ノミチ
⑯	明12	ヨワタリ ノゲフ	ヨワタリ ノワザ	ヨワタリ ノワザ	×	ヨワタリ ノミチ

72 漢語「生活」・「生産」の意味・用法に関する一考察（論文）

—明治期を中心に—

⑯	明18	スギワヒ	「生活」ニ同	ナリワヒ	「生活」ニ同	ナリワヒ
⑰	明20	ナリワヒ	ナリハイ	×	×	×
⑱	明24	生キテアルコト。スギワヒ。暮らし	ナリハヒ。 クラシ。	ナリハヒ。 スギハヒ。	×	生活ノ手段。 クチスギ
⑲	明26	生キテアルコト。クラシ =活計	ナリハヒ。 =産業	活計 ノミチ =タツキ	動植物ノ生活 ノ理	クチスギ =クラシ
⑳	明30	ア生存活動してあること。 イ活計、すぎはひ。	ア生計のたつきとなるべき産業。 イ物を産出すこと ○【同義】なりはひ、暮らし	活計の職業	動植物の生活の理。	すぎあひ、活計
㉑	明31	ア生きてはたらくこと。 イよわたり。暮らし。	生活を立てゆく、産業	よわたりのわざ。なりはい。 すぎはひ。	動植物の生活し居る、機関などのはたらき、又、そのことわり。	せいくわつのしかた。 くらしかた。 活計。
㉒	明33	×	スギワヒサン ヅツヲコシラ ベルコト	ナリワヒノコトナリ	イキモノノワケヲイフ	クラシカタ ライフ
㉓	明34	イキテアルコト	クラシ。 =ナリハヒ。 =ヨスギ。	生意	×	クラシ。 クチスギ。
㉔	明37	イキル	クラシ、=ナリハイ、産物 ヲコシラベダス	「生意」ニ同： ナリハヒ。=カゲフ。	×	クラシ。 クチスギ。
㉕	明37	×	サンモツヲツクリダス	ナリハヒ	×	クラシ
㉖	明40	ア生存して活	ア生計のたづ	生活のために	生物の生活す	くちすぎ。

	<p>動すること。 はたきうごく こと。 イすぎはひ。 くらし、活計。</p>	<p>きとなるべき 産業。なりは ひ、すぎはひ。 イ人類が自然 の上に人力を 加へて、財物 の効用即ち財 物がひとの慾 望を充すに適 する能力を作 り出し若しく は増加する と、分つてそ の原料の採取 産出即ち農 業・鉱業等と、 其形体の変更 即ち製造業等 と、其位置の 変更即ち商 業・運搬業等 との三とす、 而してその要 素は、自然と 労力と資本と の三なりと す。</p>	<p>なす仕事。 なりはひ。 すぎはひ。</p>	<p>る原理。 「せいりが く」の略</p>	<p>くらし。 すぎはひ。 活計。</p>
--	---	---	----------------------------------	--------------------------------	-------------------------------

明治期の辞書資料で「生活」「生産」の意味記述を確認したところ、その二語を同義語として扱う辞書は 13 冊あり、明治 20 年（1887 年）頃までに集中しているように見える。そのうち、『漢語字類』『新撰字類』『新撰字解』『漢語開化節用字集』『大全漢語字彙』『漢語挿入新撰玉篇』『文明いろは字引』『漢語いろは字典』『日本類語大辞典』の 9 冊では、「生活」「生産」は「ナリハヒ」（あるいは「ナリワヒ」「ナリハイ」）と記されており、『大全漢語便解』『大増補漢語解大全』『広益熟字典』『雅俗漢語字引大全』の 4 冊はその二語を「スギハヒ」（あるいは「スギワヒ」）としている。特別な例としては、『漢語便覧』には「生活」

を「生民」と並んで「タミ」と捉えるものが存在しているが、このような「タミ」の意味を表す「生活」は、『日国二』『大漢和辞典』で確認できなかった。また『必携熟字集』には、「生活」「生産」は「ヨワタリ」といった意味で重なっているものの、「生産」は「世渡りの業」とされているため、「生計を立てる職業」を強調する点で「生活」と区別している。

以上の記述から、明治初期の各辞書資料では、「生活」「生産」の語釈は均質的であり、大きな相違が見られなかった。「生活」「生産」はほぼ「ナリワヒ」「スギハヒ」といった意味で一貫している。

明治中期以降、「生活」「生産」をまとめて語釈を与える辞書資料が依然として存在している。『言海』では、両語の語釈には「スギワヒ」「ナリハヒ」のほか、「クラシ」といった意味で重なっている。そのうち、「生活」は「生キテアルコト」といった語釈が対応していることが注目に値する。次いで明治 26 年（1893 年）に成立した『日本大辞書』をはじめ、『日本新辞林』『ことばの泉』『辞林』では「生産」には「産業」といった記述が出現し、『新編熟語字典』『新編漢語辞林』『早繰辞書』では「産物」と解釈されていると見受けられる。明治中期以降、辞書資料において、「生活」は「イキル」「クラシ」、「生産」は「産業」「産物」とされることが定着しており、『辞林』『大辞典』などの国語辞書には「生活」「生産」は現代語のような意味分担が見えるようになったと思われる。

明治初期に刊行された漢語辞書・俗語辞書は実用性を重視しているため、限られている紙幅で見出し項目の漢語に簡潔な語釈を施すものが多く、異なる漢語に同じ語釈を与えることを避けない記述態度を探っている⁶⁾。明治 25 年（1892 年）頃は国語辞書の完成期を迎えるとともに、各語について前より詳しい意味記述を求められるようになったが、各辞書資料の体裁によって語釈の与え方に差異がある。以上の要因からみれば、辞書資料の記述が限られているものである。そのため、「生活」「生産」は当時どのような意味で用いられていたかを確実に把握するならば、実際の用例を調査する必要があると思われる。

III. 『日本語歴史コーパス』における「生活」・「生産」

前節では、明治期の各辞書資料における「生活」「生産」の意味記述を概観した。本節では、実際の用例⁷⁾を整理・分類することによって、「生活」「生産」の意味・用法を把握することを試みる。具体的には『日本語歴史コーパス CHJ』（データバージョン 2020.03 中納言 2.5.2）を用いて、用例を抽出した。検索する際、時代名を「6 明治」に指定し、短単位検索を行った。検索条件「キー 書字形出現形=生活」によって得られた 1601 例、検索条件「キー 書字形出現形=生産」によって得られた 751 例を分析対象とした。

1. 『日本語歴史コーパス』における「生活」

『日本語歴史コーパス』において、明治期で「生活」は 1601 例あった。そのうち、「生きていること。存在していること」の意味として捉えられる「生活」は 106 例見られ、(1)

～ (7) はそれに当たるものである。このような意味に使われる用例は 1895 年以前に散見され、それ以降の使用が少なくなってきたと観察できる。例 (1) (2) では、「人間」「人類」は自然の恵みを受けながら世の中に生きていることが述べられており、「生活」の指す対象が「人」である。

(1) 又空気といふ物は大切なものにて空気がなければ人間は生活して居ることが出来ません。

(開化問答: 1874 [初編] 下 小川為治(作))

(2) 又大気ト水ト光トヲ共同ニ用フルノ権理アリ是等ヲ自然ノ権理ト云フ其故ハ人類ハ天ヨリ生活シタル体ヲ受ケ、

(明六雑誌: 1875 「権理」解西語十二解の三 西村茂樹(作))

それに対し、(3) ～ (7) の用例は「生活」が人間以外の生物に用いられる可能性を提示している。(3) は植物の生存競争、(4) は珊瑚虫の生存環境について語るものであり、いずれも「生活する」といった形で植物・動物が「命を維持する」という内容を表現する用例と見受けられる。同じく動植物に使われる用例であるが、(5) ～ (7) では「生活機能」「生活作用」「生活力」のような「生活」の合成語の使用が注目に値すると思われる。これらの合成語はその時代の新語として、自然・科学知識を紹介する文章では数多くの用例を見出すことができる。

(3) 優勝劣敗の原理に依て、生存競争場里に相駆逐し、他を凌ぎて勝を制せんと勉むるが故に、其総数の饒富なること、挙て数ふべからず、而して是等の植物は、或は水陸に生活し、或は空気中に浮游し、

(太陽: 1895 日本植物の概論 安田篤(作))

(4) そもそも、珊瑚虫は、海水中に生活して、殻を造るものなれば、珊瑚礁の海面にあらはるることはなきはずなるに、

(国語教科書高等小学校国語一期: 1904 第 1 課高等小学校 3 年文部省)

(5) 冬は植物凡て静息の時季なれば、更に降霜の害を見ることなし、然れども春季気候漸く温暖となり、植物の生活機能已に活動を始め、

(太陽: 1895 「霜害之説」上野英三郎(作))

(6) 然るに新梢発生後新に生せる細根が獨力にて生活作用を営み能はざるに先ちて時として貯蔵養分の缺乏を來すこと、是れ発病の期なり、

(太陽: 1901 「農業世界」上野英三郎(作))

(7) 植物は重力に反して上方に向ふて生長するも、少しく其生活力衰ふるときは引力の為めに直ちに倒され或は酸素の為めに腐敗するに至り、

（太陽：1895 人生観に就て 元良勇次郎（作））

次の（8）～（11）のように、「人間が世の中に暮らしていくこと」の意味として捉える「生活」は1436例あり、「くらし」と言い換えられると思われる。そのうち、（8）（9）の「生活」は「人間の日常的活動」に限定されている。具体的に見れば、（8）は「衣食住」に限られて「生活の基本」を描くものであり、（9）の「学校生活」「政治生活」のように「生活」がある領域と結び付く用例も散見される。また、その時期に「生活難」「生活費」などの経済問題に関わる合成語が出現し、用例（10）（11）の文脈に含まれる「文明諸国共通の現象」「殆んど困らぬ月がない」の部分から、時代の世相を反映するために造出された語と言えるだろう。

（8）一の外国人と一の日本人との間に生ずる事情は、直に一変して一の日本人と他の日本人との間に生ずる事情となるは固より疑を容る可らず、此の如きは豈に只だ衣食住の生活のことのみならんや。

（国民之友：1887 外交の憂は外に在らずして内に在り）

（9）其の勃々たる功名心と其の自ら負ふの新智識とは、彼等をして遂に学校生活より一躍して政治生活に入らしめたり、

（太陽：1901 大学派の政治的系統＊（作））

（10）生存競争の苦痛激増し一身一家を支持すること困難を加へ、生活難に於ての煩悶を生じ来るも亦た文明諸国共通の現象なりとす。

（太陽：1909 現時の青年に告ぐ 浮田和民（作））

（11）細君が節儉して貯へて置いた金が少しあつたのを、ぼつぼつ引出して生活費の不足を補つてゐる間はよかつたが、通帳の残高欄へ棒を引かれてからは、犬塚は殆んど困らぬ月がない。

（太陽：1909 老技手 西村醉夢（作））

一方、（12）～（14）のような用例では「生活」の使用範囲は「日常的活動」にとどまらず、「精神的活動」まで拡張されたように見える。（12）は「高尚の生活」を用いて「精神の豊かさ」を強調する例である。この用法において、「生活」を造語成分とした合成語の使用が目立つようと思われる。（13）（14）に挙げた「裸体生活」「美的生活」を含め、ほかには「簡易生活」「孤独生活」などのような「人間の精神的追求」を表す「生活」の合成語は、二十世紀初頭から姿が現れ、時代の新語として盛んに使われている⁸⁾。

（12）品行を養ひ、精神を練り、以て高尚の生活を為すを知らざる日に於ては、一国の良心茲に亡び、

(国民之友 : 1888 人民の手に依りて成立する大学)

(13) 足下の所謂裸体生活とは、人生の静止の姿を指したものだといふ。

(太陽 : 1909 文芸時評 主觀に別るる苦痛 長谷川天渓(作))

(14) 人若し吾人の言をなすに先ちて、美的生活とは何ぞやと問はば、吾人答へて曰はむ糧と衣よりも優りたる生命と身体とに事ふるもの、是也と。

(太陽 : 1901 [文芸時評] 高山樗牛(作))

以下の 2 例では、「生活」は「生計を立てる」という意味合いが強いと思われる。このような意味で用いられている「生活」は『日本語歴史コーパス』で 59 例見受けられた。(15) では、医者といった職業は生活を立てる手段とされている。ここでの「生活」は「生計」に置き換えることができるだろう。(16) では婦人の独立の意識を喚起することが述べられており、「生活」は「人を頼らずに自立すること」の意味を強調していると思われる。坂詰(1983) はこのような意味合いで用いられる「生活」は主観的内容の表現の中で多用されると指摘し、『日本語歴史コーパス』で見られた 17 例にもそのような傾向で一致している。

(15) 医業で生活をたてるのは洋薬の名目も口元だけはおぼへなければならんが、

(安愚樂鍋 : 1872 三編上 [本文] 仮名垣魯文(作))

(16) 他人の力によらず、自分は自分の力で生活するといふ概念をもつことが必要であります。

(女学世界 : 1909 心配する事の多い中等社会の婦人 三輪田元道(作))

2. 『日本語歴史コーパス』における「生産」

『日本語歴史コーパス』で検索したところ、明治期における「生産」の用例は 751 例あった。「出産すること」の意味を表すものが 4 例見受けられる。そのうち、(17) のように、「人間の出産」を指す例が 3 例あり、「動物の繁殖」に用いられる「生産」は (18) の 1 例のみ見られる。

(17) 女婚姻ノ正邪ハ必ス他日公衆ノ為メニ利害ヲ生ス凡ソ子女ノ生産ハ夫婦ノ婚姻ニ始マル者ナリ、

(明六雑誌 : 1874 米国政教 (三) 加藤弘之(訳) / トムソン(作))

(18) 馬は妊娠十一ヶ月にして牛は九ヶ月なり、(中略) 生産の難易、馬は性鋭敏なる丈に流産多く又難産多し、牛に比して危険甚だ多し、

(太陽 : 1901 [農業世界] 上野英三郎(作))

次のような「物を作り出すこと。また物を作り出す活動」の意味で使われる「生産」が

最も多く、746例あった。例（19）（20）には「生産」は国の発展のために必要な経済活動として捉えることができると思われる。ここでは「生産」の使用範囲及び対象が限定されず、「物資や用役を作り出す活動」の全般を指していると見られる。

（19）如何なる国にても、貨幣以前より多く流入するや、世態茲に其面目を一新し、勤労及び生産は、欣々として活氣を含み、

（国民之友：1887一期国要するの貨幣幾何ぞ 乘竹孝太郎（作））

（20）新事業の為に外債を起さんとする者の説を聞くに戦争によりて受けたる経済上の損失は必ず生産を以て之を補はざる可らず、

（太陽：1895 土子金四郎君の経済時事談 土子金四郎（作））

（21）からは、「生産」の使用範囲が明確であり、農業ないし工業に用いられているよう見える。（22）では、具体的な内容となる「穀類の栽培」が述べられ、このような「生産」は農業と関連する用例が当時に圧倒的に多くと観察できる。工業において、（23）（24）のような「食塩」「砂糖」などの「食料品の製造」に結び付く用例がほとんどであり、そのほか、（25）では巖島は当地の名物「彫刻品」を商品として販売することが述べられている。

（21）工業も肝要なれども、農業工業は物品の生産を目途とせるもの、

太陽：1895 亜細亞の大商戦 飯田旗軒（作）

（22）古來茜草ヲ耕作スルニ供セシ田地合算スレバ狹シトセズ而シテ自今多クハ不用ナルガ故ニ穀類等有用ノ物ヲ生産スルニ用フ可キナリ、

（東洋学芸雑誌：1882 有機物の合成（二）松井直吉（作））

（23）而して内に顧りみれば、我が製塩業は、年々其生産は需要に超過し、

（太陽：1895 食塩の清国輸出 藤田達芳（作））

（24）されば昔時欧米諸国に於ては砂糖は其生産を余り見なかつたが、今日にては丸で反対の趨勢を呈し来り、

（太陽：1901 日本の製糖業 鈴木藤三郎（作））

（25）此市は製器を以て一の生産となすか故に其技に熟するもの多く近來小学校課程中一の彫刻科を設け幼より之を教授す、

（太陽：1895 広島の形勢 野口勝一（作））

（26）（27）の「生産」は実際の農産品・製品を作り出すことに使われず、「富の生産」「お金の生産」といった記述から、「利益の創出」の意を表すと理解できると思われる。

（26）我邦過去の社会は、所謂る人為の貴族社会にして、為めに富の生産を妨げたる

のみならず、併せて富の自然分配を妨げ、

(国民之友：1887 政治上に及ぶ金錢の勢力＊(作))

(27) 又千八百八十九年二大中央購買組合に聯結して二大製產組合の創立あり、其初
めに当りては三百六十八万円を生産し、

(太陽：1901 二十世紀に於て日本国民の為すべき事業（下）加藤政之助(作))

また、『日本語歴史コーパス』において、以下の2例が目に付く。(28)のような貿易活動において、「製造」と共起する用例は34例あった。「生産」と「製造」は「物を作り出す」という意味で共通しているが、「製造」は「原材料の加工」の意に偏っている。もう一つの用例(29)では、「生産」は対義語「消費」と並列し、表裏の関係にある経済現象として使用されている。この2例では、「生産」は相変わらず経済活動の一環として用いられるように読み取れる。

(28) 又両締盟国の方の版図内へ別国の生産或は製造に係る物品の輸入を禁止する
に非されは、

(太陽：1895 [政治] ＊(作))

(29) 故に今日の要は、獨り国民に向つて奢侈放逸を戒め、其生産に消費を伴はしむ
るの必要を説くと同時に、國家の政策並に社会の風潮を之と同一の方針に導き、

(太陽：1901 国家貯蓄論 添田寿一(作))

「生産」を造語成分とした合成語も盛んに使われている。(30)は「一つの国の物資を生
産する力」を「生産力」とし、(31)(32)の「生産高」「生産費」はそれぞれ「生産の数量」
「生産のために支出する費用」の意で理解できる。(34)は「消費者」「販売者」と並んで
使用するものである。これらの合成語はほぼその時期の新造語であり、人間の経済活動に
起こった様々な現象に繋がっている。

(30) 多くの労働社会は、これが犠牲に供せらるる訳なり、依て、一国の生産力を減
殺し、延いて経済上に及ぼす処の影響は、決して鮮少のものに非るなり、

(太陽：1901 建築条例の制定及工業衛生＊(作))

(31) 併しながら機械は生産費の最も高價なる一に位するものにして之を購求するも
使用するも普通人の辨じ能はざる程、

(国民之友：1887 大なる会社の起源＊(作))

(32) 第二農夫は貨物の相場によりて生産高を加減するに就ては最も遲鈍なるのみな
らず、

(太陽：1901 [商業世界] 佐野善作(作)/水島鉄也(作))

(33) 可成高価を以て直接に消費者に売却するの方法なれば、恰も生産者自から販売者の業務を営むも同様にして、

(太陽：1901〔商業世界〕祖山鍾三(作) / 佐野善作(作))

僅か1例ではあるが、「詩歌」を語る際に用いられる「生産」の例が見受けられた。ここで、「生産」は実際の物を作り出、あるいは利益を創出するより、詩歌のような「文芸作品を創作すること」の意味に偏っていると思われる。

(34) 余輩は再言す、部落的組織、種属的組織、或は現代の国民的組織は、余輩が胸里に編せられたる社会史の第一階段にあることを、然らば此第一期の社会が生産したる詩歌はいかに曰く、

(太陽：1895 社会と詩歌と 桐生悠々(作))

IV. まとめ

上記の分析によって、明治期の辞書資料において、「生活」は「①なりわい、すぎわい」「②生きている」「③くらし」の意味を担っており、「生産」は「①なりわい、すぎわい」「②くらし」「③産物を作り出す」「④産業」の意味を有していることがうかがえる。『日本語歴史コーパス』の用例に合わせて見ると、「生活」は「①人間が生きていること。生物が命を維持するために行う活動」「②人間が世の中に暮らしていくこと。またそのために行う活動」「③生計を立てる。また人を頼らずに自立すること」の意味で用いられている。①は自然科学を紹介する文章に多用されており、動植物に使う点が目立つようと思われる。『日本語歴史コーパス』の用例数からみれば、②は最も使用される意味で人間活動の全般を指す用法であると言える。この意味では「生活」は人間の日常活動から精神的活動にかけて盛んに用いられており、とりわけ精神的活動を表す際に合成語による使用が際立っている。③の用例は相対的に少ないが、ここで「生活」は経済基盤を得るための手段の意と理解できるため、「生計」と言い換えられると考えられる。

それに対し、『日本語歴史コーパス』において、「生産」の用例は「①出産すること」「②一種の経済活動として、物を作り出すこと。またその活動」「③文芸作品を創作すること」の意味に限られているように見えるが、辞書資料においての「ナリワヒ」の意味に相当する用例が見当たらなかった。①は動物の出産にも使用される点が注目される。③の詩歌の創作によって、「生産」は現代語のように文芸作品の創作に使われる可能性を提示している。しかし、①③の使用例が極めて少ないため、「生産」は主に②の意味で用いられていることが推察できるだろう。②では「生産」は「消費」の対立語で経済活動の一環としてあらゆる産業に使用されているが、全体的には農業に関連する文脈に用いられるのが多いと観察できる。②で「生産」は「経済活動」を指しているため、「生活」の②はすべての人間活動

を含むという点から見れば、「生産」の②は「生活」の②に内包されるものであると言えるだろう。また、その意味では「生活」の②と同様に合成語の造出が多く見られる。

おわりに

本稿はまず明治期の辞書資料における「生活」「生産」の意味記述を把握した。そして、『日本語歴史コーパス』を用い、その二語の実際の用例を分析することによって、その時期の「生活」「生産」の意味・用法を明らかにした。その結果は以下の表2に整理した。

表2. 明治期における「生活」・「生産」の意味・用法

見出し語	辞書資料	『日本語歴史コーパス』
生活	①なりわい、すぎわい	①人間が生きていること。 生物が命を維持するために行う活動
	②生きている	②人間が世の中に暮らしていくこと。 またそのために行う活動
	③くらし	③生計を立てる。 また人を頼らずに自立すること
生産	①なりわい、すぎわい	①出産すること
	②くらし	②一種の経済活動として、物を作り出すこと。 またその活動
	③産物を作り出す産業	③文芸作品を創作すること

明治期の辞書資料では、「生活」は「①なりわい、すぎわい」「②生きている」「③くらし」の意味を担っており、「生産」は「①なりわい、すぎわい」「②くらし」「③産物を作り出す」「④産業」の意味を有している。明治初期ではその二語は①といった意味で一貫しており、「生業」との関連性を示している。明治中期以降、その二語にはそれぞれの意味分担がみえるようになり、「生活」は②③、「生産」は③④の意味で用いられている。『日本語歴史コーパス』で明治期の実際の用例を確認したところ、「生活」は「①人間が生きていること。生物が命を維持するために行う活動」「②人間が世の中に暮らしていくこと。またそのために行う活動」「③生計を立てる。また人を頼らずに自立すること」の意味で用いられており、「生産」は「①出産すること」「②一種の経済活動として、物を作り出すこと。またその活動」「③文芸作品を創作すること」の意味を担っている。

以上の考察から、「生活」「生産」は意味上の重なりが少ない二語であるが、「人間の活動」の意味で関連付けられていることがわかった。全体的に見れば、両語は造語成分として多くの合成語を造出した点で共通しており、いずれも当時活発に使用されていた漢語であ

ると判断される。しかし、『日本語歴史コーパス』の用例は限られているため、「生産」の③のような個別の例が存在している。そのような個別の例は当時どの程度使用されているのかを解明するには、これからより多くの用例を精査する必要がある。また、明治期の辞書資料はいくつの漢語をまとめて語釈を与える傾向があると考えられる。今後の課題として、辞書資料における「生活」「生産」のような同義語として扱われる漢語は当時どのように理解されているかについて、詳しく考察したい。

注

- 1) 松井（1990:336）は、明治初期頃、それまでの漢語の意味を広げること、また古典漢文中での意味やそれまでに使われていた意味と違った意味で漢語を使用する現象があると指摘している。
- 2) 辞書資料によって、「生業」「生理」「生計」は「生活」「生産」と同義語として扱われるものもあるが、「生業」「生理」「生計」の考察は別稿に譲るとし、本稿は「生活」「生産」の二語を扱う。
- 3) 前田（1995）によると、明治25年までは節用集の辞書、漢字辞書、漢語辞書などの小型辞書が盛んに編集・刊行される時期であり、その時期の漢語を考察するにあたって、小型辞書への把握が必要となると述べられている。
- 4) 27冊の辞書は『明治のことば辞典』の「付録：引用辞書一覧」及び松井（1997）の附表「近代漢語辞書一覧」を参考して選んだものであり、国立国会図書館デジタルコレクションで閲覧できるものを優先に取り上げる。辞書の選択にあたって、辞書の系譜的関連・相互影響については立ち入らないことにする。また、辞書の通し番号は筆者によるものである。
- 5) 語釈は、引用した辞書の表記のままにすることを原則としたが、便宜上、漢字の字体は新字体に改めた。また、立項されていない語に「×」を引き、語釈に「同上」「上二同ジ」などの表記を統一して「二同」と記入した。
- 6) 今野（2017）参照
- 7) 『日本語歴史コーパス』の用例を取り上げる際、文中の旧字体を新字体に直す。用例番号は通し番号であり、下線は筆者によるものである。
- 8) 木村（2019）では、20世紀初頭において、「生活」が後部分にある語は文芸や思想の用語としての用語が多く、また人間としての思想的課題に関わる語も目立つと指摘されている。

参考文献

- 今野真二（2017）「明治期の漢語理解」『国文学研究』170、14-24頁。
- 木村義之（2018）「近代用語としての「生活」とその周辺」（沖森卓也編『歴史言語学の射程』三省堂）、440-442頁。

- 木村義之 (2019) 「近代用語としての『生活』と新語辞典」『日本語と日本語教育』47、33-62 頁。
- 坂詰力治 (1983) 「せいけい (生計)、せいかつ (生活)、かつけい (活計)、せいぎょ (生業)、わたらい (渡らい)、なりわい (生業)、すぎわい (生業)、くちすぎ (口過ぎ)」(佐藤喜代治編『講座日本語の語彙 10 語彙 II』明治書院)、280-285 頁。
- 佐藤享 (1983) 『幕末・明治初期語彙の研究』桜楓社。
- 前田富祺 (1995) 「漢語資料としての明治前期小型辞書」『国語語彙史の研究』12、211-234 頁。
- 松井利彦 (1990) 『近代漢語辞書の成立と展開』笠間書院。
- 松井利彦 (1997) 「近代漢語辞書の基準」『京都府立大学学術報人文・社会』49、1-60 頁。
- 飛田良文・惣郷正明編 (1986) 『明治のことば辞典』東京堂。
- 福井淳子 (1995) 「『生命』『人生』『生活』-life の訳語との関わり」『武庫川国文』46、123-140 頁。

国立国語研究所 (近藤明日子・間淵洋子・服部紀子・南雲千香子ほか) 編 (2020) 『日本語歴史コーパス 明治・大正編 I 雜誌』(短単位データ 1.2, 中納言バージョン 2.5.2)
https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/meiji_taisho.html#zasshi (2021年3月21日確認)
 国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/>

付記：本稿は、第五回北京外国语大学・神戸大学国際共同研究拠点シンポジウム（2020年11月28日～29日、オンラインにて開催）での発表内容を基にしたものである。席上、ご指導下さった方々にお礼申し上げる。

A Study on the Meaning and Usage of the Chinese characters “Seikatsu” “Seisan”: in the Meiji Era

HE, Yipeng

Abstract

The purpose of this paper is to clarify the meaning and usage of two Chinese characters “Seikatsu” and “Seisan” in the Meiji Era. As a research method, the writer overviewed the semantic descriptions in the dictionaries of Meiji Era firstly. Then, to analyzing actual examples of usage, the writer attempted to examine the meanings and usages of “Seikatsu” and “Seisan” by using the *The Corpus of Historical Japanese* (CHJ).

The writer checked the semantic descriptions of “Seikatsu” and “Seisan” in dictionaries of the Meiji Era, and found that until the Mid-Meiji Era, most of these dictionaries treated the two words as synonyms. And the glosses in the dictionaries are homogeneous. “Seikatsu” and “Seisan” have consistent meanings such as “Nariwahi” “Sugihahi” or “Yowatari”. In line with the examples

in the CHJ, “Seikatsu” has the following meanings: (1) Human are alive. The activities that organisms perform to sustain their lives. (2) People live in the world and what they do to stay alive. (3) Making a living. Living without depending on others. On the other hand, “Seisan” is used in the following ways: (1) Giving birth. (2) Creating things as a kind of economic activity. (3) Creating literary works. However, the examples corresponding to the meaning of “Nariwahi” cannot be found in CHJ.

As a result of the above discussion, “Seikatsu” and “Seisan” have little semantic overlap, but they are associated with each of the meanings in (2). Overall, it can be concluded that the meaning of these two Japanese words have little in common. But they were coined as components of a number of synthetic words, and both of them are frequently used Chinese characters in the Meiji Era.

Keywords : Seikatsu, Seisan, Modern Japanese, Chinese characters, Semantic

日・中・韓平和絵本 —『春姫という名前の赤ちゃん』を題材に—

尹 惠貞（一橋大学博士研究員）

要旨

本論文は、「日・中・韓平和絵本シリーズ」の中の『春姫という名前の赤ちゃん』を分析・考察したものである。分析・考察の必要性から絵本のあらすじをまず述べた。それから、作者と画家についても言及した。作者は、在日朝鮮人二世のピョン・ギジャ氏であり、画家はピョン氏が翻訳したその他の絵本の絵を描いたチョン・スンガクである。

分析するためには、ドゥーナンの『絵本の絵を読む』に基づき、(1) 見返し (2) 線・形 (3) 色 (4) 枠 (5) 視点について、絵と言葉を提示しながら分析した。この分析に基づいて考察を行った。『春姫という名前の赤ちゃん』が普通の「物語絵本」であれば、例えば分析した枠や視点によって、読者が絵本の中の登場人物と同じ視点を持ち、緊張を感じるなど、分かりやすい絵の手法と読みやすい言葉で書かれている、と考察できたであろう。しかし、本絵本は「戦争絵本」という特質も有することから、オーラル・ヒストリー的な視点も加味して考察する必要があると考えた。

したがって、作者ピョン氏の背景にもう一度注目することで、本稿の絵本がオーラル・ヒストリー的に書かれていること、また言葉のみならず絵において、その当時の社会や時代背景を具現化することで、オーラル・ヒストリー的に描かれたことを指摘した。

キーワード： 平和絵本、戦争絵本、物語絵本、オーラル・ヒストリー

はじめに

韓国において、現代絵本が本格的に出版されたのは1988年のことである。『ペクトゥサンイヤギ（백두산 이야기）』¹⁾がその始まり（尹,2020）である。もちろん、それ以前においても、一冊の本の中に絵と言葉が共にあるものは存在していた。しかし、絵と言葉がただ一緒にあるだけでは絵本とは言えない。絵と言葉に相互作用がなければならないのである。この点、藤本（2007：20）は、「絵本では、「文章」は読むだけでなく見るものであり、「絵」は見るだけでなく読むものなのです」と述べている。そこで、この絵本の定義を基準として、以下『春姫という名前の赤ちゃん』について分析・考察したい。この絵本は、本稿の題目にもあるように、日・中・韓平和絵本の一冊として出版されており、以下詳述

するが「戦争絵本」の部類に属するものである。特に、言葉を書いたピョン・キジャ氏は在日朝鮮人で、彼女の生涯と物語の背景がまさにオーバーラップするところにこの絵本を選んだ意義がある。以下では、章を分けて日・中・韓平和絵本とは何か。次に、「戦争絵本」に関する先行研究を述べる。それから、分析するために『春姫という名前の赤ちゃん』のあらすじを概観し、作者のことに触れ絵本の内容分析に移る。その後、「戦争絵本」がどのような性質を持つか、を考察することを本稿の目的としたい。

I. 日・中・韓平和絵本とは

2005年、日本の絵本作家である田島征三が終戦60年を迎えて、アーティストとして東アジアに向き合い、子どもの本の作り手の感性・芸術性はきっと響き合うものがあると考え、出版社関係なく作り手4人で（2018年4月28日Avaco in早稲田、クォン・ユンドク講演会「絵本で伝える戦争と暴力」）²⁾、韓国と中国の絵本作家に手紙を書いて始まった平和絵本作りである。2007年中国の南京で企画会議を起点として本格的に進行し、3か国からそれぞれ4人の絵本作家³⁾が一作品ずつ作品を作り、それぞれの国の出版社（日本童心社、中国訳林（イーリン）出版社、韓国사계절（サゲジョル））で、共同出版することとなった。

しかし、最初に出版されるはずであったクォン・ユンドクの作品『꽃 할머니（花ばあば）』は日本の童心社では出版されず、出版社を変えて2018年に「ころから」という出版社から出版された。理由として考えられるのは絵本の内容が「従軍慰安婦」であったあるおばさんの話⁴⁾を基にしているからであろう。最初の志であったはずの「感性・芸術性」がうやむやになってしまったのではないだろうか。本稿で分析する『春姫という名前の赤ちゃん』を書いたピョン・キジャ氏が、本来ならば『花ばあば』を翻訳するはずであったこともここで述べておく。

結果、日本の童心社では10冊が出版され、中国の訳林出版社では11冊、韓国のサゲジョルでも11冊が出版され、最後の一冊は恐らく出版されず⁵⁾、このシリーズは幕を閉じた形となっている。

それぞれの出版社のホームページを検索すると、「平和絵本とは」というページが設けられているが、微妙なニュアンスの相違を見ることができる。特に注目したいのは、童心社では、「歴史と向き合い、考え、人と手をとりあって未来を切り開いていく力を育みます」⁶⁾（下線部筆者、以下同）と、書かれている。対して、中国の出版社では、「真実の歴史を記録し、過去の痛みを分かち合い、平和の明日へと歩む」⁷⁾（筆者直訳）と記し、韓国の出版社では、「過ぎし日を正直に記録し、今日の痛みを互いに分かち合い、平和な明日へと共に歩む」⁸⁾（筆者直訳）と記している。

以下の先行研究と関わるが、「戦争絵本」自体、出版されたのがごく最近のことであり、それに伴い研究も始まったばかりなので、子どもたちが絵本を通して戦争の歴史を知る、ということに鑑みると、少しの考え方の相違に重きを置くのか、もしくは絵本が出版された

ことに重点を置くのか、葛藤は残るところである。

II. 先行研究

「戦争」を題材にした絵本が韓国で本格的に翻訳もしくは出版されるのは、1995年以降であり、現代絵本が本格的に作られたのが1988年のことであるから、時期としては納得のいくところである。

キム・キョンヨン（김경연, 2003）は、1995年から2003年まで韓国で翻訳された西洋の絵本13種類を中心に（原文テキストは1967年がこの中では一番古い）、戦争の原因と姿・解決方策を、文学性や芸術性よりも主題がどのように扱われたのかを主に考察した。その結果、残酷な戦争の姿と寓話的な解決方策が表われたとしている。

イ・ミンジュ（이민주, 2008）は、1995年から2008年7月まで韓国で出版・翻訳出版された33種類の絵本を対象に考察を行ったが、国内戦争を扱った作品がほとんど見当たらないこと、キム（2003）の研究同様、解決方策が現実的でないことを上げている。

キム・クムヒ（김금희, 2012）は、1995年から2010年12月まで出版された31種類の絵本を中心に、①戦争絵本のジャンルはどういうものがあるのか。②戦争絵本の歴史的背景はどうか。③主人公は誰か。④関連用語は何か。⑤戦争の原因と結果はどういうものなのか。など5つに分類して、①については一般フィクションと歴史フィクションに分け、前述した先行研究で主に取り上げている絵本のジャンルは一般フィクションであることから、解決方策が寓話的であったり、現実的でなかったりする、と分析している。②歴史フィクションである場合、歴史から語られる戦争名を取り上げている、例えば、第2次世界大戦など。③主人公については男女の差や、大人・子どもの差を上げ、男性の主人公が若干多く、子どもの主人公が若干多いことを上げている。④関連用語として、「戦争・軍人・武器・情緒・傷/死・場所・その他」の用語に分けている。⑤戦争の原因の言及についての有無は言及されてないものがやはり圧倒的に多く、8割弱であることを示している。

以上の、3つの先行研究はいずれも「戦争」というテーマに焦点化するくらいがあり、研究対象が「絵本」であるということ、つまりその視覚的・文学的側面を度外視している点遺憾なところがある。しかし、「戦争絵本」が出版されまだ月日がそれほど経過していないことを考えると、それでも多くの示唆を与えてくれている、という一面も否めない。

イ・ウンジュ（이은주, 2018）は、戦争絵本のイメージの視覚文法の分析を2005年に翻訳出版された『에리카 이야기』（エリカ物語：筆者直訳）、と韓国人作家による『곰이와 오픈들이 아저씨』（ゴミワオプンドリアジョシ）（ゴミとオプンドリおじさん：筆者直訳）を比較分析している。研究方法として社会記号学的（視覚デザイン文法）枠組みで絵を読み解いている。しかし、わざわざ視覚デザイン文法という枠組みを用いずとも、本稿ではドゥーナン（2013, 『絵本の絵を読む』）に基づき、『春姫という名前の赤ちゃん』の絵を読みたいと思う。何故ならば、絵本とは絵と言葉がある本であり、絵と言

葉に相互作用がなければならないからである。したがって、本稿では見返し、線・形、色、枠、視点に分けて分析するが、それは言葉と相まってのことであるため、時には言葉と一緒に示すこともある。まず絵本のあらすじを述べ、作家・画家について紹介する。

III. あらすじ・作者・分析

本章では分析をする前提として、『春姫という名前の赤ちゃん』のあらすじと作家・画家について述べたのち、分析に移りたい。

1. あらすじ

東京から岡山の瀬戸内海に面した小さな町に引っ越してきた由美ちゃん。由美ちゃんは新しい学校に行く途中、洗濯物を干しているおばあさんを見かける。聞いたことのない歌を歌っているおばあさんは、時々家の窓を覗きながらおしめの洗濯をしていた。

由美ちゃんは毎日同じ道を通り、おばあさんと挨拶するようになっていた。初めて挨拶をした日、由美ちゃんはおばあさんに野花をつんで、物干し台にそっとプレゼントをする。ある日、由美ちゃんはおばあさんが歌っていた歌を笛で吹きながら帰っていた。毎日聞いていたので覚えたのである。すると、おばあさんは上手だとほめてくれ、拍手を送ってくれた。手招きされたので、二人は並んで話をした。三年生であり、名前が由美であることを話すとおばあさんは自分の名前は由喜^{ヨウキ}であると言い、由美ちゃんは驚く。おばあさんにはとても可愛い赤ちゃんがいることも、その日に知ることになる。

しかし三日後の朝、おばあさんの家の方から救急車が通るのを見た。学校が終わり、由美ちゃんは走っておばあさんの家に行くと、青ざめた顔でひとり座るおばあさんがいた。おばあさんの可愛い赤ちゃんが入院し、赤ちゃんは43才であることを知る。ずっと昔、おばあさんの旦那さんが畑仕事をしている時に、日本人が来て連れ去られた。広島で鉄砲を作っていると手紙があり、おばあさんは必死に広島まで来たが、原爆が落ちて旦那さんは死んでしまった。春になったら赤ちゃんが生まれ、春姫と名付けたが、でも大きくならなかった。だから、洗濯しながら窓を覗いて朝鮮の歌を歌ってあげていたことを由美ちゃんに話した。次の日、由美ちゃんは仲良しの友達にこのことを話し、今度の日曜、三人で春姫さんの病院に行っておばあさんが歌っていた歌を笛（ソソミファソ…）で吹こう、と約束するのである（歌は「故郷の春」である）。

2. 作者・画家

（1）作者

作者ピョン・キジヤ（1940-2012）については、岡山県生まれで、在日朝鮮人二世であることは、彼女が訳した多くの絵本の中の訳者紹介に記されている。より詳細に知りたいと考え、ピョン氏の友人であり児童文学者であるきどりこに、2020年6月23日15時より東

京都国立市にある喫茶店白十字にてインタビュー⁹⁾を行った。また、きどりこの厚意でピョン氏のお嬢さんと連絡が取れ、お嬢さんにピョン氏のことを追加でたずねたこと、及び氏自身が生前にアンソロジーで書かれたものを参考に「(1) 作者」は記している。

『春姫という名前の赤ちゃん』は、第6回(1990)ニッサン童話と絵本のグランプリで童話部門優秀賞を受賞した、創作童話を原作として作られた絵本である。「創作」となってはいるがリアルに心に訴えるものがあったので疑問が湧き、インタビューで質問させていただいたところ、岡山に被爆したお母さんがいた、という事実を素材に創作したものであることを知った。まさに、先行研究で指摘した「歴史フィクション絵本」であると言えるだろう。胎内被爆して頭が小さい「小頭症」の先天性疾患の赤ちゃんのお話である、ということである。

ピョン氏は朝鮮大学校で学び、在日朝鮮人として生きた。アジア児童文学大会(日・中・韓・台の児童文学者が参加)が結成され開かれたが、朝鮮籍であるがゆえに、韓国で行われた時には参加できなかった。しかし、〈춘희란 아기(春姫という赤ちゃん)〉という前掲受賞作品は論文集に付録として掲載¹⁰⁾されている。日本で開かれた時は氏自身も参加し、朝鮮大学校の学生との交流を持つこともあった。一度だけ韓国¹¹⁾を訪問することができ、その時氏が翻訳したたくさんの作品を作ったクォン・ジョンセン氏に会っている¹²⁾。

ここで、クォン・ジョンセン作、チョン・スンガク絵、ピョン・キジャ訳(2000)『こいぬのうんち(강아지 똥)』について言及する。『こいぬのうんち』は平凡社で出版されているが、当初ピョン氏が児童書出版社である福音館書店に持ち込み、長い間出版するのかどうかの解答が得られなかった。結局平凡社で出版されたのであるが、判型は原作より小さいサイズでなされ、出版されたあとでもタイトルに「うんち」という語彙があることから「汚い」と誹謗中傷があった。しかし、韓国の絵本では群を抜いて今でも売れ続けており、2019年9月の数字であるが、19刷りを記録し累計発行部数は63,000部¹³⁾となっている。

また、「花をもって走るハルモニ」というアンソロジーを、日本児童文学者協会が発行したシリーズ「夢いろ童話コレクション」(全10巻、国土社)の第5巻『花にすむ馬』(1992)に書いている。内容を簡単に紹介するが、いつもジャージを着て、荒川の土手を走るスーパーハルモニ(おばあさん)の在日朝鮮人がいた。地域の祭りではウルトラ技を発揮するほどのハルモニであるが、ある日、孫の秀峰(スボン)とその友人である健太が家に遊びに来た時、ちょっとした地震が起こると、気分が悪くなる。孫と健太は心配して理由を聞く。ハルモニは日本の朝鮮支配と、1923年に起きた関東大震災の時に多くの朝鮮人が殺されたり、生き埋めにされたりしたが、その中にお兄さんもいたことを孫や健太に話す。何日かが過ぎ、健太はホウセンカの種をもって、秀峰とハルモニを訪ね、荒川の土手に植えようと提案するのである。

このように、ピョン氏は韓国の良い絵本を日本語に翻訳するのみならず、日韓の間にあ

った事実を、分かりやすい言葉で子どもたちや若い人たちに伝えようと生涯尽力されていったことが分かる。

（2）画家

画家チョン・スンガクは前述の『こいぬのうんち』でも絵を描いており、韓国絵本界では重鎮である。1961年韓国忠清北道生まれ、韓国中央大学西洋画科を卒業している。韓国の伝統文化を投影させた作品を発表する傍ら、子どもたちと壁画作りなどの活動も行っている。『こいぬのうんち』と同様、『金剛山のトラ（금강산 호랑이）』¹⁴⁾でも、クォン・ジョンセンとタックルを組んでいる。韓国では絵本に帯が付されることは珍しいが、『金剛山のトラ』には帯が付され「韓・日同時出版」と大々的に書かれてはいるものの、2017年6月に日本で先に翻訳出版され、3か月遅れの9月に韓国で出版されている。

本稿の『春姫という名前の赤ちゃん』の文章を既に何年も前にピョン氏より受け取っており、実際絵を描くにあたり、岡山などを訪れ取材しスケッチを行っている。

3. 分析

本節では絵本の分析をするが、ドゥーナンの『絵本の絵を読む』に基づき、（1）見返し、（2）線・形、（3）色、（4）枠、（5）視点に分けて絵を示しながら分析する。

（1）見返し

表・裏の表紙をめくって登場する両面見開きの場所を見返しといい、白い無地の場合もあるが、その絵本において特徴的なシーンや色、作家が特に伝えたいと思うものをデザインする場合もある。本絵本においては表・裏同じデザインとなっており、淡い色の水彩の大小の水玉模様が散りばめられている。この水玉模様は、絵本の内容においても重要な役割を担っており、画家は暗に見返しでそのことを予告し、読者に前もって伝えていると言えよう。また裏見返しでもう一度同じものを見せることで、重要な意味であることを今一度読者に伝えている。



図1：表・裏見返し

（2）線・形

いわゆる直線よりは、揺れのある線で町の風景が描かれ、水平線（瀬戸内海）は細い線

というよりは水色で両面見開きページの上部に淡く描かれており、言葉（「由美ちゃんは3年生の春、東京から岡山県の瀬戸内海に面した小さな町に、引っ越してきました」）と相まってそれであることが分かる（図2）。

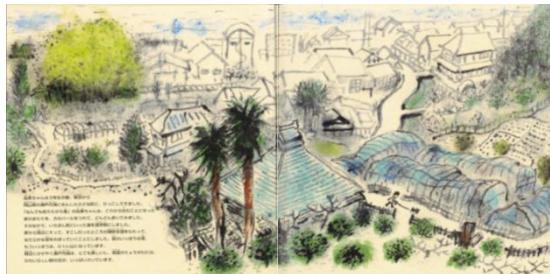


図 2 : pp. 2-3

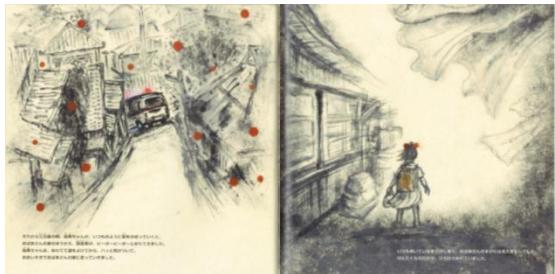


図 3 : pp. 16-17

また、絵本全体を通して、画家が描いている線は定規や道具を使ってまっすぐに描かれているものではなく、手で直に引いている線がより多いと思われる。まっすぐな線と比較すると、登場人物の心の揺れや不安、反対に喜び、優しさなどを表わしている。その象徴として、図3右側（p. 17）の絵を提示する。いつも揺れのある線で描かれていたおばあさんの家が、救急車が通った後はまっすぐな線及び由美ちゃんが直視している先は空白になっており緊迫感を表わしている。洗濯ものの大きな揺れで由美ちゃんの「なんでいつもと違うのだろう？」という緊張感や不安感も表わしている。

（3）色

基本的には墨、つまり黒で描かれている。物語において重要な意味を持つものには色彩が加えられるという一定の法則を持つ。この法則のもと、おばあさんが登場する時は原則黒もしくは黒味のかかった青で描かれている。おばあさんの悲しみを表わしているのである。

対照的に由美ちゃんが登場する時は由美ちゃんのリボンは赤色（図3、図5、図7参照）であるし、また由美ちゃんを取り囲む色合は明るい暖色系の色（図5参照）となっている。ここで、見返しの水玉模様について言及するが、由美ちゃんが奏でる笛の軽快な音（図8 : p. 33）、また春姫は病に伏しているが、しかしおばあさんにとっては大事な赤ちゃんであること、及びおばあさんが歌う朝鮮の歌が春姫を包み込むことを表わしている（該当絵省略）ので、見返しと同じような水玉模様でそれを表わしている。

図3左側（p. 16）の救急車が通る絵が描かれているが、この水玉は赤である。警戒・恐怖・緊張など救急車のサイレンの音の余韻を表わしていると読み取ることが可能であろう。何故ならば、該当箇所の言葉に「救急車が、ピーポーピーとおりてきました。」と書かれており、赤の水玉がこの言葉とこだまするように描かれている。

図4（pp. 22-23）は、球体の真ん中は彩度¹⁵⁾が一番高い白から黄色、オレンジ、赤、黒という風にグラデーションが掛かっており、広島に原爆が落ちたことを表わしている絵と

なっている。

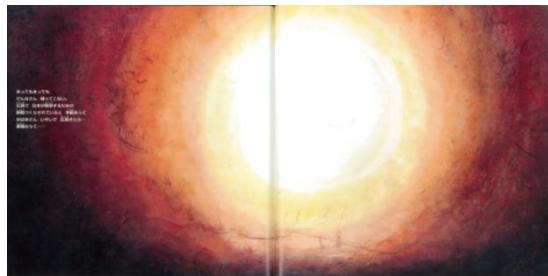


図 4 : pp. 22-23

(4) 枠

枠 (frame) とは、絵がページより小さい場合、紙の白い余白を枠という。枠は本体の絵と関連して装飾的な縁取りがなされる場合もあれば、太さやスタイルは様々なものがある。枠の種類によって、囲まれている絵の心理描写は異なる。図 5 (p. 15) は大体四角の枠で、その真ん中におばあさんと由美ちゃんが話している絵が描かれており、お互い名前を初めて知ったあとの場面であり、心が通った温かい雰囲気となっている。したがって、枠の周りの色が暖色系の色合で囲われていることを見ることができる。図 6 (p. 26) は、歪んだアーチ型の枠で、周りは黒となっている。若かりしおばあさんの頭や体を重石のような力が押さえつけるように線が何重にも描かれている。該当する言葉は、「おなかのなかで 原爆をうけた春姫 大きくならないんだよ。」である。

図 7 (pp. 28-29) は、由美ちゃんのドックンドックンと心臓の動悸を表わすような幾重にも丸が重なった枠であり、ページをはみ出すほど心音や悲しみが激しいことを表わしている。言葉は「…今までに由美ちゃんが聞いた、どんなはなしよりも、悲しいものでした。」である。図 8 (pp. 32-33) は、夕暮れの太陽を象徴する丸い枠、おばあさんの故郷の歌が響き渡り、子どもたちにとっては明日を迎えるという希望を抱かせる象徴としての太陽と海原が描かれている。また、言葉の下には見返しのページのように水玉模様が少し散りばめられており、笛で奏でられている「故郷の春」を表わしているのである。



図 5 : p. 15

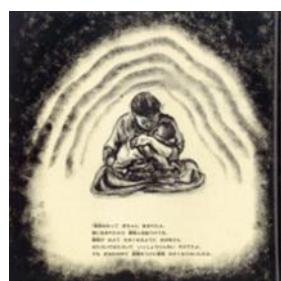


図 6 : p. 26



図 7 : pp. 28-29



図 8 : 32-33

(5) 視点

最初の両面見開きは、瀬戸内海に面した小さな町を読者が俯瞰するように描かれている（図1参照）。そこを岡山に引っ越したばかりの由美ちゃんが犬を連れて散歩している姿が描かれている。読者が俯瞰する場面は暫く続き、由美ちゃんとおばあさんと挨拶を交わすようになると、由美ちゃんの視点が読者と一致するようになり、俯瞰する場面と登場人物の視点との接合が起こる場面がページを重ねながら交差して登場する。さらに、おばあさんが経験した怖い出来事、つまり読者も経験したことのないものはおばあさんが仰視するように思い出すように描かれ、読者はそれを平行的視点として見られるようになっていく。例えば図9の絵を提示する。



図 9 : pp. 20-21

IV. 考察

以上の分析を「絵本」という観点から見ると、絵と言葉の相互作用の関係を読み解いており、一定程度の分析が進み、この分析に基づく考察が可能であるように思われる。例えば、枠や視点の工夫により、子どもたちが絵本の主人公由美と同じ視点に立ち、緊張感を感じるなど、分かりやすい絵の手法と読みやすい言葉で書かれている。また、朝鮮人のおばあさんと日本人の子どもを通しての交流により、「平和絵本シリーズ」の正しい歴史の記録と平和な明日へと繋がる思いが込められており、目的もある程度達成した、という考察ができると思われる。

しかし、筆者は今まで「絵本」という媒体から、特に「物語絵本」¹⁶⁾における「絵と言葉の相互作用」を焦点に研究をしてきた。絵を読み、原文テクスト（韓国語）と目標テクスト（日本語）の翻訳の仕方、例えば言葉の削除・付加やそれに伴う絵の差し替えが行わ

れる。これらのことことが生じる理由は、絵本が作られる過程において、原文テクストのみならず、目標テクストの文化、社会及び歴史と深く関わるからである。

絵本の種類が本稿のように「戦争絵本」である場合、今までのような分析・考察のみでは十分に絵本を読み解いた、とは言えないと思われる。何故なら、「戦争絵本」という性質上、作者及び画家が文献調査のみならず、オーラル・ヒストリー的方法に基づいて、そもそも絵本を作ったのではないか、という「物語絵本」とは異なる性質が含まれているからである。

もう一度、「III.2. (1)」作者紹介の節に立ち返るが、ピョン・キジャ氏は在日朝鮮人二世である。また、韓国の良質の絵本を日本で翻訳出版するのみならず、日韓の両国間で起きた事実を平易な言葉（日本語）で子どもたちに伝えようと、尽力していたのである。つまり、氏の自伝的な側面及び民衆の生きざまに氏自身が耳を傾け、かつ作品自体に聞き手である由美ちゃん（＝読者）を登場させるように作られている。ここで一度オーラル・ヒストリー的な手法が使われているのではないだろうか。これに加え、「絵本」の「絵は見るだけでなく読むものである」という定義からも、言葉がある特定の民衆の生きざまに基づき「創作」という過程を経たとしても、もう一つ読まなければならない「絵」からは、絵本の設定されている時代や社会を綿密に具現化する作業が存在するので、ここでも語り手としての作用が聞き手としての読者に働きかけているのではないか、と考えるのである。

つまり、子どもたちが絵本を通して戦争の歴史を知るよう、「語る歴史、聞く歴史」¹⁷⁾が「戦争絵本」を通して「語る歴史、見る歴史・読む歴史」として形づくられていると言えよう。絵本だからこそ可能な歴史の伝え方であると思われる。「日・中・韓平和絵本シリーズ」では、言葉は違えども同じ絵本を読むことで、子どもたちが国を越え、同じ記憶を刻むことができる。「平和絵本シリーズ」のその他の絵本の詳細な分析・考察も必要であるとは思われるが、少なくとも『春姫という名前の赤ちゃん』には、オーラル・ヒストリー的性質が極めて濃厚と言えるだろうし、このことを除外しての分析・考察はできない、と思うのである。

おわりに

日・中・韓平和絵本シリーズの中の『春姫という名前の赤ちゃん』に焦点をあて、そのあらすじ、作者・画家について記述した。その後、ドゥーナンの『絵本の絵を読む』という観点から当該絵本の見返しや線・形、色などを例示しながら、またそこに該当する言葉を提示しながら分析した。本絵本が「物語絵本」であるならば、このような分析の結果ある一定の考察が可能であろう。しかし、本絵本が「戦争絵本」の種類に属していることを考え、作者の背景に立ち返りオーラル・ヒストリー的視点があることを指摘した。さらに、語られる言葉のみならず、絵からもそのオーラル・ヒストリー的な視点は同様に読み取れることを示すことができた。今後はその他の平和絵本シリーズについても分析・考察し、

「戦争絵本」「平和絵本」の位置づけについて進んで課題としたい。

注

- 1) 日本では 1990 年に『山になった巨人 白頭山ものがたり』リュウ チェスウ作・絵、イ サンクム／まつい ただし共訳、福音館書店で翻訳出版された。
- 2) スペシャル鼎談として田島征三、浜田桂子、クォン・ユンドク三氏が平和について語った。
- 3) 日本の絵本作家は上述した田島征三と浜田桂子、田畠精一、和歌山静子である。中国の絵本作家は蔡皋、姚虹、周翔、岑龙である。韓国の絵本作家はクォン・ユンドク、チョン・スンガク、イ・オクペ、キム・ファンヨンである。なお、日本の絵本画家である田畠精一は 2020 年 6 月 7 日逝去された。
- 4) クォン・ユンドク (2019) 「絵本の創作における実証と芸術的再現について--『花ばあば』を中心に」、『日本学法』第 38 号、pp. 7-15.
- 5) 中国の周翔の作品は出版されていない。渡辺美奈 (2019) 「日本軍「慰安婦」を描いた『花ばあば』出版をめぐって 生き抜いた女性たちの存在を伝えたい」、『日本学法』第 38 号、p. 25 によると、「途中で一人断念」と記されている。
- 6) 童心社 <https://www.doshinsha.co.jp/> (2021 年 3 月 11 日最終検索)。
- 7) 译林出版社 <http://www.yilin.com/> (2021 年 3 月 11 日最終検索)。
- 8) (주) 사계절출판사 <http://www.sakyejul.net/> (2021 年 3 月 11 日最終検索)。
- 9) インタビューの際は筆者が用意した幾つかの質問にお答えいただいたのと、聞き取りしながら関連する質問を追加させていただいた。なお、インタビューの内容は聞き取って記録すると同時に、IC レコーダーで音声も採取した。
- 10) 卞記子 (1990) 「춘희란 아기」 『한국아동문학학회 학술대회』 pp. 120-124、李英俊翻訳。
- 11) 2002 年 9 月に、韓国を訪問している。 <https://www.changbi.com/archives/971?cat=213> (2021 年 3 月 11 日最終検索)。
- 12) *변기자* (2009) 「<소년 권정생도 여기까지 왔을까?>」 『창비어린이』 7(3)、pp.248-253。
- 13) 尹惠貞 (2020) 『絵本の言語文化--韓国絵本を中心に』 一橋大学博士学位論文、p. 70。
- 14) 前掲註 13、pp. 36-52。
- 15) 色の純度を測る言葉である。赤・黄・青の三原色がもっとも彩度が高いものである。白を考えると黄色よりさらに強い色である。原爆の閃光と爆音(ピカドン)を色で表わしている。
- 16) ここでいう「物語絵本」とは、昔話絵本の場合もあれば、創作絵本の場合もあり、一定のストーリー性があるものを指す。
- 17) 大門正克 (2017) 『語る歴史、聞く歴史--オーラル・ヒストリーの現場から』、岩波新書。苅部直 (2019) 「文化人のオーラル・ヒストリーをめぐって」、御厨貴編集 『オーラル・ヒストリーに何ができるか』、岩波書店、pp. 261-276。

参考文献

- 大門正克(2017)、『語る歴史、聞く歴史—オーラル・ヒストリーの現場から』東京：岩波書店。
- クォン・ユンドク(2019)、「絵本の創作における実証と芸術的再現について—『花ばあば』を中心に」『日本学法』第38号、7-15頁。
- ドゥーナン、ジェーン(2013)、『絵本の絵を読む』(正置友子・灰島かり・川端有子訳) 東京：玉川大学出版部。
- 藤本朝巳(2007)、『絵本のしくみを考える』東京：日本エディタースクール出版部。
- 御厨貴編(2007)、『オーラル・ヒストリー入門』東京：岩波書店。
- 御厨貴編(2019)、『オーラル・ヒストリーに何ができるか—作り方から使い方まで』東京：岩波書店。
- 尹惠貞(2020)、「韓国現代絵本の誕生—『ペクトゥサンイヤギ』の考察を通して」、一橋大学大学院言語社会研究科2019年紀要『言語社会』14、377-361頁。
- 尹惠貞(2020)、「絵本の言語文化—韓国絵本を中心に」一橋大学博士学位論文。
- 渡辺美奈(2019)、「日本軍「慰安婦」を描いた『花ばあば』出版をめぐって 生き抜いた女性たちの存在を伝えたい」『日本学法』第38号、24-26頁。
- 김경연(2003)、「서구 그림책에 나타난 전쟁」『어린이문학교육연구』4(1)、99-111頁。
- 김금희(2012)、「그림책에 나타난 “전쟁”의 이미지」『어린이문학교육연구』13(3)、1-19頁。
- 변기자(1990)、「춘희란 아기」『한국아동문학학회 학술대회』、120-124頁、李英俊翻訳。
- 변기자(2009)、「<소년 권정생도 여기까지 왔을까?>」『창비어린이』7(3)、248-253頁。
- 이민주(2008)、「그림책에 그려진 전쟁」성균관대학교 석사학위논문。
- 이은주(2018)、「전쟁그림책 이미지의 시각문법 분석 — ‘에리카 이야기’ 와 ‘곰이와 오픈들이 아저씨’ 를 중심으로」『한국기초조형학회』19권(4호)、349-365頁。

Picture Books for Peace from Japan, Korea, and China

Chun-Hee, She is a baby

YOON, Hejeong

Abstract

This article examines about *Chun-Hee, She is a baby* in the ‘picture books for peace from Japan, Korea, and China’ series. First, it gives a summary of the picture book for analysis. And then, it refers to author Ki-ja Pyeon who is a second-generation Korean in Japan, and painter Seung-Gak Jeong who draw the other picture books Pyeon’s translated.

To analyze the book *Chun-Hee, She is a baby*, this article adopted the methodology used in *Looking at picture in Picture Books* by Jane Doonan-(1)endpapers, (2)line and figure, (3)color, (4)frame, (5)viewpoint while presenting pictures and words. If it is a ‘narrative picture book’ I can

say it is written in easy-to-understand picture methods and simple words, as the reader having the same viewpoint as the characters. But this picture book is not only a ‘narrative picture book’ but also has the nature of a ‘war picture book’.

Therefore, it was necessary to analyze the book from an oral history perspective. That is, I paid attention to the background of the author and pointed out that the book was an oral history in written not only in words but also in pictures.

Keywords : peace picture books, war picture books, narrative picture books, oral history

林美美子の戦争協力及びその要因について

李 先瑞（浙大寧波理工学院）

要旨

1937年、中国に対する全面侵略戦争が勃発した時、流行作家である林美美子は「毎日新聞」の特派員として南京に来て戦争を報道した。帰国後も意欲を燃やして「ペン部隊」に参加し、もう一度中国に来た。彼女は侵略戦争の事実を捩じ曲げて「偉い戦争」と吹聴した。自ら全力をあげて戦争に協力しただけでなく、「愛国精神」を鼓吹し、国民に戦争協力を呼びかけた。戦時下の美美子は軍国主義政府の宣伝の道具となつた。林美美子が戦争に協力する原因は外部原因と内部原因に分けられる。外部原因として社会の大変動が挙げられる。たとえば国民全体を戦争に巻き込んできたこと、作家達に戦争協力を要求すること、国家法の裏づけを持つ「賢妻良母」の教育制度の影響などは外部の原因である。内部原因として性格上の負けん気と虚栄心などが挙げられる。

キーワード：林美美子、戦争協力、外部要因、内部要因

はじめに

林美美子(1903～1951)は、昭和女流作家の中で傑出した一人である。1930年、日記体小説『放浪記』で文壇にデビューした。もともと詩人になろうと志を立てたが、小説における才能に恵まれるので文学界で小説家の位置を築いた。行商人の娘から作家になるまでの過程においては、林美美子は社会の残酷さと男女の非対称性を痛感し、家父長制度下の女性の生き方及び男女の関係を考え始めた。1937年、中国に対する全面侵略戦争が勃発した時、林美美子は「毎日新聞」の特派員として南京に来て戦争を報道した。帰国後も意欲を燃やして「ペン部隊」に参加し、もう一度中国に来た。彼女は侵略戦争の事実を捩じ曲げて「偉い戦争」と吹聴した。自ら全力をあげて戦争に協力しただけでなく、「愛国精神」を鼓吹し、国民に戦争協力を呼びかけた。戦時下の美美子は軍国主義政府の宣伝の道具となつた。林美美子は流行作家であると同時に女性作家でもあるから、その戦争協力が日本本土に及ぼした影響は大きかった。

I. 先行研究

林英美子に関する先行研究はたくさんある。日本においては、林英美子についての研究はだいたい四つのグループに分類することができる。

一つは伝記研究である。例えば、板垣直子は『林英美子の生涯—うず潮の人生—』で英美子の生涯の全貌を明らかにした。平林たい子の『林英美子』で、林英美子と母親キクの絆に注目した。清水英子の『林英美子・ゆきゆきて「放浪記」』では英美子の誕生から『放浪記』を発表するまでの経験を書いた。竹本千万吉の『人間・林英美子』で家族関係を詳しく調査した。

作家論としては、亀井勝一郎は『印象』で、林英美子の作品に「一管の草笛の綿々として尽きざる哀調を聞く」、その音は「地を這ふやうに執拗で逞しい」と述べ、その抒情性を評価した。中村光夫は『林英美子論』で、『放浪記』を日本文学の伝統、日記や歌物語の流れの正しい継承と評価し、彼女の小説には「どこか生活の詩といったやうな情感が流れて」いると主張した。それに『浮雲』をその文学の集大成とする。これらに対し、藤川徹至の『林英美子論』では、作品に作家としての技術を認めないとし、作品を貫くのは「安直な生活倫理」だけだとする。そのほかに、また寺田透『三人の女流作家』、河盛好蔵『林英美子さんのこと』、今村潤子『林英美子論』などの作家論が多かった。

作品研究では、林英美子の代表作、即ち『放浪記』『晚菊』『浮雲』に対する研究が多い。例えば、山本健吉の『放浪記』の誕生』で「レンペン文学」と批評された『放浪記』について、その批判内容を解明し、ユニークな論を展開した。そのほかに、今川英子『放浪記』一生成とその世界』、川副国基「林英美子『晚菊』について」、今村潤子「雨の表現にみる感情移入について—『浮雲』を中心に」、荒井とみよ『林英美子の従軍記』、河野基樹「林英美子『浮雲』論—共生の模索が意味するもの」などもある。

もう一つの分野は、林英美子の文体研究である。例えば、草部和子『宮本百合子、林英美子の文体』、原子朗『林英美子』、岡崎和夫『林英美子の文体—<訪問>場の特質』などがある。

中国では、林英美子についての研究は少ない。大体二つの型に分けられる。

一つは作品研究である。例えば、吉林大学の曾婷婷は「林英美子『浮雲』試論—愛の遍歴における共生と背反」（2007年吉林大学修士論文）では、場所という空間の移動を縦糸に、男女主人公の意識である共生と背反の関係を解明し、二人の恋愛関係の内実を指摘した。張麗と王有紅の「突破できない垣根—ジェンダーの視点で林英美子の『浮雲』を読む」

¹⁾ では、男女差別の非対称性から出発して、場所の移動にしたがい、主人公の転落原因を分析した。二つは比較研究の方法で、林英美子を中国の女性作家と比較した。例えば、山東大学の林娜は修士論文『女性意識における林英美子と張愛玲の比較』では比較文学の中の平行研究という方法で、両作家の女性意識の共通点と相違点を見つけた。

上の先行研究を見てきたように、林英美子に関する先行研究はほとんどその生い立ち及

び代表作『放浪記』『浮雲』に集中し、その戦争協力を反映する作品の研究は少ない。しかし、林英美子の戦争協力とその原因を研究することは日本女性作家の戦争協力を探ることにとっては非常に重要なことである。本研究は林英美子の戦争協力を評価し、その戦争協力の要因を分析しようとする。

II. 林英美子の従軍活動

昭和 12 (1937) 年 12 月、林英美子は『毎日新聞』の依頼を受けて、南京陥落報道のために上海と南京に来た。男性作家ではなく、女性作家として戦争報道をしたことは、世の注目を集めた。彼女の成功と遠征について、『毎日新聞』は「女流一番乗り」と書き立てた。翌年、林英美子も積極的に「ペン部隊」に参加し、陸軍班の一員として、漢口攻略戦に従軍してきた。国内での人々にとって、戦場での兵士がどういう暮らしをしているのか、どういう戦いをしているのかは何よりも知りたかったことである。したがって、国内の人々は従軍作家のことに最も関心を払っていた。林英美子は女性従軍作家として「漢口一番乗り」を果し、世論の喝采も浴びた。

漢口より帰国した林英美子は各地を巡り報告講演を精力的にこなした。10 月 30 日、英美子は軍用機で漢口から南京へ飛び、午後上海へ向かった。31 日福岡を経て大阪木津川尻飛行場に着いた。「英美子が『朝日』の飛行機で福岡の飛行場に帰った時、小柄な彼女の身体の隠れるような大きい花束がまっていた。群衆をわけてすすむことが困難なほどに歓迎者が集まつた。」²⁾ 翌日、「十一月一日付朝刊は『<見せたい灰色の兵隊／愛に飢える現地>／林女史 きょう大阪で講演』の見出しを揚げ、長文の記事を飛行機を降りる英美子の写真とともに掲載した。」³⁾ 林英美子は大阪で講演を終えた後、夜行列車で上京した。11 月 2 日、日比谷公会堂と軍人会館で講演を行った場面は「立錐の余地もない超満員」⁴⁾ であった。このように、林英美子は熊本、福岡、大阪、名古屋、東京など各地で従軍報告講演を繰り広げた。彼女の名も紙面に躍つた。11 月 1 日の新聞では「戦況報告大講演会」開催の広報であった。続いて 2、3、4 日と「林英美子女史に訊く 銃後の婦人への報告座談会」が連載された。⁵⁾ 日本国内で林英美子は人気の絶頂に至つて、時代の寵児となつたといえる。

川本三郎の『林英美子の昭和』では宇野千代の言葉を借りて英美子の当時の姿を描いた段落がある。

その頃の林英美子の人気について宇野千代は回想記『生きてゆく私』(毎日新聞社、昭和五十八年) の中で次のように書いている。「日華事変のことで、忘れられないのは林英美子のことである。」「あの戦争の緒戦のときの彼女が、『漢口一番乗り』と唱われ、人気の絶頂にあったことは、いまも、人の記憶に新たなことであるが、そのとき、その林英美子にならって、我れも我れもとあとに続き、殆どの女流作家が戦地に行きたがつたものである。」従軍した林英美子の「勇壮」な姿がニュース映画でも何度もとりあげられ

る。リュックサックを背負い、頭髪に布をかぶって、笑顔を見せながら飛行機に乗る。

まさに得意絶頂の姿だろう。無邪気なまでに戦意昂揚の旗振りをしている。⁶⁾

従軍作家として、英美子は侵略戦争を鼓吹する役割を果した。例えば、大阪での講演では、英美子は「今度の従軍で痛切に感じた事は戦場の兵隊さん達が「愛」に飢えて居るということです。お母さんの愛、子供の愛、殊に故国の女性の愛をどんなに求めているかということを切実に感じてきました。デパートに包装して売っている慰問袋などよりも、見ず知らずの小学児童からでもいい、たった一本の手紙の方がどんなに兵隊さんを喜ばせることでしょうか。『僕は貧乏だからこれで我慢して下さい』といってゴム消しと鉛筆を送つて来た小学生の慰問袋を或る兵隊さんは涙をこぼし拝んでおられました。一時間程の間にお母さんからの手紙をポケットから出しては読み、出しては読み、五度も読み返している兵隊さんもいました。殊に日本の若い女性方に望みたいことは、もっと戦地に接近して、女でなければ出来ない傷病兵士の御世話や慰問やその他に活発に働き、この国家の重大時期に際してもっと愛国の情熱を燃やして戴きたいと思いましたわ」⁷⁾と語っている。林英美子が言った「愛国の情熱」は本質的には是非を転倒した捩じ曲げられる「愛国」の感情である。講演の目的も「愛国」の名目で日本国民を侵略戦争に駆り立てることである。このように、英美子は実戦者として戦争を報告すると同時に、人々の感情を動員し、戦争協力を呼びかけた。

その後、1941年9月、林英美子は大佛次郎、佐多稻子、横山隆一と一緒に戦地慰問の名目で中国東北に来て講演を行った。翌年8月には「日本文学報告会主催・情報局後援の文芸報国運動講演会北海道班の講師として十一日から十七日まで道内各地で『美しい戦』と題する講演を行っている。」⁸⁾10月には、陸軍報道部の徵用に応じ、林英美子は報道班員として南方に派遣された。東南アジアでは、ジャワ島、ボルネオ島などを精力的に巡回、講演、座談会などをこなしていた。1943年5月に帰国した。

1937年暮れに『毎日新聞』の特派員として上海と南京にきて以来の5年半、英美子は戦争報道記者同然であった。中国戦場で戦争を報道し、東南アジアで「文化工作」の名目で「皇民化」推進に協力し、さらに精力的に各地を巡って講演を行った。この一連の活動から見て、林英美子は侵略戦争の共犯者だといえる。

III. 従軍記『戦線』『北岸部隊』における「民族意識」

林英美子の従軍した体験を描いた二つのルポルタージュは『戦線』と『北岸部隊』である。昭和13年12月25日出版された『戦線』は通信文のスタイルをとり、二十三の信を収録した。それに「漢口戦従軍通信」と「漢口より帰りて」も加えて載っている。一方、翌年1月1日発行された『北岸部隊』は日記体をとり、「九月十九日 雨」から「十月二十八日 雨」までの従軍経験を書いた。あとがきの日付は「十二月二日記」、『戦線』とほぼ同時に作成された。内容では、二つのルポルタージュはともに林英美子が「ペン部隊」を離

れて一人で前線へ行く一週間の体験を中心にして、重複して収められる内容もあった。即ち林英美子は同時に同じ内容で二つのルポルタージュを刊行した。

1. 日本兵士を美化し、中国兵士を貶す

林英美子は戦争の主体、つまり両国の兵隊に対する描写ははっきりと対立する。彼女が描いた戦場では、日本の軍隊は向かうところ敵なし、中国の軍隊は算を乱して逃げるほかなかった。戦場の死体についての描写も中国人の兵士に限って、日本兵士の死体を描くことが一度しかなかった。それは『北岸部隊』で描いた一つの場面である。

砂床で兵隊が流弾にあたって一人殞れた。私はしゃがんだまま雑草の根を一つかみぐさっと握りしめた。一瞬一つの感傷が頭を走り去るが、その感傷は雲よりはかなく、すぐさんらんとした兵士の死の純粹さが、私の瞼に涙となってつきあげてくる。⁹⁾同じ段落で、中国兵士の死体についての描写は全然異なった。

丘の上や畠の中には算を乱して正規兵の死体が点々と転がっていた。その支那兵の死体は一つの物体にしか見えず、さっき、担架の上にのせられて行った我が兵隊に対しては、沁み入るような感傷や崇敬の念を持ちながら、この支那兵の死体に、私は冷酷なよそよそしさを感じる。その支那兵の死体に対する気持は全く空漠たるものなのだ。私は、本当の支那人の生活を知らない冷酷さが、こんなに、一人間の死体を「物体」にまでひきさげ得ているのではないかとも考えてみた。しかも民族意識としては、これはもう、前世から混合する事もどうも出来ない敵対なのだ。¹⁰⁾

日本兵隊に優しい林英美子が一転して中国兵士のこととなると冷たく、情け容赦もなくなった。「中国人の死体には、同情を寄せないし、ときには、中国人に悪罵も浴びせかける。」¹¹⁾この差異の原因について、英美子は上の例文では明らかに答えた。その中核は「民族意識」ということであった。『戦線』には同じ考え方を記したところがもう一箇所ある。「こんな死骸をみて、不思議に何の感傷もないと云ふことはどうした事なのでせう。これは今度戦線に出て、私にとっては大きな宿題の一つです。違った血族と云ふものは、こんなにも冷たい氣持になれるものでせうか。」¹²⁾「違った血族」と「宿題の一つ」からみて、林英美子の立場がはっきりと現れている。彼女が「ペソ部隊」の一員として中国に来たのは、日本の内閣情報局の要請を受け、戦争を起こした軍部のために働いたことが前提である。林英美子が日本兵士を美化し、中国兵士を貶した。戦争の主体に対して、ただ「違った血族」によって日本人と中国人を区別したが、戦争の加害者と被害者を区別することができなかった。彼女の「民族意識」は狭隘な民族意識である。

2. 戦争の侵略本質が認識できない

従軍記で描いた中国の国土はどこでも悲惨と荒廃に満ちている。これは日本兵隊によつてもたらされたことである。しかし、『戦線』と『北岸部隊』では侵略戦争を美化する言葉

が随所に見られる。さらに、日本部隊に林英美子は「輝かしい自信とほこり」を持った。彼女はひたすら戦線での困苦で日本兵士の偉さを際立たせた。戦争の侵略本質に触れなかった。

「戦争」でいいではありませんか。堂々と、實に水ぎはだつた堂々さでこの軍隊は戦つてゐるのです。揚子江北岸部隊の強さは、一つには困苦缺乏に黙つて耐へてゐる牛のやうな底力にもよると云へませう。私のやうにこんな短い戦線生活ではありません。一年の星霜を得て、なほかつ、不眠不休のこの精勵ぶりは、世界の戦場にもおそらくないことだらうと思はれます。¹³⁾

林英美子は日本の兵士の戦いぶりを強調し、自分の愛国心を叫んだのである。たとえば次の二節である。

皆がこうして困苦に耐えているのだ。眼に見えるものではないが、吾民族の為に一年間營々として流した沢山の兵隊の血は、この支那大陸にどんな風に実を結ぶのだろうと思う…私は何と云うこともなく、前線へ行ってみたいと思う。非戦闘員で、しかも女の身だけれど、私は日本の女として、日本の兵隊の戦闘ぶりを、しっかりと自分の生涯の眼に焼きつけておきたいとおもう。何年さきに本当の事が書けるのか、それは知らない…眼の前に起つてある事、起りつつある事、私は、私の身うちに愛国的な熱情のほとばしつつ来るのを、全く驚きの眼でみはつた。たとえ砲弾にあたつて殲れようとも、そんなことはどうでもよくなってしまつてゐる。この国を愛する激しい気持は、私にとって一つの大きな青春におもえるのだ。¹⁴⁾

「日本が東洋の盟主となって、中国を善導してゆくという大東亜共栄圏の思想が林英美子は単純に信じられている。」¹⁵⁾漢口攻略という作戦は到底どういうものか、そもそも中国に対する戦争はどんな戦争なのか、そういう問題に触れることが一度もなかつた。英美子は侵略戦争を正当なものであると描いただけでなく、「世界の戦場にもおそらく」偉い戦争と吹聴した。彼女は日本国民の戦意を高揚させることに全力を尽くし、侵略戦争の御用道具になってしまった。

従軍記の中では、中国の物産を我が物にしようとする林英美子の野心が伺われる。例えば、

漢口の街は北京につぐ美しい都會です。大きな建物は、急に看板や旗を塗りかへて外國管理の家になってをりましたが、私は不快な気持になりました。日本へ歸つて來て思ふことは、こんな犠牲を拂つて戦つてゐる日本は、さうさう外國に遠慮なんかしない方がいいとおもふ事でした。武漢の棉の大平原だけはしっかりと日本のものにしたいものです。¹⁶⁾

「武漢の棉の大平原だけはしっかりと日本のものにしたい」という文を見れば、林英美子は軍国主義政府と共に立場に立ち、中国の土地と財産を略奪するという野心を抱いた

ことがわかる。中国に対する戦争の侵略本質がはっきりと現された。しかし、林英美子の従軍記は、日本国民を唆して戦争に駆り立てるという目的を持ち、戦争の侵略性という本質を語らず、ひたすら「愛国」精神と「民族意識」を鼓吹した。英美子は戦場の真実を意識的に捩じ曲げて、日本国民に間違った情報を提供し、軍部の宣伝道具となった。彼女は言説の側から積極的に日本のアジア侵略に援護した。

IV. 戦争協力の外部要因

1937年暮れから林英美子は積極的に従軍活動に身を投じた。当時においては彼女の従軍活動は女性作家の中で際立ったといえる。戦線に赴いて報道しただけでなく、日本の各地を巡り精力的に講演した。英美子は『戦線』と『北岸部隊』という二つのルポルタージュの中では、日本軍国主義の侵略政策に追随し、意識的に戦争の真実を捩じ曲げた。彼女は「愛国精神」と「民族意識」を唱えたが、この民族意識は狭隘な民族意識である。日本の国民を唆して侵略戦争に協力させようとする目的を持ち、英美子は単に軍部に有利な内容を描き、侵略戦争の本質を語らなかった。彼女は積極的に日本の侵略行為に援護し、軍国主義政府の宣伝の道具となった。林英美子の戦争協力の外部原因は次の三つである。

1. 国民全体を戦争に巻き込んできたこと

昭和12（1937）年に入って、中国に対する侵略戦争は戦線の拡大につれて、局地戦というより全面戦争の様相を呈していた。日本部隊は現役兵だけでは足りずに、一般からの召集が始まった。この時から、日本国内では応召風景が日常的に見られるようになった。このように、戦争が突然、市民生活の中に入り込んできた。穏やかな暮らしをしていた人々が、召集令状によっていや応なく戦争に巻き込まれてきた。

戦争がいかに国民全体を巻き込むことについて、川本三郎は『林英美子の昭和』で板垣直子の『現代日本の戦争文学』（六興商会出版部 昭和十八年）の一段落を引用した。

非常時といふ言葉は皇国の近い未来に現はれるものとして、余程以前から国民が警告されてゐた。かくて、年とともに非常時へのけはいが濃くなつていった。そして、つひに一九三七年七月の日支衝突が起つたのである。満州事変の時と異り、事件の不気味な底知れぬ重大さが早くも感じられ、当時はまだ賑やかに見送られるが習慣であった出征兵士達に饌した軍歌の轟ろく巷にも、緊張した真剣な空気があった。満州事変以来活発に目醒めてきた日本人特有の愛国心は、時局の重大化に即応して、真面目な戦国気分となり、直ちに社会全体に漲つていったのである。¹⁷⁾

また、昭和13年5月には、国家総動員法が施行され、国を挙げて戦争体制が作られた。林英美子は日本国民の一人として、漲っている戦意が無視できなかった。それに、彼女の夫、緑敏も召集令状を受け、前線に出征させられた。林英美子の家庭も戦争に巻き込んできた。軍国主義と民族主義に満ちている社会にいて、林英美子の日本人特有の「愛国心」

も呼び起こされた。

2. 作家達に戦争協力を要求すること

社会の大変動の中で、文学界でも著しい変化が現れた。中国に対する全面侵略戦争の勃発の直後、多くの作家たちが新聞や雑誌の特派員として、戦地に行って、我勝ちに戦争の情況を国内に伝えた。板垣直子の言葉を借りれば、「<文芸家の世界でも、国策に参与する態度が決定した>、また<軍当局の方でも、文芸家の力を国策に用ひやうとする方針が新しく起った>（『現代日本の戦争文学』）。いわば<文軍協同>の路線が双方の合意で作られていった。」¹⁸⁾

この「文軍協同」の路線をもとにして、軍部は国民の感情動員という目的で、作家達の協力を要求した。当時の林英美子はもう流行作家となり、文学界でも地位を築いた。英美子は周りの変動を見て「戦争について書いた優秀な文章に出遭うと、現に私自身が打たれる—それが何よりの証拠で、もう今はくだらん恋愛なんか書いている時代じゃないと思います」¹⁹⁾と述べた。時局の変化について、林英美子はいち早く文学創作のテーマを変えた。

その後、漢口攻略戦に当り、内閣情報部が「文壇動員計画」を発表した。計画の内容は「文壇から二十人のペンの戦士を選んで陥落間近な漢口の最前線へ送る」²⁰⁾ということであった。以前の個体的なレベルで行なわれた従軍と違って、今度の計画は公的な性質を持つことに気付き、林英美子は積極的に従軍を志願した。8月27日、内閣情報部は、菊池寛、久米正雄、白井喬二、吉川英治、佐藤春夫、尾崎士郎、小島政二郎、片岡鉄兵、丹羽文雄、北村小松、吉屋信子、川口松太郎、浅野晃、岸田国士、瀧井孝作、中谷孝雄、深田久弥、佐藤惣之助、富沢有為男、林英美子、杉山平助、浜本浩の合計22人の従軍作家を決定した。このように「ペン部隊」が結成された。また陸軍班と海軍班に分かれ、前者の団長は久米正雄、後者の団長は菊池寛であった。林英美子は吉屋信子と二人で女性作家を代表して「ペン部隊」に参加した。

3. 国家法の裏づけを持つ「賢妻良母」の教育制度の影響

明治以来、日本では女性に対する教育は、「貞淑の徳」²¹⁾の涵養を強調し、「良妻賢母」の育成を目的とした。女性の生き方は娘として親の「家」から出て夫の「家」に入り、良い妻となって母となって生きている。これは法律上認められた唯一の生き方である。「<家>の存続のために全てを犠牲にした女性が婦女の鑑として讃えられた。」²²⁾1893年、文部大臣に就任した井上毅は男女の生理的差異をもとに、その役割の違いと固有の性能を固定化して強調した。その後、一連の法規も公布された。つまり、「良妻賢母」という教育理念は「教育勅語」のように国家法の裏づけを持って国家の意志によって決定された。国家の意志は公的レベルに止まらず、私的レベル、つまり、家庭生活までも貫徹してきた。

林英美子も女学校で「良妻賢母」という教育を受けた。女性として、私的レベルでは「家」

を守り、公的レベルでは「国家」に協力することが要求された。戦争が起ると、私的レベルでの「家」というものはすぐになくなってきたといえるかもしれない。「国家」は「家」に取って代わり、女性の務めの対象となった。銃後の女性に要求することも家庭内の役割に止まらなくなつた。「戦争が女たちに求めた役割の第一は、<靖国の妻><軍国の母>としてであり、特に母性が強調された。」²³⁾林英美子も「良妻賢母」という教育の影響を受け、戦時下では容易に国家意志に盲従してきた。

V. 戦争協力の内部要因—性格上の負けん気と虚栄心

『新潮日本文学アルバム』の中では、林英美子は文壇に小説家としての足場を築いた後の 1931 年の 4 月に、自身の企画で、故郷尾道において、井伏鱒二・横山美智子と文芸講演会を開いたということが記されている。「かなり強引な企画であったようで、故郷に錦を飾ろうとする意識が丸見えである。」²⁴⁾この事件から林英美子の虚栄心が窺われる。そして、昭和 10 年、林英美子は『牡蠣』の成功に嬉しかったらしく、自分の主催で出版記念会を開き、「その席でどじょうすくいを踊ったことが、語り草になっている。文壇雀に嘲笑された」²⁵⁾。林英美子の自己誇示が明らかに示された。貧しい行商人の娘から、有名な作家に成長することに英美子はかなり自負していた。

したがって、「ペン部隊」のメンバーを選ぶ時、最初女性作家の中で吉屋信子一人だけを選んだことを知り、林英美子は自費でもゆきたいと意欲を燃やして志願した。当時、吉屋信子が『毎日新聞』に連載した『良人の貞操』で大評判をとった。吉屋信子に対して、林英美子は自分の流行作家の地位を保つため、闘志が漲った。全文は「是非ゆきたい、自費でもゆきたい。ならば暫く向うに住みたいと願っていたところです。中支の生活が<動>の感じで興味があります。女が書かなければならぬものが沢山あると思っています。戦争について書いた優秀な文章に出遭うと、現に私自身が打たれる—それが何よりの証拠で、もう今はくだらん恋愛なんか書いている時代じゃないと思います。ひつかかっている仕事は雑誌原稿が七つ、全集が一つですが、もちろん書けるだけ書いてゆきますが、間に合わなければ抛つたらかしたって連れていってもらいたいと思ってます。」²⁶⁾それに、林英美子が戦場で得た「一番乗り」という称号も負けん気で組織を離れて単独の行動によって獲得したことであった。つまり、性格上の負けん気と虚栄心も彼女の戦争協力の重要な内因である。

おわりに

林英美子は貧しい家に生まれ、その負けん気を養った。しかし、その負けん気は軍国主義と合流し、彼女の戦争協力を導いた。戦時中、日本国民の日常的な生活が打ち破れ、人々は自ずから社会の大変動に巻き込まれていった。文学界でも「文軍協同」の路線が作られ、軍国主義政府は作家達の戦争協力を要求した。そういう雰囲気で、林英美子の盲目的「愛

国心」も呼び起された。一方、自分の流行作家の地位を保つため、美美子は積極的な従軍活動で人気の絶頂にのぼった。彼女は「ペン部隊」の一人として、中国に来て戦争を報道し、報道班員として東南アジアへ行って「皇民化」推進にも協力した。日本国内にいる時間でも、各地を巡り報道と講演を行った。彼女は戦争を鼓吹し、日本国民の協力を呼びかけた。中国での従軍経験を記する二つのルポルタージュでは、彼女は戦場の事実を意識的に捩じ曲げて、中国に対する侵略戦争を偉い戦争と美化した。死亡に満ちる残酷な戦場は彼女にとっては美しいところであった。彼女の目で見れば、日本の兵隊は誰でも偉くて英雄人物であった。それに対して、中国の兵士は弱くていつも算を乱して逃げずにはいられないイメージのものであった。ここから美美子の狭隘な「民族意識」がわかる。

林美美子が戦争に協力したのは流行作家の地位を保とうという心理が働いていたからである。流行作家の地位が保てたら、原稿料がたくさんもらえる。しかし、文化統制が厳しくなったその当時では、流行作家の地位を保つためには、国家の意志に従わなければならなかった。貧しい家に生まれた林美美子にとっては、金銭の誘惑は国家の意志と合流し、戦争協力者という美美子像が出来上がったわけである。

注

- 1) 張麗、王有紅（2006）、「冲不破的藩篱—用社会性别差异视点解读林美美子的〈浮云〉」、『北京工业大学学报』（社会科学版）、第 85—88 頁。
- 2) 板垣直子（1956）、『婦人作家評伝』角川書店、第 107 頁。
- 3) 横山恵一（2002）、『北岸部隊』解説『北岸部隊』、中央公論新社、第 239 頁。
- 4) 関川夏央（2006）、『女流 林美美子と有吉佐和子』集英社、第 71 頁。
- 5) 荒井とみよ（1999）、「林美美子の従軍記」『文芸論叢』、大谷大学文芸学会編、第 1—21 頁。
- 6) 川本三郎（2003）、『林美美子の昭和』新書館、第 239。
- 7) 同 3)。
- 8) 中川成美（1996）、「林美美子—女は戦争を戦うか」、『南方微用作家 戦争と文学』、世界思想社、第 250 頁。
- 9) 林美美子（2002）、『北岸部隊』中央公論新社、第 128 頁。
- 10) 同上
- 11) 川本三郎（2003）、『林美美子の昭和』新書館、第 246 頁。
- 12) 林美美子（2000）、『戦線』ゆまに書房、第 34 頁。
- 13) 同 12)、第 109 頁。
- 14) 同 9)、第 45 頁。
- 15) 川本三郎（2003）、『林美美子の昭和』新書館、236 頁
- 16) 同 12)、第 199 頁。
- 17) 同 11)、第 233 頁。

- 18) 同 11)、第 237 頁。
- 19) 関川夏央 (2006)、『女流 林英美子と有吉佐和子』集英社、第 61 頁。
- 20) 横山恵一 (2002)、「『北岸部隊』解説」『北岸部隊』、中央公論新社、第 223 頁。
- 21) 脇田晴子・林玲子・永原和子編 (1989)、『日本女性史』吉川弘文館、第 207 頁。
- 22) 同上、第 202 頁。
- 23) 脇田晴子・林玲子・永原和子編 (1989)、『日本女性史』吉川弘文館、第 261 頁。
- 24) 磯貝英夫 (1986)、『新潮日本文学アルバム 林英美子』新潮社、第 45 頁。
- 25) 磯貝英夫 (1986)、『新潮日本文学アルバム 林英美子』新潮社、第 66 頁。
- 26) 横山恵一 (2002)、「『北岸部隊』解説」『北岸部隊』、中央公論新社、第 223 頁。

参考文献

- 荒井とみよ (1999)、「林英美子の従軍記」『文芸論叢』、大谷大学文芸学会編、1—21 頁。
- 磯貝英夫 (1986)、『新潮日本文学アルバム 林英美子』新潮社。
- 板垣直子 (1956)、『婦人作家評伝』角川書店。
- 川本三郎 (2003)、『林英美子の昭和』新書館。
- 関川夏央 (2006)、『女流 林英美子と有吉佐和子』集英社。
- 中川成美 (1996)、「林英美子—女は戦争を戦うか」『南方徴用作家 戦争と文学』、世界思想社、250 頁。
- 林英美子 (2000)、『戦線』ゆまに書房。
- 林英美子 (2002)、『北岸部隊』中央公論新社。
- 横山恵一 (2002)、「『北岸部隊』解説」『北岸部隊』、中央公論新社、239 頁。
- 脇田晴子・林玲子・永原和子編 (1989)、『日本女性史』吉川弘文館。

On the Fumiko Hayashi's war cooperation and it's factors

Li Xianrui

Abstract

When the all-out invasion war against China broke out in 1937, Fumiko Hayashi, an epidemic writer, came to Nanjing as a correspondent of the Mainichi Shimbun to report the war. After returning to Japan, he participated in the "pen Troops" by burning his willingness to come to China again. She twisted the fact of the invasion war and heard "great war". She did not only cooperate with the war, but inspired "patriotic spirit" and called on the people for war cooperation. During the war, Fumiko became a tool to propagate militaristic government. The reason why Fumiko Hayashi cooperates with the war is divided into external cause and internal cause. The large cause of the society is mentioned as an external cause. For example, it is an external cause that the whole nation

has been involved in the war, the request of war cooperation to the writers, and the influence of the education system of " A good wife and mother " who has the backing of the national law. The internal cause is negative and vanity on the character.

Keywords : Fumiko Hayashi, War cooperation, External factors, Internal factors

爵青の「近代批判」における〈感性〉の役割 —芸術哲學論と小説創作を中心に—

王 晴（一橋大学大学院生、日本学術振興会特別研究員DC2）

要旨

大東亜戦争期以降の爵青の作品から一度は消滅したかのように見えた〈感性〉のモチーフが、西欧的近代に関する論考の中に最も先鋭なかたちで蘇ったのはなぜか。本稿はこのような問いに答えるため、芸術哲学的本質をもつ〈感性〉と政治的なニュアンスの強い「近代性」という二つの概念が、満洲国作家爵青の中でどのようになかたちで併存しているのかを指摘することで、彼の「近代批判」に至るプロセスを明らかにする。特に、雑誌『青年文化』に掲載された爵青の〈感性〉に関する文章を中心に、爵青の〈感性〉への関心が近代に対して適応できない感覚に起因していることを論じる。さらに、爵青の小説創作における〈感性〉の役割を解明するため、「藝人楊崑」という小説を取り扱い、近代主義に抵抗する〈剥き出しの生〉の役割を解明する。このような〈感性〉に対する思考の存在こそが、爵青の思想と創作のはざまを埋め、総体的に芸術哲学の様相を呈しているのである。

キーワード： 爵青、近代批判、感性、満州文学、「藝人楊崑」

はじめに

満洲国作家爵青（1917–1962年）の初期から戦後にわたる批評活動には、いくつかの重要なモチーフが見出せる。その中で最も注目されているのは、近代に対する批判である。先行研究では、劉建輝¹⁾が爵青の作品に見られる文明開化の理論への否定的態度を取り上げ、彼の思想には日本の「近代の超克」に影響された部分があると言及した。その後も爵青は、彼の作品におけるモダニズムの特徴がよく取り上げられ、モダン的な手法で近代性に対する批判を行うと見なされてきた²⁾。しかし、これらの研究では、彼の近代批判というモチーフと同時並行的に存在している〈感性〉への思考については、触れられてこなかった。

本稿では、芸術哲学的本質をもつ〈感性〉というモチーフと政治的な意味の強い「近代性」というモチーフが、爵青においてどのようになかたちで併存することが可能だったのかという問題を提起したい。より正確には、後に述べるように、近代性問題への傾倒に至る爵青の批評のうちで一度は消滅したように見えた〈感性〉のモチーフは、なぜ大東亜戦争

になって、西欧的近代に関する論考の中にもっとも先鋭なかたちで蘇ったのかということである。さらに爵青のドストエフスキイ論に顕著に見られる「西洋近代批判」と小林秀雄を対象としたこの時期の日本における〈感性〉の議論とは、どのように重なり合い、またどのような点で決定的に違っているのか。そしてこれらは「近代性問題」の発見とその中への沈潜という大東亜戦争期の爵青の問題とどのように関係しあっているのか。

しかし、これらの問題に対してここで性急な解答を出すことは差し控えたいと思う。むしろこのような問題に対する解答にたどり着くための準備作業として、本稿では爵青における〈感性〉の問題に焦点をしぼって考察を進めていく。

I. 爵青の〈感性〉に対する理解について

爵青は、雑誌『青年文化』の編集者に誘われ、1943年9月から12月にかけての三か月間、「毎月評論」というコラムを連載することになり、これを契機に文学に関する評論を書き始めた。爵青の小説に対する創作理念は、これらの評論文を読み解くことによってはじめて明らかになると言える。さらに、これらの評論文を分析することで、爵青の「感性」に対する思考を考察対象とすることができます。

まず爵青は、1943年9月の「毎月評論」において、「毎月評論」というジャーナリズムの産物に対し批判的態度を示すことによって、個人の〈感性〉の重要性を強調している。彼によると、「毎月評論」という形式での言論表現は、ジャーナリズムの時代特有の文体であり、この文体は、時間の流れと蓄積（歴史）を切り捨て、物事を部分的、断片的に捉え、さらにこれらの切り取られた部分を強制的に拡大させている。それにより、瞬間に人目を引く効果は得られるが、それはジャーナリズムの常套手段であると批判し、爵青はこのように述べる。

物事の価値を根本的に捉えるためには、この「毎月評論」の形式は不十分である。眞の解説とは、眞の価値の発見であり、永遠の価値の肯定であるべきだと思うのである。³⁾

つまり、爵青は「毎月評論」を書くことで、物事の根本的な捉え方を探求しているのである。さらに、表層的事象に留まらず、目に見えない本質を探究すべきだと主張している。彼にとって、まさしくこの目に見えない本質的な部分にこそ普遍性があり、絶対的な「眞」があるのである。爵青は、書くことと普遍性の探究過程を同一視しており、その普遍性を時空の推移の中に位置付けるのではなく、時空を超えた永久不変のものとしている。

このような理念のもと、爵青自身がこのコラムで執筆したいのは、個人的な感想や見解であり、またその形成過程であると述べている。なぜ爵青は個人的側面をこれほどまでに強調するのであろうか。それは、彼にとって、個人の感性を表す言葉の中には、思考や内省から生まれる数少ない閃きと、世界が軽蔑するような叙情的で、直感的で、非合理的な

情熱が存在しているからである。それは完全に「理論以前のものとの出会いである」⁴⁾。ここで、爵青は「理論」（もしくは「理性による観念の獲得」）に対する不信感も吐露している。爵青によれば、概念は、既知の世界の外にあるもの、あるいは少しでも異なるものに遭遇するとすぐに動搖し、断片化されるか、もしくは無関心になり、その無力さが醜い姿で現れるものである。つまり、理論は物事の深遠さに直面したとき、しばしばその複雑さ、抽象化の難しさを回避する傾向がある。

こうして爵青は、「理論は時代精神である」という一般的な観点に対し、それは時代の精神というよりも「人間としての個人の敗北である（人類作為个人的敗北）」⁵⁾と断言し、時代の複雑性と多岐性には無限の豊かさと深遠さが含まれているが、理論に支配され、自己意識を失った個人はもはやその豊かさと深遠さを感受することができなくなると指摘している。さらに、爵青は「近代の理論はただの知性の過剰であり、この時代の知性としては、独自の領域と形を有しているとはいえるが、感受性に関して言えば、知性と対比させ、私は常に感性を支持してきたのである」⁶⁾と述べている。つまり、物事の普遍性を探究するためには、理論ではなく、直接的な感性が必要とされるのであり、爵青によれば、感受性、つまり感性こそが新たな人生、新たな世界の幕開けの原動力となるのである。

II. 〈感性〉の感受的な表現：近代とその不適応

まず、〈感性〉に関する考えが最も明確に表れているのは、読者に対する〈感性〉あるいは〈感受力〉を要求するときである。爵青によれば、読書は生命の営み（「生きるために欠かせない生命活動」⁷⁾）である。彼は、読書には常に選択力と判断力と感受力が要求されるため、まず読者の感受力を喚起すべきだと訴えている。実は、爵青の「感性」は、前述したように、彼の近代に対する批判と深い繋がりがある。彼は近代に対する感覚を常にこのような消極的もしくは否定的な立場で表現している。

例えば、爵青の小説「青服的民族」にはこのような見解がある。

現代の自動電話は、「文明」の利器というより、むしろ「犯罪」の文字を「文明」にかえるべきだ。全ての詐欺と恐喝は電話によるものである。⁸⁾

このように、小説内において具体的な科学発展によるものへの不安感を表す以外に、爵青の評論文の中では、「近代」のもたらした違和感をはつきり表現する言葉もある。

近代は奇妙な時代である。自分の感情や感傷さえも遮断して、冷静かつ残酷に対象物を分析したり、要約して愛憎を表現したりすることが必要とされる。⁹⁾

現代は複雑で豊かな時代…要するに、そんな複雑で豊かな時代の中で、時代の中で波

に乗るのだが、その後不安に襲われる。¹⁰⁾

近代は奇妙的な時代である。近代は理論を葬りるために、整然とした世界を作り上げた。この世界では、すべてのものが概念化され、概念だけで物事が表されている。しかし、最近の概念の氾濫の弊害は誰が見ても明らかである。¹¹⁾

このような思いは、特に新京郊外の水力発電所を訪れた後に強まった。爵青は、近代科学技術の偉大な発展を象徴した水力発電事業によって人々の生活が改善されたことは認めつつも、この「傑作」の前に立つと非常に違和感を覚えるのである。なぜなら、近代発展が引き起こしたのは、物質的な発展よりもはるかに大きな混乱の影響であり、科学主義の絶え間ない追求は、人々を整然とした秩序ある世界に慣れさせ、客觀では捉え切れない世界を味わうことを不可能にしているからである。「個人の神経とそこから生じる理論が、時代の混沌や分離に適応できないからであり、これらの多様や分散は限りなく豊かで深遠であるにも関わらず、個人は自己意識を失って、理論の要塞に閉じこもってしまうのである。」

¹²⁾

爵青によれば、分析と要約は近代の生活習慣であり、分析と要約をせずに対象物を捉えることはほとんど不可能と言えるが、それは時代の弊害でありながら、個人の感性が失われた証拠でもある。そして、このような時代の弊害は文学領域にまで深く侵入していると説明している。19世紀以降世界文学から多くの観念が輸入され、それらの〈型〉、〈イデオロギー〉、〈階級性〉なしでは文学解釈ができなくなるほど依存性が高まり、結果として、自分の洞察力を鍛える為に、自分の見解を「未知の火」の中に投じる勇気を失ってしまったのである。このような現状において爵青は、満州文学は常に生まれ変わっているため、「我々は古い文学観念を超克しなければ、満州文学を対象とすることはできない」¹³⁾と指摘し、満州文学に対する新たな理解を求めている。爵青の独特的創作論は、このような過程を経て形成されるに至ったと言えるのである。

III. 「小説」論を中心とする〈感性〉の問題

1944年1月『青年文化』の新年号において「小説」¹⁴⁾に関する評論文を発表した。爵青はこの文学論において、まず芸術における小説の主導的地位を示している。一つの芸術表現としての小説は、以前から既に様々な文化領域に浸透し、他の芸術分類、例えば詩、演劇、映画などに深く関与していたが、爵青はジェイムズ・ジョイスの『ユリシーズ』とマルセル・プルーストの『失われた時を求めて』を例に挙げ、小説がフロイトの精神分析学とアンリ・ベルクソンの哲学領域にまで入り込んでいたことを説明している。こうして、中国古来の「小説」という言葉はますます定義不可能になってしまったのである。爵青は「(小説の定義に対して) 小説自身しか明確に答えることができない」¹⁵⁾という日本人作家伊藤

整の言葉を借りて、小説の定義と限界が曖昧になったことで、小説は小説自体によって定義することしかできなくなったと指摘している。

また、爵青は、十九世紀以降バルザックが小説の広さを示し、小説が人間の現実全体を包含できることを証明したのに対し、ドストエフスキイが小説の深さを示し、小説が人間の内面的な精神の底に迫ることができることを証明したとしている。そして、今の小説創作はこの二人によって作られた範囲を打ち破ることができているとは言えないが、時代特有の表現は見受けられると、その状況と傾向を述べている。

爵青によれば、まず小説はそれ自体が確立された限界から絶えず解放され、シンプルな手法と素朴な意図によって、様々な対象の現象や性格と向き合っている。以前の小説の対象は皇族、貴族、英雄のみであったが、現在はあらゆる人間、さらには動物、海、山、存在していないものさえもが対象とされている。つぎに、小説は社会を対象にすると同時に、個人を対象にするという矛盾を常に持っている。例えば、バルザックが創作した小説は「社会小説」と呼ばれるのに対し、ドストエフスキイの小説は「心理小説」と呼ばれるが、小説家は常に人間生活の表面に現れる人間関係に注目しながらも、個人の自己意識にも目を配らなければならない。そして、小説は人間生活の内外の矛盾を表現しながら、自己発展を成し遂げているのである。さらに、爵青は小説の価値問題について意見を述べている。

「小説は必ずイデオロギー的な要素を含め、倫理的、社会的、国家的なもの」¹⁶⁾ として作用しているため主位的な価値がないという観点と、逆に小説は思考と直観で構成もしくは表現されるべきものであり、つまりそれは小説家が再構成している現実であり、思考の産物である、という二つの観点がある。

つまり、爵青にとって、小説には社会的問題や社会全体を対象とする「社会小説」と個人的内面世界を対象とする「心理小説」（日本の場合は「私小説」に近い）という二つの文学的「ジャンル」があり、爵青はそれらのイデオロギー的なものを否定することで、個人的内面に向き合う文学の価値を見直している。これによって、人間の内面的な精神の底に迫る「心理小説」の支柱となる〈感性〉の重要性を見出しているのである。

しかし、爵青は様々な場合で、〈感性〉や〈直観〉の重要性を繰り返し強調しているのであるが、この「近代的感受」と結びついている〈感性〉は如何に彼の創作の中で表れていたのか。つまり、爵青の小説において、〈感性〉はいかなる役割を果たしているのであるか、この問い合わせるために答えるため、爵青の小説「藝人楊崑」を考察していく。

IV. 小説「藝人楊崑」における〈感性〉

「藝人楊崑」¹⁷⁾は、1943年『青年文化』8月号に掲載された小説であり、「藝人楊崑」には、生命と芸術の絶対性が書かれている¹⁸⁾と爵青自身が述べている通り、生命をテーマにした一連の作品群の一つとして位置づけられ、爵青の〈生命主題〉の文学的創作物として扱われてきた。しかし、「生命と芸術の絶対性」は本来芸術哲学に属するものであり、

芸術哲学の観点から見れば、この小説には、1940年代以降の爵青の芸術への関心、すなわち芸術哲学において〈感性〉を重視する姿勢が反映されているのである。本稿では、この小説を通して、爵青の〈感性〉という概念をさらに掘り下げ、考察したいと考えている。

まずは、小説のあらすじを簡単に紹介する。小説は「私」という一人称視点で語られている。家柄の悪くない「私」が小説の主人公である楊崑と出会うのは15歳の時で、「私」は「不良少年」に憧れながらも、一晩外泊する勇気もない、「不良少年」気取りの少年であった。本物の「不良少年」であった楊崑は、「私」よりも「年長者」のように見え、「彼の態度は非常に傲慢で威張っており、年長者を名乗ることで私たち全員を支配しようとしているかのような態度だったが、誰もがその威圧感から彼を恐れている」という点で、自分とは異なる人間だと「私」は感じた。楊崑の生い立ちはあまり知られていなかったが、家族はおらず、子供の頃からハルピンで絵描きをして生活し、店の看板を描いていた。しかし、彼は既成のルールに従うことを嫌がり、看板を勝手に独創的に描いたため師匠に解雇された後、長春を彷徨うことになった。窃盗で刑務所にいたこともあるという噂もあったが、証拠はなかった。

ある日、「私」が妓館通りを歩いていると、妓館で麻雀をしていた楊崑に出くわした。彼は「私」から三百元借りて、妓館にいる少女にあげるといいだし、「私」は彼を「かわいいところもあるのだな」と思ったので、四百元渡した。その後、楊崑はお金を返すため、「私」と妓館の少女を彼の魔術ショーに招待すると、彼は彼女を見つめながら全身全霊で演じた。その時「私」は、「舞台上で楊崑が逆さまになって笑いの機械と化し、胸に愛の炎を燃やしている姿は、誠実な生き方として、人の目に涙を浮かべさせるほどである」と強く心を揺さぶられた。

この後、楊崑の魔術団は長春を発って奉天に向かったため、楊崑との友情は断ち切られた。十年後、「私」が再び楊崑と会うとき、まさか彼の棺を見ることになるとは思いもしなかった。

十年後のある日、楊崑から「どうしても会いたい」という手紙が届くが、「私」は忙しくて会いに行けず、一ヶ月が経ち、彼からまた手紙が届いた。手紙には、彼が病気で困窮しており、お金を貸してほしいと書かれていた。しかし、手紙が届くのが五、六日遅れたため、「私」が楊崑のところに駆けつけたときには、残念ながら楊崑は棺の中であった。

葬儀の後、「私」は楊崑のこの十年の人生について、妓館の少女であった奥さんから聞き出した。その時初めて、楊崑が芸術生活を続けるために人間性を放棄し「動物」になろうとしたが、最終的には失敗して「人間」に戻ってしまい、その十年間の芸術家生命に終止符を打っていたことを知ったのである。

この小説は、爵青の文学作品の中ではかなり特異な作品であると言える。その特殊性は、真実と虚構の両方が極限まで突き詰められていることに起因しており、真実と虚構の強烈な対比の中で、「感性」を至高の芸術として追求する爵青の芸術哲学が小説に反映されてい

るのである。

まず、爵青が小説の中で確立しようとする「真実」は、一人称視点の「私」と作者の類似性に表れている。なぜなら、爵青は語り手の「私」と作者自身との同一性を読者が検証できるように多くの「手がかり」を残しているからである。例えば、「楊崑と出会ったのは、十年前、満州事変が起きた時だった。当時私はまだ15歳だった…」という記述からも、満州事変が勃発したのは1931年9月であり、爵青が生まれたのは1917年10月であるから、満州事変の時、東北地方の風習である「虚歳」、つまり数え年で、爵青はちょうど15歳だったことが確認できる。

また、楊崑と出会って10年後、小説の中の「私」は「文学家になった」が、周りの人々から「鬼才」「頽廃」「超現実」と呼ばれ、新聞や雑誌にも「私」の名前がよく載ったとある。満州文学に詳しい人であれば、当時文壇で「鬼才」と呼ばれ、その作品のテーマが「頽廃的」「超現実的」と解釈されることの多かった爵青自身のことをすぐさま思い浮かべるであろう。1940年代初頭、爵青は創作の絶頂期にあり、王秋蚩や巴寧や古丁などの作家が彼の書評を書いたこともあり、実際当時の新聞や雑誌には爵青の名前が頻繁に登場していた。

そして、「ミケランジェロは私が最も尊敬する偉大な芸術家である」という「私」の発言に関しても、爵青が芸術作品を紹介するために書いたエッセイ「画」¹⁹⁾で同様の記述があり、爵青自身の好みを表すものである。小説の中の「私」と作者自身の同一性を認めるのに、これらの具体的な手がかりがあれば十分ではあるが、爵青の居住地から新京郊外の八里堡までの距離と家柄の類似性を加味すれば、その根拠はより強まるだろう。

さらに、もう一つの「真実」として、「満州事変」を主軸に時間展開がされていることが挙げられる。これも爵青の他の小説には見られない現象である。歴史的事件である満州事変を時間軸としているいくつかの例を見てみよう。小説の冒頭の一文は、「楊崑と出会ったのは、十年前、満州事変が起きた時だった。」で始まる。その後も、「私」は再び「楊崑に会ったのはその年の秋で、今でもぼんやりと覚えているが、それは満州事変の一ヶ月前の八月のことだった…」「満州事変が勃発したのは、それから間もなくのことだった」などと満州事変について繰り返し言及している。

満州事変が勃発した。橋の下がちょうど日中両国の境界線になっており、九月十八日朝、日本軍が土嚢を積み上げ橋の近くに仮の要塞を作ったことで、橋の下で野宿していた不良少年たちは蹴散らされた。事変による緊迫した空気の中、夕暮れ時を過ぎると町には人影が見えなくなり、不良少年たちの世界も失われてしまった。²⁰⁾

しかし、満州事変後の出来事については、小説の中では時間軸設定が明確になっておらず、「十年後」「七年前」「二年前」などの漠然とした時間の概念を表す言葉に置き換えられ

ている。では、なぜ満州事変が小説の中の「私」の時間座標として表され、大きな意味を持つのであろうか。まず、満州事変により、「私」の生活環境が一変したことが挙げられる。例えば、満州事変の影響で、不良少年たちは「橋下」という空間を失い、「橋下」から「路地」へと移動することになった。その結果、楊崑は妓館の少女と親しくなり、新たな物語が生まれる。そこには〈物語の時間〉の流れがある。つまり、満州事変は、歴史的時間かつ物語的時間の「変化」として機能しているのである。「私」である爵青にとって満州事変は青春時代の思い出に終止符を打つことを意味していたが、物語の主人公である「楊崑」にとっては芸術人生の始まりであり、恋の物語の始まりでもあったのである。

こうして爵青は、満州事変を時間軸として設定することで、小説に強いリアリティを持たせることに成功している。時間概念を意図的に設定し、ストーリーを展開させながら、若き爵青が経験したこの歴史的出来事の象徴的な意味を明らかにし、一種現実味を帯びたノスタルジーを生じさせると同時に、作者の歴史的記憶を蘇らせる手法でもある。つまり、「私」と作者の同一性、時間的な真実性という二点から見れば、この小説にはリアリスティックな側面があると言える。しかし、一方で、このような「真実」は、実のところ作者の「現実」認識は虚構に他ならないという徹底的な自覚の上で意識的に作り上げられるものであり、それゆえ、小説に書かれた「真実」を認識しつつも、その「真実」を客観視しなければならない。言い換えれば、「藝人楊崑」において、作者が作り上げた「真実」はいかなる役割を果たしているのかを問いただす必要があるのである。

この問い合わせるためには、「藝人楊崑」における小説としての虚構性を考察しなければならない。作者は「私」を通して、小説の「真実」を表現し、主人公楊崑を通して、その「虚構性」を明示していると言える。この小説において、楊崑の顔の描写に多くの紙幅が割かれているが、以下にその部分を引用する。

彼の顔を細かく描写すると、その顔はまさにチンパンジーの顔に瓜二つであると言える。低く開いた頭蓋骨、突き出たアゴ、薄紫色の両唇、横に広がった鼻翼、平らで丸い鼻、これらすべてが合わさって、人相学では「貧乏人」と表現される顔になっているが、それは些細なことである。最も馬鹿にされるのは、彼の両頬に丸みがなく、歯と歯の間に吸い込まれるように両頬が内側に凹んでいることで、そのせいですますます口と顎が前に突き出ているように見える。このような顔の歪みが、彼の顔を完全にチンパンジーに見せてしまっていた。²¹⁾

楊崑のチンパンジーのような顔は、まだ北京や上海では知られていなかったが、一見の価値のある滑稽な人物に違いない。生まれつきのピエロのような彼の顔を思い出すと、滑稽さ以外に、心なしか人間の悲しみと哀れみを感じた。²²⁾

十年前、楊崑は新京を離れ、北京、天津、江蘇、浙江に渡り、そのチンパンジーのような顔と演技力で世界の人々を笑わせたるため、名前までも「チンパンジー」に変え、骨身を削り努力を重ね、肉体を改造した。結果として、彼は人類からチンパンジーに変身を遂げ、ステージ上では一挙手一投足にまでチンパンジーを意識し、観客を圧倒するよう努めた。この尽力は、ローマのサン・ピエトロ大聖堂を作り上げたミケランジェロの手腕にも匹敵する。²³⁾

明らかに、作者は多くの紙幅を費やして楊崑の外見の特殊性を描写しているが、要するに顔がチンパンジーに似ているがゆえに、人を笑わせる能力があるということである。楊崑が舞台でチンパンジーを演じ、生計を立てることができたのは、まさしくこの「非人間的」な外見を持っていたからである。生まれ持った「長所」とは別に、彼自身も、自分の中の「人間性」を「真誠」と「無我」の精神で封じ込め、「人間性」を「動物性」に入れ替えることに精一杯取り組んでいた。例えば、彼は断食を行うことで外見を維持し、必要に迫られない限り誰とも「人間の言葉」で話さなかった。これらの努力はすべて、彼の体から人間の臭いを取り払うためになされたものである。特に舞台上では、彼のその「動物性」は存分に発揮された。

しかし、「チンパンジーの魂」が楊崑の身体の奥深くまで浸透しているとはいえ、人間としての痕跡を完全に消すことは不可能である。作者は、この人間性と動物性の葛藤を、「愛の欲求」と「芸術の欲求」として描いている。小説の中の「私」は、一人の人間の中に愛に対する欲求と芸術的欲求が共存できると信じているのだが、楊崑は俗世に浸るにつれ、人間の属性を拭い去ることができなくなるのである。つまり、楊崑は家庭生活を営むようになると、愛への欲求が芸術への欲求の存在空間を奪ってしまったのである。それは楊崑が突然太ってしまったことにも現れている。これについて、作者はこう述べている。

彼は象のように太ってしまい、チンパンジーの魂が飛び出してしまった。彼が舞台に立つと、いくら自分がチンパンジーだと思って演じても、観客からは鼻先で笑われるだけであった。観客が期待して彼の演技を見に来ても、いつもの巧妙で本物そっくりの様子は完全に失われ、チンパンジーにはちっとも似ておらず、笑いも拍手もなくなっていた。²⁴⁾

チンパンジーのような容姿を失った楊崑は、芸人としての生活の基盤を失い、不安に駆られ、体の余分な肉を取り除く手術に踏み切った。しかし、手術によって顔面神経に異常をきたし表情が硬直てしまい、生き生きとした真に迫る表情がなくなり、チンパンジーとしての演技がさらに困難になってしまった。そこで彼は、失われた動物性を「神性」に

変換させようと、「豆を摘む」（中国の伝統雑技の一つ）という雑技者に転身した。しかし、間もなくして、彼は重い病気を患ってしまった。

亡くなる前、楊崑の体は衰弱しており、「以前の姿を取り戻したかのようにチンパンジーにそっくりだった」という。そのため、楊崑はまたチンパンジーとして舞台に立つ機会があると思い、とても喜んでいた。しかし、結末は悲劇的なものであった。「神は彼をチンパンジーに生まれ変わらせたが、寿命を延ばしたわけではなく、完全なチンパンジーに生まれ変わった瞬間、彼を天国へ、いや、ミケランジェロの元へと連れて行った。神の恩恵で、彼はチンパンジーの容姿を持って生まれ、チンパンジーとしてこの世を去ることができたのであろう…」²⁵⁾。

チンパンジーという象徴的なシンボル、あるいはこれによって表現された「動物性」は一体何を意味しているのであろうか。なぜ作者は、人間性を失い動物のようになった楊崑に対し、ミケランジェロに匹敵する芸術家として、惜しみない称賛を送るのであろうか。この小説には、芸術的領域において、人間は合理的思考を捨てて初めて芸術の領域に入る事が可能であり、それと同時に「真誠」と「無我」という芸術精神の本質を重んじるべきだという主題が色濃く貫かれている。「真誠」と「無我」というのは、人間の最も本能的な状態（感受、自然状態）に近づくということである。つまり、社会性や生存本能以外の多くの人間的要素を剥ぎ取り、動物のような「無我」の境地に達し、最も原初的な「眞の自己」を見出すことである。ここで、爵青が描き出そうとした〈剥き出しの生〉は、アガンベンやジョン・ロックらのネガティブで政治的・経済的に権力が奪われた〈裸性〉ではなく、ディオゲネスの〈剥き出しの生〉の形により近い。

ディオゲネスが解釈した第三形態の〈剥き出しの生〉は、文化の完全な拒絶と放棄であり、彼は文化的な意味においての〈剥き出しの生〉を追求しているのであり、この〈剥き出しの生〉は他者によって剥奪されるものではなく、積極的に追求する自発的剥奪から生じるものである。ディオゲネスにとって命の価値は、動物のように純粹に自然に生きることであり、この純粹に自然に生きることこそが真理を明らかにすることでもある。つまり、ディオゲネスにとって〈剥き出しの生〉とは、悲劇や貧困や恥ではなく、むしろ眞実と美を意味しているのである。爵青の見解では、動物性への回帰は、合理主義的な人間世界への裏切りとその放棄を意味し、近代主義と戦うための最も急進的な方法である。近代社会は人間社会に合理主義的なユートピアをもたらしたが、それは政治や経済などの保障を約束することで、人間に理性という束縛を加えただけである。そして、現実において、この合理主義を完全に否定することが可能なのは芸術の世界のみであるため、爵青は〈剥き出しの生〉に希望を託して、近代主義を断固とした態度で拒否しているのである。

その意味で、爵青の〈感性〉論は、実は近代主義と対峙するあらゆる可能性の模索であり、彼が最初にその可能性を模索したのが、芸術の分野なのである。彼は、まず主人公に舞台上でその動物性を無心で表出させ、その動物性を原動力とした演技で、最も純粹な〈感

性〉を観客に見せることによって、〈感性〉の価値を見直し、〈理性〉のみ有り難がる近代主義の欺瞞性を見抜く機会を与えたのである。さらに、楊崑の「人間性の放棄」から「動物性の獲得」、そして「動物性の喪失」から「人間性の回復」への過程を通して、芸術生活を完全に失い、肉体的生命までも失ってしまう彼の悲惨な最期を描く中で、爵青は、「人間にとって〈感性〉はいかに生命哲学と関わっているのか」という芸術哲学の思考を熟成させ、近代主義に対抗する芸術的、哲学的な試みを完成させているのである。作者が、虚構の小説と作者本人とを同一視できるような、ある程度のリアリティーを構築することを躊躇しないのも、作者自身の芸術的・哲学的思考を反映させたいという意図があるからである。爵青は、「可能性」の探求として、楊崑という架空の人物を創造し、フィクションとリアリティーの絶妙な組み合わせの中で、〈感性〉への追求と憧憬を大胆に表現している。

おわりに

王秋蚩は、「光」という筆名で発表した「論劉爵青的創作」²⁶⁾を通して、爵青の「天才」への憧憬を痛烈に批判したが、確かに、爵青の小説の中には天才肌の主人公が頻繁に登場するため、爵青が神から恩恵を受けた人に執着しているような印象を与える。例えば、「廢人」、「天才の悲劇」、本稿で取り扱った「藝人楊崑」など、多くの作品に「奇妙な人物」が登場する。しかし、これらの人物設定を爵青の〈感性〉論と照らし合わせてみたとき、爵青の創作動機が初めて明らかになるのである。彼自身もかつて作品の中で「二十世紀は天才の時代ではないと言われている。偽の天才たちがハエのように二十世紀を取り巻き、名声と自己利益への飽くことのない欲望で二十世紀を暗澹とさせてきた」²⁷⁾と明言しているように、爵青は「天才」の世界に憧れているわけではない。彼が小説に求める「天才」は、神の恩寵を受けた「天才」ではなく、ディオゲネスの〈剥き出しの生〉なのである。このことから、評論にしても小説の創作にしても、彼の文芸的関心においては、近代主義に抵抗する〈感性〉が常に重要なテーマであったといえる。この〈感性〉に対する思考の存在こそが、爵青の思想と創作のはざまを埋め、総体的に芸術哲学の様相を呈しているのである。

注

- 1) 劉建輝、「近代の超克と「満州」文学-雑誌『芸文志』同人を中心」に『昭和文学研究』(二十五)、昭和文学会、1992年、73頁。
- 2) 柳書琴、「上海新感覺派文藝在「滿洲國」的傳播：兼論爵青〈哈爾濱〉的版本問題」、蔡鈺凌、『文學的救贖：龍瑛宗與爵青小說比較研究（1932-1945）』、新竹：國立清華大學台灣文學研究所碩士論文、2006年。蔡佩均、「廢墟与新都：爵青筆下的滿洲新人試煉場」『創傷-東亞殖民主義与文学』（劉曉麗、叶祝弟 編）、上海三聯、2017年3月を参考に。
- 3) 爵青、「毎月評論」『青年文化』第1卷第2期、1943年9月。爵青著、謝朝坤、李冉編、『爵

青作品集』、北方文藝出版社、2017年版、222頁から引用した。原文：為由事物的根本上把握其全部價值，我非常不滿意這種每月評論的形式。真正的評論該是真正的價值的發見，該是永遠的價值的肯定。

- 4) 同前。
- 5) 同前、223頁。
- 6) 同前。原文：近代的理論只是知性的過程，作為這個時代的知性，雖然已經具有其独特的地盤和形態，可是只若事关感受的問題，我是始終擁護和知性相對的感性的。
- 7) 同前、224頁。
- 8) 爵青、「青服的民族」『新滿州』第3卷第12期、1941年12月。原文：現代的自動電話，與其稱作“文明”的利器，不如用“犯罪”來代替”文明“二字，一切的欺詐和恫吓，都藉着自動電話做出來。
- 9) 爵青「毎月評論：今日の満州文學」『青年文化』第1卷第5期、1943年12月、76頁。原文：現代是一個其妙的時代，對於一個對象，在表示自己的愛着和憎惡之先，必要封鎖住自己的感情乃至感性，冷靜而殘酷的對這對象加以分析或歸納，然後才能有所愛，有所憎惡。
- 10) 爵青「「黃金的窄門」前后」『青年文化』第1卷第4期、1943年11月、83頁。原文：現代是一個複雜而豐富的時代，……總之，就在如此複雜而豐富的時代里，我過來了一程，過來之後，我感到焚身不寧的焦急和孤獨。
- 11) 爵青、「「毎月評論」及其他」『青年文化』第1卷第2期、1943年9月。原文：現代是一個奇妙的時代，這時代將理論葬送到了壞死狀態，為之安排下一個整然有序的世界。在這世界里，所有的事物都呈現出一個概念，概念又都代表著一個事物。但是近來的惡概念氾濫，乃是有目皆觀的事實。
- 12) 同前。原文：因為個人的神經以及由這神經生發出來理論，不能處理這時代樣相的複雜性和多歧性；這複雜性和多歧性更有着無限的丰富和深刻，個人被這丰富和深刻責難得完全失掉了自意識，所以才躲在理論的堡壘里了。
- 13) 同前。
- 14) 爵青、「小說」『青年文化』第2卷第1期新年号、1944年1月、70-71頁。
- 15) 同前、70頁。
- 16) 同前、71頁。
- 17) 爵青、「藝人楊崑」『青年文化』第1卷第1期、1943年8月、91-97頁。
- 18) 爵青、「「黃金的狹門」の前後」『青年文化』、1943年1月、83頁。
- 19) 爵青、「画」『並欣集』、興亞雜誌社、1944年、182頁。
- 20) 爵青、「藝人楊崑」『青年文化』第1卷第1期、1943年8月、94頁。原文：満洲事變勃發了。因為橋下的小沟正是日華兩國的境界，在九月十八日早晨，日本軍在橋傍塹好土囊筑成了臨時的堡壘，在橋下過宿的浮浪少年便吓得都星散了。而且事變當時的局面非常緊張，每到黃昏以後街上就沒有行人，浮浪少年的世界也被奪去了。

- 21) 同前。原文：若來詳細描繪一下，可以說他的面孔恰和黑猩猩一樣。天額低下，下頸突出，薄薄的兩片紫嘴唇，平扁肥大的一條兩翅朝外的鼻子，完完全全的把這副面孔襯成了相法上所說的窮相，但是這些還无关緊要，最惹人忍不住笑的倒是他的兩腮。這兩腮非但毫無圓潤味，反而往口腔里凹洼着，恰像故意用齒間吮着兩腮一樣，由外面看來，正是兩個直徑寸余的兜兒，越顯得口吻以及下頸往前突出着了。因為這凹洼的兩頭，一副面孔成了十全的黑猩猩。
- 22) 同前。原文：楊崑那副黑猩猩似的面孔，雖然其名未曾馳于京沪，滑稽倒是生來當之無愧。我想着他那生就的一副小丑臉兒，除了滑稽，不知道因為什麼，竟有些感到人生的悲哀和可伶了。
- 23) 同前、96頁。原文：楊崑在十年前離開新京，到京津江浙一帶賣藝，借着那張黑猩猩似的面孔，使天下的人士笑倒在他的演技里，後索性改名為“黑猩猩”了。他用削骨瘦身的努力，改造着自己的肉態，使自己由人類的一員下降為黑猩猩，在舞台上尽力征服着觀客，讓觀客在自己的一舉手一投足之間，發現他就是黑猩猩。這努力和米開朗琪羅設計羅馬聖彼德寺院的靈腕是不相上下的。
- 24) 同前、97頁。原文：他胖得像一匹象，黑猩猩的魂由他的身內飛出去了。站在舞台上的時候，無論他怎樣自己以為自己就是黑猩猩，而觀眾都冷笑起來，縱即是懷着善意來看他的演技，也在沒有往時那種惟妙惟肖的好處，完全不像一匹黑猩猩，台下再也不送哄笑和鼓掌了。
- 25) 同前。原文：神將他重造成黑猩猩，却没有給他留下壽命，當他完全化作了黑猩猩的那一剎那，就把他帶到天上去，不，帶到米開朗基羅的墓穴里去了。神對他的命令，大概由始至終是要他成個黑猩猩的……
- 26) 光、「論劉爵青的創作」『滿州作家論集』(陳因編)、實業印書館、1943年、340頁。
- 27) 爵青、「藝人楊崑」『青年文化』第1卷第1期、1943年8月、97頁。

The Role of 'Sensibility' in JueQing's 'Critique of Modernity: Focusing on artistic philosophical theory and the novel of YiRen YangKun

WANG, Qing

Abstract

Why is it that the motif of "sensibility," which once seemed to have disappeared from JueQing's works after the Greater East Asia War, has been revived in the most radical form in his essays on Western modernity? In order to answer this question, this paper will clarify the process leading to his "critique of modernity" by pointing out how the two concepts of "sensibility" and "modernity," which have a philosophical essence and a strong political nuance, coexist in the Manchukuo writer JueQing. In particular, I will focus on his writings on "sensibility" in the magazine "Youth Culture" and argue that his interest in "sensibility" stems from his sense of

inability to adapt to modernity. Furthermore, in order to elucidate the role of "sensibility" in JueQing's novel creation, I will deal with the novel "YiRenYangKun"(Artisan YangKun) and elucidate the role of "bare life" in resisting modernism. The existence of such thoughts on "sensibility" is what fills the gap between JueQing's thought and creation, and made his work can be read as a practice of artistic philosophy.

Keywords : JueQing, critique of modernity, sensibility, Manchukuo Literature, "YiRenYangKun"

漱石の「俳句的小説」と漢文学

崔 雪梅（江西農業大学）

要旨

漱石の小説には当時でも今でも修辞上に読者の注意を引く特色を持っている。軽妙な言文一致体で描いた西洋風の生活スタイルや、漢文調交じりの文章を以て描いた幻想世界と主人公の心の世界は、独特的な持ち味を作り出している。漢詩や英詩を使わざるを得ない文章の構成には作者自身が追い求め続ける美的観念が働いている。漱石はこのようなスタイルを「俳句的」な表現とプロットのない構造と述べる。その論理を具体化したのは、つまり『草枕』である。本稿では、漢詩と「俳句的小説」という構造の相関関係を考察しながら、『草枕』における「俳句的」な特色について論じてみたい。

キーワード： 夏目漱石、俳句的小説、漢詩、草枕、漢文学

はじめに

近代に入り、発句が俳句になり、漢詩と連句が流行しなくなった。欧米の影響を受けた日本文壇では芸術や文学における開放性を追求し、さまざまな改革を行った。そのうち、明治詩壇にも詩歌の創作と理論をめぐって、いろいろな改革が行われるようになった。その時、漢詩の創作と深い関わりを持つ「俳句的小説」という概念が夏目漱石によって提起された。漱石の「俳句的小説」は、「中心となるべき人物」をめぐるプロットと事件の発展が叙述されないものとして作られている。作品における観察者という媒介の役を通して、作品に加えたエピソードや登場する人物間の関係性を伝えながら、一つの作品に仕上げている。『草枕』では、漢詩の挿入や創作方法のほか、その空間描写には重層的構造が仕込まれている。本稿では、漢詩と「俳句的小説」の相関関係を解明しながら、その語りの方法を明らかにする。

I. 明治期の詩歌

江戸時代の文学青年の通過するコースであった漢詩文の学習と創作は、この時期に入つて大きな打撃を受ける。明治期の詩壇において、多様な詩形が現れるようになった。これは日本の詩歌が近代文学を経て現代文学へ移行する過渡期における創作方法への挑戦と革新とも言えよう。

1. 新体詩

1882年8月、日本古来の詩風と詩形と異なる新体の詩形が井上哲次郎・外山正一・矢田部良吉三氏により提出された。この英米の詩風を模倣する詩形をめぐって、三者は『新体詩抄』でそれぞれ「新体詩抄序」を記し、その創作構想を述べた。井上哲次郎は、儒学者で教育思想家である貝原益軒の「我邦只可以和歌言其志述其情。不要作拙詩以招誣癡符之誚」という考えに引き受け、「我邦之人。可學和歌。不可學詩」¹⁾と漢詩創作を反対する意見を述べた。その主な理由は、和歌より漢詩のほうが難解の点があるということである。井上は、また、和歌は時代とともに発展する西洋の詩歌に比するものにならないと考え、新体の詩形を創るようになった経緯について述べた。

日本の社会学の開拓者と言われる外山正一は、固有の詩形を否定し、新たな詩形への革新に働く一方、知識の伝えと思想の交換の利便性を高めるためには漢字を廃止すべきだと主張した。そして、1884年6月、漢字をやめて英語教育を強化する旨を「漢字を廃し英語を熾に興すは今日の急務なり」という一文で『東洋学芸雑誌』第33号に発表した。それを踏まえ、1894年4月、井上は国字使用の利便性を極めて高めるため、平仮名を改良して単純な文字を作り出す新国字論を唱えた。かつて英国、ロシアに滞在したことのある森有礼は、早くも1872年6月訪米中に井上と同じような考え方を示した。当時、森はエール大学言語学教授ホイットニーに漢文の代わりに英語をもって日本語とする意見を聞き出したが、該博士の否定を受けたと言われている²⁾。似たような考え方を示した志賀直哉は、第二次世界大戦の直後日本語をやめ、フランス語に変えると提案したことがある。

この時期の文壇において、新体詩の文壇デビューのほか、様々な実験が盛んに行われていた。欧米文学の閲読者の増加とともに、海外の小説とエッセイ、詩歌が言文一致体、和文体、漢文体、漢文訓読体など、さまざまな方法を以て邦訳されるようになっていた。従来、新しい言葉や概念を輸入する際に、まず漢字表記の単語に訳すのが共通的な認識となっている³⁾。

2. 英詩漢訳

海外文学の邦訳において、音韻法則や情緒、思想表現をめぐる教養と技巧とを最も厳しく要求するのは、詩歌の漢訳であった。1889年、森鷗外が雑誌『国民之友』に「於母影」を発表した。これは、鷗外を英詩漢訳の代表詩人として認める作品となっている。鷗外はこの詞華集の「悌に就きて」という一文で、翻訳に関する独自な見解、及び認識を叙した。その冒頭では、まず「詩の想體はその形骸のために變ぜず」⁴⁾という考え方を記した。そして、翻訳の成敗が訳者の技巧にあるという認識を示した。翻訳するにあたって守るべき原則については、「若唯情のみを傳へば、他邦の趣味を輸入すといふべく、若唯文のみを傳へば、他邦の風調を輸入すといふべし」⁵⁾と、主張している。また、「於母影」の翻訳は、「主として趣味を傳へむとするにありき」⁶⁾と明示し、「字句、平仄、韻法をも流石に拋

棄するに忍びず、その能く根を托し芽を抽かむは覺束なしとは思ひながらも、聊又移植を試みつるなり」⁷⁾と、漢詩に訳す思いを語っている。鷗外の翻訳について、小堀桂一郎氏は「鷗外と西洋一翻訳の問題—近代小説の様式をめぐって」で、鷗外の翻訳を「一の文壇的現象としてその表面だけを見れば、差当っては反自然主義の文学運動の一環」と述べる一方、自然主義風な作品も翻訳する彼の流儀は、「一つの文学觀に固執することの陋なるを間接的に主張したやうなものである」⁸⁾という考え方を示していると考える。

英詩の漢訳のほか、鷗外は大量な小説を邦訳した。このような鷗外は新体詩に対しては、終始否定の立場に立っていた。1893年歳の暮れに書いた「紅豆集題詞」では、鷗外は和歌・俳諧・新体詩・ラテン語詩に対する見解を示した。そのうち新体詩については「詩の新體といふものあれど是れ將たいまだ整はず」と述べ、また、「一時の遊びものになり」⁹⁾と冷評した。1897年に記した「今の文學界」においても、「まさか今の新體詩見たいなものを作る氣にもなれぬさ、めざまし草にも新體詩の投書が来るが一向に載せぬ」¹⁰⁾と、新体詩という詩形に対する反感を隠さなかった。そして、子規の提唱する新俳句については、長く流行すると思わないが「新しい名詞や何かをドシ／＼注入することも出来る」と作詩上の簡易さがあるため、俳句は生き続けるだろうと述べた。そして、まさしく鷗外の言う通りに、俳句は今の日本でも盛んに詠まれ、漢詩は西洋のラテン詩のように「早晚亡びる」境地に追い込まれたのである。

3. 新俳句

1866年12月、幕府開成所の翻訳筆記方であった前島密による「漢字御廃止之議」が公的な漢字批判を行って以来、国字改革、国語改革、学制改革、絵画改革等、思想・文化・社会制度のあらゆる面からせっかちに和洋折衷をはかることになってきた。子規は、俳句の近代化への「革新」緊迫性を感じ、積極的に新俳句の設立に取りかかるようになった。1898年3月に出版した『ほとゝぎす』15号に載せた「『新俳句』のはじめに題す」では、子規が新俳句の発足経緯と背景について言及した。子規はこの文章で新俳句の発足が明治25年以後だと述べ、そのきっかけは、「維新以後百事日新月進の勢は獨り俳句をして時運の外に遺棄し去るべくもあらず」¹¹⁾と思いついた。1892年以後から俳句が「元禄の高古を摸し文化の敏贍を學ぶ」ことになり、後に「蕪村を崇み天明を宗とする」ことで、世間の文学者が始めて俳句の存在を認めるようになったと子規が述べる。「新俳句」の特色については、古典に対する「模倣」を重んじながら、時代の発展と伴い開花し、続けていくことで、「第二第三の『新俳句』は續々世に現れんことを希望」する、と記している。

子規は、「新俳句」の改革を求めるが、西洋詩歌を模倣する方法を否定した。この点について、三好行雄氏は「『俳句』の近代—シノプシス風に—」で、「子規はむろん、啓蒙家でも改良主義者でもなかった。だから——という短絡は危険だが——すくなくとも、伝統に代えて西洋をという発想は、かれにはなかった」という観点に立ち、子規の俳句改革

が和洋折衷的な改革ではないと述べた¹²⁾。そのうえ、子規の新俳句が日本派の指導理念において「古人の存在」、「古句の研究」を重視していることを指摘しながら、十七音を基調とする定型・季語・運座という伝統を継承する面において「〈反近代〉をうけつぐことになった」と、西洋への接近を否定している。

4. 俳句と漢詩

1897年、子規は俳句と漢詩の関係において「俳句と漢詩」と題する評論に次のような考え方を述べた。

俳句と和歌と漢詩と形を異にして趣を同うす。中にも俳句と漢詩と殊に似たる處多きは俳句が力を漢詩に藉りしにも因るべきか。芭蕉は杜甫の詩を讀みて其趣味を俳句に移し、蕪村は詩の趣味と共に詩の言葉をも俳句に用ゐたり。然るに漢詩を解する者往々にして俳句を解せざる者あり。こは俳句を見るに漢詩を見るの標準を用ゐざる故なり。余も久しく漢詩を見るの標準を誤りしが一旦俳句と漢詩をと二致あるに非る悟るや疑團冰解して始めて漢詩の眞相を認め得たる心地す。俳句に於ける余の標準の誤らざる限りは漢詩に於ける標準も亦誤らざるを信ず。俳句解すべからずとなす者、亦た俳句を見ること詩を見るが如くせば容易に之れを解し得べし¹³⁾。

正岡子規は俳句・和歌・漢詩三者は同種とはいいうものの、和歌より、俳句と漢詩との関係が最も緊密であることを強調しながら、俳句が漢詩の「力」を借りているからだと考えている。また、芭蕉と蕪村との作品を例としてあげて、前者は漢詩の詩風と詩境を俳句の句風と句境に移し、後者は詩風と詩語を俳句に使ったと分析した。そこで、俳句と漢詩とを見る標準において、同一視しなければならないと意見を述べた。さらに、俳句は漢詩の一句に相当し、漢詩の一句が単独の俳句として見られる、という論点を示した¹⁴⁾。この論点に基づいて、例示として多くの漢詩を俳句に訳し、また表現における関連性を長篇にわたって説明した。子規の俳句を漢詩と同一視すべきという観点は、新俳句を振興させようとする目的に呼応していることがよく分かるのである。新たな句作の原理を組み立てる子規の新俳句は、ある意味では漢詩の改良とも言えよう。

1976年岩波書店から出版された雑誌『文学』に見える竹内実氏の「俳句と中国の詩句」は、子規の「俳句と漢詩」と同じく、漢詩を俳句に訳し、俳句を漢詩に訳す例を挙げている。しかし、ここで竹内氏は漢詩と俳句の相互変換可能という考えは自らの「おもいつき」¹⁵⁾と述べている。子規が早くも同じような見解を表明したことについては触れなかった。

西洋文明至上主義の風潮が吹き荒れる文壇において、詩歌はもちろん、さまざまな方面においていわゆる改革が行われていた。このような時代背景の下で、正岡子規は新俳句を提倡し、森鷗外は英詩漢訳に試み、漱石は「俳句的小説」という文学理論を提起し、実践

することに励んだのである。漢文教育と漢詩創作が衰退しつつある時代背景の中で、漱石の「俳句的小説」は伝統文化の伝承を新たな理論の構築と結びつけた試みである。

II. 「俳句的小説」の創作法

1. 「俳句的小説」と漢詩、そして「断面的文学」

1906年11月15日、『文章世界』に掲載された「余が『草枕』」において、漱石は『草枕』の創作方法について述べている。

私の『草枕』は、この世間普通にいふ小説とは全く反対の意味で書いたのである。唯一種の感じ——美しい感じが讀者の頭に残りさへすればよい。それ以外に何も特別な目的があるのでない。さればこそ、プロットも無ければ、事件の発展もない。

茲に、事件の発展がないといふのは、かういふ意味である。——あの『草枕』は、一種の變つた妙な觀察をする一画工が、たま／＼一美人に邂逅して、之を觀察するのだが、此美人即ち作物の中心となるべき人物は、いつも同じ所に立つてゐて、少しも動かない。それを画工が、或は前から、或は後から、或は左から、或は右からと、種々な方面から觀察する。唯それだけである。中心となるべき人物が少しも動かぬのだから、其處に事件の発展しやうがない。

所が普通の小説ならば、この主人公は甲の地點から乙の地點に移つて行く。即ち其處に事件の発展がある。この場合に於ける作者は、第三の地點に立つて事件の發展して行くのを側面から觀察してゐるのだが、『草枕』の場合はこれと正反対で、作中の中心人物は却つて動かさずに、觀察する者の方が動いてゐるのだ。

「プロットも無ければ、事件の発展もない」という「俳句的小説」の創作方法は、漱石が漢詩の創作から得たヒントにより構成されたと考えられる。漱石の『文学論』の「第三編 文学的内容の特質」の「第一章 文学的 F と科学的 Fとの比較一汎」では、「吾が邦の和歌、俳句若くは漢詩の大部分の如きは皆此断面的文学に外ならず」と、「断面的文学」¹⁶⁾という概念を提起した。その特質は、英文学と漢文学、ないし国文学に通ずるところに現れる。そして、この「俳句的小説」は「断面的文学」の「客観的断面」という表現形式から發展したと考えられる。なぜなら、両者には共通する創作方法が用いられているためである。「中心となるべき人物が少しも動かぬのだから、其處に事件の発展しやうがない」というのは、因果連鎖を指示する出来事に関する叙述や、描くものと主人公との関係を示さない「客観的断面」の変形のことである。

漱石が『草枕』は、作品に仕組んだ過去に発生した事件などが「中心となるべき人物」と直接な関係を持たない構造を以て構成されていると述べているように、作品に描かれた出来事は画工という觀察者を通して叙述されている。そして、知らされた出来事は、画工

が「中心となるべき人物」を「或は前から、或は後から、或は左から、或は右からと、種々な方面から觀察する」時に、関連人物らによって語られるのである。

また、「世間普通にいふ小説とは全く反対の意味で書いたのである。唯一種の感じ——美しい感じが讀者の頭に残りさへすればよい」と語られた「俳句的小説」の特徴は、すなわち、「漢詩の大部分の如きは皆此断面的文学」に表現する「快味」「趣」を指示していると考えられる。

『草枕』では、出世間的で非人情な詩を創作することを目指す画工を通して、「必ずしも時間間に材料を按排する必要はあるまい。矢張り絵画と同じく空間的に景物を配置したのみで出来る」とする「断面的文学」の詩歌の創作法を提示する。

次に詩にはなるまいかと、第三の領分に踏み込んで見る。レッシングと云ふ男は、時間の経過を条件として起る出来事を、詩の本領である如く論じて、詩画は不一にして両様なりとの根本義を立てた様に記憶するが、さう詩を見ると、今余の発表しやうとあせつて居る境界も到底物になりさうにない。余が嬉しいと感ずる心裏の状況には時間はあるかも知れないが、時間の流れに沿ふて、遙次に展開すべき出来事の内容がない。一が去り、二が来り、二が消えて三が生まるゝが為に嬉しいのではない。初から窈然として同所に把住する趣きで嬉しいのである。すでに同所に把住する以上は、よし之を普通の言語に翻訳した所で、必ずしも時間間に材料を按排する必要はあるまい。矢張り絵画と同じく空間的に景物を配置したのみで出来るだらう。只如何なる景情を詩中に持ち来つて、此曠然として倚托なき有様を写すかゞ問題で、既に之を捕へ得た以上はレツシングの説に従はんでも詩として成功する訳だ。ホーマーがどうでも、ヴージルがどうでも構はない。もし詩が一種のムードをあらはすに適して居るとすれば、此ムードは時間の制限を受けて、順次に進捗する出来事の助けを藉らずとも、單純に空間的なる絵画上の要件を充たしさへすれば、言語を以て描き得るものと思ふ。

(『草枕』「六」)

加藤禎行は、画工を通して語られた詩歌の創作法について、「『汽車論』の隱喻一夏目漱石『草枕』をめぐって一」という論文で、漱石が「余が『草枕』」で提示した「第三の地点」という創作理論と同じものとして見なしているが、なぜ同じ理論として見なせるのかという根拠について述べていない。加藤は、「だが、『胸中の画面』（十三）という結果には、その原因として『草枕』での個々の情景が『必要』で、その個々のユニットや情景を、因果関係や配列の必然性などなしに配置しても、記述の終焉を決断する時点で、不可避的に結末とそれ以前の記述とのあいだに『遙次』の関係を結んでしまうからだ」¹⁷⁾と述べ、『草枕』における漱石の時間に関する理論を否定的に捉えている。

『草枕』の画工が「余が嬉しいと感ずる心裏の状況」を表象しようとするが、その媒体

として選択したのは、小説ではなく、詩と画である。1906年11月15日の『文章世界』に発表した「プロットも無ければ、事件の発展もない」という「俳句的小説」は、小説における詩と詩的なものを取り入れ、プロットなしのプロットの展開と話題の飛躍を成し遂げたのである。これは、また「自己との関係如何等につきては一向に云ふところなし」という「客観的断面」の表現形式に通じている。

2. 「俳句的小説」と「客観的断面」

「客観的断面」における「自己」は、詩人や主人公になる。「俳句的小説」の場合、漱石は、「中心となるべき人物」と呼ぶ。そして、「客観的断面」に加える主人公と明確な関係性が示されない人や物の点景らは、『草枕』の場合、那美を除いた画工や茶店の婆さん、髪結屋の親方、源兵衛などの登場人物と、作品の中に加えたエピソードとして考えられる。さらに、このような材料を以てまとまった作品に構成させるには、繋がりを付ける媒介となるものが必要とされる。漢詩の場合、点景に関する描写に貫き通される基調は作者が鑑賞者に伝えようとする「快味」を表現し得る。一方、「俳句的小説」は、媒介の役をつとめる観察者が必要とされる。

那美を「中心となるべき人物」として読む時に、画工は、単なる観察者として登場するだけではなく、読者と同じ地位に立つ人物として設定されていることが分かる。そして、『草枕』の展開は、読者と同じ目線を共有する画工が「中心となるべき人物」を「或は前から、或は後から、或は左から、或は右からと、種々な方面から観察する」ことによって構成されている。この問題については、さらに具体的に分析する。

「プロットも無ければ、事件の発展もない」ということは、「中心となるべき人物」とする那美に関する出来事の展開が存在しないと考えられる。この方向に沿いながら、那美に関する事件が『草枕』の中でどのように描かれたのかを考察する。

【那美に関する事件】

【事件1】 画工が茶店の婆さんから聞いた話。

①志保田の嬢様—那美のお嫁入りの時の状況。

②長良の乙女が二人の男に恋い慕われて、悩んだ末に淵川へ身を投げたこと。

③那美が旦那と離縁したこと。(婆さんは「(那美・筆者注) 嬢様と長良の乙女とはよく似て居ります」と、二人のお嬢様の身の成り行きが似ていることを画工に告げる。)

【事件2】 画工が髪結屋の親方から聞いた話。

①もと觀海寺の坊主の泰安が那美に文をつけて、恥を搔かせられたこと。

【事件3】 「鏡が池」で、画工は源兵衛から「あの志保田の家には、代々気狂いが出来ます」と聞かされて、昔の志保田のお嬢様が虚無僧に恋をしたが、親の反対に「鏡が池」に身を投げたことが分かる。

上に示している通り、「中心となるべき人物」の那美にまつわる三つの事件が作品の中に記述されている。いずれも、過去に生じた事件で、うわさという他者から第三者の画工・読者に告げる方法で叙述されている。また、この三つの事件は、補助線のように那美の人物像を表わしている。このような叙述法は、すなわち、「プロットも無ければ、事件の発展もない」として創作方法を意識した証拠になる。ここでは、他者から伝達された事件として描かれたシーンに「中心となるべき人物」の直接的な参与が行われてないことから、「中心となるべき人物が少しも動かぬのだから、其處に事件の発展しやうがない」ということになっている。そのうえ、「作中の中心人物は却つて動かずに、観察する者の方が動いてゐるのだ」という方法は、那美に関する事件の展開を設げずに、すべての事件が画工の観察を通して得た情報として叙述されるところに反映される。このような情報は、『草枕』を構成する材料となる。それらは、以下の通りである。

【画工による観察】

【観察1】那美との最初の対面—【三】

那美の「顔に統一の感じのないのは、心に統一のない証拠で、心に統一がないのは、此女の世界に統一がなかつたのだらう」と、画工が観察して思ったこと。

【観察2】那美が裸で風呂場に現れる—【七】

【観察3】「鏡が池」で源兵衛と遭遇し、その後、池の危巖の頂に突然現れた那美の顔に注目する。—【十】

【観察4】画工は、偶然と雑木の間にいる野武士と那美と一緒にいることを見かけ、二人の様子を注意深く観察した。—【十二】

【観察5】那美が走り出した汽車の窓から現れた野武士の顔を見合わせた瞬間に、画工は、那美の顔から「憐れ」の表情を発見した。—【十三】

漱石が「中心となるべき人物が少しも動かぬのだから、其處に事件の発展しやうがない」と主張したように、右に掲げた内容には、因果関係を含む事件の発展が見当たらないのである。ところが、「中心となるべき人物」ではない久一が満州に行くプロットがなければ、画工らが汽車の停車場に行く展開は生じられなくなる。さらに、那美の顔から「非人情」の表情も現われなくなる。つまり、漱石が「余が『草枕』」で言う「プロット」と「事件の発展」は、那美にまつわるプロットに限られているのである。

要するに、「俳句的小説」の方法は、「客観的断面」の表現形式を展開するために、「プロットも無ければ、事件の発展もない」という形式に進展したのである。しかしながら、これは「中心となるべき人物」の設定に制限されている。

このように、1906年の「新小説」に発表された『草枕』では、「断面的文学」とする詩歌の創作方法が見られるばかりではなく、それを実践に移した内容も加わっている。さら

に、「断面的文学」という概念を正式に提示するまでに、漱石は、すでに「俳句的小説」という名前で「断面的文学」の構造を持つ小説を創作したのである。

3. 「俳句的小説」と「低徊趣味」

1908年1月の『鶴頭』序で、漱石は「低徊趣味」という造語を持ち出している。「断面的文学」に表わす「快味」と考えられる「低徊趣味」について、漱石は、次のように述べている。

文章に低徊趣味と云ふ一種の趣味がある。是は便宜の為め余の製造した言語であるから他人には解り様がなからうが先づ一と口に云ふと一事に即し一物に倒して、独特もしくは連想の興味を起して、左から眺めたり右から眺めたりして容易に去り難いと云ふ風な趣味を指すのである。だから低徊趣味と云はないでも依々趣味、恋々趣味と云つてもよい。所が此趣味は名前のあらはす如く出来る丈長く一所に佇立する趣味であるから一方から云へば容易に進行せぬ趣味である。換言すれば余裕がある人でなければ出来ない趣味である。

「低徊趣味」という造語に関して、漱石は多くの場所で使用しているが、その具体的な意味と表現形式について明確に語っていない。しかし、それに関する論述から、「低徊趣味」は読者に「美しい感じ」を与えることを第一位にする「俳句的小説」と、事件の発展や筋と構造にかかわらず、「主観的」「客観的」な描写法を用いて「快味」を表わす「断面的文学」の文脈にあることが確認できる。「低徊趣味」あるいは「余裕がある」趣味に関する議論は、当時の文壇の主流と形成する自然主義を批判する立場で持ち出されている。写生文を擁護する論陣にいる漱石は、『鶴頭』序で「天下の小説を二種に」区別して、「余裕のない小説」に対する「余裕のある小説」は「左から眺めたり右から眺めたり」して、読者に連想を起こす独特な趣味を表わしていると言う。「客観的断面」を継承した「余裕のある小説」は、漱石が「俳句的小説」について述べたように、あまり作れないものである。なぜなら、それは作品を構成するための厳しい条件が付与されているからである。

それを実践した作品の『草枕』を例として挙げれば、作品が成立するためには、物語の発展に直接的に関与しない登場人物が必要とされる。この登場人物は、読者と同じ目線を共有する観察者としての機能を働かなければならない。また、「中心となるべき人物」にまつわるエピソードに関する叙述は、作品の全体を貫通する「プロット」や、事件の発展に関わることに許されない、という厳しい条件に制限されている。それと同時に、物語の進行に影響しない事件は作品の中で副次的に描かれている。「俳句的小説」は、「客観的断面」の形式を継承する一方、プロットと事件のない叙述方法を強化したと見られる。

III. 『桃花源記』と『草枕』におけるひび割れた世界

「俳句的小説」として書かれた『草枕』では、陶淵明の『桃花源記』の行程を加えた部分がある。ここでは、『桃花源記』に見えるような一本の「ふね」が幽玄たる時間と空間の広がりを表現するに橋渡しをつとめている。画工は汽車が見えるところを「現実世界」と称し、「汽車程二十世紀の文明を代表するものはあるまい」と言う。また、汽車並びに「汽船」「船」も同じく、「現実世界」に属するものとして表現されている。そして、「現実世界」と対立的に表現されたのは、画工と那美、および、和尚の大徹のいる「吾等が世」である。ここで、注意すべきところは、『草枕』における漱石の「ふね」¹⁸⁾をめぐる表記の意味表現である。紙面の制限により、この部分の分析は省かせていただく。

かつて前田愛は汽車と船に関する描写について、「世紀末と桃源郷 『草枕』をめぐって」（「理想」、1985）という論文に、「『草枕』の世界が桃源郷のトポスをかりていることはよく知られているが、冒頭の那古井温泉へ向う山旅と末尾の那古井温泉から鉄道の駅に出る舟旅とは相互に補完しあっている」¹⁹⁾という見解を示している。一方では、平成6年岩波書店が出版した『草枕』の注解者の今西順吉と出原隆俊は、「非人情」が漱石の独自の哲学的主張だと解釈し、漱石が描こうとする「桃源」が陶淵明の『桃花源記』に描かれた世界ではない、と反対の意見を示している。「非人情の天地」について、今西順吉と出原隆俊は次のように解釈している。

「天地」はこれまで「乾坤」と表されていたものである。「非人情」は人情・不人情を超越したもの。漢籍に用例が皆無というのではないが、殆ど漱石独自の用語と言つてよい。『文学論』の第二編第三章に道徳的分子の入り込まない情緒として「非人情」を取り上げ、「東洋の文学には此趣味深きが如く、吾が国俳文学にありて殊に然りとす」という。その意味でも、意識論に基礎をおく漱石の「非人情」説は独自の哲学的主張である²⁰⁾。

また、「桃源」については、下記の通り解釈している。

陶淵明の『桃花源記』に、一漁夫が小舟で川を遡って行くと、いつしか桃花の咲く夢のような別世界（桃源境）に迷い込んでいたという話による。ただし漱石はこの意味における桃源境としての理想郷を『草枕』で描こうとしたのでない²¹⁾。

前田は、画工らが「那古井温泉から鉄道の駅に出る舟旅」という設定をめぐって、次のような推測を行った。

オフィーリアのうつろな表情や開かれた両手の不気味さからあらかじめ視線を外

らすようにしていた画工の「余」は、この鏡が池の場面ではミレーのオフィーリア像の深層にわだかまるもっとも暗い部分を呼び出してしまった。藻草や深山椿が織りなすアラベスク模様とひとつにとけあつた死美人のイメージある。それがユリやスイレンなどの植物に変生した宿命の女を好んでとりあげたアール・ヌーヴォーの図像学に通じていることはいうまでもないが、本来は画工が忌避し、排除しなければならなかつた無意識の領域のうとましさ、おぞましさに触れてしまったゆえに、那美さんをモデルにした画像には、浄化の兆しが期待されなければならない。その意味で那美さんの顔に「憐れ」の表情が掠めすぎる一瞬を点出することで締めくくられる河下りの最終章は、この鏡が池の章と相呼応している。

有明海に面しているはずの那古井の里から出征する久一青年を見送る一行を乗せた船が川を下つて行く不合理については、はやいところでは森田草平が直接漱石にむかって疑問をぶつけているし、最近では佐々木充の論考（「『草枕』—根源の記憶への旅」・有精堂『一冊の講座 夏目漱石』）もある。しかし、そういた矛盾をあえて犯してまでも、漱石にはこの川下りの場面を書きくわえなければならない内的要請があつた。あるいは『草枕』のテクストに内在する論理があつた。『桃花源記』の武陵の漁人は、「芳草鮮美」、「落葉繽紛」の溪流を舟でさかのぼり、山中の洞窟の向う側に異界としての桃源郷を発見する。ところが、『草枕』のテクストでは、『桃花源記』の行程が逆に辿りかえされ、船旅の終わるところ下りの場面を最後につけくわえることで、死の翳りを浄化しなければならなかつた。那美さんの「憐れ」を引きだすためには、的確と光る桃の花や田園のあいだをゆるやかに流れる春の水、つまりは桃源郷のトポスにふさわしいイメージが欠かせなかつたのである²²⁾。

当時那古井の里から満州への実際のルートはともかく、前田は、那美の「憐れ」を引きだすために、久一を船で送る場面を『桃花源記』の行程に収斂させるような設定にしたのであると考えている。その理由は、画工が非人情な表情の中にミレーの描いたオフィーリアのような面影を取り入れようとした試みがあつたためである。しかし、後に画工はこの案を捨てる。それは、

どんな顔をかいたら成功するだらう。ミレーのオフェリヤは成功かも知れないが、彼の精神は余と同じ所に存するか疑はしい。ミレーはミレー、余は余であるから、余は余の興味を以て、一つ風流な土左衛門をかいて見たい。然し思ふ様な顔はさう容易く心に浮んで来さうもない。（『草枕』「七」）

と書かれているように、画工は、自らが求めるものはミレーがオフィーリアに込めた創作意図と相違があることに気づいたためである。前田は、画工が表情の構想に「死美人のイ

メージ」、つまり、オフィーリアのイメージがわだかまっていると述べ、「那美さんをモデルにした画像には、浄化の兆しが期待されなければならない」と主張する。そのために、『桃花源記』の行程を加えたと解釈する。

前田が指摘したごとく、久一を船で送る場面を『桃花源記』の行程に収斂させることは、那美の「憐れ」を引きだすためである。しかし、『桃花源記』のような行程を『草枕』に加えることは、前田の言うような「死の翳り」を浄化する意味は含まれないと筆者は考える。これは、画工の「非人情の旅」に必要とされるゴール、つまり、「非人情の天地」を象徴する部分なのである。さらに、画工が画の画材にしようとした表情の中には、那美とオフィーリアの表情だけではなく、茶店の婆さんの表情もあったためである。

二三年前宝生の舞台で高砂を見た事がある。その時これはうつくしい活人画だと思った。籌を担いだ爺さんが橋懸りを五六歩来て、そろりと後向になつて、婆さんと向ひ合ふ。その向ひ合ふた姿勢が今でも眼につく。余の席からは婆さんの顔が殆んど真むきに見えたから、あゝうつくしいと思った時に、其表情はぴしやりと心のカメラへ焼き付いてしまつた。茶店の婆さんの顔は此写真に血を通はした程似て居る。

中略

余は懐から写生帖を取り出して、婆さんの横顔を写しながら、話をしかける。

中略

余は天狗岩よりは、腰をのして、手を翳して、遠く向ふを指してゐる、袖無し姿の婆さんを、春の山路の景物として恰好なものだと考へた。余が写生帖を取り上げて、今暫くといふ途端に、婆さんの姿勢は崩れた。（『草枕』「二」）

旅を始めたばかりの時に、画工は気に入った婆さんの表情を描こうとしたが、その表情があつという間に消えたため、成功せずに終わる。そして、旅を続けながら新たな画材を求める。そのうちに、画工は那美の顔から期待する表情を求めようとし始めたのである。

憐れは神の知らぬ情で、しかも神に尤も近き人間の情である。御那美さんの表情のうちには此憐れの念が少しもあらはれて居らぬ。そこが物足らぬのである。ある咄嗟の衝動で、此情があの女の眉宇にひらめいた瞬時に、わが画は成就するであらう。然し——何時それが見られるか解らない。（『草枕』「一〇」）

ここで、画工はすでに画にしようとする表情を「憐れ」に決めようと考えたのである。ただし、画工は、那美の憐れの感情をひき起こす「ある咄嗟の衝動」が現われるまで待たなければならない。この衝動が到る時期は、すなわち、画工の「非人情の天地に逍遙したいからの願」によって成り立った「非人情の旅」のゴールでもある。つまり、『草枕』にお

ける『桃花源記』のような行程は「非人情の旅」そのものを意味し、「非人情」の空間を構成する重要な舞台でもある。

おわりに

「俳句的小説」として創作された『草枕』は、作家によって決められた読み方に従わないと成立しない点において、成功例と言い難い。しかし、急速な西洋化を進める明治文壇において、西洋化を対抗する意味で行われる小説創作方法の改革は、言うまでもなく重要な意義を持っている。そして、いかにすれば読者に新たな体験を与えるかという問題追求において、「俳句的小説」という創作法は成功した試みともいえよう。

「俳句的小説」という構造を基にした『草枕』では、陶淵明の『桃花源記』の行程を加えている。「俳句的小説」は詩的機能を生かした小説として、その模索のプロセスにおいて、いかに漢文や漢詩的構造を生かすかを問題視している。『草枕』では、ほかにも漢詩的な空間構造が確認できる。紙面の制限により、それに対する分析を割愛させていただくことにする。

注

- 1) 『明治文学全集』60巻、筑摩書房、1977年3月、3頁。
- 2) 大野晋「国語改革の歴史（戦前）」、『日本語の世界』16巻、中央公論社、1983年、19頁を参考している。
- 3) 同前。10頁。
- 4) 森鷗外著『鷗外全集』第19巻、岩波書店、1973年、67頁。
- 5) 同前。
- 6) 同前。
- 7) 同前。
- 8) 『国文学解釈と教材の研究』第18巻第10号8月号、学燈社、1973年、113-114頁。
- 9) 森鷗外『鷗外全集』38巻、岩波書店、1975年、140頁。
- 10) 同前。
- 11) 正岡子規『子規全集』5巻、講談社、1976年、24頁。
- 12) 『国文学 解釈と教材の研究』31巻12号、学燈社、1986年10月、37頁。
- 13) 正岡子規『子規全集』4巻、講談社、1975年、590頁。
- 14) 「詩の一句又は二句位が俳句の一首に相當すること常なり。それも詩に在りては前後の聯絡ある句なるを單獨の句として俳句には譯するなり。故に俳句に譯せんがために詩句を取らば其詩句は單獨に離しても猶完全なる意味を有つ者ならざるべからず。」正岡子規著『子規全集』4巻、1975年、591頁。
- 15) 『文学』第44巻第1号、岩波書店、1976年1月、166頁。

- 16) 「断面的文学」の概念については、漱石の『文学論』の「第三編 文学的内容の特質」の「第一章 文学的 F と科学的 F との比較一汎」に見える。「吾が邦の和歌、俳句若(もし)くは漢詩の大部分の如きは皆此断面的文学に外ならず」という断面的文学の特質は、英文学と漢文学、ないし国文学に通ずるところに現れる。「断面的文学」とは、つまり事物の発展を含む出来事や自然現象の局部、及び、長続きしないながら「快味」を感じさせる一時的な現象のみとらえて文芸化した作品と考えられる。そのうえ、「断面的文学」は二種類に分ける。一つは「主観的断面」で、これは事物の発展を表わす出来事や自然現象の局部を描くときに、感情を中心として表現する。もう一つは「客観的断面」である。「主観的断面」に対して、「客観的断面」は「快味」を感じさせる一時的な現象を捉えて、簡単で飾りけのない描写を以て表現する作品である。
- 17) 加藤禎行「『汽車論』の隠喻—夏目漱石『草枕』をめぐって—」『日本近代文学』62集、2000年5月、37頁。
- 18) 『草枕』における交通機関の描写は物語の構成に重要な役割を果たしている。その種類及び使用回数は表1にまとめている。表1を作成することに当たって、1994年岩波書店より出版した『漱石全集』第3巻をテキストにしている。

表1

(一)	「船」の使用例	7回
(二)	「舟」の使用例	10回
(三)	「汽車」の使用例	12回
(四)	「停車場」の使用例	4回

- 19) 前田愛「世紀末と桃源郷 『草枕』をめぐって」『理想』3月号、1985年3月、205頁。
- 20) 『漱石全集』3巻、466頁。
- 21) 『漱石全集』3巻、466-467頁。
- 22) 前田愛「世紀末と桃源郷 『草枕』をめぐって」『理想』3月号、1985年3月、213頁。

参考文献

- 森鷗外（1973）、『鷗外全集』岩波書店。
- 正岡子規（1976）『子規全集』5巻、講談社。
- 井上達三（1977）『明治文学全集』、筑摩書房。
- 夏目漱石（1994）、『漱石全集』岩波書店。
- 小堀桂一郎（1973）、「鷗外と西洋—翻訳の問題—近代小説の様式をめぐって」『国文学解釈と教材の研究』18巻（第10号8月号）、113-114頁。
- 竹内実（1976）、「俳句と中国の詩句」『文学』44巻（第1号）、166頁。
- 前田愛（1985）、「世紀末と桃源郷 『草枕』をめぐって」『理想』（3月号）、205頁。

三好行雄 (1986)、「『俳句』の近代—シノプシス風に—」『国文学 解釈と教材の研究』31巻 (12号)、37頁。

加藤禎行 (2000)、「『汽車論』の隱喻—夏目漱石『草枕』をめぐって—」『日本近代文学』(62集)、37頁。

大野晋 (1983) 「国語改革の歴史 (戦前)」(『日本語の世界』16巻、中央公論社)、19頁。

Natsume Soseki's "Haiku-style Novels" and Chinese Literature

CUI, Xuemei

Abstract

The language used in Natsume Soseki's novels appeals his readership from all time by his distinctive, strategic juxtaposing Chinese poetry and the parallelism between spoken and written language in a literary attempt to represent a westernized life style, fantasy worlds and hidden sides of the protagonist. This tentative juxtaposition of both Chinese and English poetic elements into fiction prose writing bespeaks an aesthetic intent unique to him own, which Natsume Soseki himself terms as a haiku-like, plotless construct. This very idea was first put into practice in one of his fictions *The Three Cornered World*. With that, the present article is to examine the bond between Chinese poetry and haiku-like novels, and on that basis to pinpoint the haiku elements that reside in the novel of *The Three Cornered World*.

Keywords : Natsume Soseki; haiku-like novels; Chinese poetry; *The Three Cornered World* ; Chinese Literature

元教師の平和教育

市川 章子（一橋大学研究員）

要旨

本稿では、当事者意識を育む平和教育の必要性を感じている教師経験者1名を対象に、教師をめざすまで及び教師生活での経験を通して「どのような経験が教師の教育に対する認識に影響を与えるのか」「教育の場でどのような当事者に対する認識がみられるのか」を複線径路等至性アプローチ(TEA)を用いて考察する。結果から、協力者の取り組みは、子どもたちを中心に「ネーションを横断する物語や疑問に自らをさらした」。当事者意識を育む平和教育の必要性を認識し教材作成する行為は、戦争の「非体験者」だからこそ可能になる様々な「戦争」についての語り方の実践例である。日本語指導が必要な子どもたちが増加する昨今において、本稿でとりあげたTの取り組みは、平和教育という枠を超えて、多言語多文化の共生の可能性を拓げるものである。

キーワード： 教師、平和教育、当事者意識、複線径路等至性アプローチ (TEA)

はじめに

日本語指導が必要な児童生徒¹⁾たちが、日本の学校で歴史を学ぶ際に戸惑うことがあるという話を聞くことがある。また、保護者からは、日本の社会科教科書の戦争の記述について、信頼が得られないことが理由で、帰国を選択するという話も聞く。本稿では、学校教育の場において、歴史の共有がどのようになされているのかを、教師経験者に対する聞き取りをもとに検討していく。

I. どのようにして当事者意識を育む平和教育の必要性を認識するのか

文部科学省（2019）の調査によると、日本語指導が必要な児童生徒の数は、約5万人となり、2016年の調査より16.3%増加した。うち、日本語指導が必要な外国籍の児童生徒数は、約4万人で前回調査より18.7%増加した。日本語指導が必要な日本国籍の児童生徒数は、約1万人で前回調査より7.9%増加した。日本語指導が必要な外国籍の児童生徒の母語別在籍状況は、ポルトガル語が最も多く約1万人、次いで中国語9,712人、フィリピン語7,919人、スペイン語3,788人、ベトナム語1,845人、英語1,106人、韓国・朝鮮語595人にのぼっている。こうした状況下では、様々な背景を持つ子どもたちに対して、相手の

文化や言語、歴史的背景を含めた当事者意識をもつことが必要になる。

現代日本では、地方自治体において、外国人施策が進められている。特に、外国人施策に積極的に取り組んでいる自治体は、大きく三つに分けられる。第一に、1970年代に在日コリアンを対象とする施策（主に人権施策）を始めた自治体と1990年代にニューカマーを対象とする施策（主に国際化施策）を始めた自治体である。代表例としては、大阪市（人権型）、浜松市（国際型）、川崎市（統合型）があり、これらはいずれも人口規模の大きな都市で、外国人の権利保障や生活支援に取り組み、その後、外国人の地域社会への参加の促進、日本住民への働きかけ、多文化共生をめざす地域づくりへと施策の幅が拡大し体系化された。特に、大阪市は、在日韓国・朝鮮人の人権保障に取り組んできた（山脇, 2004）。

「当事者」という言葉は「社会的弱者」という意味で使われることが一般的であるという指摘がある。例えば、交通事故に巻き込まれた人たちや災害や犯罪などの被害者として使われることも多い。「社会的弱者」と呼ばれる人々は、自らが弱い存在ではなくて、社会的に弱い存在にされている（ロニー, 2004）。本稿での当事者意識は、相手の立場に立ちものを見たり考えることをさす。

現在、世界では様々な平和教育が実践されている。「平和」と「教育」の二つの概念によって、「平和教育」が構成されていると考えると、村上は、5つの平和教育のタイプに分類できると述べる。

一つ目の「平和についての教育」(education about peace)では、戦争や紛争や構造的暴力などの平和問題を題材（教材）として、取り上げ、平和問題に関する知識を提供しようとする。二つ目の「平和のための教育」(education for peace)では、平和をめざしての教育であり、平和を志向する性格や態度や技能（スキル）を学習者に育成することを目的とする。三つ目の「平和を大切にする教育」(education in peace)または「平和を通じての教育」(education through peace)では、教育方法そのものが平和的であるべきとされる。四つ目の「教育における平和」(peace in or through education)では、教育行政、学校、教室などの各レベルの組織において、紛争・暴力・葛藤などが少ない平和的な状況（場）を形成しようとする。五つ目の「積極的平和としての教育」(education as a positive peace)では、単に戦争がない「消極的平和」の成立だけでは不充分とみなし、貧困・差別・不正義がない「積極的平和」な社会においてのみ、一人ひとりの教育権（学習権）が充分に保障されると考える。ここには、教育界における男女差別や障害者差別、マイノリティ差別をなくすことがめざされる。さらに、日本国内のみを問題にするのではなく、開発途上国の貧困問題を改善して子ども達の就学率の向上や教育権を人々に保障する社会状況を創ることに参加することも期待される（村上, 2004: 279-280）。

日本の平和教育は、第二次大戦の戦争体験の継承を中心に行われてきた。学校教師のほぼ全員が戦争体験を持っておらず、子どもたちにとって戦争体験は過去の歴史的事項になりつつある。日本の学校では、平和教育は教科ではないため、平和問題に対する子どもた

ちの自主的判断を育てるものでなければならない。また、学校現場での平和教育実践に対して政治的規制が働くことがあるため、学校教師はあるべき平和の社会をイメージしながら、論理的な平和問題の扱い方を実践力として身につけることが大切である(村上, 2004)。本稿における平和教育とは、過去の戦争に関わる場所を子どもたちが実際に訪れ、その場所で何が起きたのか犠牲になったのはどのような人たちだったのかを考える教育をさす。

反戦平和をめざした平和教育の実践は、保守政権による再軍備・防衛力強化、愛国心向上をめざす政治状況の中で、教育現場で政治的対立を起こすことが多かった。米軍・日米安保条約²⁾・自衛隊基地や日本軍の戦争加害責任や日の丸・君が代などの政治的論争題を「平和」を教える題材として学校教育内で扱おうとすると、学校外部からの政治的規制や教職員間の葛藤が生じ、学校内が「平和的」でなくなるという意図と結果が異なる状況を生み出すこともある(村上, 2004)。

また、平和教育への規制の強まりを感じる例として「学校現場で、戦争を体験した方々が重い口を開いて話をされてきた「事実」に触れようすることは、すでにそれほど簡単なことではなくなっている」(北上田, 2016: 145)という変化も指摘されている。

このように日本では、平和教育が容易ではない事例も出てきているが、一つの方法として次の指摘がある。テッサ・モーリス＝スズキ氏が韓国の独立記念館を訪れた際の体験である。

「大学院生は、韓国人、日本人、在日コリアン、そして日本にいるオーストラリアの交換留学生たちだった。その一人一人が、自分自身の歴史教育の経験と大衆的なメディアから得た歴史の記憶とを、記念館の極めてナショナリスティックな歴史展示と比較し合ったのである。日本人学生は、自らが受けた歴史教育と展示との落差を語り、韓国人学生のなかには、この記念館のナショナリスティックな展示に批判的な見方をしようとする学生もいた。さらに「朝鮮籍」の在日コリアンは、朝鮮学校（民族学校）で学んだ歴史の見方についてコメントを述べてくれた。一緒に議論することで、見学に参加した私たちは、まさに議論したという経験によって自らの過去についての見方がわずかに変化したことに気付いた」(テッサ・モーリス＝スズキ, 2013: 100-101)とあるように、一緒に議論することで、自らの過去についての見方が変化することも明らかになっている。

かつては、戦争を体験した当事者がいたが、最近では、戦争を体験した当事者が減少している。このことについて、前述した北上田（2016）は、「戦争体験者に比べて若い人の説明は重みがないね」「非体験者であるあなたに何ができるの？」といった言葉は何度も投げかけられてきた」と述べる。戦後75年が過ぎて、戦争を体験しその実相を語ることができる当事者が減少している今の状況で、戦争を体験しない人々が当事者意識を持つことが、戦争体験を継承することを可能にすると思われる。

日本の子どもたちが戦争について学ぶ機会の最たるものは学校教育である。そこで教師がどのような教育を行うかによって、子どもたちが当事者意識を持つかは異なるだろう。

では、教師は具体的に「当事者意識を育む平和教育の必要性」をどのように認識するのだろうか。そして、教育の場で当事者意識を育む平和教育の必要性を感じるのにはどのような経験がきっかけとなり、その経験が教師にどのような認識をもたらすのだろうか。そこで、本稿では、「当事者意識を育む平和教育の必要性を感じている」教師経験者1名を対象に、教師をめざすまで及び教師生活での経験を通して「どのような経験が教師の教育に対する認識に影響を与えるのか」、そして「教育の場でどのような当事者意識に対する認識がみられるのか」を、複線径路等至性アプローチ（Trajectory Equifinality Approach:以下TEA）（安田・サトウ, 2017）を用いて考察する。

II. 方法—TEA を用いて

教師の経験を詳細に把握する必要がある。そこで、教師が「当事者意識を育む平和教育の必要性を認識し、教材作成する」に至った径路を分析するため、対象者の経験を抽出し、それらに働く社会的な諸力を理解しつつ、非可逆的時間とともに生きる人間の経験を描くことができるTEAを用いて質的に分析する。

A 調査協力者の概要

協力者は、大学で教育を専攻した後、小学校教員として児童に教える経験を通して当事者意識を育む平和教育の必要性を感じている元小学校教師1名（協力者Tさん：以下T）である。インタビューは、2019年冬から2021年春にかけて実施した。対面とメールで1回ずつ実施した後に半年ほど時間をあけて対面での確認を行い、分析結果に加筆修正を加えた。

表1は、研究協力者Tの概要である。

表1 研究協力者Tの概要

元小学校教師の女性で、国籍は日本である。朝鮮戦争がおきた1950年代に日本人の両親の元に日本で生まれた。幼少期、実家の空いている部屋を朝鮮人の親子が借りて住んでいた。朝鮮人の親は家の近くで働いていた。大学では教育を専攻した。日本の学校で教える戦争体験に疑問をもち、教員時代から日本国内の戦争にかかわる場所を訪ね、資料や証言を収集してきた。地域や修学旅行先の人たちとやり取りをする中で、戦争遺跡がなくなっていくことや、現地に立ち、子どもたちが自分の目でみて理解できる教材が必要だと考えるようになる。朝鮮人や中国人の戦争体験も含んだ戦争記憶の伝承の活動を実施している。教師を退職後、平和教育に関わる教材を自費出版し、小学校、中学校、高校に配布した。

研究デザイン

本研究では、生を享けた個人がその環境のなかで生命を維持し人生をまとうするため記号を取り入れつつ生きていくプロセスを描く心理学的試みである複線径路等至性アプローチ (Trajectory Equifinality Approach:以下 TEA) を分析手法として用いる。

データ収集は、主に対面での半構造化インタビューを実施し、内容の確認はメールで行った。インタビュー内容は、幼少期の経験や戦争にまつわる記憶のエピソード、教師時代印象に残ったことなどである。

分析方法

語りをもとにメモをとり、Tの人生のストーリーを再構成した。TEAは、分析概念が複数存在する。本研究では、研究課題および研究協力者の属性・人数から等至点 (Equifinality Point:EFP)、分岐点 (Bifurcation Point:BFP)、社会的助勢 (Social Guidance:SG)、社会的方向づけ (Social Direction:SD)、統合された個人的志向性 (Synthesized Personal Orientation :SPO) を用いた。

TEA の概念説明

人が非可逆的時間を生きるなかで等しく辿りつくポイントがありこれを等至点と呼ぶ (神崎・サトウ, 2015)。等至点の前には、いくつかの分かれ道が存在しこれが分岐点である (サトウ, 2015)。等至点への歩みを後押しする力が社会的助勢 (SG) であり、等至点に向かうのを阻害する力が社会的方向づけ (SD) である (安田, 2015)。統合された個人的志向性 (SPO) は、個人の内的志向性である (弦間, 2012)。

倫理的配慮

本研究は、倫理的配慮に基づき実施され、結果に影響を与えない範囲でプライバシー保護を行っている。

III. 結果

図1はTのTEM図である。図の作成にあたり、廣瀬 (2012) と上川 (2017) の作成手順および記述を参考にした。表2は、図1を分析するために整理した概念表である。図を描く際に、理論的に仮定される径路を点線で示した。

表2 TEA の概念表

概念	本研究の位置づけ
等至点 : EFP (Equifinality Point)	当事者意識を育む平和教育の必要性を認識し教材作成する

両極化した等至点：P-EFP (Polarized Equifinality Point)	これまでの平和教育に疑問を持たずに生きていく
分岐点：BFP (Bifurcation Point)	日本語を話せない朝鮮人親たちとの出会い
社会的方向づけ：SD (Social Direction)	被害者としての戦争体験しか知らない教員たち
社会的助勢：SG (Social Guidance)	①父の戦争体験 ②朝鮮戦争の影響を肌で感じる ③教師に反論できる高校・大学時代 ④勉強会に参加 ⑤サークル活動での経験 ⑥マイノリティが権力に抑圧される社会に違和感 ⑦戦争に関わる証言・資料収集
統合された個人的志向性：SPO (Synthesized Personal Orientation)	当事者意識を育む教育が次世代に必要

A 当事者意識を育む平和教育に対する協力者Tの認識—TEM図からの分析結果

協力者TがEFP「当事者意識を育む平和教育の必要性を認識し教材作成する」に至るまでの経験をTEM図に表し、その全体像を4つの期間に区分した。具体的には、以下の通りである。

- 第Ⅰ期 朝鮮人の親子に出会いマイノリティに関心をもつ
- 第Ⅱ期 マイノリティの生活支援
- 第Ⅲ期 教員として経験を積み批判的に自らの経験を振り返る
- 第Ⅳ期 当事者意識を育む平和教育の教材作成

それぞれの区分ごとに、表2で示した分析結果を中心に、協力者Tの語りを記述する。図1は、協力者Tの語りに基づいて、当事者意識を育む平和教育に関する協力者Tの経験をTEM図に示したものである。第Ⅰ期～Ⅱ期は、マイノリティとの経験が語りの中心であり、第Ⅲ期は、SDとSGの影響をうけながらSPOが示され、第Ⅳ期のEFPに向かっていることから、協力者T自身が当事者意識を育む平和教育の必要性を認識している期間と考えられる。

以下では、TEMの概念により分類された経験を< >で示す。

第Ⅰ期 朝鮮人の親子に出会いマイノリティに関心をもつ

Tは、<朝鮮戦争がおこった1950年代に生まれる>。満州国での<父の戦争体験>を聞いて育つ。住んでいた地域は、朝鮮戦争による好景気の影響を受けており、<朝鮮戦争の影響を肌で感じる>。近くに朝鮮人が働く職場があり、実家では<朝鮮人の親子に部屋を貸す>ことがあった。この頃から、<マイノリティが権力に抑圧されることに違和感>を感じていた。

第Ⅱ期 マイノリティの生活支援

<教師に反論できる高校・大学時代>を過ごし、<大学で戦後の日本の教育を学び影響を受ける>。大学では、いろいろなことに挑戦した。<勉強会に参加>し、教育について議論する日々を送った。<サークル活動での経験>を積み、台風で家が流された人のために、小学校の先生と解決のために奔走する。<子どものためのサークル活動で様々な立場の人と会う>。「被差別部落出身者もおられたけれど、小学校の先生と相談に行きました」と語った。<朝鮮人の子どもや保護者の支援活動に参加>することもあった。<日本語を話せない朝鮮人親たちとの出会い>があり、<マイノリティの生活支援>に力をいれて大学生活を送った。その後、小学校の<教員になる>。大学時代から継続して<マイノリティが権力に抑圧される社会に違和感>を持っていた。

第Ⅲ期 教員として経験を積み批判的に自らの経験を振り返る

教員になると、<日本に住む朝鮮人や中国人が戦争でどんな目にあったのか取り上げにくい日本の教育に直面>する。この頃から、<当事者意識を育む教育が次世代に必要>だという内的志向が表れた。<被害者としての戦争体験しか知らない教員たち>に出会い、子どもたちの教育をどうしようか日々考えた。<戦争被害者として教える日本の教育に違和感を覚える>日々を過ごす。教員時代、修学旅行先は京都か伊勢神宮だった。「このままでは子どもたちのためにならないのではないか」と考え、<修学旅行先について疑問を持ち行動をおこす>。修学旅行先を広島に変更し、戦争体験について多面的に教えるようになった。そして、<犠牲になった隣人たちを視野に入れて空襲・原爆投下を教える>教育を続けた。<朝鮮人中国人に向き合った平和教育が必要>と実感し、授業や修学旅行の傍ら、<戦争に関わる証言・資料収集>を行った。広島に子どもたちを引率した際は、日本人被爆者の話だけでなく、犠牲となった朝鮮人の話もして、子どもたちと対話を重ねた。

「歩いて探すことで分かってきたことがあるんです。戦争に協力した暮らし、戦争末期の暮らし、オーストラリア兵らが川崎重工に向けて歩いた新開地、韓国併合や朝鮮中国とのかかわり、戦後すぐに朝鮮民族の言葉を教える学校を作ったが、GHQに中止を命じられた阪神教育闘争も調べました」資料館で話を聞いたり、学校の100年史などを活用した。

丸山に連合国軍捕虜の収容所があったことや空襲にあったといわれる朝鮮人労働者の骨

がまつられる供養塔、神戸電鉄の工事をした朝鮮人労働者を記念する像や朝鮮人集落跡、中国人空襲犠牲者の慰靈碑がある中華義荘なども歩いて調べた。

第IV期 当事者意識を育む平和教育の教材作成

Tは、戦後生まれであるが、父親から戦争のことをよく聞かされ、「子どもたちにも戦争のひどさを語り、真実を知り考え、戦争を止められる人になってほしい」という思いを抱いて教員を続けていた。

定年退職後、＜当事者意識を育む平和教育の必要性を認識し教材作成する＞に本腰をいれ、平和教育に関する教材を自費出版した。

平和教育の教材には、かつてのアメリカ軍の無線基地がいまは観光地となっている場所や学童集団疎開の記録、朝鮮人労働者の像、中国人犠牲者の慰靈の位牌などが掲載されている。また、Tが父親から聞かされたエピソードすなわち1930年代の中国東北部「満州」においては、朝鮮人や中国人が軍隊によって残酷な目にあったり、戦争に召集された立場では、本当のことは知らされず、あるいは言えない状況であったことも載せてあり小学生から高校生までが活用できる内容である。

その根底にあるのは、「子どもたちや若い人に戦争の実相を伝えたい」という思いと、＜当事者意識を育む教育が次世代に必要＞という教員時代からの認識だった。

B 当事者意識を育む平和教育に対する認識に影響を与えたSDおよびSG

ここでは、「どのような経験が教師の教育に対する認識に影響を与えるのか」を考察するにあたり、協力者Tの認識に影響を与えた社会的要因と心理的要因を明らかにするために、TEM図から示されたSDを表3に、SGを表4にまとめた。

表3 TEM図から示されたSD

1. 同僚教員との関係	被害者としての戦争体験しか知らない教員たち（第III期）
-------------	------------------------------

表4 TEM図から示されたSG

1. 家族関係	父の戦争体験（第I期）
2. 研修・教育	勉強会に参加（第II期） サークル活動での経験（第II期）
3. 教師との交流	教師に反論できる高校・大学時代（第II期）
4. 社会環境	朝鮮戦争の影響を肌で感じる（第I期） マイノリティが権力に抑圧される社会に違和感（第II期、第III期、第IV期）
5. 教材準備	戦争に関わる証言・資料収集（第II期、第III期、第IV期）

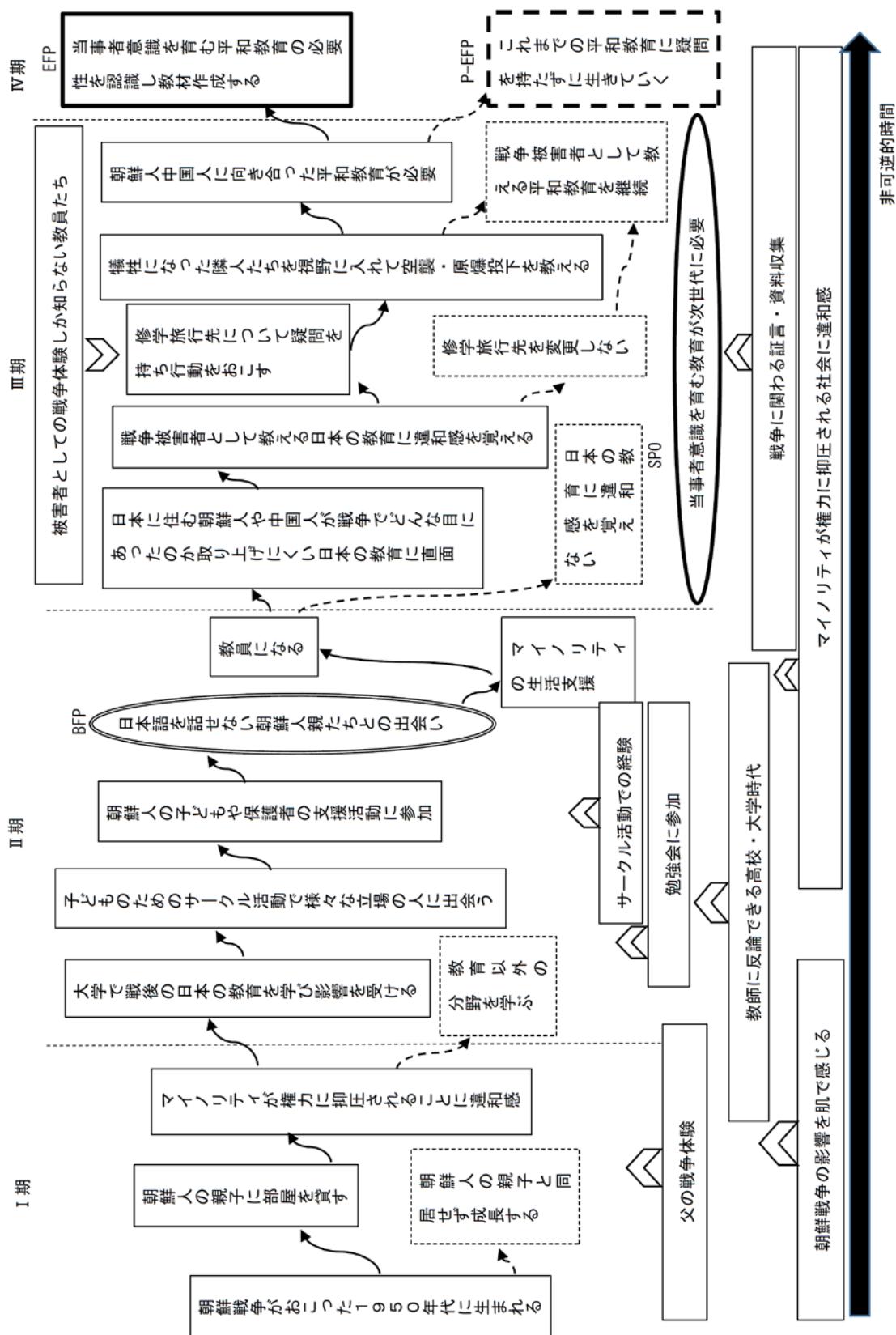


図1 TのTEM図

まず、SD は表 3 のように、「被害者としての戦争体験しか知らない教員たち」が示された。第 I 期から第 III 期までまとめると、教員になり様々な背景をもつ同僚との交流から被害者としての戦争体験をもつ教員の存在に気づいたことが SP0 の＜当事者意識を育む教育が次世代に必要＞という志向を表す要因になったことがわかった。

次に、SG は表 4 のように「家族関係」「研修・教育」「教師との交流」「社会環境」「教材準備」の 5 種が明らかになった。第 I 期～IV 期までまとめると、家族関係や研修・教育、教師との交流、社会環境、教材準備等の具体的な経験が主体的な行動につながり、SP0＜当事者意識を育む教育が次世代に必要＞という志向性を表した。SP0 や EFP へ影響を与えたと考えられる。

IV. 考察—教育の場でどのような当事者意識に対する認識がみられるのか

本稿では、TEM により協力者 1 名が EFP＜当事者意識を育む平和教育の必要性を認識し教材作成する＞に至る径路を分析した。そして、当事者意識を育む平和教育に対する認識に影響を与えた SD および SG を検討した。

「教育の場でどのような当事者意識に対する認識がみられるのか」に対しては、協力者が大学で、研修・教育や教師との交流、社会環境等の SG を受けながらサークル活動や朝鮮人の子どもも、親たちとの出会い、社会的マイノリティとの出会いを通して、多様な立場に置かれている人々の当事者意識を学び、育んでいたと思われる。

他方、教員になってからは学校で子どもたちとの対話や、地域社会および修学旅行先で人々や遺跡を通して当事者意識を育む教育が必要であることを認識していったと考えられる。こうした結果から考えると、学校で子どもたちに対して、当事者意識を育む教育を行うためには、教師自らが学生時代に大学の外の社会に目を向けて、経験を積むことが大切であるといえるだろう。

V. まとめ

協力者 1 名を対象に TEA を用いて分析し、協力者 T の EFP＜当事者意識を育む平和教育の必要性を認識し教材作成する＞に至るまでの経験とその経験に影響を与えた社会的・心理的要因を記述した。

協力者 T の平和教育の取り組みは、子どもたちを中心に「ネーションを横断する物語や疑問に自らをさらした」（テッサ・モーリス＝スズキ, 2013: 101）と言えるだろう。また、「当事者意識を育む平和教育の必要性を認識し教材作成する」行為は、戦争の「非体験者」だからこそ可能になる様々な「戦争」についての語り方（北上田, 2016: 149）の実践例であろう。日本語指導が必要な子どもたちが増加する昨今において、本稿で取り上げた T の当事者意識を育む平和教育をめぐる取り組みは、平和教育という枠を超えて、多言語多文化の共生の可能性を拓げるものである。

おわりに

本稿は、教師経験者 1 名を取り上げたもので、現在の日本の教師の「平和教育」について、一般化することは困難である。今後は、学校で平和教育を行った経験のある他の教師にも聞き取りをおこない、検討を重ねる必要がある。崔文衡^{チエ・ムンヒョン}元韓国歴史学会会長は、「歴史の共有について、「近頃の「韓流ブーム」もあるが、両国若手研究者たちの日露戦争共同研究を通じての歴史共有基盤の準備が、歴史学徒としての私の一つの希望である」(2005 年 4 月) と述べている(崔, 2015)。様々な角度からの歴史の共有が期待されている。

当事者意識を育む教育は、日本における多文化共生社会の実現に向けても、優先されるべき重要な取り組みの一つである。

注

- 1)文部科学省総合教育政策局国際教育課の平成 26 年 1 月の発表によると、「日本語指導の対象となる児童生徒」について、「小学校、中学校、中等教育学校の前期課程、特別支援学校の小学部及び中学部に在籍する日本語指導が必要な児童生徒」と定義している。本稿では、高等学校に在籍する生徒も含めて日本語指導が必要な児童生徒という言葉を用いる。
- 2)日米安全保障条約は、1951 年に調印され 1952 年 4 月に講和条約・日米行政協定とともに発効された。1960 年 1 月に新日米安全保障条約が日米地位協定とともに調印された。日本国とアメリカ合衆国との間の相互協力及び安全保障条約である(山本, 2020)。

参考文献

- 上川多恵子 (2017)、「第 1 節 中国人日本語学習者の敬語使用」(安田裕子・サトウタツヤ (編)『TEM でひろがる社会実装 : ライフの充実を支援する』誠信書房)、26-48 頁。
- 神崎真実・サトウタツヤ (2015)、「1-3 開放システムと形態維持 形態維持と発生のプロセス」(安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ (編)『TEA 理論編 複線径路等至性アプローチの基礎を学ぶ』新曜社)、14-18 頁。
- 北上田源 (2016)、「2 「戦争体験者／非体験者」の二分法を超えた「当事者」として」(栗原彬 (編)『ひととの精神史 第 9 卷 震災前後 : 2000 年以降』岩波書店)、137-150 頁。
- 弦間亮 (2012)、「3-2 大学生がカウンセリングルームに行けない理由・行く契機」(安田裕子・サトウタツヤ (編)『TEM でわかる人生の径路 : 質的研究の新展開』誠信書房)、125-137 頁。
- サトウタツヤ (2015)、「1-1 複線径路等至性アプローチ (TEA) TEM、HSI、TLMG」(安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ (編)『TEA 理論編 複線径路等至性アプローチの基礎を学ぶ』新曜社)、4-8 頁。
- 崔文衡 (2015)、「まず歴史の共有を」(藤原書店編集部 (編)『「アジア」を考える』藤原書店)、174-175 頁。
- テッサ・モーリス=スズキ (2013)、『批判的想像力のために : グローバル化時代の日本』平凡社。
- 廣瀬眞理子 (2012)、「1-2 ひきこもり親の会が自助グループとして安定するまで」(安田裕子・サトウタツヤ (編)『TEM でわかる人生の径路 : 質的研究の新展開』誠信書房)、125-137 頁。

ヤ（編）『TEMでわかる人生の径路：質的研究の新展開』誠信書房）、71-87 頁。

村上登司文（2004）、「第 10 章 平和教育：平和を創る人を育てる」（藤原修・岡本三夫（編）『いま平和とは何か：平和学の理論と実践』法律文化社）、278-304 頁。

安田裕子（2015）、「2-2 分岐点と必須通過点 諸力（SD と SG）のせめぎあい」（安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ（編）『TEA 理論編 複線径路等至性アプローチの基礎を学ぶ』新曜社）、35-40 頁。

安田裕子・サトウタツヤ（編）（2017）、「TEMでひろがる社会実装：ライフの充実を支援する」誠信書房。

山本章子（2020）『日米地位協定』中央公論新社。

山脇啓造（2004）、「第 8 章 現代日本における地方自治体の外国人施策：人権・国際化・多文化共生」（内海愛子・山脇啓造（編）『歴史の壁を超えて：和解と共生の平和学』法律文化社）、219-248 頁。

ロニー・アレキサンダー（2004）、「第 1 章 グローバルな課題と平和学：「当事者」を中心に」（高柳彰夫・ロニー・アレキサンダー（編）『私たちの平和をつくる：環境・開発・人権・ジェンダー』法律文化社）、9-36 頁。

資料

文部科学省（2014）「日本語指導の対象となる児童生徒」（総合教育政策局国際教育課）
<https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/1341927.htm>（2021 年 6 月 22 日）

文部科学省（2019）「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査（平成 30 年度）」の結果について <https://www.mext.go.jp/content/20200110_mxt-kyousei01-1421569_00001_01.pdf>（2021 年 6 月 22 日）

文部科学省（2019）「7 日本語指導が必要な外国籍の児童生徒の母語別在籍状況」
<https://www.mext.go.jp/content/20200110_mxt-kyousei01-1421569_00001_02.pdf>（2021 年 6 月 22 日）

謝辞

本稿執筆に際し、ご協力いただいた T さんに心より御礼申し上げます。

付記

本稿は、2020 年 9 月 17 日に『文学と歴史学から見た 植民地支配と戦争体験』一橋大学大学院言語社会研究科韓国学研究センター・独立記念館韓国独立運動史研究所共同学術シンポジウムで発表した「元教師の平和教育」に加筆修正を加えたものである。一橋大学のイ・ヨンスク先生、李圭洙先生、貴重なコメントをくださった独立記念館韓国独立運動史研究所の先生方、2 名の査読者の先生に厚く御礼申し上げます。

This work was supported by the Core University Program for Korean Studies through the Ministry of Education of the Republic of Korea and Korean Studies Promotion Service of the Academy of Korean Studies (AKS-2016-OLU-2250001).

The Peace Education by a Former Teacher

ICHIKAWA, Akiko

Abstract

This research investigated a former teacher, who recognizes the peace education helping students have a sense of ownership as significant, using Trajectory Equifinality Approach/TEA. The aims of this study were to delineate “What kind of experience affects teachers’ recognitions towards education?” and “What kind of people are recognized in the field of education?” employing TEA. Results in this study show that the approach for peace education, which was conducted by the participant in this study, exposed oneself to stories and questions which are across the nation. In addition, it was also implied that the acts to recognize the importance of the peace education helping ones have a sense of ownership and to make the teaching materials were the examples of war-story telling that only non-war-experienced people could conduct. In the recent situations where these the number of children who need Japanese-language education increasing, the attempt of T that this paper reports broadens the possibilities of multilingual and multicultural beyond the range of peace education.

Keywords : Teacher, Peace education, sense of ownership, TEA

合気道における「競技化」の動向と現状 —国際統括組織「WSAF」設立にみる「グローバル化」の展望—

村下 慣一（立命館大学大学院生）

要旨

本稿は、「非競技性」を文化原理とする合気道において、富木謙治を流祖とする「競技派」が主張する「競技化論」の概要と、その国際的普及活動の現状を明らかにするものである。とくに本稿では、富木の競技化論と、近年設立された国際統括組織である Worldwide Sport Aikido Federation に着目し、競技合気道の「グローバル化」を描く。

さらに、本稿では、これらの現状分析について、社会学的な分析枠組みから「競技化」の意義と展望について、検討を進める。この際、手がかりとするのは、「エリアス学派」と山下高行の方法論的視角である。

本稿では、これらの検討を通して、「家元」と「国際統括組織」による二元的な支配体制が、競技合気道における「相克」として、つまり、文化原理をめぐる「闘争のアリーナ」として、現れていることを試論的に提示した。

キーワード： 合気道、競技化、WSAF、グローバル化、エリアス学派

はじめに

合気道開祖・植芝盛平の修行遍歴は、しばしば合気道の源流とされる「大東流合気柔術」のほか、柔術（起倒流など）、剣術（小野派一刀流など）、槍術（宝蔵院流）、講道館柔道など、多岐にわたる。それゆえ、植芝の技法・思想には、日本武道全般にみられる技法・思想的なエッセンスも多分に含まれている、といえる。実際、合気道の技法は、「柔能剛制」を基本とする柔道と近い性質を持っている。「自然体」・「崩し」・「柔」の理と呼ばれる技法・原理は、柔術系統全般にみられる技法・原理である。

この合気道の最大の特徴は、格技において特異な「非競技」という性質である。「争わない武道」や「愛の武道」という表現は、まさにこの性質に由来する。しかし、この合気道を競技化しようとする試みが、植芝盛平の高弟のひとりである富木謙治によって、模索され続けてきた。現在では、富木の指導拠点のひとつであり、当初中央道場として位置づけられた昭道館を中心とする昭道館合気道連盟（以下、昭道館と略す）と、富木の在籍した早稲田大学を中心とする日本合気道協会という、二つの流派が、富木の競技化理論を継承し、競技合気道の普及・発展を推し進めている。

本稿¹⁾では、とくに富木の競技化理論と前者の普及活動に関する現状を把握し、それを「グローバル」という準拠枠のなかに位置づけることで、合気道における「グローバリゼーション」の一端を明らかにしたい。それでは、以下に本稿の章構成を示す。

第一章では、合気道の「競技化」に関する先行研究として、合気道乱取競技法に関する研究を取り上げ、先行研究と本研究との異同を示す。

第二章では、合気道の競技化戦略の論拠を示すために、考案者である富木による「合気道競技化論」の概要を明らかにする。

第三章では、「エリアス学派」の方法論を手がかりとして、合気道が「競技化」されるという現象の「意味」を社会学的知見から明らかにする。

第四章では、競技合気道の現状分析として、近年国際統括組織として設立した「Worldwide Sport Aikido Federation（以下、WSAFと略す）」に着目し、競技合気道の向かいうるグローバル化の展望を検討する。

第五章では、前章の現状分析を踏まえて、競技合気道の「グローバリゼーション」は何を意味するのか、ということについて、とくに佐藤尚平（Sato; 2013）と山下高行（2002）を導きとして、検討する。

I. 合気道乱取競技法に関する研究の蓄積について

合気道乱取競技（通称、合気道競技）法とは、富木が考案し、確立した合気乱取法を指す。そのため、狭義の意味における「競技」と「競技」に至るまでの稽古プロセスの双方が含まれている。「競技」は、徒手乱取法と短刀乱取法の二種類に区分できる。前者は、柔道乱取法同様に、徒手対徒手による競技である。合気道競技では、当身技、関節技に限定されるため、間合いが「一足一刀の間合い」を前提とすること、また道着への組みつきや寝技、足掛けなどが禁止されているという点に柔道乱取競技との「差異」を確認できる。そして、短刀乱取法であるが、これは徒手対短刀による交代制の競技である。この格闘条件は、異種格闘技に通ずるものであり、日本武道における競技種目のなかで、特異である。このような競技形態を実践させる段階的な稽古プロセスは、大別すると、①基本技（合気道乱取基本技 17 本・徒手返し技 10 本・短刀返し技 10 本）、②短刀体捌き法、③掛かり稽古、引き立て稽古、④乱取稽古、という四つの要素に区分できる。

合気道競技法に関する先行研究は、①提唱者富木に関する研究、②合気道の技法分析や合気道競技のルールなどに関する研究の二つに大別できる。前者は、志々田文明（1981）や、工藤龍太（2016）が中心に取り組んできた研究であり、主に歴史研究である。後者は、昭道館の審判部長を務める大森竜一（2016）らを中心に、現場レベルにおいて取り組まれてきた。以下に、主要な研究事例として、志々田文明（2001）、佐藤忠之・川上泰雄・志々田文明（2006）、大森竜一（2016）、大森竜一・小森富士登（2017; 2018; 2019）を取りあげる。

志々田（2001）は、富木による戦後の競技化思想から、合気道競技の乱取競技試合が初めて開催された1962年までを検討し、富木の「競技化」という志向性が具現化されていく過程を明らかにした。志々田（2001）は、合気道競技史という「正史」を補強する側面を持ち合わせており、合気道競技史に関する本格的な学術研究として嚆矢となるという点に大きな意義がある。佐藤ほか（2006）は、合気道乱取技法の向上を目的に、合気道乱取競技のなかで浮技（手首・肘の両関節を同時にせめる関節技であり、いわゆる投技に分類される）系統に属する「隅落」と「引落」という二本のわざの「崩し」の理論と方法について、検討し、提言を試みた。佐藤ほか（2006）は、合気道競技における実践性を向上させることを目的に、考案者の富木自身が拠り所とした柔道原理を踏まえ、「浮技」における「運足」と「重心」の操作法を分析した。佐藤ほか（2006）の対象は、「浮技」に属する二本のわざに限定されているとはいえ、合気道競技に関する緻密な技法分析として、嚆矢となるものであり、その点に意義がある。

大森（2016）は、「合気道競技における審判部国際化の必要性と課題」という主題にある通り、合気道競技における国際化の現状分析を「審判技術」と「競技規則」という、合気道競技が直面する二つの大きな課題を明らかにした。この課題の明示は、大森（2016）の到達点であり、高く評価できる。この大きな課題には、「わざの先取制」という日本武道の競技化における課題が含まれている。大森・小森（2017）は、近接種目との比較を通して、この「わざの先取制」に関する今後の合気道競技の方向性を提言するものであった。また、大森・小森（2018）では、「短刀乱取競技」の稽古段階に位置づけられる「短刀体捌き競技」という、合気道乱取法に特徴的な競技法について、現状と課題を明らかにしている。さらに、大森・小森（2019）において、合気道の技法的特徴のひとつである「脱力法」を高度に発展させた「抜き」の技法に関する検証を進めた。

これらの先行研究では、合気道競技法の技能向上という目的が明確に現れており、社会学的な分析に踏み込むものではなかった。富木の志向した合気道競技法やそれを取り巻く合気道界の構造に関する社会学的考察は、拙稿（2020; 2021a; 2021b）が試みている。最後に、拙稿（2020; 2021b）の到達点を示す。

拙稿（2020; 2021b）は、いずれもノルベルト・エリアスを中心とする「エリアス学派」の方法論を手がかりに、合気道研究における重大な研究課題として、主流派と競技派の「相克」を描こうとした。殊に拙稿（2021b）では、「グローバル化」に直面する競技合気道が、世界的に普及するなかで、国際統括組織であるWSAFを設立し、オリンピック種目化を志向する動きに着目した。そのうえで、グローバル化に伴う全世界的な再編過程において、「モダンへの適応」のなかで世界システムへと組み込まれていく傾向性を指摘する（村下, 2021b: 74）。以下では、拙稿（2021b）にて模索された競技合気道の「グローバル化」について、さらなる検討を進めたい。

II. 合気道の競技化戦略：富木謙治「合気道競技化論」の概要

本章では、富木による「合気道競技化論」の概要と普及の状況、彼を流祖とする昭道館の発展について、確認する。そのために、まず富木の『武道論』から読み解いてみたい。

『武道論』は、富木の論考を5つの観点（①日本武道の性質、②日本武道の技術的・思想的考察、③古流柔術、講道館柔道における技法的分析、④合気道競技理論の技術的・体育学意義、⑤体育の必要性）から彼の弟子である志々田文明が整理した論考集である。志々田は、同著の「解題」において、富木武道論の特徴について5つの観点（①体験と熟慮に根差す総合的武道研究、②伝統と普遍の調和に立った教育理念、③「柔道原理」理論による武道解釈、④独創的創造性としての合気道競技、⑤境地としての「無心無構」と今後の課題）から説明する（志々田, 1991: 280-283）。

また、同著における富木武道論における強調点として、次の二点を引き出すことができる。第一に、富木が日本武道という種目群から柔道や合気道を分析しようとする姿勢（つまり各論としての種目論的武道論からの脱却であり、「部分と全体」の関係性のなかで個別の種目を認識しようという姿勢を指す）であり、第二に、とくに嘉納治五郎の柔道論に基づく合気道の発展方向性に関する研究、とくに合気道における「競技システム」の導入である。

この富木の基本姿勢は、富木を流祖とする合気道統括団体である昭道館の公式テキスト『合気道競技』の歴史編「合気道競技史」における叙述にも共通する（大森・成山, 2010）。同著における合気道競技史の強調点は、「嘉納治五郎の柔道論に基づく合気道における競技システムの導入」の意義を説明することに置かれている。つぎに、その概要と意義を確認していきたい。

富木の競技化論の意義は、型稽古の弊害を克服しようとする点、柔術系統におけるわざの教育体系の確立を目指すという点、戦後社会に適応する体育としての合気道を目指そうとする点にある。第一に、型稽古による弊害についてであるが、富木によれば、その弊害は技能の客観化の場を持たないこと、つまり、「実践性」が追求されないことによる技能水準の低下、および、不十分な技量の正当化という点に現れる。この論調は、富木の著作群を通して一貫している。実際、富木は、前近代の古流柔術・柔術が「辻斬り」、「辻投げ」、あるいは他流試合といった実践の場を通して実力の「客観化」を行うことで、型の形骸化を抑制してきたことを取り挙げる。その後、江戸時代における竹刀稽古の発展、明治時代における嘉納治五郎の柔道乱取法の体系化によって、安全な方法で、実力の「客観化」が可能になったことで、型稽古による過度な「美化」、「様式化」といった弊害が克服されたことを評価する（富木, 1991: 20-23）。

第二に、柔術系統における教育体系の確立であるが、これは嘉納治五郎による柔道の体系化と大きく関係している。たとえば、嘉納治五郎の柔道乱取法は、柔術系統に属する技法のなかでも、とくに、襟袖をもって組みつくことのできる近接距離のわざが主な対象で

ある。つまり、柔道乱取法は、投技、固技、および関節技の一部である肘技を含むが、「離隔態勢」と呼ばれる手と手が触れ合う間合いで行う、当身技、関節技の多くが含まれていない、という点で課題を残していた。当時の柔道界では、戦中の柔道の戦技化の希求の潮流も相まって、柔道乱取法の取りこぼした「離隔態勢」におけるわざの体系化が模索されていた。そのために、講道館二代目館長である南郷次郎によって設立されたのが「離隔態勢における柔道の技の研究委員会（村上邦夫委員長・1941年）」である。富木は、同委員会の委員でもあり、「離隔態勢」における柔術の技法を体系化した「合気道」が大きな可能性を持っていることを認識していた（大森・成山, 2010: 9-11）。たとえば、富木が満洲建国大学在籍時に発表した「柔道に於ける離隔態勢の技の体系的研究」や、戦後の『柔道体操』などの諸論考には、合気道に関する研究内容が含まれており、大きな影響を与えてい る。

第三に、戦後体育としての合気道の確立であるが、これはまさに「競技化」そのものが要請されている、ということを意味している。戦後体育としての合気道とは、文部省から合気会への要請や早稲田大学体育局から富木への要請にあるように、合気道を「競技化」できるか、否か、ということが最大の争点となっている。以下では、実際に、富木やその弟子がどのように「競技化」を模索したのか、ということを示す。

1958年、富木が早稲田大学合気道部を創部するにあたって、大学側から要請された条件とは、第一に、日本武道としての歴史的伝統的意義、第二に、現代の体育学的練習意義と練習体系、第三に、将来の国際的普及発展性である（上掲: 10）。とくに争点となったのが、現代の体育学的な練習意義と練習体系であり、換言すれば「競技化」の要求である。大学側の要求に対して、富木は以下のように回答した、という。

古流柔術を現代体育の立場から生かすには、その教育理念を講道館柔道に求めなければならぬ。けれども、技術体系においては、柔道が「組方」の体勢を起点とするのに対して、合気道の技は「離隔」の体勢を起点とする。これによって、現在の柔道がとりのこしている当身技や関節技を科学的に解明し、体系的教育法を確立することができる（上掲同頁）。

富木の主張は、現代体育学的意義に基づく合気道の競技化を推し進めるべきというものであり、それが戦後日本における合気道の普及の在り方である、というものだ。戦後の富木が生涯を通して主張し続ける「現代体育学的」意義とは、「競技システム」が体育教育に有効である、という主張に裏づけられている。富木は著書において、「現代体育的」という用語を定義していないが、少なくとも、戦後の学校体育に限定されるものではなく、社会体育としての側面を含んでいることは、確かである、といえる²⁾。

ところで、富木は武道における乱取法を戦後社会に合致させるために、「乱取」という実

践の場が、「スポーツマン・シップ」の理念を内面化するための教育の場となることを、高く評価していた。富木の論考集である『体育と武道』や『武道論』のなかで再三強調されている「競技化」の意義は、危険な柔術のわざを安全な方法で実力の「客觀化」を可能にすること、そして戦後社会に求められる武道の理念を、より時代に適合した教育のプラットフォームである「競技」として提供することである。

さて、このような合気道における「競技化」の展開は、エリアス学派の分析枠組みにおいて、どのような展望が示されうるのだろうか。次章では、それを検討する。

III. 合気道における「競技化」の展望：「エリアス学派」を手がかりとして

本章でははじめに、エリアス学派スポーツ研究の方法論的特徴を簡潔に整理する。つぎに、エリアス学派の分析視角からみえる、合気道における「競技化」の意味を試論的に描く。

エリアス学派の中心フレームとなるのは「文明化過程論」であるが、これは「コントロールの程度が社会、自己コントロールのメカニズムの発展をも考慮すると、全体で強まる」ということである。しかし、このプロセスは非可逆的な生物学的進化の過程とは異なって、「脱文明化の過程を含む」（クリューガー, 1998: 203）ものとして理解されている。また、山下（2002）は、エリアスの「文明化の過程」を「サバイバル・ユニット」、「機能的民主化」、「対照幅の縮小と変種の増大」という相互に関連し合う三つの概念から説明する。この際、山下は「対照幅」のテーゼを「文明化の過程の性格を描く重要な意味を持つ」（山下, 2002: 368）ものとして、さらに「相互依存の様態や発展を規定的に論ずる方向を示す」（上掲同頁）ものとして位置づける。そのうえで、このテーゼにおける重要な契機として「依存関係の増大による支配＝被支配関係の関係構造の変化〔引用者補足：この変化が進むことで「機能的民主化」が起こる〕」を挙げている（上掲: 370）。

山下によれば、ノルベルト・エリアスの「文明化の過程」とは「機能的相互依存と連鎖の増大と生存単位の多層化、そのことに規定される人格構造の変容、自己抑制と再帰的人間の生成、それを安定させる心理的装置の創造、このもとで表れる機能的民主化、権力関係の縮小、権力比重の配分の平等化の過程として、近代社会とそこに存在する人間像を捉えるが、それは『対照幅の縮小と変種の増大』の過程として描かれる」（上掲: 371）のである。

この過程において「スポーツ」は、特別な機能を持つものとして位置づけられている。その機能は「興奮の探求」というタイトルに形容される人間の情動の発露に関する機能であり、「自己抑制の多元的重層性」（市井 2016: 133）と結びつけて把握される「情動を抑制しつつ解放する」（エリアス・ダニング, 2010: 62）というテーゼが、まさにその機能を端的に示している。しばしば「テンション・バランス」という用語から説明されるスポーツにおける情動や暴力性の起伏は、このことと密接に関わっている。

また、エリアスのスポーツ研究の特徴として「議会主義化現象から近代スポーツ化現象へ」といった従来の機能的因果関係から脱却し、それがあくまで「身体に関する暴力的行使の抑制」というマナーの発達によって、同時代的かつ同質的に、さまざまな集団的、階級的、社会的現象として現れた、という「社会発生的」見方をとっている点にある（市井, 2016: 132; 菊, 1997: 16）。それゆえ、エリアス学派のスポーツ研究は、「社会の編成秩序のダイナミズムの分析を志向していた」（市井, 2016: 132）ものとして、また「構造=機能主義的アプローチを遙かに超える豊かなもの」（上掲同頁）として、スポーツを「相対的自律性」を持つものとして分析するのである。

「エリアス学派」の方法論的特徴は、このような分析視角にあるが、合気道の「競技化」という現象を描きうる概念として、殊に注目されるべきは、「情動を抑制しつつ解放する」というテーゼである。エリアスにおける「情動」は、やはり「文明化の過程」のなかに位置づけられている。以下では、『スポーツと文明化（原題: Quest for excitement）』における「情動」テーゼの概要を示す。

エリアス学派スポーツ研究のバイブルである同著のタイトルが意味するのは、「文明化」という社会「発展」の傾向性が比較的進んだとみなされる後期段階である現代社会において、余暇活動や娯楽が持ち合わせる機能は何か、という命題である。そのような社会において、人間は「情動を抑制しつつ解放する」ための機会が、スポーツなどの余暇を通して提供される。人びとは余暇を通して「模倣的な興奮」を享受し、「超自我」のもとで「情動」を適切に解放することができるようになる。

エリアスの「文明化の過程」は、しばしば「情動抑制論」としてみなされる³⁾が、その前提には次の理解がある。人間が習得する「二重の抑制」つまり、法秩序に代表される「外的抑制」と「超自我」の作用による「内的（自己）抑制」の程度が、「情動解放」の程度、すなわち暴力性の表出の程度を規定するようになる。「情動」は、「文明化の過程」を通して、「二重の抑制」をより強固にしようとする傾向性へと向かっている、というものである。

この点は、富木が主張する日本武道の「競技化」とも結びつけることが出来よう。たとえば、前近代の古流柔術・柔術における「辻斬り」、「辻投げ」、他流試合が、江戸時代の平和化、エリアスに沿えば「戦士の延臣化」のなかで、竹刀稽古に代表されるように、「模倣化」へと向かう発展を確認できる。富木の主張は、明治時代における嘉納治五郎の柔道乱取法の体系化によって、より「安全」な方法で、その「機能」を提供できるようになった点に「競技化」の重要性を見出している、ということに収斂される。これは、まさにエリアス学派の方法論に合致しており、「乱取」の導入によって、より後期の社会に適応した「情動を抑制しつつ解放する」ためのシステム、すなわち新しい「テンション・バランス」（より良い情動の解放へと向かわせるための、緊張と弛緩の均衡状態を指す、エリアスの概念）を提供するようになったことを意味する、といえよう。

それでは、次章以降にて、このような「競技化」が「グローバリゼーション」という全

世界的な潮流のなかで、どのように進行していくのか、ということを検討する。

IV. 競技合気道の国際的普及の現状：国際統括組織 WSAF の特徴

本章では、競技合気道の国際的普及の現状について、整理を試みたい。

昭道館の公式テキスト『合気道競技』によれば、第一回国際親善合気道競技大会は、1989年に天理大学武道館にて開催されている⁴⁾。その後、2003年の第五回国際合気道競技大会が、英国のリーズ大学（Lees University）にて初めて国外開催が行われた（上掲：17）。近年では2016年に設立された「WSAF」の主催のもとで、2019年に第2回 WSAF 世界大会が米国のサンディエゴ・メサ大学（San Diego Mesa College）にて開催されている（WSAF, online1）。これらの公式大会のほかに、三度の準国際大会が開催されている（大森・成山, 2010: 17）。

近年の競技合気道のグローバル化を把握するうえで、重要であるのは、WSAF の設立である。WSAF は、競技合気道の国際統括組織として、2016年に日本を含む七カ国の合気道団体によって設立され、現在、八カ国の正会員と、五カ国の準会員から構成されている（これらの構成員には、昭道館傘下の団体のみならず、多くの非加盟団体を含む）。WSAF は、主要な組織目標に「オリンピック・ゲームズへの参加志向」を掲げるなど、合気道界においてさらなる競技合気道の普及を志向し、独自の路線をとっている。以下では、WSAF の概要について、公式 HP を手がかりに確認する（WSAF, online2）。

WSAF の組織的な特徴は、以下の三点に収斂される。第一に、構成団体間の権力比重である。合気道最大会派「合気会」を中心とする国際統括組織「IAF (International Aikido Federation)」の場合、IAF に加盟する他の構成団体と比較して、「日本」の「道主」および「合気会本部」が特別な地位にある（IAF, online）。これに対して、WSAF の場合、基本原則にある「平等」を体現するように、各構成団体間に権力比重の偏りはない、と考えられる。第二に、組織加盟対象団体である。IAF の場合、合気会の認定が必要条件であり、事実上、合気会以外の他流派には門戸が開かれていない。これに対して、WSAF の場合、ナショナルな合気道統括団体のうち、国際連合加盟国に所在を置く団体であり、かつ WSAF への加盟を求める団体であれば、加盟できる、という。つまり、流派の垣根を越えて参加可能である。第三に、競技合気道の普及・促進を組織的に展開することである。WSAF は重要目標として、以下で示すように、10 の目標を掲げている。

1. 全競技者が血統や所属に関わらず自由に参加できるようにする統一された国際大会と世界選手権を開催すること。
2. 国際的合意のもとで、乱取と演武の両方に関する競技規則を開発し、維持すること。
3. 独立した十分な情報に基づいた、[引用者補足：旗揚げ方式] 審判員（judges）、

〔同上：演武競技採点方式〕審判員 (referees)、大会役員 (officials) を通して公正な競技を推進すること。

4. 競技者が、彼/彼女らの自然な運動能力のみを用いて競技すべく自信を持たせるための環境を提供するために、薬物を使用しないスポーツを推進すること。
5. 国際合気道大会の財政的な持続可能性を確保すること。
6. 競争相手の健康、安全性と幸福を保証すること。
7. WSAF のメンバーとして国連によって認定されるように、国家 (Nation States) を認識すること。
8. 競技合気道の概念と実践を促進し、市場で売り込むこと。
9. スポーツ合気道の発展を支援するために、効果的かつ効率的な管理構造を提供すること。
10. オリンピック種目認定を達成すること。

これらの十箇条の大半は、合気道の乱取競技に関する事項と関係しており、WSAF がオリンピックへの参入を視野に入れた合気道乱取競技の国際規格化を試みようとしている、とみなすことができる。

これまで、WSAF の概要について確認してきたが、このようなグローバル化は、どのような「意味」をもっているのだろうか。次章では競技合気道の「グローバリゼーション」という「主題」に関する考察を進めたい。

V. 競技合気道の「グローバリゼーション」は何を意味するのか

日本武道に関する先行研究の多くが捉えようとしてきたのは、近代日本という「ドメスティック」なキャンバスにおける「日本武道」の創出過程であった。このような現状を踏まえて、Sato (2013) は、柔道研究の主たる関心が「日本史の文脈上で、柔道を理解することにあるため、柔道を、より広い世界的な流れのなかに位置づけるという課題は、まだ完全なものではない」 (Sato, 2013: 300) という。

このような問題意識から、今日では、「グローバル」という準拠枠のなかで日本武道研究が進められている。この準拠枠において、日本武道は、世界的伝播のなかでの文化変容⁵⁾や、武道のスポーツ化、という文脈に位置づけられてきた。特に後者は、Sato (2013) によって「柔道界における国際柔道連盟 (International Judo Federation; 以下 IJF と略す) の台頭、それによる日本の文化的ヘグモニーの低下および西欧への移行」の文脈をとして捉えられている (Sato, 2013:309)。

Sato (2013) は、講道館柔道がグローバル化するなかで、家元としてのヘグモニーを十分に発揮できず、また国際競技力の相対的な低下によって、IJF のヘグモニ一体制が確立されていく過程と IJF のもとでの国際ルールの変更を捉えている。Sato (2013) の捉えた

柔道の「スポーツ化（スポーティフィケーション）」⁶⁾とは、家元による一元的支配体制から二元的支配体制移行、そして IJF のもとでの柔道界の再編成の過程である、といえる。

競技合気道は、講道館柔道に倣って競技化を推し進めているが、その志向性は、合気道界内において理解されないばかりか、「合気道」の特殊性により、グローバル化の進んだ今日でも、合気道の競技化への理解が浸透せず、国内外での普及は依然として劣勢に瀕している、という状況にある。つまり、競技合気道における「近代化」や「グローバル化」は、たしかに柔道の事例と近似しているが、それは柔道のように「競技派」が急速に台頭することを意味しないのである。

しかし、「家元としてのヘグモニーを十分に發揮できず、また国際競技力の相対的な低下によって、西欧中心のヘグモニ一体制が確立されていく過程」は、競技合気道においても、今後確認されうるのではなかろうか。上述の通り、WSAF の規則は、「構成団体間の権力比重の均等性」がある。そして、WSAF の構成団体は IAF と同じく、西欧諸国がその多くを占めているが、IAF とは異なり「家元」という特権的な立場を容認していない、という点に規則上の異同を確認できる。これらを踏まえ、上述の方法論の俎上で再解釈するならば、家元である昭道館は、グローバルな統治機構である WSAF 設立によって、相対的にヘグモニーを失いつつある、という権力バランスの変化を示唆できよう。

さて、マグワイア (Joseph Maguire) は、エリアスの「対照幅の縮小と変種の増大」という、規定的なテーゼを基盤としながらも「ヘグモニーの移動」としてグローバル化の成層的な構造を描いた (Maguire, 1999)。上述の Sato (2013) では、近代スポーツの伝播が「拡散」の過程であるのに対し、講道館柔道の伝播は「収束」の過程として捉えられている (Sato, 2013: 316)。この「拡散」に対する「収束」とは、まさにマグワイアの捉えた拡散と収束の動態的変化の試論モデルである「対照幅の予備的モデル」における「非中心国のニュー・スポーツの台頭」の過程を指す (Maguire, 1999: 80; 山下 2002: 374)。この過程において、講道館柔道は、西欧的価値観のもとでスポーツ化、規範・規則の改定が進み、グローバルなメディア・スポーツと化していく、ともいえる。これまで、このグローバル化に対する抵抗として、つまり、近代スポーツに対する、競技至上主義への抵抗の文脈で、念頭に置かれてきたのは、民族スポーツのような土着文化やエクストリーム・スポーツのようなライフスタイル・スポーツであった。

以上を踏まえると、競技合気道は、競技化を推し進めることで、柔術・柔道同様に、この過程へと向かいつつあることを示唆しうる。無論、この過程は、日本の特異な価値規範が衰退していくとともに、「より抽象化され、世界的普遍に向か」（山下, 2002: 380）う過程であり、世界システムによる再編の過程でもある。事実として、競技派は WSAF と昭道館による二元的支配体制への移行が進んでおり、Sato (2013) に描かれた講道館と同様の現象が確認できる。

しかし、競技派は、講道館柔道をモデルとし、合気道を再構築したが、同時にいくばく

かの合気道の「固有性」を残存させていることは注目に値する。この「固有性」は、昇段昇級審査内容などに表れており、「グローバル化する競技武道」において「オールタナティヴ」としての可能性を持っている、と考えられる。たとえば、講道館柔道における昇段審査内容では、「競技成績」が大きな意味を持っている。競技成績「秀」（全国大会、世界大会における入賞者）と「可」では、修業年限に3年の違いが出る（講道館, online）。これは、講道館が柔道技術の習得度を「競技成績」によって測定していることを意味する⁷⁾。

これに対し、昭道館合気道における昇段審査内容では、合気道従来の「形」が主な評価対象である（昭道館京都, online）。また、「競技成績」の考慮が成文化されておらず、あくまで審査対象の規定技の習熟度が、主たる評価対象となっている。そのため、国際大会における「形」と「乱取」の重要性は、講道館は「乱取」重視であるのに対し、昭道館は「形」が形骸化していない、といえる⁸⁾。この「形」の残存は、日本武道としての形式的な意味のみならず、競技化される合気道の「固有性」の支柱としての意味を持っている。この「固有性」を保持することによって、普遍化された「競技性」と日本武道の「美学」としての「形」を同時に提供することができる、といえよう。それは、「情動を抑制しつつ解放する」というテーゼに沿った新しい「テンション・バランス」の在り方を提示しているのではないか。このような特徴を踏まえたうえで、「グローバリゼーション」という準拠枠に合気道を据えるには、今後検討されるべきいくつかの重要な課題がある。この課題について、すでに山下（2002）が重要な示唆を示しており、以下ではそれを検討する。

第一に、山下（2002）は「西洋」や、「非西洋」という概念規定の曖昧さを指摘する。山下は、それらは、民衆的レベルであったり、「創られた伝統」として支配的な意味のレベルであったりするため、柔道の「西洋」への普及をもって、「非西洋」と「西洋」の融合化と還流を描くのは妥当性に欠く、と指摘する（山下, 2002: 379）。これは、柔道がそうであるように、「西洋」との国際関係を前提とする差異的に創り出された「非西洋」であるため、「固有の非西洋」というものを見いだしにくいことが極めて困難であることに起因する。

第二に、山下は、第一の点に関連して、近代国民国家形成以降の文化は、モダニティの諸要素と結合されており、「固有の非西洋」を見出すことが極めて困難であることを指摘する（上掲同頁）。山下によれば、近代以降の「非西洋文化」の創造過程は、たとえば「想像の共同体」を形成する「創られた伝統」として現れるように、「西洋」との交渉のなかで創られた「非西洋」である場合が多く、それゆえに、国際関係を前提とする差異的な創造過程として現れる、という（上掲同頁）。

第三に、山下は、現代スポーツのグローバルな再編が、ギデンズのいう「脱埋め込み」化過程のなかで、トランサンショナルな統括組織を生成し、またスポーツ界が世界資本によるシステムの均一化に編み込まれることによってなされている、と指摘する（上掲: 383）⁹⁾。このようなグローバルな再編構造過程は、世界支配構造の再編とエリアスの捉えた「対照幅の縮小」のテーゼ、この両者が関連した過程として認識できる、という（上掲: 384）。

このようなグローバリゼーションに伴う再編過程は、合気道がモダンへの適応のなかで世界システムへと組み込まれていく傾向性を確認できる。合気道界内に残存する「モダンへの抵抗力」は、グローバル・システムへの編入という、激しいせめぎ合いのなかで、かつてほどの抗力効果を持たなくなつた、とも考えられる。この再編過程は、もはや「合気道がグローバル化に成功した」という文言以上の意味を持っている。Sato (2013) が分析したように、競技規則の変更は、日本武道の文化原理をめぐるせめぎ合いの帰結として現れており、文化の重大な変容を意味している。

グローバル化以前に家元である昭道館、つまり富木が競技化によって意図していたのは、型稽古のみでは養成できない「実践性」を安全に習得させる機会を作り出すこと、そして勝敗観を伴う競技空間において、現代により適した情動統御の機会を作り出すこと、この二点に収斂される。それゆえ、競技理念の核となるのは、合気道の技法における高度な「実践性」の探究であり、攻撃的情動の自己統御の習得である、といえよう。富木による競技化への転換は、エリiasの「興奮の探究」という近代スポーツ的な「プレイ性」が、合気道に内包されるようになった、と解釈できよう。この「プレイ性」を担保するものが競技規則であるため、今後競技合気道の分析を進めるにあたって、この変容の詳細が解明されることが要求される。

最後に、今日の国際合気道競技大会の実情を踏まえ、以下の争点を提起したい。大森 (2016) において、提起された審判部問題とは、①審判技術と規程内容に関する問題、②審判組織に関する問題、③競技規程の解釈に関する問題、④競技形態に関する問題の四種類であった（大森, 2016: 29-33）。さらに、①には(1)短刀突きの判定に関する問題、(2)技の判定基準に関する問題、(3)反則行為に関する問題、の三つの問題群が、②には、(1)各国の審判員数の問題、(2)各国の審判組織の現状、(3)審判レベルの問題、の三つの問題群が含まれている（上掲同頁）。

このなかで、WSAF の設立以降の合気道競技法をめぐる争点は、やはり「得点制」という競技システムの特性に起因して、競技理念の形骸化が起こりうるか、否か、という点に収斂されるのではなかろうか。この点に関連して、大森 (2016) は、殊に「『足持ち』の反則行為」¹⁰⁾について、審判規程自体の見直しを視野にいれた抜本的な改革の必要性がある、とする（大森, 2016: 31-32）。

上述の通り、WSAF が志向するのは、オリンピック種目化であり、その意味でスペクタクル・スポーツ化であった。しかし、このような潮流が勢いを増すにつれて、スペクタクル・スポーツとしての「熱狂」の要素、つまり視覚的に派手なわざが求められるようになることが懸念される。この潮流において、家元の意図とは異なり、「足持ち」の「技術性」の追求は加速するようになるだろう。まさに「昭道館」と「WSAF」による二元的な支配体制は、競技合気道における「相克」であり、文化原理をめぐる「闘争のアリーナ」が展開されているのである。

おわりにかえて

本稿では、合気道における「競技化」と「グローバル化」について、検討を進めてきた。その到達点は、以下の通りである。

第一に、エリ亞スに基づけば、「競技化」は、合気道において、より後期の社会に適応した「情動を抑制しつつ解放する」ためのシステム、すなわち新しい「テンション・バランス」を提供するようになったことを意味する現象として、理解できる、ということである。

これまで、富木の「競技化論」や「正史」において、強調されてきたのは、「現代体育学的意義」であったが、この「現代体育学」の指す内容について、詳細な分析はされてこなかった。本稿では、この「現代体育学」の代替物として、エリ亞斯学派の方法論を用いたが、これによって試論的にではあるが、「競技化」の意義をスポーツ社会学的な見地から示すことができた、といえる。

第二に、競技合気道の「グローバル化」の現状分析から、競技合気道における「相克」を示すことができた。家元である昭道館も国際統括団体である WSAF も、いずれも世界的普及を志向している。しかし、「家元」の志向する世界的普及は、あくまでスペクタクル・スポーツ化を意味しない。だが、WSAF が志向するように、「グローバリゼーション」という全世界的潮流のなかで起こる「オリンピック種目化」は、世界資本による「意味」収奪ともなりうるという逆説的な可能性を含んでいるといえる。ここに、文化原理をめぐる「闘争のアリーナ」が展開される。

今後の課題として、合気道の「競技化」の通史的な過程に関する分析が残されている。本稿では、富木による競技化の概要と、WSAF に関する規約の一部を扱うにとどまった。また、昭道館と WSAF の普及戦略の異同について言及できていないが、この異同の解明はグローバル化を分析するうえで不可避である。合気道の「競技化」、「グローバル化」を描き出す作業は、着手されたばかりであり、これらの課題は今後の研究において、引き続き取り組む所存である。

注

- 1) 本稿は、拙稿（2021a; 2021b）をもとに加筆修正したものである。
- 2) 例えば、富木の『体育と武道』では、社会体育としての武道教育の必要性が論じられている。
- 3) ただし、坂（2011）のようにエリ亞斯学派内部では、単なる情動抑制論とみなすことには否定的であるという見方が出ている。
- 4) 当時は、早稲田大学合気道部を中心とする日本合気道協会との分裂以前であるため、日本合気道協会としての開催大会である。
- 5) 例えば、坂上（2010）がその例である。
- 6) エリ亞斯における「スポーティゼーション・プロセス」は、英國議会主義化過程との関係性

のなかで現れる「文明化の噴出」の事例として扱われる（エリアス・ダニング, 2010: 30-31）。近代スポーツは、イングランドのジェントリ層を中心に経験する、この過程のなかで、その初期形態と比較して、外的にも、内的にも情動が抑制されることで暴力性を排除しつつ、社会的に許容される範囲内で情動を解放させることを可能にした。このような、特殊イングランド的な余暇形態が、全世界へと伝播する過程が「スポーツタイゼーション・プロセス」である。これに対し、Sato (2013) における「スポーティフィケーション・プロセス」は、柔道が「近代スポーツ」の持ち合わせる要素を内在化していく過程を指している、といえるため、これらの概念は区別されるべきである。Sato (2013) によれば、「成文化、乱取競技の重視、商業化に伴うスペクタクル化、認識論の変化」(Sato, 2013: 315-316) が重要な特徴である。

- 7) ただし、講道館の審査規定が、実技（形）や筆記、口頭試問などを軽視していることを意味するものではなく、他種目との相対的な比較における特徴として「競技成績」の比重が高い、ということに言及しているにすぎないことを強調したい。
- 8) 一競技者としての私見であるが、昭道館においても緩やかにではあるが「乱取」へと関心が移りつつある、といえる。おそらく、この事実は、選手の競技力向上に伴って、合気道における「情動解放の場」としての「乱取」が、競技者、観衆の「興奮の探求」を掻き立てているからであろう。
- 9) 山下は、世界支配構造の再編とはグローバル資本やIOCなどの国際スポーツの統治機構によって文化の「均一化」や文化実践を通して経験される意味の「直接的な収奪」が行われるリスクを含んでいることを指摘している（山下, 2002: 384）。
- 10) 合気道競技法では、当身技の技術性を担保すると同時に危険防止の観点から、「足持ち」が禁止されている。事実、短刀乱取競技規程「第7条(反則事項)」では、柔道技・レスリング技が反則事項として記されている（著者補足：本稿の作成にあたり、昭道館国際本部道場にて、現行の「短刀乱取競技規程（非公刊）」を参照した）。この背景には、類似種目との差別化を図り、合気道競技の独自性を担保しようとする側面がある、といえる。

参考文献

- 市井吉興(2016)、「スポーツを「闘争のアリーナ」として読み解く—エリアス、ブルデュー、ハーグリーヴスのスポーツ研究を導きに」（日暮雅夫ほか『現代社会理論の変貌—せめぎ合う公共圏』ミネルヴァ書房）、127-148頁。
- 大森竜一(2016)、「合気道競技における審判部国際化の必要性と課題—世界大会での現状に合気道競技の成り立ちと特性を踏まえて審判部国際化の必要性と課題・方向性について考える」『國士館大學武徳紀要32』、27-37頁。
- 大森竜一、小森富士登(2017)、「合気道競技のルールについての考察—技の先取制について」『國士館大學武徳紀要33』、1-11頁。
- (2018)、「体捌き競技についての考察—体捌き競技の必要性と体捌き競技が抱える問題」『國士館大學

- 武徳紀要 34』、1-10 頁。
- . (2019)、「合気道における「抜き」の技術性についての考察—究極の崩しとも言える「抜き」の技術性を多方面から検証する』『國士館大學武徳紀要 35』、1-10 頁。
- 大森竜一、成山哲也 (2010)、『合気道競技』共栄出版。
- 菊幸一 (1997)、「エリアス派スポーツ社会学と身体/Body」『スポーツ社会学研究 5』、15-25 頁。
- 工藤龍太 (2016)、「富木謙治の武道技術論の出発点と戦前における展開—嘉納治五郎の「武術としての柔道」論の継承を中心として」『体育学研究 61(2)』、681-700 頁。
- 坂上康博 (2010)、『海を渡った柔術と柔道—日本武道のダイナミズム』青弓社。
- 坂なつこ (2011)、「スポーツにおける文明化論の可能性と今後」『スポーツ社会学研究 19 (1)』、39-54 頁。
- 佐藤忠之、川上泰雄、志々田文明 (2006)、「合気道競技の投技における「崩し」の方法—隅落と引落を中心にして」『スポーツ科学研究 3』、69-77 頁。
- 志々田文明 (1981)、「富木謙治著作目録にみられる思想傾向」『武道学研究 13』、53-59 頁。
- (1991)、「解題—武道と富木謙治」(富木謙治『武道論』大修館書店)、270-283 頁。
- (2001)、「合気道競技史の研究—合気乱取り法の創案過程を中心に」『早稲田大学体育学研究紀要 33』、17-27 頁。
- 富木謙治 (1942=2020)、「柔道に於ける離隔態勢の技の體系的研究—柔道原理と合氣武道の技法」建國大學研究院 (=民和文庫研究会編)、『格闘武術・柔術柔道書集成—合氣武道・合氣道』クレス出版)。
- (1954)、「柔道体操—柔道原理による「合気の技」の練習法」稻門堂。
- (1970=1977)、「増補 体育と武道」早稲田大学出版部。
- (1991)、(志々田文明編)『武道論』大修館書店。
- ノルベルト・エリアス、エリック・ダニング (2010)、「スポーツと文明化—興奮の探求」(大平章、原著は 1986 年) 法政大学出版局。
- ミヒヤエル・クリューガー (1998)、「スポーツ及びスポーツ科学に対するプロセス=フィギュレーション理論の意義について—ノルベルト・エリアス生誕 100 年によせて」(坂なつこ、有賀郁敏、原著は 1997 年)『立命館産業社会論集 34(1)』、201-214 頁。
- 村下慣一 (2020)、「エリアス学派による合気道研究の新規性と課題—サンチェス・ガルシア『日本武道の歴史社会学』の批判的考察」『現代スポーツ研究』4、30-43 頁。
- (2021a)、「グローバル化に直面する合気道における「文化ポリティクス」と「競技化」—ノルベルト・エリアス「文明化過程論」の応用可能性』立命館大学大学院修士論文 (社会学)。
- (2021b)、「グローバル化と競技化に直面する合気道の課題とは何か—日本、グローバル化するスポーツ、N・エリアス「文明化過程論」」『東アジア日本学研究 5』、69-77 頁。
- 山下高行 (2002)、「グローバリゼーションとスポーツ—ノルベルト・エリアス、ジョセフ・マグワイアの示す像」(有賀郁敏ほか『近代ヨーロッパの探求 8—スポーツ』ミネルヴァ書房)、365-87 頁。
- Joseph Maguire (1999), *Global Sport: Identities, Societies, Civilizations*, Oxford: Polity Press.
- Sato Shohei (2013), “The Sportification of Judo: Global Convergence and Evolution,” *Journal of*

Global History,8(2), pp.299-317.

講道館 (online)、「活動:昇段資格について--講道館昇段資格に関する内規」。

(<http://kodokanjudoinstitute.org/activity/grade/> : 閲覧日: 2020年11月8日)

昭道館京都 (online)、「【昇段・昇級審査】」。

(<https://shodokankyoto.jimdo.com/昇段-昇級審査内容/昇段審査内容/> : 閲覧日: 2020年12月9日)

IAF (online), “About the IAF” .

(<https://www.aikido-international.org/about/> : 閲覧日: 2020年12月9日)

WSAF (online1), “2019 WSAF Competition Hits Local News in San-Diego” .

(<https://www.wsafakido.org/post/manage-your-blog-from-your-live-site> : 閲覧日: 2020年12月9日)

—— (online2), “About” . (<https://www.wsafakido.org/about> : 閲覧日: 2020年12月9日)

資料

昭道館合気道連盟（非公刊）、「短刀乱取競技規程」。

A Reflection on the Introduction of the Aikido-randori: Prospects for Globalization Based on the Establishment of the Worldwide Sports Aikido Federation

MURASHITA, Kanichi

Abstract

This study aims to clarify the outline of the "the introduction of the randori system (competitive Aikido)" advocated by the "competition school (Shodokan)" founded by Kenji Tomiki. In particular, this paper describes the "globalization" of competitive Aikido, focusing on Tomiki's theory of "Aikido-randori" and the recent establishment of the Worldwide Sport Aikido Federation.

In addition, this study examines the significance and prospects of "the introduction of the randori system" using a sociological framework of analysis of these current conditions. In doing so, I use the methodological perspectives of the Elias School and Takayuki Yamashita as clues.

In this paper, I propose that the dualistic control system of the Iemoto and International Federations appears as a conflict in competitive Aikido, that is, a clash of cultural principles.

Keywords : Aikido, Introduction of the Aikido-randori, WSAF, globalization, Elias School

逸脱的な行動に対する日中母語話者の否定的評価について —ロールプレイの結果を中心に—

儲 叶明（儲 葉明）（筑波大学大学院生）

要旨

本研究は、逸脱的な行動に対する日中母語話者の否定的評価のストラテジーの使用傾向、談話上の特徴をロールプレイに基づいて検証を行い、分析した。その結果、JNSは「批判」、「確認/ほのめかし」を多用し、CNSは「悪態/罵り」、「冗談/皮肉/からかい」の意味公式を多用していることが分かった。この結果は、儲（2019）のDCTの結果と一致していた。一方、ロールプレイの文字化トランスクリプトに基づいた結果では、①JNSは談話の核となる部分はマイナス評価語を伴った発話を発して規範性に志向する一方で、指示詞「あれ」や取り立て助詞「も」を用いて後続の否定を投射し、聞き手にこれから否定することを予告する手立てが見られた。②逸脱行動を行った側が自身の逸脱さを認めた後、CNSはフェイスを侵害しつづける「攻め型」のストラテジーを使用するのに対して、JNSは条件節を利用し、なるべくFTAを弱めながら相手に提案するという「守備型」のストラテジーの使用が見られた。③JNS、CNS両者とも、否定された側が、後から否定した側に対してフェイスの侵害を引き起こし、遡及的にフェイスの均衡を図るという特徴が見られた。本研究の考察を通して、①発話上の工夫と談話構造上の配慮が日常コミュニケーションにおいて、異なることを志向し、さらにそれを運用することで（場合によって）相反する両者（対人関係と規範）を両立する可能性、②ロールプレイを利用してDCTの結果を検証できる可能性を指摘した。

キーワード： 逸脱的な行動、否定的評価、談話、ポライトネス、ロールプレイ

はじめに

逸脱的な行動とは、慣習や規範、倫理・道徳といった「基準」から見て、ずれている行動を指す（関崎 2014）。われわれは社会の一員である以上、「普通はこうであるべきだ」という社会の中で一般的と考えられる何等かの価値観（関崎 2014）に常に晒されているわけである。赤信号を渡るのは危険である、歩きスマホは危ない、食事が済んだ後もレストランに居続けるのは申し訳ない、などはその例である。基準には、法律やルールもあり、明文化されていないものの、社会成員に暗黙に共有されているイデオロギーとして存在す

る可能性もある。

一方、この規範や道徳などの基準ほかに、我々は日常生活において、日々協力、合意(Grice 1975 ; Brown & Levinson 1987)を志向する対人関係にも対処しなければならない。日常生活における「基準」と「対人関係」は、その関係性が常に一致するとは限らない。自転車で友人にぶつかってきた相手と議論するときは、友人との対人関係には影響しない。むしろ、促進されるだろう。一方、衝突した側が友人の場合は、基準と対人関係が対立項になる。基準を踏襲して友人の行為を指摘すれば、人間関係が険悪になる可能性がある。人間関係を優先してその逸脱的な行為を見逃せば社会的通念や常識を破ってしまう。

このような状況をロールプレイで再現し、日本語母語話者（以下、JNS）と中国語母語話者（以下、CNS）がそれぞれ使用する言語ストラテジーの特徴を明らかにすることが本稿の目的の一つである。なお、本稿で考察する場面は、儲（2019）では異なる方法、DCT（談話完成テスト）を用いて統計的に検証した。しかし、談話完成テストには「一発話文のみ」という限界があり、またその発話は実際のコミュニケーションでなされるかという懐疑的な指摘もある（Rose 1994）。

そこで本稿では、次の課題の解明を目的とする。第一に、より自然会話に近いロールプレイを用いて、同じ場面における日中母語話者の否定的評価の使用頻度は、儲（2019）によるDCTの結果と同様の傾向を示しているか否かを検証する。第二に、ロールプレイの利点を生かし、談話レベルにおける日中母語話者の否定的評価の特徴を記述することで、DCTでは観測できなかった特徴を明らかにする。さらに、日中母語話者の否定的評価の談話上の特徴をポライトネス理論に基づいて示す。

I. 先行研究

これまで否定的評価をはじめ、要因統制の観点に立って、一般的に非選好とされる発話行為をめぐる研究には、初鹿野・他（1996）、西尾（1998）、関崎（2014）、林（2015）、儲（2019）などがある。初鹿野・他（1996）は、DCTを利用して日本語母語話者と日本語学習者の不満表明ストラテジーの使用傾向を調べた。日本語母語話者には、好ましくない状況が生じた原因、理由を問うストラテジーの使用が多く見られたのに対して、日本語学習者には間接的、暗示的ストラテジーの使用が多く見られたと報告している。西尾（1998）は日本語母語話者によるマイナス待遇表現の表し方を分析し、若年層男性はぞんざいな言語形式を使用してマイナス評価を表明するのに対し、実年層の話者は表現内容や表現量によってマイナス評価を表明する傾向があると述べた（p. 27）。

一方、相手が起こした逸脱的な行為を指摘する否定的評価を巡る研究は、管見の限りまだ少ない。関崎（2014）は、否定的評価の対象となる事柄、否定的評価の表現方法、否定的評価の開始部、否定的評価の発話デザイン、否定的評価の開始から収束までの一連の現象を分析している。林（2015）は、日本語母語話者と韓国語母語話者に焦点を当て、日本

語母語話者は受け手の自己否定に対する同調のパターンが多く、それに対して韓国語母語話者は受け手の言動に対する否定的評価のパターンが多いと報告している（林 2015:154）。また、本稿と直接関係する儲（2019）では、本稿と同場面を用いて、日中母語話者の否定的評価の意味公式の使用傾向をカイ二乗検定に基づいて示した。結果の詳細は4節で詳述するが、主要な結果として、CNSは「冗談/皮肉/からかい」と「悪態/罵り」を有意に多用した親和的な関係性への志向性が、JNSは「批判」による規範性への志向性が報告されている（儲 2019:74）。しかし、以上の先行研究は、DCTとロールプレイのどちらか一方を使用して論じるものがほとんどであり、一つの課題に対して、DCTとロールプレイの両方で検証するものは管見の限り多くない。本稿は、儲（2019）のDCTの結果を、同場面を利用しロールプレイで検証するものであることから、新規性があると考えられる。

なお、本稿では否定的評価の定義を、関崎（2014）と儲（2019:59）に従い、「会話の相手と、相手の行動が慣習や規範、倫理・道徳から逸脱していて意義が低いと認め、それを表現すること」とする。

II. 調査方法及び理論枠組み

1. データの採取方法

発話行為をデータとして採取するには、大別してDCT、ロールプレイ、自然談話という三つの方法がある。ロールプレイは、調査協力者が短時間のうちに反応しなければならず、より自然談話に近いデータを採取できるという利点がある。また、場面や状況など、調査者が事前に想定した各要因、変数をコントロールできるため、自然談話と異なった大きな利点を持っているとも言える。本研究は先述したように、日中母語話者の、同場面における発話行為を観測し、その特徴を検討するために、要因、変数を統制しやすい採取法が必要となる。さらに、本研究は、DCTの結果を検証することを目的とするため、ロールプレイを最善の採取法として採用した。

2. 調査概要

ロールプレイのデータ採取は、儲（2019）のDCTと同様の場面を使用して、2017年6月から10月にかけて行った。調査は、普段から仲が良い知り合い同士のJNS（3組）とCNS（3組）の計6組12名を対象にした。ジェンダーバランスを考慮し、ペア内の組み合わせはそれぞれ男性同士、女性同士、異性とした。1グループあたり8場面の会話をを行い、日中それぞれ24回、合計48回のデータを収集した。JNSの平均年齢は24歳で、標準偏差は0.82歳である。CNSの平均年齢は25歳で、標準偏差は1.15歳である。調査協力者は全員が大学の学部生または院生であった。ロールプレイでは、否定的評価の実施側と否定的評価の受け手にそれぞれのロールプレイカードを渡し、カードの指示通りに役割を演じても

らうよう依頼した¹⁾（図1）。日本語母語話者には日本語で、中国語母語話者には中国語でプレイしてもらった。

カードA（否定的評価の行い手）忘れ物	カードB（否定的評価の受け手）忘れ物
<p>あなたは3-4歳年上で、親しい先輩と一緒にいます。 先輩は普段からよく忘れ物をしています。 今日はまたこう言つてきました。 先輩の話しを聞いて、あなたなりの反応をしてください。 以上の内容で指定されていない部分は、自分なりの感覚で会話を進めてください。 とはいっても、無理やり会話を長くする必要はありません。</p>	<p>あなたは親しい後輩と一緒にいます。あなたはいま、また携帯を家に忘れてしまったことに気づきました。 そして一緒にいる後輩に対して思わず、「あ～また携帯を家に忘れちゃった」と呟きました。 また、後輩の反応を見て自分なりの応答をしてください。 以上の内容で指定されていない部分は、自分なりの感覚で会話を進めてください。とはいっても、無理やり会話を長くする必要はありません。 では、あなたからトークをはじめてください。</p>

図1 ロールプレイカード

III. 場面の設定および意味公式

本稿は儲（2019）のDCTの結果と対照するために、儲（2019:61）で設定された場面を援用する。次はその概要である。表1に示した通り、場面①と場面②は「直に他人に迷惑をかける可能性がある」や「危険性が高い行為」として逸脱度の高い各場面として設定され、場面③と場面④は「相対的に他人に迷惑をかける可能性が低い」ことから、逸脱度の低い場面として選ばれている。4つの場面については、いずれも日常生活で実際に経験しやすく、経験がなくても想像しやすい場面にした。親疎関係（社会的距離）については、発話のしやすさを考慮し、「親」に絞った。なお、「逸脱度」の高低については、筆者の想定だけではなく、2017年5月にJNS 30人（平均21.4歳、標準偏差：5.09）、CNS 30人（6人年齢不詳、残り24人平均28.6歳、標準偏差：4.84）を対象に予備調査を行った（儲2019:60-63）。その結果、場面①～②は逸脱度が高い場面であり、場面③～④は逸脱度が低い場面であることが検証された（儲2019: 60-63）。その後、本調査では予備調査で検証した4場面に「先輩/後輩」という要因を導入した。詳細を以下の表にまとめる。

表1 ロールプレイの場面設定

場面	力関係	社会的距離	逸脱度
① 図書館の本をもどさないまま帰ろうとする	先輩/後輩	親	高
② プラットホームで歩きスマホをして危うく 他人にぶつかりそうになる			
③ コンビニで必要以上に商品を購入する			
④ 普段から忘れ物が多く、今日も携帯を忘れ てきた			

儲（2019:61）に基づいて微修正

以下、場面①は「本の返却」、場面②は「歩きスマホ」、場面③は「買い物」、場面④は「忘れ物」と記する。なお、本研究はロールプレイのデータであるものの、DCT の結果と対照し、DCT で有意に観測された意味公式が、より自然会話に近いロールプレイでも観測されるかを検証することが目的であるため、分析の際に儲（2019:64-65）の意味公式²⁾を援用する。

表2 意味公式の詳細

	意味公式	下位意味公式	意味機能	例
①	批判	マイナス評価語	良くない、駄目、危ないなど評価性を持つ語、または中立な意味を表す場合もあるが、文脈の中で一時的に否定的評価を表す語。	すぐ一買うね、そんな買ってどうすんの？（JNS/買い物/後輩）
		その他	マイナス評価語も、悪態罵りに関する言葉も伴わないが、相手を問い合わせたりして、非難として捉えられる発話。	それを誰もがするようになったらどうなると思う？（JNS/本の返却/後輩）
②	悪態/罵り		逸脱行為そのものではなく、相手を罵って責めるもの。	你是不是傻（CNS/忘れ物/後輩）（馬鹿じゃないの？）
③	直接改善要求		相手に逸脱した行為を改善するよう直接要求する発話。	毎回しまったほうがいいんじゃない（JNS/本の返却/後輩）
④	間接改善要求	規範言及	社会的規範、通念、常識、改善要求の根拠となる拘束力のある状況に言及するもの。	それでも戻すのはマナー やろ（JNS/本の返却/後輩）
		行為結果/不利益の対象者言及	逸脱した行為により引き起こされる好ましくない結果、またはその好ましくない結果を被る人を提示することで否定的評価を実施するもの。	そのうちお金無くなっちゃいますよ（JNS/買い物/先輩） 係りの人困りますよ（JNS/本の返却/先輩）
		申し出	相手の逸脱した行為の改善に協力する意欲を示す発話。	持ち物リスト作ってあげるよ。（JNS/忘れ物/先輩）
		軽量化	相手が逸脱した行為を改善してもそれほどの不利益をもたらさないと伝え、相手の改善を促す発話。	順手放回去又不是什么多大的事儿。（CNS/本の返却/後輩）（ついでに返すだけだし）
⑤	冗談/皮肉/からかい		マイナス評価語、悪態/罵りに関する言葉を伴わなく、流行語、冗談/アイロニー/大げさに言うなどの方法を使用した発話。	多规划总没坏处，免得月末总有剁手的冲动。（CNS/買い物/後輩）（計画立ておいて損はないよ。じゃないと月末になるとまた手を切りたくなるからさ）
⑥	確認/ほのめかし		質問や確認など、相手に余地を与える形の発話で、より婉曲的な形で相手に自分の逸脱した行為を気づかせる発話。	歩きスマホ良くないってよく言われているよね（JNS/歩きスマホ/後輩）
⑦	緩和		個人体験や前置きなどの発話	確かにそうかもしねないんですけど（JNS/本の返却/先輩）
⑧	呼称		対称と自称がそれぞれ使われる発話、二人称の相手との親しみを表す呼び方（対称）。相手と同じ立場を表すのに使	学弟（後輩くん）（CNS/本の返却、等） 咱们（私たち）（CNS/本の返

			われる一人称複数（自称）	却など
⑨	回避		相手の行為に一切言及することなく、否定的評価を徹底的に回避するか、相手の行為に賛成する発話。	何も言わない（JNS/CNS/買い物、等）

儲（2019: 64-66）に基づいて加筆・微修正

意味公式の設定については儲（2019）で詳しく記述しているが、概説すると、語彙意味論的に、相手の逸脱的な行動を否定し、改善を促そうとするものが前項（①～③）に分類されている。例えば、「良くない」のような形容詞や「馬鹿」などの罵り語や「毎回しまったほうがいいじゃない」という「直接改善要求」などがそれにあたる。一方、それらと比較して、否定的評価として理解するのに語用論的推意が必要となるものは後に来ている（④～⑥）。さらに、（韻律の操作などを排除し）単独で否定的評価として機能できないものは、否定的評価を行う際に周辺的に補助するものとしており、⑦～⑨に分類されている。例えば、「呼称」が該当する。さらに評価そのものを徹底的に回避する場合、または相手の行為に賛成する場合は、相手のフェイスを脅かすリスクを避けるストラテジーとして捉えられるため、本研究では否定的評価の一つのストラテジーとして考え「回避」という意味公式を設定している。

IV. ロールプレイの量的な結果

1. 意味公式の出現頻度

まず、意味公式の出現回数について考察する。その結果を、儲（2019）と比較する。

表3 ロールプレイにおける日中意味公式の使用頻度

意味公式	CNS	JNS
	使用割合（回数）	使用割合（回数）
批判	27.1 (19)	33.7 (30)
悪態/罵り	5.7 (4)	0 (0)
直接改善要求	11.4 (8)	16.9 (15)
間接改善要求	24.3 (17)	22.5 (20)
冗談/皮肉	21.4 (15)	2.2 (2)
確認/ほのめかし	0 (0)	15.7 (14)
呼称	7.1 (5)	7.9 (7)
緩和	0 (0)	1.1 (1)
回避	2.9 (2)	0 (0)
合計	100 (70)	100 (89)

（灰色は多用した意味公式を示す）

ロールプレイの参加者の発話から意味公式の使用割合と回数を抽出し、表3にまとめた。

また、ロールプレイは JNS3 組、CNS3 組だったため、実際の発話数は統計処理できるサンプル数に至っておらず、ここでは集計の結果に基づいて述べる。本稿では、使用割合が 5% 以上異なっていた意味公式について考察する。

まず、JNS では「批判」(33.7%)、「直接改善要求」(16.9%)、「確認/ほのめかし」(15.7%) という意味公式の使用頻度が CNS より多かった。これに対して、CNS では「悪態/罵り」(5.7%)、「冗談/皮肉/からかい」(21.4%) という意味公式の使用頻度が JNS より明らかに多かった。儲 (2019: 66) では、DCT を用いて、同場面における日中母語話者による各意味公式の使用頻度のカイ二乗結果を次のように報告している。JNS と CNS の使用比率は有意に異なり ($\chi^2 (8) = 116.477, p < .01$, Cramer's $V = 0.345$)、JNS は、「批判」(調整済み標準残差: 6.8, $p < .01$)、「確認/ほのめかし」(同 3.9, $p < .01$)、「緩和」(同 2.1, $p < .05$) を有意に多用しているのに対して、CNS は、「悪態/罵り」(調整済み標準残差 2.4, $p < .05$)、「冗談/皮肉/からかい」(同 6.6, $p < .01$)、「呼称」(同 3.9, $p < .01$) を有意に多用していると報告している (儲 2019: 66)。

以上からわかるように、本稿のロールプレイの結果においては、サンプルサイズの限界によって統計処理はできないものの、集計の結果として、JNS 側の「批判」、「確認/ほのめかし」、CNS 側の「悪態/罵り」、「冗談/皮肉/からかい」の多用は、儲 (2019) の結果と一致していることがわかる。次に、本調査のロールプレイによる発話例を以下に示す。(括弧の中の「先輩/後輩」は、「先輩/後輩に対する発話」の意味である)。

JNS の多用例 :

「批判」の発話例 :

- (1) ややや、ダメでしょ、ダメだよ。 (JNS / 本の返却/後輩)
- (2) 買いすぎですよ。 (JNS/買い物/先輩)

「直接改善要求」の発話例 :

- (3) 片付けてから帰ろう。 (JNS/本の返却/後輩)
- (4) とりあえず今日は減らそう。 (JNS/買い物/後輩)

「確認/ほのめかし」の発話例 :

- (5) 置いていくんですか? (JNS/本の返却/後輩)
- (6) それ、全部ちゃんと食べている? (JNS/買い物/後輩)

CNS の多用例 :

「悪態/罵り」の発話例 :

- (7) 卧槽、你又摆在这儿。(お前またここに置きやがって!) (CNS/本の返却/後輩)
- (8) 你哪天不把脑子忘带了呢。(いつか頭も忘れて来れば?) (CNS/忘れ物/後輩)

「冗談/皮肉/からかい」の発話例 :

(9) 不愧有干爹包养啊！（さすが貢がれている人間だね）（CNS/買い物/後輩）

(10) 没事儿，反正你钱多。（大丈夫、お金ならお前いくらでもあるから）

（CNS/買い物/先輩）

上記の意味公式を多用する理由について、その多くは儲（2019）において論じられている。なかには、従来の研究で指摘されたとおり、「確認/ほのめかし」という婉曲的なストラテジーの使用も見られた。一方、特に従来の日中対照研究で指摘されていない、JNSによる「批判」と「直接改善要求」の意味公式の多用も見られた。「だめ」などの形容動詞を用いて相手の逸脱した行為を低く価値づけたり、「片付けてから帰ろう」などと言って相手の逸脱した行為を直ちに改善させたりするのは、本来ならば相手のネガティブ・フェイスを侵害するリスクが高い発話行為として回避されがちだが、それが結果的に発話されているのは、話者が対人関係より、「そうであるべきだ」という規範性を志向した結果だと考えられる。Brown & Levinson（1987、邦訳：100）も論じているように、ネガティブ・フェイスを侵害する序列として、「相手がそうすべき」の度合いが高いほど、FTA（Face Threatening Act）（Brown & Levinson 1987、邦訳：77）の度合いが小さくなると言われている。本調査で設定された場面において、「本を返却す」という行為の当為性、相手がそうすべきだという度合いが高いほど、同じ発話でも話し手がFTAの見積もりが小さくなるということが考えられる。したがって、これらの意味公式の多用は、JNS側が規範性への志向性が現れ、FTAを小さく見積もって行われたものと考えられる。

一方で、CNSのほうの「悪態/罵り」と「冗談/皮肉/からかい」は、どれも話し手と聞き手が「親しい」間柄であることに基づいたストラテジーであり、親しい友人関係に訴えかけるストラテジーの運用であることは、儲（2019）で分析した通りである。

ここまででは、同場面において、DCTと、より自然会話に近いロールプレイの結果を比較し、これらの調査において同じような結果が得られたということについて述べてきた。

しかし、それだけでは日中両言語の否定的評価の全貌を明らかにできたとは言い難い。というのは、一発話文のデータでは観測できなかった談話上の特徴が、本調査のロールプレイで見られたからである。

V. トランスクリプションに基づいた質的な分析

次に、ロールプレイで収集したデータのトランスクリプション³⁾の内容に基づいて分析し、談話の構造の中で談話完成テストでは考察できない日中の特徴を考察していく。

1. JNSによる否定の予告一指示詞と取り立て助詞による投射

まず、本調査のロールプレイのデータにおいて、JNSは相手を否定する前にさまざまな手続きを踏まえ、相手に「これから否定する」という予告を発するという特徴が見られた。

これに対して、CNS グループにはそれは見られなかった。以下では、実際の事例を取り上げて論述する。以下の事例の標題にある括弧の中の「先輩/後輩」は、「先輩/後輩が逸脱的な行動をした場合」という意味を表す。

事例 (1) JNS (歩きスマホ/後輩)

行番号	話者	発話内容
23	後輩 JNS03	そうですね、歩きで帰るんですけど。
24	先輩 JNS04	うん。
25	後輩 JNS03	なんか、いつもこうやって音楽、好きなのを選びながらやっていたら、
26	先輩 JNS04	うん一。
27	後輩 JNS03	なんか、まえからすーごいなんか勢いおじさん来て、
28	先輩 JNS04	じ、え、歩いて？。
29	後輩 JNS03	や、歩いて。
30	先輩 JNS04	おおおお。
31	後輩 JNS03	なんかちょっと [携帯を触る手振りをする]。
32	後輩 JNS03	こうやって触ってたらなんかすー、なんかめっちゃぶつかりそうになつて。
33	先輩 JNS04	おおお。
34	後輩 JNS03	何じゃこいつはみたいになっちゃって。
35	先輩 JNS04	おおおお。
36	後輩 JNS03	ちょっと昨日も暑かったし、めっちゃいいらいらしましたね。
37	先輩 JNS04	え、おじさんはーその何？なんか弄ってたの？携帯とか？。
38	後輩 JNS03	やおじさんなんか普通に=、
39	先輩 JNS04	=普通に歩いてきたの？。
40	後輩 JNS03	なんか歩い、てきて、けっこう勢いよく歩いてきて。
→ 41	先輩 JNS04	自分ーはさ、あれでしょ、多分、あのーipod?携帯？。
42	後輩 JNS03	まあ、iPhone ですか
→ 43	先輩 JNS04	iPhone でさ、多分、音楽見てたでしょ多分。
44	後輩 JNS03	〈そう、そうー〉 { } ですね。
→ 45	先輩 JNS04	〈選んでいたから〉 { } 多分、もしかしたらそのー、あれかもしないよ、なんか《少し間》向こうが、向こうはさもう見て、ま、向こうもね [↑] 、
46	先輩 JNS04	見ていたんなら、
47	後輩 JNS03	はい。
48	先輩 JNS04	ちゃんとー、避けてあげればいいと思うんだけどー、
49	後輩 JNS03	はい。
→ 50	先輩 JNS04	多分、あんたもー、あの、道端でスマホとか最近危ないっていうんじや。
51	後輩 JNS03	あー、はい [軽くうなずき]。
→ 52	先輩 JNS04	まあ、音楽とはいえ、そうそう、だから、まあ、歩きながらというよりは、曲を選ぶときは止まってとか、
53	後輩 JNS03	あ、もうもう、そう、〈そうやね〉 { }。

事例 (1) は、歩きスマホにおける先輩と後輩の会話である。JNS03 は「歩きスマホによってあやうく他人とぶつかりそうになった」という逸脱行為を起こした後輩で、JNS04 はそれに対して評価する先輩である。23 行目～36 行目では、JNS03 は「歩きスマホ」の経由を一つの「物語」（串田・他 2017）として JNS04 に提示している。それに対して、JNS04

は28行目の質問で詳細を確認したり、30、33、35行目で「おおお」と相槌を打ち続けたりして続きを促し、聞き手の役割をつとめている。

注目すべきは、41行目の「あれでしょ？」である。文末表現の「でしょ」は聞き手への情報確認を示しているが、その前にある指示詞「あれ」は、先行文脈の何かを照応的に指示するものではなく、現場にある何らかの存在物を指示するものでもない（林 2008: 17）。つまり、全体的には意味論的に情報量の提供が消極的で少ないが、指示詞「あれ」には「行為投射⁴⁾」（林 2008: 19）の用法があるとされている。これについて、林（2008: 26）は、指示詞「あれ」の使い方について、「『ダミ一語』として用いて時間をかせぎ、後続の発話の中でその指示対象を特定する」としている（p. 26）。本稿のこの事例でも、「あれでしょ」（41行目）の指示詞「あれ」の部分は、後続の43行目で「音楽見ていたでしょ」という述語文によって置換されていることがわかる。特にこの事例では、41行目と43行目は、「〇〇+でしょ」と、「構成素+助動詞でしょ」という構文上の類似にも注意が必要である。

このように、指示詞「あれ」からも、構文的にも、41行目の指示詞を伴った「あれでしょ」という発話は、43行目の発話の先行投射であるということが立証される。それに対して、JNS03は「そう、そうですね」（44行目）と「スマホで音楽を見ていた」という行動していたことを認めている。ここまででは、JNS04は41行目の時点でJNS03の行為を予測していたにもかかわらず、それを即時に明言せずに、指示詞や文構造を利用して会話を組織立てて相手に予告しつつ漸次にそれを披露する手立てが見られた。

しかし、それだけではなく、JNS04の45行目の発話も注目すべきである。45行目では、JNS04はまず、「多分」、「もしかしたら」、「あれかもしれないよ」、「なんか」と、不確定や蓋然性を表す副詞やモダリティさらにフィラーを連ね、その後、「向こうが」「向こうは」と立て続けに言い直しした後、最後に「向こうもね」に辿り着いた。ここで注意すべきは、「向こうが」「向こうは」が、一度提示したにもかかわらず取り消され、終盤で取り立て助詞の「も」にしたところである。取り立て助詞「も」には、「が」にも「は」にも存在しない並列の意味がある（庵・ほか 2019: 370）。ここで話し手は「は」から「も」に置換することによって、「おじさん」と並列して対象者の存在をほのめかしていると考えられるだろう。しかし、45行目の時点で、並べられる対象者はまだ不明である。その後46～49行目までは発話が続き、50行目でJNS04が「あんたも」と発している。ここでの「あんたも」は、45行目で明示的に示されなかった「向こうも」の並列対象であることを示している。すなわち、「あんたも」（50行目）によって、JNS03が45行目の「向こう」と同じように逸脱的な行動の行い手と並べられることが照合可能になる。さらに、後半の「最近、歩きスマホが危ないっていうんじや」というマイナス評価語を伴った発話から、JNS03への否定的評価のニュアンスがより顕著になる。事実、51行目でJNS03は「あー、はい」と理解、承認のスタンスを示している。

以上の分析から、41～50 行目で、JNS04 は JNS03 の逸脱的な行動を予測していたにもかかわらず「あれ」を使用して予告し（41 行目）、JNS03 の逸脱行動に対して評価してもよい位置であるにもかかわらず、「向こうのおじさん」への言及を優先し、さらに並列助詞「も」を利用して後続の否定的評価を予告するということが見られた。一連の発話から、否定的評価の実施側は、より早めに明言できることをあえて遅らせるということが観察された。なお、この事例でも、「危ない」（50 行目）と「曲を選ぶ時は止まって」（52 行目）のように、3 節にまとめた意味公式の「マイナス評価語」と「改善要求」が見られた。これらの発話自体が聞き手のポジティブ・フェイスとネガティブ・フェイスをそれぞれ脅かしていると考えられるが、上述したように、このような発話に到達する前に、JNS04 は指示詞と取り立て助詞を利用してこれから発話を予告することによって、FTA が緩和されていると言えるだろう。

2. 逸脱的状況を認めた相手に対する否定側の反応：攻め型の CNS と守備型の JNS

次に、CNS と JNS のいずれにおいても、否定される側自身が、自身の逸脱を承認する発話が見られた。しかし、その後続の連鎖におけるポライトネス・ストラテジーの運用には日中で相違が見られた。

CNS グループでは、相手の逸脱行動を認める発話の後、二人称代名詞「你」を使って明らかに相手を同定しながら、相手の逸脱をめぐってさらに指摘していた。しかし、その後に相手との関係性に基づいたポジティブ・ポライトネスを利用して FTA の度合いを弱める措置が見られた。一方、JNS グループでは、相手が逸脱を認めた発話の後に、疑問文などで確認を示し、さらに一人称の「わたし」から始まる条件文を用いて相手に提案を提示していた。以下、同場面の事例を取り上げて説明する。

事例（2）CNS（忘れ物/先輩）

	行番号	話者		発話内容
	1	先輩	CNS04	哎呀，我手机又忘带了，总是这样，我真受不了自己了。 (あ、また携帯を忘れてしまった。もう、いつもこうだよ、もうこんな自分が嫌い。)
→	2	先輩	CNS04	《沈默 2 秒》做什么事情都很健忘，感觉自己要废掉了。 (《沈默 2 秒》最近何やっても忘れがちだから、もう自分は駄目だ。)
→	3	後輩	CNS03	天[驚いた感じで]，学长，你这样子可怎么好呢，你可是数 [↓] 学家， 你学数 [↓] 学的啊。 (え[驚いた感じで]、先輩、あなたこんなんどうしよう、あなたは数 [↓] 学家ですよ、あなたの専門は数 [↓] 学なんですね。)
	4	先輩	CNS04	啊，我觉得， (や、俺はね、)
	5	後輩	CNS03	你说你忘个标点符号，额，小数点儿，这可咋办啊？ (もしあなたが数学記号、や、小数点とかを間違えていたらどうしよ う？。)

	6	先輩	CNS04	我觉得可能就是因为...看了太多的论文，把脑子看出问题了。 (多分論文を読みすぎて、頭が動けなくなっちゃったのかも。)
→	7	後輩	CNS03	不能这样子，你说你要这么粗心大意，以后可怎么给我找嫂子[↑]呀？。 (それはいけないですよ、あなたのそんなそそかしいぶりで、将来どうやって義姉（ここでは先輩 CNS04 の嫁を指す）[↑]を探してくれるんですか？)

この場面では、CNS04 は先輩で、CNS03 は後輩である。1～2 行目では、否定的評価の受け手である CNS04 はまず「哎呀，我手机又忘带了」（また携帯を忘れてしまった）と自己開示し、さらに「做什么事情都很健忘，感觉自己要废掉了」（何をやっても忘れがちだから、もう自分は駄目だ）（02 行目）と自身の逸脱を承認している。それに対して、CNS03 は 3 行目と 5 行目でふんだんに二人称代名詞の「你」（あなた）を使用し、相手を明示しながら、ほかの側面からその逸脱した行為によるマイナス的な結果を提示している。その形も、「你学数学的啊」（03 行目）（専門は数学なんですね）、「你说你忘个标点符号，小数点儿，这可咋办啊？」「小数点とかを間違えていたらどうしよう？」（05 行目）と否定のニュアンスが強い確認文/質問文であった。このような発話は、相手が忘れがちであるということの逸脱さを強く主張していることから、相手のポジティブ・フェイスを侵害している一方で、その発話に対して CNS04 が応答しなければならないという性質から、同時に、ネガティブ・フェイスをも侵害していると言えよう。したがって、ここまで CNS04 が自身の行為の逸脱さを認めた発話の後にも、CNS03 がポジティブ・ネガティブフェイスを同時に侵害する発話をしていることから、攻めのストラテジーを取っていることがわかる。

また、注目すべきは、07 行目の「どうやって義姉を探してくれるんですか」という発話である。ここでの「義姉」とは、先輩である JNS03 の嫁を指しているが、この発話は本来、JNS03 のネガティブ・フェイスを脅かす可能性がある。なぜなら、「嫁探しするか/しないか」は、本人の自由だからであり、また、JNS03 がそれに回答しなければならないからである。しかし、平（2006）が報告しているように、中国語の会話には、親密さを主張する手段として話し手は聞き手のプライバシーを聞くなど、あえて相手の私的縛張りに踏み込むことがあるとされている（p. 12）。そのため、ここでは同時に、相手との親しい関係をアピールするポジティブ・ポライトネスとしても捉えられる。要するに、7 行目の「どうやって義姉をさがしてくれるんですか」は、「フェイスを充足する」ストラテジー（Face Boosting Act: FBA）（宇佐美 2008:16）としても機能可能である。

このように、CNS では、相手が逸脱的な行動を承認した後でも、積極的に相手のフェイスを侵害しつつ、最後に実質的にはポジティブ・ポライトネスとして働く、見せかけのフェイスの侵害が見られた。全体的には、相手の領域に積極的に踏み込む、いわば「攻め」のストラテジーとでも言うべきものがあり、その使用傾向が見られたと言えよう。一方、同場面の JNS グループの結果は下記の通りである。

事例 (3) JNS (忘れ物/先輩)

	行番号	話者		発話内容
	1	先輩	JNS01	あーまた携帯家に忘れた。
	2	後輩	JNS02	えーまたですかー? [驚き]。
→	3	先輩	JNS01	だよね、最近本当に忘れっぽい。
→	4	後輩	JNS02	でも、急な連絡あると困りません?。
	5	先輩	JNS01	取りに帰ろうかな?。
→	6	後輩	JNS02	うん、帰りましょう、私なら、すぐ取りに帰りますよ。
	7	先輩	JNS01	そうよね、私五限まで何もないし。
	8	後輩	JNS02	帰ろうよ、ふふふふ<笑い>。
	9	先輩	JNS01	帰ります [思い切って]。
	10	後輩	JNS02	はい、帰りましょう<笑い>。

事例 (3)において、JNS01 は先輩で、JNS02 は後輩である。3 行目で JNS01 は「最近本当に忘れっぽい」と自身の逸脱を承認した。それに対して、4 行目で JNS02 は、「急な連絡あると困りません?」と忘れ物による不利益な結果をほのめかして JNS01 に提示している。それに対して、5 行目で JNS01 は携帯を取りに帰ろうかと躊躇のスタンスを示したところ、JNS02 は 6 行目で、「帰りましょう」という発話の後、「自分ならそうする」と、条件節を用いてもう一度相手に提案を示している。上記の例を通して、否定的評価の受け手が自身の逸脱を承認した後でも、JNS は婉曲的な確認文を用いて状況を提示したり、「わたしなら」と条件文を用いて提案したりすることによって、相手の改善を促すという特徴が見られた。このことから、JNS は、相手の逸脱承認の発話連鎖の後でも、過度に相手の「踏み込まないでほしい」という欲求への配慮を示す傾向があり、(CNS と比べて) ネガティブ・ポライトネスの使用が比較的に顕著であると言える。

3. 事後のフェイス侵害によるフェイスの均衡

以上の事例では、全体的に FTA を行う際に、いかにその度合いを軽減するか、もしくは後から損なわれたフェイスを充足するかという観点に基づいて分析を行った。しかし、宇佐美 (2008) が主張したように、コミュニケーションにおいて、FTA の度合いの軽減が足りない、もしくはなかった場合、FTA された側が、事後に同じような見積もりの FTA を相手に行うことで、「相互作用上の不均衡」(Goffman 1972; 宇佐美 2008:9) を修正し、結果的に「フェイスの均衡を保つ」ということも可能であるとされている (ibid:16)。本調査のロールプレイでは、JNS、CNS 両グループとも、否定的評価を受けた側が、否定的評価をされた後で、否定的評価の実施側も逸脱した側面を持っていると言及する特徴が見られた。以下、CNS の会話を例に示す。

事例（4）CNS（買い物/後輩）

	行番号	話者	発話内容
→	10	先輩 CNS01	中国人，就是爆买，你就是增加这个 evidence 你知道吗？<大笑>。 (中国人は爆買いをよくしているから、あなたはそのエビデンスを増やしているってわかる？<大笑い>。)
	11	後輩 CNS02	<大笑>。
	12	後輩 CNS02	不是啊，我是要拿到研究室去跟大家一起吃啊。 (違いますよ、私は研究室に持つて行って皆と一緒に食べるつもりなんですよ。)
	13	先輩 CNS01	可是你上次去那个，商场的时候你还买了好多东西呢。 (でも前回あの…、スーパーに行った時もいっぱい買っちゃったんじやん。)
→	14	後輩 CNS02	好像你没有吃一样，你吃得特别多（笑）。 (まるで自分が食べていないように言わないで、あなたが一番食べていたんじゃないですか？<笑>)

以上の事例（4）において、CNS01 は先輩で、CNS02 は後輩である。10 行目では、CNS01 は CNS02 の買い物という行為を「爆買い」として同定し、それが日本での中国人像にマイナス的に働くと相手を否定している。一方、CNS02 は 12 行目で「研究室に持つて行ってみんなと一緒に食べるつもりなんですよ」と理由説明を始めている。にもかかわらず、13 行目で CNS01 は、さらに今回とは別機会の CNS02 の買い物行動に言及している。それに対して、14 行目で CNS02 は「あなたが一番食べていたんじゃないですか？」と、CNS01 は購入行動の受益者でありながらも、それについて指摘してくる逸脱さを明確化し、さらに間接的に「大量に購入する」という逸脱的な行動に加担する者として位置づけている。ここでは、CNS02 が 14 行目であえて CNS01 のフェイスを侵害することで、これまで自分が侵害されたフェイスの均衡を保とうとしていると考えられる。

おわりに

本稿では、逸脱的な場面における JNS と CNS の否定的評価のストラテジーの使用傾向を、ロールプレイのデータに基づいて量的に示した。その結果、DCT で観察された意味公式の使用（傾向）（儲 2019）は、より自然会話に近い本稿のロールプレイの結果にも出現しており、しかもほぼ同様の傾向を示していることを示した。さらに、本稿のロールプレイのデータに基づく質的な分析によって、DCT では得られなかった結果も観察された。それらを以下にまとめると。

① JNS による否定の予告

マイナス評価語を伴った否定的評価に到達するまえに、その否定的評価による FTA の度合いが弱まるように、JNS は指示詞「あれ」や取り立て助詞「も」を用いて聞き手に「これから否定する」という予告を行っていることがわかった。こうすることによって、同じマイナス評価語を伴った発話であっても、予告を通してその効力が削られ続け、聞き手へ

のFTA度が軽減されると考えられる。ロールプレイの場合、談話上の工夫を通して「対人関係」に志向しながら、一方では談話の核となる単体の発話（例えば、マイナス評価語を伴った「批判」）で「規範性」に志向するという、一見相いれない両者の両立の可能性が示唆された。すなわち、「言葉上の配慮」と「談話構造上の配慮」が別箇でありながら共存・補助的関係にあるということが示唆されたと言えよう。

②攻め型の CNS と守備型の JNS

相手が自身の逸脱さを承認した場合、CNSでは、全体的に「攻め型」のストラテジーを使用してフェイスを侵害しつづけ、最後にフェイスの充足と見なせるストラテジーの使用が見られた。それに対して、JNSでは、「わたしなら」などの条件節の提示により、なるべく相手へのFTAの度合いを軽減しながら逸脱さを指摘するという「守備型」のストラテジー使用が見られた。

③事後のフェイス侵害によるフェイスの均衡

最後に、両者ともフェイスを侵害された側が後からフェイスを侵害した側のフェイスの侵害を意図的に引き起こし、そこで遡及的にフェイスの均衡を図るという特徴が見られた。

本稿では、ロールプレイの考察を通して、日本語母語話者は「規範」的な言語ストラテジーの運用と同時に、談話上の工夫によって「対人関係」にも志向しており、実際のコミュニケーションでは一見相反する両者が表裏一体である可能性を明らかにした。一方、中国語母語話者は、単体の発話でも、談話上のターンの組み立てでも対人関係に基づいたポジティブ・ポライトネスを使用する特徴が示唆された。なお、FTAを行う前（同時）に、それを緩和するだけではなく、後から「フェイスの充足」、もしくは「フェイスの侵害」によって全体的に談話レベルで「フェイスの均衡」（宇佐美 2008）を取っている可能性も指摘した。最後に、従来の研究において、DCTと同場面を用いたロールプレイによって検証を行っている研究は筆者の管見の及ぶ限り多くない。本稿では、ロールプレイを用いて、意味公式の出現（傾向）がDCTの結果に近いことを検証した一方で、実際の談話構造上の工夫はDCTでは看過されがちであることを示した。

注

- 1) カードのタイトルの後の括弧のなかにある「否定的評価の行い手/受け手」は実際にロールプレイの際につけていない。
- 2) 意味公式について、Olshtain & Cohen (1983: 20) は「ストラテジーを満たす単語、句、文からなる単位である」としている。
- 3) 文字化記号は宇佐美まゆみによるBTSJ「基本的な文字化の原則2011版」に準拠している。
- 4) 林 (2008: 16) によると、「投射 (projection) はある行為が完全に産出されてしまう前に、

それがどのような行為なのか、そしてその次に適切（relevant）にある行為は何かを予測することを可能にする」と述べている（p. 16）。

参考文献

- 林始恩（2015）『親和の関係における否定的評価の研究：日韓母語話者の言語行動の比較』筑波大学博士
学位論文。
- 宇佐美まゆみ（2008）「ポライトネス理論研究のフロンティア—ポライトネス理論研究の課題とディスコ
ース・ポライトネス理論」『社会言語科学』11（1）、4-22頁。
- 串田秀也・平本毅・林誠（2017）『会話分析入門』勁草書房。
- 関崎博紀（2014）『日本人大学生の会話における言語行動としての否定的評価の研究』筑波大学博士学位
論文。
- 庵功雄・高梨信乃・中山久実子・山田敏弘（2019）『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』
スリーエーネットワーク。
- 平靜（2006）「日中のポジティブ・ポライトネスの対照研究—日本語と中国語の談話分析を通して」
『比較社会文化研究』20、1-19頁。
- 西尾純二（1998）「マイナス待遇行動の表現スタイル—規制される言語行動をめぐって」『社会言語科学』
1（1）、19-28頁。
- 初鹿野阿れ・熊取谷哲夫・藤森弘子（1996）「不満表明ストラテジーの使用傾向—日本語母語話者と日本
語学習者の比較」『日本語教育』88、128-139頁。
- 林誠（2008）「相互行為の資源としての投射と文法指示詞—『あれ』の行為投射的用法をめぐって」『社
会言語科学』10（2）、16-28頁。
- 儲叶明（2019）「否定的評価に見る規範意識と対人関係—ポライトネス理論からの日中対照分析」『語
用論研究』21、57-77頁。
- Brown, P., and Levinson, S. C. (1987) *Politeness: some universals in language usage*, Cambridge,
MA: Cambridge University Press. (『ポライトネス 言語使用における、ある普遍現象』田中典子
監訳、斎藤早智子・津留崎毅・鶴田庸子・日野壽憲・山下早代子訳、2011年発行、研究社)
- Grice, H. P. (1975) "Logic and Conversation", in Cole and Morgan, op. cit., pp. 41-58.
- Goffman, Erving (1972) *Interactional Ritual*. London: Penguin.
- Olshtain, E. & Cohen, A. D. (1983) "Apology: A speech act set," in N. Wolfson & E. Judd ed.,
Sociolinguistics and Language Acquisition, Rowley, Mass. : Newbury House, pp. 18-35.
- Rose, K. R. (1994) On the validity of discourse completion tests in non-Western contexts. *Applied
Linguistics*, 15, pp. 1-14.

Negative Evaluation towards deviant behavior by Japanese and Chinese Native Speakers: An analysis conducted through role-play

CHU, Yeming

Abstract

This study investigates how Japanese and Chinese native speakers (CNS, JNS) make negative evaluations toward deviant behavior, using role-play as its research method. The study's findings indicate that JNS tend to use the semantic formulas for "criticism" and "confirmation/allusion," while CNS make use of "cursing/insult" and "joke/sarcasm/teasing" formulas. These results were in line with those of 儲 (2019). Analysis of the role-play transcriptions, however, revealed further findings. First, the researcher found that while JNS include negative evaluative words in their utterances in order to adhere to norms, they also use the demonstrative pronoun *are* and post-positional particle *mo* to signal the forthcoming negative evaluation. Second, after the deviant interlocutor admits to the deviant nature of their action, CNS continue the FTA while JNS make suggestions with conditional clauses in order to mitigate the FTA. Third, negative evaluations were made towards the original FTA perpetrator in order to restore Face-balance. This study shows that: 1. considerations at the utterance level and the discourse level can show contradictory orientations to balance out interpersonal relationships and norms, and 2. role-play can confirm the results of DCT.

Keywords : Deviant acts, Negative evaluation, Discourse, Politeness, Role-play

学会役員

＜顧問＞

山泉進（明治大学・名誉教授）

李漢燮（高麗大学・名誉教授）

＜会長・理事＞

安達義弘（日韓言語文化交流センター・副代表）

＜副会長・理事＞

李東哲（韓国新羅大学校・教授）

権寧俊（新潟県立大学・教授）

崔光准（新羅大学・教授）

海村惟一（福岡国際大学・名誉教授）

杉村泰（名古屋大学・教授）

金龍哲（神奈川県立保健福祉大学・教授）

鄭亨奎（日本大学・特任教授）

＜常任理事＞

李東軍（蘇州大学・教授）

岩野卓司（明治大学・教授）

崔肅京（富士大学・教授）

李慶国（追手門学院大学・教授）

＜事務局長・理事＞

金斑実（商丘師範学院・副教授）（事務局長）

＜一般理事＞

阿莉塔（浙江大学・副教授）

安勇花（延辺大学・副教授）

白曉光（西安外国语大学・副教授）

宮脇弘幸（大連外国语大学・客員教授）

金光林（新潟産業大学・教授）

李光赫（大連理工大学・副教授）

娜荷芽（内蒙古大学・副教授）

任星（厦门大学・副教授）

施晖（蘇州大学・教授）

矢野謙一（熊本学園大学・教授）

王宗傑（浙江越秀外国语大学・教授）

徐瑛（浙江越秀外国语学院・副教授）

植田晃次（大阪大学・教授）

朴銀姪（魯東大学・教授）

加藤三保子（豊橋技術科学大学・特任教授）

中川良雄（京都外国语大学・教授）

堀江薰（新潟県立大学・教授）

飯嶋美知子（北海道情報大学・准教授）

李昌玟（韓国外国语大学校・教授）

学会動向

◆「韓国日語日文学会 2021年冬季国際学術大会」の共催事前申請

本研究会と学術交流協定を締結している韓国日語日文学会の提案により、2021年12月18日、韓国外国语大学校サイバー大学で開催予定の「韓国日語日文学会 2021年冬季学術大会」に本学会から30名近く事前発表申請を行い、2020年に続き共催することが決まりました。

◆学会誌第7号への投稿

2022年3月発行予定の『東アジア日本学研究』第7号への投稿を募集中です。会員皆様の積極的な投稿を期待します。締め切りは10月10日（日）の北京時間24:00です。

東アジア日本学研究学会副会長

李東哲

会員消息

◆新入会員

蔡一升（大阪市立大学、大学院生）
何芸芃（神戸大学、大学院生）
劉嘉勇（名古屋大学、大学院生）
張鴻鵬（信陽師範学院、副教授）
李靜（信陽師範学院、講師）
曹花艷（延辺大学、副教授）
張天（商丘師範学院、講師）
羅菲凡（名古屋大学、大学院生）

◆会員所属・職位変更

加藤恵梨（大手前大学 現代社会学部）講師→准教授
堀江薰 新潟県立大学教授→新潟県立大学名誉教授
朴天弘 帝京大学外国語学部外国語学科コリア語コース助教→
東京大学大学総合教育研究センター特任講師（2021年4月より）

※上記の情報は2021年4月1日以降、2021年9月30日までの変動事項です。

東アジア日本学研究学会副会長

李東哲

東アジア日本学研究学会会則

＜名称＞

第1条 本会は、東アジア日本学研究学会(The Society of Japanese Studies in East Asia)と称する。

＜目的＞

第2条 本会は、東アジア地域における日本学の学際的研究をとおして、また、それぞれの研究者が研究成果を発表し交換し合うことをとおして、学問の進歩及び当該地域の平和的発展に寄与することを目的とする。

＜事業＞

第3条 本会は、前条の目的を達成するために次の事業を行う。

1. 東アジア地域における日本学を中心とした学際的研究・調査
2. 学会、研究会、講演会及びシンポジウムの開催
(学会における共通言語は、原則として日本語とする)
3. 機関誌及び図書等の刊行
4. 内外の学術団体、研究者との連絡及び学術上の交流
5. その他本会の目的を達成するために必要と認められる事業

＜会員＞

第4条 本会の会員は、個人会員、賛助会員とする。

1. 個人会員は、東アジア地域の研究に关心を持ち、かつ本会の目的に賛同する個人
2. 賛助会員は、本会の目的に賛同し、本会の事業に協力する法人・団体または個人

第5条 本会には、名誉会員および顧問をおくことができる。名誉会員および顧問は、理事会が推薦し、会員総会の承認を受ける。

＜入会・退会＞

第6条 本会に入会を希望する者は、理事会に申請し、その承認を得るものとする。

ただし、大学院生は、指導教員の推薦を得ることとする。

第7条 本会を退会しようとする者は、退会を事務局に通告すれば退会することができる。

会費を2年間滞納した者は、理事会において承認のうえ、退会とみなす。

＜会費＞

第8条 会員の会費は、次のように定める。

一般会員 5,000 円
学 生 3,000 円
賛助会員 50,000 (1 口) 円

<役員>

第9条 本会に次の役員をおく。

1. 会長 1名
2. 副会長 若干名
3. 理事 30名以内（理事のうち若干名を常任理事とする）
4. 事務局長 1名
5. 会計監事 2名
6. その他理事会が必要と認めた役員

第10条 役員の任期は、就任から2年とする。ただし、再任は妨げない。

<役員の職務>

第11条 本会の役員の職務は次のとおりとする。

1. 会長は、本会を代表し、会務を統括する。
2. 副会長は、会長を補佐し、会長に不都合が生じた時はこれを代理する。
3. 理事は、理事会を組織し、会務を審議執行する。理事会の議事は、出席者の過半数により決定する。
4. 事務局長は、会長の指示に基づいて、事務を執り行う。
5. 会計監事は、会計を監査する。

<役員の選出>

第12条 役員の選出は次のとおりとする。

1. 会長は、会員総会において選出する。
2. 副会長・理事は会長が任命する。
3. 会計監事は、会員総会において選出する。
4. 他の役員は、理事会が委嘱する。

<学会誌編集委員会>

第13条 本会は、理事会のもとに学会誌編集委員会をおく。

1. 学会誌編集委員会は、学会誌の出版計画を立案し、これを理事会に提案する。
2. 委員は、個人会員の中から理事会が推薦し、会長が任命する。
3. 委員の任期は、就任から2年とする。ただし、再任は妨げない。

4. 学会誌編集委員会に委員長を置き、委員の中から互選する。
5. 委員長は、学会誌編集委員会の事務を掌理する。

＜会員総会＞

第14条 本会は、毎年1回会員総会を開催する。

第15条 会員総会では、次の事項を審議決定する。

1. 事業報告及び決算
2. 事業計画及び予算
3. 会長及び会計監事の選出
4. 会則の変更
5. その他の必要な事項

第16条 臨時会員総会は、理事会が必要と認めたとき、または会員の2分の1以上の要望があるときに開催する。

第17条 会員総会の議決は、出席会員の過半数をもって決する。

＜会計＞

第18条 本会の運営は、会費及びその他の収入で賄う。

1. 本会の会計年度は、毎年4月1日に始まり、3月31日に終わる。
2. 本会の決算は、会計監事の監査を受けなければならない。

＜雑則＞

第19条 本会の所在地は、〒818-0125 福岡県太宰府市五条2丁目8-8-205とする。

＜付則＞

1. 本会の設立は、2018年9月1日とする。
2. 本会則は、2018年9月1日から実施する。
3. 本会の運営に必要な事項は理事会が定める。

『東アジア日本学研究』投稿要領

- 1) 『東アジア日本学研究』は、東アジアにおける日本学研究に関する論文・研究ノート・書評などにより構成される。
- 2) 1年に2号（春季号・秋季号）の刊行を原則とする。
 - ・春季号はシンポジウムの論文集とする。毎号シンポジウム終了後3週間以内を目安にその都度締め切りを設ける。
 - ・秋季号はシンポジウムの発表以外の内容も含む学術論文集とする。投稿期間は毎号3月1日から4月1日までとする。

（例：2020年度年会費分の春季号は翌2021年春、秋季号は翌2021年秋に発行予定）
- 3) 『東アジア日本学研究』に投稿できるのは、東アジア日本学研究学会の会員および編集委員会が依頼した者とする。ただし春季号にはシンポジウムで発表した非会員にも投稿資格を認める。その場合、会員の年会費相当額を投稿料として事務局に納入することとする（筆頭著者だけでなく共著者も同様とする）。
- 4) 投稿者が会員の場合、投稿する当該年度までの会費を投稿前に全て納入しなければならない（筆頭著者だけでなく共著者も同様とする）。
- 5) 投稿者が学生会員の場合は、投稿時に投稿原稿、投稿票とともに、指導教員等による承諾書（100字以内で様式は任意。指導教員等の署名または捺印が必須）を提出しなければならない。ただし、編集委員会が投稿を依頼した者については、これを適用しない
- 6) 投稿原稿は未発表のものでなければならない。投稿者は投稿原稿の不採用が決定される前に当該原稿を他の場所で公刊してはならない。
- 7) 本誌の春季号と秋季号は両方同時に投稿することができる。ただし、両者の内容は異なるものとすること。また、春季号も秋季号も一回の投稿期間に投稿できるのは一篇のみとする。
- 8) 『東アジア日本学研究』に掲載された全ての原稿の著作権は東アジア日本学研究学会に帰属する。
- 9) 原著者が『東アジア日本学研究』に掲載された文章の全部または大部にわたって複製利用しようとする場合には、事前に編集委員長に申請しなければならない。編集委員会は特段の不都合がない限りはこれを受理し、複製利用を許可する。
- 10) 『東アジア日本学研究』に掲載された全ての原稿は、東アジア日本学研究学会のホームページにおいてPDFファイルにて公開する。
- 11) 投稿者は、東アジア日本学研究学会ホームページに掲載の「執筆要領」の内容を踏まえ、これに準拠した完成原稿と投稿票を提出する。投稿票は下記の所定の様式で提出すること。
- 12) 完成原稿と論文要旨は、E-mail の添付ファイルとして送付する。ファイル形式は原則

として MS-Word とする。採用が決定された原稿の提出方法は編集委員会から再度通知する。

- 13) 投稿された原稿は、査読者による審査結果をもとに、編集委員会が採否を決定する。
- 14) 採用された場合、投稿者は英文要旨を提出する。英文要旨は、提出前に必ずネイティブ・チェックを受ける。
- 15) 原稿の投稿先および問い合わせ先は次のとおりとする。

東アジア日本学研究学会事務局 E-mail: eaja20172@163.com

(2021年4月20日改正)

※投稿の際は以下の部分を切り取り、原稿に添えて送ってください。

投 稿 票		
投稿日：20 年 月 日		
氏名		
所属・職位	(例) ○○大学・助手、講師、副教授、教授、大学院生	
メールアドレス		
電話番号		
論文タイトル		
種類 (該当を残す)	春季号 / 秋季号	論文・研究ノート・書評
分野 (該当を残す。 複数回答可)	1. 語学・言語教育 2. 文学 3. 文化 4. 歴史 5. 哲学・思想 6. 経済 7. 政治 8. その他	
連絡事項 事務局または編集委員会に連絡したいことがあれば書いてください。特に記載不要です。		

『東アジア日本学研究』執筆要領

1) 利用言語

原稿は日本語を使用し、横書きで作成する。

2) 原稿枚数

原稿の枚数は40字×35行を1枚と換算して、春季号論文は5～7枚（注・図表・参考文献を含む）、秋季号論文は10～15枚（注・図表・参考文献を含む）とする。

3) 見出し番号の表記

本文内の各節章の見出しに付ける番号はI、II、III…とし、その下の款項には1.、2.、3.…を用いる。さらにその下の項には(1)、(2)、(3)…を用いる。最初に「はじめに」、最後に「おわりに」を置いててもよい（番号は付けない）。

4) 句読点の表記

句読点は全角の「、」「。」を用いる。

5) 括弧の表記

括弧は原則として全角とする（欧語表記および注記を示す記号に用いる片括弧を除く）。

6) 数字の表記

数字は、熟語など特別な場合を除き半角のアラビア数字を用いる。4桁表記以上となる場合は、コンマ(,)を用いる。また、「兆、億、万」などの漢数字を用いてもよい。

7) 年号の表記

年号は原則として西暦を用いる。必要に応じて、西暦の後に元号などを丸括弧に入れて併用してもよい。

8) 度量衡の単位は、原則として記号（m kgなど）を用いる。

9) 図や表には番号とタイトルを記入する。

10) 注は以下のように該当部分の右肩に入れ、論文末にまとめて並べる。

～と考える¹⁾。

11) 参考文献の表記

本文と注記で用いた全ての文献を「参考文献」として本文の最後に一括して表示する。

参考文献の表記は以下のとおりとする。

（日中韓語の書籍）編著者名（発行年）『書名—副題』出版社。（MS 明朝 9P）

（日中韓語の雑誌論文）著者名（発行年）「論文名—副題」『雑誌名』巻数(号数)、○-○頁。

（日中韓語の書籍中の論文）著者名（発行年）「論文名—副題」（編者名『書名—副題』出版社）、○-○頁。

（日中韓訳書）編著者名（発行年）『書名—副題』（訳者名、原著は○年発行）出版社。

（欧文の書籍）編著者名（発行年）書名：副題、発行地：出版社。

（欧文の雑誌論文）著者名（発行年）“論文名：副題,” 雑誌名、巻数(号数), pp.○-○.

（欧文の書籍中の論文）著者名（発行年）“論文名：副題,” 編著者名 ed., 書名：副題、発行地：出版社, pp.○-○.

『東アジア日本学研究』査読要領

【査読スケジュール】

・投稿締切日

(春季号) シンポジウム終了後3週間以内とする。

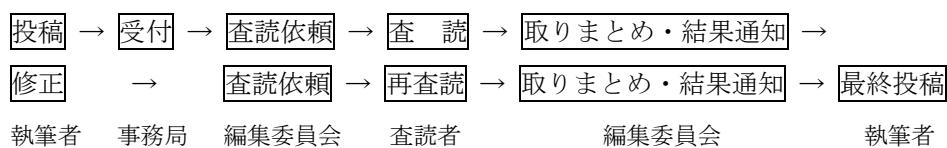
(秋季号) 毎号4月1日(北京時間24:00)とする。

・投稿先：東アジア日本学研究学会事務局 E-mail: eaja2017@163.com

・査読の流れ

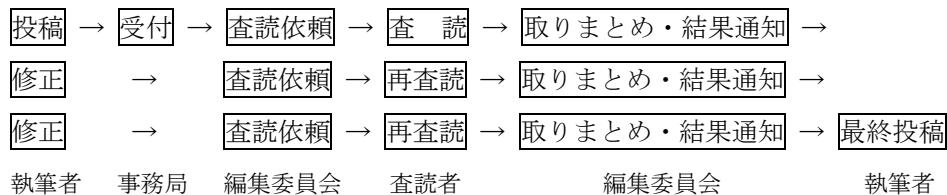
(春季号) 査読は2回までとする。

(2回目の総合評価が「再査読」の場合は結果的に「不採用」となる。)



(秋季号) 査読は3回までとする。

(3回目の総合評価が「再査読」の場合は結果的に「不採用」となる。)



【査読者の構成】

- 1) 論文1編について2名の査読者が査読する。
- 2) 査読者は編集委員会によって原則として会員の中から選任する。会員の中に適任者がいない場合は外部審査員を依頼することができる。審査料は全て無料とする。
- 3) 春季号の場合は、自己の投稿論文でなければ査読可能とする。秋季号の場合は、投稿者は当該号の査読は行わないこととする。

【査読】

- 4) 査読は投稿者・査読者間、査読者間ともに匿名で行うこととする。
- 5) 判定は、「採用」「条件採用」「再投稿」「不採用」の4段階とする。
 - ・「採用」は誤植程度の修正しか必要でない場合とする。
 - ・「条件採用」は査読者から指摘された問題が1週間程度で修正でき、当該号での採用が見込める場合とする。
 - ・「再投稿」は査読者から指摘された問題が2週間程度で修正でき、当該号での採用が見込める場合とする。

- ・「不採用」は当該号での採用のレベルに達していない場合とする。
- 6) 査読者は所定の「査読票」に査読結果とコメントを記入する。
- 7) 論文の中に投稿者が特定される情報が書かれていることが査読の過程で明らかになった場合でも、原則として査読を継続する。但し、投稿者と査読者が指導教員と指導生の関係、同じ機関に属する等の場合には、査読者の交代を行う。
- 8) 査読にあたり二重投稿等の疑義等が生じた場合、投稿者宛てコメントには記載せず、編集委員会宛てコメントに記載する。

【査読結果のとりまとめ】

- 9) 査読者は「査読票」を編集委員長に送付する。
- 10) 編集委員会では、以下の総合判定ガイドラインに基づいて採否を決める。基本的にこれを順守するが、このガイドラインに従わない方がよいと判断される場合には、編集委員会で審議する。
<総合判定ガイドライン>
(◎採用、○条件採用、△再投稿、×不採用)
採用 : ◎◎ (6点)
条件採用 : ◎○ (5点)、○○、◎△ (4点)
再投稿 : ◎×、○△ (3点)、○×、△△ (2点)、△× (1点)
不採用 : ×× (0点)
- 11) 総合判定の確定後、編集委員長は結果を事務局に送付する。
- 12) 事務局は、総合判定結果と査読者のコメントを投稿者に送付する。

【再投稿・最終投稿】

- 13) 「採用」の場合は、微修正の確認を編集委員会で行う。
- 14) 「条件採用」と「再投稿」の場合は、初回の2名の査読者で再度査読する。
- 15) 春季号の査読は2回まで、秋季号の査読は3回までとし、査読結果に基づいて編集委員会で最終判定を行う。
- 16) 編集委員会は最終判定結果を事務局に送付し、それを事務局から投稿者に送付する。

【その他】

- 17) 「不採用」に関する投稿者からの反論には原則として応じない。
- 18) 校正は字句等の修正のみ認める。問題が生じた場合には編集委員長が確認する。

編集後記

編集委員長 杉村泰（名古屋大学教授）

本号には17本の投稿がありました。各論文とも2名の査読者による審査が行われ、採用12本、不採用2本、辞退2本、不受理1本という結果となりました。何度も書き直して採用に至ったものもあり、投稿者と査読者の粘り強い努力が実を結んだと思います。

編集委員 加藤三保子（豊橋技術科学大学特任教授）

最近はユニークな題目の論文が見られます。読者が最初に目にするのは題目ですので、まさに題目は論文の「顔」であることを改めて感じます。もちろん、論文は中身で評価されますが、題目もぜひ大切にしていただきたいと思います。

編集委員 吉川佳英子（愛知工業大学教授）

今年も多彩な論文が寄せられ、面白く読ませていただきました。力作が多く、読みごたえのあるものばかりでした。綿密な裏付けに説得され、ユニークな視点に心が躍りと、編集のプロセスはたいへん刺激的です。皆さんのさらなる飛躍に期待しています。

編集委員 金光林（新潟産業大学教授）

今回も投稿論文の査読を行い、そのために査読対象の論文を精読し、いい勉強になりました。学会誌において査読は必要不可欠だと思われました。査読することによって、投稿論文は事前に審査を受け、書き直される場合があり、不採用にもなるので、論文の質が向上します。

学会誌担当副会長 海村惟一（福岡国際大学名誉教授）

コロナ感染の第五波の中、学会誌（第六号）が世に問うことができ、祝賀すべきだと思います。学会誌（第六号）を通覧すると、研究論文はやはり研究対象を「熟読玩味」した結果であると痛感しました。

〔本号の査読者〕（50音順）

安達義弘（日韓言語文化交流センター副代表）、海村惟一（福岡国際大学名誉教授）、加藤恵梨（大手前大学准教授）、加藤三保子（豊橋技術科学大学特任教授）、関承（今和教育教務主任）、金光林（新潟産業大学教授）、菅陽子（International Business Alliance 代表取締役兼CEO）、池孝民（商丘師範学院講師）、陳秀茵（東洋大学講師）、中川良雄（京都外国语大学教授）、任星（厦门大学副教授）、白曉光（西安外国语大学副教授）、橋本恵子（福岡工業大学短期大学部准教授）、吉川佳英子（愛知工業大学教授）、李東軍（蘇州大学教授）、李東哲（新羅大学教育専担）

東アジア日本学研究 第6号
Japanese Studies in East Asia No.6

2021年9月20日発行

東アジア日本学研究学会

The Society of Japanese Studies in East Asia

学会事務局 E-mail: eaaja2017@163.com (一般)

eaaja20172@163.com (学会誌専用)

住所: 〒818-0125 福岡県太宰府市五条2-8-8-205

日韓言語文化交流センター

ホームページ <https://www.east-asia.info/>

ISSN 2434-513X
